

僕が日常から脱獄するまで

DEKKAマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

趣味はゲーム、特技はなし、将来の夢もなんにもないつまらない男
そんな彼が変わっていくお話

この話は原作より前から始まります

目次

宿泊	142
偶像	135
路上	129
進級	124
敬語	117
独白	111
天体観測	102
譲渡	94
観賞	86
発熱	80
恋心	72
溝	67
理解	61
普通	54
甘露	48
偶々	42
予定	36
興味	30
遊興	24
焦燥	17
類似	12
交換	6
出会い	1

選択	確信	不明	課題	常夏	花火	成長	通話	期限	渦	作文	当落	睡眠	想起	夏祭り	購入	内心	予約	修復	願い	晴れ	曇り後	作戦	嘘	決意
330	324	318	311	303	296	279	270	252	245	240	234	227	221	215	208	202	196	190	184	176	169	162	156	149

星座	期待	真夏	明日	納得	新年	手袋	熱	写真	認知	将来	誕生日	一年	特別	悪戯	距離	共有	指切り	後日談	日常	紗夜	日菜
478	470	463	456	448	441	434	426	419	413	407	400	393	385	379	373	367	360		355	346	338

出会い

日常というものは、ほんの些細な事で変化する。

化け物に襲われた、空から女の子が降ってきた、ちよつとおかしな力を手に入れた。そんなファンタジックな事があれば紛うことなく変化をするだろう。

だけどそんな生き方を変えるような大きな変化ではなく小さなもの、それであつてもゆつくりと日常というものは変わっていく。

例えば……恋をする、とか。

学校が終わり自転車に乗って校舎から出る。予定もないし真つ直ぐ帰ろうとしたところで今日は週刊誌の新刊が出る曜日だということに気づき、帰り道に建っているコンビニに寄る。

空は怪しく灰色の雲に覆われているが、まあ大丈夫だろうと自転車から降りてコンビニに立ち寄る。

最近では立ち読みを防ぐためか本にテープを貼っているコンビニもあるが、このコンビニではありがたいことにそんなことはない。

常時金欠な僕からしてみれば大変ありがたいことなのだが、高校に入ってから何カ月もの間立ち読みさせてもらっているのだから感謝の念は欠片も持たずに本を手取る。

この週刊誌の僕のお気に入りの作品は後ろの方にある。大変好きなのだが残念ながら人気がないのだろうか。

それは『青春ラブストーリー』と銘打った作品で、ガールズバンドを組んだ女の子グループのメンバーと主人公との恋愛を書いた作品。

特別ストーリーが面白いわけではない、ならば恋愛描写が非常に上手で……というものでもない。何に惹かれたのか、自分でもわからない。

僕自身音楽がある程度好きなので音楽関連というところに惹かれたのかもしれない。恋愛というものを経験したことがないからどこか惹かれたのかもしれない。

「あーらら……」

週刊誌のめぼしい作品を全て読み終えた僕は棚の元にあった場所に戻し、そろそろ帰るかと外を見てみると大雨。大丈夫だろうとは何だったのか。

ため息をつきながら適当にお菓子を買って外に出る。降り注ぐ雨は想像してたよりもはるかに勢いが強かった。

自転車なんて酷い有り様だ、屋根の下に停めなかった自分も悪いのだが。

鞆の中には折り畳み式の傘が入っているはずだが、傘を挿しながら自転車を漕いだら邪魔だ。なにより警察に捕まって面倒くさいことになるかもしれない。

そもそも折り畳み式の傘では自転車全体を覆うほど大きくないのだから利点は何も無い。仕方なくびしょ濡れになりながら帰ろうとしたその時、視界の端に一人の女の子が映った。

自転車は僕の一台しか見当たらないことから彼女は傘を持っていないんだろうな、ということは簡単に推測できた。

もしここで傘を貸すことができるのであれば人間としてできてるんだろうな、なんて思いながら自転車で足をかける。

だが僕は彼女と目があってしまった。目があわなければこのまま自転車を漕いで家まで帰ったのだが、目があってしまったならば話は別だ。

もちろんそれがどうしたと帰るのも何もおかしくない。しかし目と目があつたら不思議な運命と何処かで聞いたことがある、それに放つて置くのは少しだけモヤツとする。

仕方なしに足を自転車から離し、屋根の下で傘を取り出して彼女に話しかけた。

「あの……これ使いますか？」

向こうはもうこちらから目を離して空を見ていたがその視線は再びこちらに向く。その目からは困惑の色が見てとれた。

「えっと……傘がなくて困っていたように見えたので」

「え……ええ、確かに傘を忘れてきてしまつて困っていましたが、私に貸したら貴方が困るのでは？」

「あー……僕は自転車で傘を使えないので、だったら貸そうかなと」
もう結構濡れちゃってますし、そう両手を横に上げながら言うとし
ばらくの間無言が続いた。

やめてほしい、僕は自分から話題を振るのが大の苦手なんだ。出来
ればさっさと借りますって言って借りてほしい。貸しましょうかと
言った手前やっぱりやめますとも言いつらいし。

「そういうことならお言葉に甘えて……と言ってもこれはいつお返し
すればいいですか？」

「多分来週の水曜日にもこの時間くらいならここにいますので」
「わかりました、ありがとうございます」

そう言って傘を渡すと僕は逃げるように自転車に乗って帰り道を
急いだ。座って漕ぐとズボンがもつと濡れてしまうし、ほんの少しで
も早く帰るために当然立ちこぎで。

家に帰ると僕は真っ先に風呂場に行って制服を脱いで干した。幸
い靴下は濡れていなかったたので床は濡らさずにすんだ為、親に怒られ
ることは無さそうで一安心だ。

僕は適当に服を着るとそのまま自分の部屋のベットに寝転がった。
「……女と学校外で話したのいつぶりだよ」

そう独り言を溢しながら最近やってるスマホゲームを起動する。
パソコンでNeo Fantasy Online、通称NFOと
いうゲームもやっているが、あれは夜中腰を据えてやりたいので平日
の学校終わりはスマホと決めている。

「にしてもあの人がかわいかったなあ……」
名前も聞いていないし会話というにはおこがましい短くしか話を
していないが、それでも僕の記憶に残るには十分、それくらいあの人は
印象的だった。

真面目そうで水色の髪をした彼女。空を不安そうに見上げるその
表情も、僕に話しかけられた時のあの困惑の表情も鮮明に思い出せ
る。三日もしたらその表情は思い出せなくなってそうだけだ。

そんなことを思いながらゲームをして、親が帰ってきたのを確認す
ると乾いた制服を適当に取り出し風呂に入って、夕飯を食べて寝た。

毎日毎日が同じことの繰り返し、嫌になる。なんて中学時代から数えきれないほど思ったことを考えながら登校し、席に着くと同時にスマホを弄る。

こんな僕だが学校では居場所はあるし友達もいる。ただ数は少なくて中学からの知り合いとあと数人、といった感じだが。

学校の授業なんて7割寝ている、起きてる3割は寝ると面倒くさい授業くらいだ。

別に学校の授業なんて聞かなくても理解できる、なんて漫画のようなことはなくテストの成績は平均より普通に低い。それどころか下から数えた方が断然早いくらいだ。

勉強なんてしなくても余裕だった小学生時代は幸せだったんだな、なんてことを考えていたら今日の授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。

今日は水曜日、つまり週刊誌の新刊の発売日で、雨なども降っていないのでコンビニに向かう事にした。

今日は何かあった気がするが思い出せない。なんだったか、掃除の当番でも日直でもなかったし、友人は忙しいと言っていたし何もなかった気がするが……思い出せない。

まあ思い出せないなら大したことではないのだろう、そう思い僕は自転車を走らせた。

「これお返しします」

コンビニに着き中に入ろうとしたところで聞き覚えのある声で話しかけられた。そちらを向くと、傘をこちらに差し出してきている女の子がいた。

一瞬なんだと思ったが、ゆっくりと一週間前の記憶が浮かび上がってきた。

「あ、そういえば……」

「自分で貸したのに覚えてなかったのですか？」

「まあ、返ってくると思ってなかったってのもありますけど」

「……私がこれを持ち逃げすると思ったってことですか？」

「いやそういうわけじゃ……」

貸した物は返ってくると思うな。誰が言ったかしらないがその通りで、例えば物を貸したらもう二度と返ってこない、なんてことは両手の指で数えきれなくなる前に数えることをやめた。

実際傘を貸したのはその傘がだいぶ古かったし壊れかけだったので、別に盗まれたとしてもいいかなって思ったからだったりもする。差し出された傘を受け取ると、彼女は仕事は終わったと背中で語るかのように帰っていった。

もう彼女と会うことはないんだろうな、少しだけ残念に思いながら傘を鞆にしまい、自転車に乗って僕も帰ることにした。

「あ、週刊誌読んでないじゃん」

最近、物忘れが酷くて困る。

交換

趣味は寝ることです、と自己紹介を更新しようかと思うぐらい寝たと思う。

何処に置いたか記憶を辿りながら眼鏡を探しながら今の時間を確認する。時計は針がよく見えないのでスマホを見ると午後の2時を示していた。

昨日は午前の3時くらいまでゲームしていたからだいたい11時間。自分でも寝すぎと思うし1日を無駄にしすぎではないかと自分でも思うが、この1日を無駄にしている感じは何故か嫌いではない。

親は既に仕事で出掛けてしまっているし朝食……ではなく昼食は自分で調達しなければならぬ。

「何かあったっけなあ……」

スマホを弄りながらお湯を沸かす。休日こうやって寝すぎた時はインスタントを食べてからゲームをするか友達と遊ぶかを決める。

ただ自分から遊びに誘うことは苦手なため向こうから遊びの連絡がこない時は家でダラダラしている。そんなんだから引きこもりに近い生活をしてしまう。

ここで問題発生、いつもインスタント系が置いてある場所に何も無い。確か先週の日曜に食いきつちやったんだっけ、と再び記憶を探りながらお湯を沸かすのをやめ外に出る準備をする。

自分で料理が出来ないわけではないが金がないわけでもないし、なにより片付けるのがめんどくさいため外で食べることにした。

外は1月ということもありとんでもない寒さで、パーカーにジャンパー、手袋に財布とイヤホン、家と自転車の鍵を持って外に出る。

これだけ重装備にも関わらず寒いものは寒い、地球温暖化なんて嘘なんじゃないかと疑ってしまうくらいには。だが夏は国が違うのかのような暑さなのだから我が国は加減というものを少し知ってほしい。

寒い寒いと文句を言いながら自転車を漕ぐ。自転車を15分くらい漕ぎ続けると目的地についた。

某大手ファストフードは昼を過ぎても大人気だ。クーポン券を使用してのポテトと珈琲、ポテトは塩少なめで、と頼むのが僕の中で密かに流行っている。

部活終わりの高校生と思わしき集団や何をしているのかは知らないがパソコンを弄っている人、一番小さいサイズの飲み物だけで勉強してる真面目な人たちの後ろを通り端の席を確保する。

イヤホンを差し込み適当に音楽を聞きながらゲームをする。寝すぎたからスタミナが溢れてしまっているから少し忙しい。

「隣大丈夫ですか？」

そんな声が聞こえたのでイヤホンを外しながらどうぞ、と言うとその人は隣に座った。

チラリとそちらの方を見るとその人は女性で、大事そうにギターケースと思わしき物を床に置いた。

そんな大きいものを持つてゐるなら入り口付近に座ればいいのにと思ったが、混みすぎてここしか空いてなかったのかと自己完結していると、その人の頼んだ物が目に入って驚かされた。

ポテトのLサイズ2つ。女でそんな食うの凄いな、なんて思っているとあることに気づく。

この人傘かした人では？ ということに。

髪は水色だし顔も多分一緒、多分同一人物だよなあ、なんて考えていると、見られていることに気づいたのかその人はこちらを向き、少し驚いたかのような顔をした。

「もしかしてあの時の人ですか？」

多分そうです、という意味を込めて頷く。

「あの時はありがとうございました」

こちらに改めて感謝を伝えてくる。感謝なんてされなれてないからどう対応していいかわからない。

内心あわてふためくがそれを外には出さないように軽く頭を下げてイヤホンを再びつける。

それからはなにごともなく頼んだ物を食べながらゲームをしていたのだが、ついにゲームのスタミナが消費しきった。

忙しい忙しいとやってはいたがいざ終わるとやるのがない。仕方がないのでSNSを眺めながら食べ進める。

やっこのこと食べ終えたのでそろそろ帰ろうと立ち上がったところで隣の人から話しかけられた。

「音楽……やるんですか？」

「えっと……前はやってましたけど、今はほとんど聴き専ですね」

イヤホンを片付けながらそう答える。小学6年まではずっとピアノをやっていたのだが、今ではもっぱら聞く専門になってしまっている。

にしてもなんでそんなことを急に聞くのかと思ったが、僕のスマホに音楽グループの人の弦きが流れてきているからだと思う。

勝手に覗き見されるのはいい気分ではないが特別見られて困るものはない。そも見えてしまうようにやっていた僕が悪いのだからあれこれ言う気は起きない。

「……お願いがあるんですが、大丈夫ですか？」

「内容しだいになりますけど」

「私のギターを聞いて欲しいんです」

「……何で僕なんですか、お互いほぼ初対面ですよね？」

「実は今行き詰まっているので第三者からの意見を聞きたいと思っていました。ただ、今知り合いに音楽経験のある人がいなくて……」

壁にぶつかっているから意見が欲しい、要はこういうことだろう。ゲームのスタミナが回復しきるまではまだだいぶあるし、帰ってもすることは特にないので大丈夫とだけ答えた。

女の人に誘われたからホイホイついていったなんてことはない、多分。

「ありがとうございます、それじゃあ行きましょう」

彼女はそう言うって食べきったトレイを持つ。え、食べきるの早くね？　なんて思いながら僕も食べ終わったものを捨てて彼女についていく。

ギターってどこで練習するのだろう。ライブスタジオとかだろうか。あまり金がかからなくて遠くなければいいなあ、そんなことを思

いながら店を出た。

「30分でお願いします」

「30分ですね、ドリンクはどうしますか？」

「いえ、大丈夫です」

カラオケってギター大丈夫なんだ、そんなことを思っていると彼女は慣れた様子で受付を済ませていたので僕も自分の分のお金を払い部屋に向かう。

僕自身カラオケというのは殆ど来ない。友人から誘われても断るくらいには人前で歌う事は好きにはなれない。

「私が弾くのでどうだったか、という意見を頂ければ」

わかりました、と言うと彼女は曲を選ぶ。あ、この曲知ってる、なんてことをボーツと考えていたら、突然意識を覚醒させられた。

凄い。

ギターを弾いたことのない僕ではそんな感想しか出てこない。これほどの演奏ができていてなお満足がいつていない、理想が高くて努力家なのだろう。

完璧とってしまうほど素晴らしい演奏。

ああ、なのに何故だろう。

どうして彼女の音は。

——こんなにも焦ったように聞こえるのだろうか。

「どうでしたか？」

その言葉で既に演奏が終わっていたことに初めて気づく。音がだんだん聴こえなくなっても不思議と演奏が続いている気がした。薄れていく音にも色がついていた気さえした。

「凄いと思います、ギターをやったことがない僕でもわかるくらい」

彼女はそう、と答えた。恐らく何度も聞いてきたのだろう。貴方も

そんな感想しかないのね、そんな風に言われてるような気がした。
凄かった、よかったと思う、それは始まる前になんて答えようかと
考えていた回答達。

無難で、相手を傷つけず、それでいて深くは聞き返されない回答。
だが実際に終わってみればその言葉のような抽象的なものしか浮か
んでこなくなってしまった。

「ただ……何処か焦っているような、そんな感じがしました」

「焦るような……早く弾いてしまったなんて風には思わなかったけれ
ど……」

「リズムじゃなくて、なんていうか……何かに追われているかのよう
な感じが」

小学生時代発表会が近くになるとよくピアノの先生に、君は焦りす
ぎだ、もう少し余裕を持った方がいいと言われていた。

あの頃は どうして焦るのが悪いのか、焦って悪いことなんて一つも
ないだろうと思っていたが、今この瞬間にやっと解った気がする。

「何かに追われているような……」

「もう少し余裕を……と言っても僕は貴女じゃないですからなんで
焦っているのかも、そもそも本当にこの感想があつてるのかわかりま
せんけども」

そう言うとき少しだけ彼女は下を向き、何か考えているかのような間
の後、僕に問いかけてきた。

「……もし貴方は、どれだけ頑張っても後から始めたある人にどんな
ものでも追い抜かされるとしたら、どうしますか」

少しだけ震えるような声でそう言ってきた。恐らくそれが彼女の
焦りの理由。

妹か弟、または友人か。そのどこかにそのような人、所謂天才がい
るのだろうか。それに今まで何度も追い抜かれたのだろうか。

それはどんな気持ちだろう、僕にはわからない。姉はいるが弟と妹
はいない、ゲームも誘われてからやり始めるため自分が先にやること
はほとんどない。

「今していることをもつと頑張るか、今していることから逃げて別の

ことをするかのだつちかと思ひます」

そうですか、と弱々しく言う彼女にただ、と付け足すようにいう。「もし頑張るなら自分だけの何かを見つけて、それを伸ばすしかないと思ひます」

「自分だけの……」

満足いく答えではないだろう。ありふれた答え、そしてつまらない答えだ。更にはとても難しい事を言っている自覚はある。

僕は彼女の音に惹かれた。こんなにも気分が高揚しているのはいつ以来だろうか、心からこんなにも思えることは今までであっただろうか、高鳴っているのはいつぶりだろう。

少しでも力になれるなら協力したい、そんなことを思っているともう30分たつたらしく終わりを告げる電話がかかってくる。

最近出来た近くのライブハウスに行けば彼女の音が聞けるだろうか。なんて思っていると、連絡先を交換しませんか？　と言われたのでお互いに連絡先を交換した。

さっきの演奏がどうだったとか、趣味はなんですかとかそんなものもない。

女友達がほぼ、というより0の僕からすればそんな会話を振れる筈もなく、結局店を出るまでに会話をすることはついぞなかった。

彼女はどうかやら歩きらしく、僕は自転車を取りに行かなければならないため別れることになった。

「それでは、また」

そう言われ別れる。また、つまりまた会える可能性があるという事だろう。それはなんともありがたいことだ。

自転車を取りに行く為に歩いている途中殆ど使っていない方のSNSを開くと、僕の少ない友達欄の一番上には『氷川紗夜』という名前が小さく載っていた。

類似

「寝れない……」

興奮が収まらない、もう半日以上経っているはずなのに。明日は学校があるのでできるだけ早めに寝なければならぬのだが、僕の頭が、記憶が、心がそれを許さない。あの音が僕を縛って離さない。

横になって20分くらいが経っただろうか。その間目を瞑り続けていたにも関わらず眠気が欠片もこなかったので充電中のスマホを手に取り動画アプリを開く。

いつもはあなたへのおすすめを飽きるまで見ているのだが、今回は検索で『ギター』と入力して上から見えていく。

動画を上げているくらいだから自分達の音に少なからず自信があるのだろう、やはりというべきかとても上手だ。

だけど氷川さんのと比べるとどうしても劣っているかのような気がする。

あの音みたく心を揺すらない、掴まない。あの感覚を求めて次へ、また次へと動画を見続けた。

今何時なのだろう、表示される動画をあらかた見終えた僕はふとそう思い、画面に表示されている時間を見るとそこには午前5時と示されていた。

やってしまった、今から寝てしまったら確実に学校には間に合わない。しかし時間があると言っても課題も既に終わっているため特にすることはなにもない。

リビングに足を運び今日の学校で睡眠という魔の手に少しでも対抗しようと栄養ドリンクを飲む。栄養ドリンクってそこまで美味しくないくせに変な中毒性があるからつい飲みでしまう。

仕方がないのでゲームをしながら時間を潰していると親に呼ばれる。親は朝飯を作ってくれるわけではないが一応起こしてくれるので感謝はしている。

テレビをつけて興味の無いニュースを聞き流しながらお菓子を食べ、それを食い終わると制服に着替え学校に向かうことにした。

「お、悠がこの時間にいるなんて珍しいじゃん」

「今日は徹夜したからな」

通学中、偶々会った友人とそんな風に下らない話をしながら自転車を漕いでいると学校に着いた。自分のクラスに入るなりすぐに席について寝る体勢に入る。

朝のHRまで残り15分、まあ寝てないよりはいいだろう。そう考え欲望のままに別の世界に旅立った。

「起きろ、次移動教室だぞ」

海の深くに落ちていたような思考を無理矢理釣り上げられる。移動教室は確か3時間目で1時間目は普通に教室で授業の筈では？
と思つて時計をみるともう午前中が終わりそうなことに気づく。

もしかして、といった感じで顔を向けると誠に残念ですが、といった目でこちらをみている。

「流星に？」

「ヤバすぎ」

そんな軽口を言いながら授業の準備をして移動を始める。徹夜はするもんじやないかと改めて思わされてしまった。次の授業は化学で、何やら実験をするらしい。

化学はいつもなら睡眠学習を僕はしているのだが、実験となると寝ていると班の他の人たちに迷惑がかかってしまう。

めんどくさいけど真面目にやるかあ、なんて思っていると隣から話しかけられる。

「ところで今日の放課後なんだがちよいと付き合ってくれね？」

「用件は？」

「ちよつとアンプを見たいんだけど一人だと行く気にならないからさ」

こいつは3ヶ月前だったか、知り合いの大学生がギターを新しくするとき安く買い取ったと自慢気に言ってきた。それまで音楽に欠片も興味なかったのに今では結構お熱らしい。

しかしアンプってどこで買うんだろう、というよりも僕が行く理由

はどこにもない。

「いや行かないけど」

「じゃあ移動教室寝過ごししてよかったんだな？」

移動教室寝過ごしなんてほとんど死と同義だ、多分三日は学校に来るのが鬱になっていたと思う。つい大きなため息をついてしまう。

「じゃあなし、行けばいいんだろ？」

「お、助かります」

めんどくさすぎる。もう一度ため息をつくと僕は意味もなく窓から空を見上げた。

「と、いうわけで向かうぞ」

「忘れとけ」

学校が終わると僕とこいつはアンプを見に行くことになった。徹夜をしてしまったのでさっさと帰って昼寝がしたいのだが、約束してしまったものを破るわけにはいかないので仕方がない。

アンプはどうやらショッピングモールでも見れるらしく、帰り道にあるからそのがいいだろとのことだ。

1月なので風は冷たいし強い。もう押した方が速いんじゃないか？　と思うくらいにはまったく進まない。

自転車をひーこら言いながら漕いでようやくショッピングモールに着き、適当なところに自転車を止めアンプを見に楽器屋に向かった。

ピアノにギター、ドラム等の様々な楽器が客寄せか知らないが置いてある店に入るとあいつはさっそくアンプを見に店員のところにいった。

待つの嫌いだ、暇で暇でどうしようもない。代わり映えのない日常でも虚無のような時間は新しかろうと欲しいとは思わない。

折角なので触っていいですよと書いてある楽器のどこに向かうとピアノが置いてあったため、懐かしさもあって軽く鍵盤を押す。

ピアノで軽く遊んでいるとあいつはアンプが決まったのか、上機嫌でこちらに歩いてくる。

「お前もギターやればいいのに、楽しいぞ？」

「ギターなんて似合わねえよ、それにどうせ長続きしないし」

「まあお前飽き性だからなあ、高い金使って始めるのは合わないか」

それならこれならどうだ？ と近くにあつたマラカスを指差してきたので頭を軽く叩く。この店にいる理由はもうないので僕たちは店を出る。

そうすると何処かで見ることがあるような顔の人とすれ違う。水色の髪に多分同じ顔、僕は振り返るがその人はまるで僕なんか知らない、と言っているかのように真っ直ぐに楽器店に入っていく。

「どうした？ 急に振り返って」

「……いや、知り合いに似てる人がいたからつい」

そんなんいるか？ と後ろを振り返って見ているこいつにはお前の知らない人だからわからねえよ、といってシヨッピングモールを出る。

家に帰ってから考えるのはすれ違った人、氷川さんに似ていた人。見間違いかも知れないし、向こうが気づかなかつただねかもしれない。ただ少しだけ引つかかることがある。

「氷川さんってあんな笑うのか？」

すれ違った人は凄いい笑顔だった。それは本当に僅かにしか顔が見えていなかったが確かに見えた。楽器店に入るのが楽しみだ、なんて考えているかのように。

いや、流石に人に対して笑うのか？ なんて考えるのは失礼か。それに音楽をやる人なのだから多少なりとも楽しみなだろう。

心の中で軽く謝って横になるが、どうしても気になり連絡用のアプリを開く。

『今日氷川さんらしき人を見かけたんですけれど、〇〇楽器に行きましたか？』

打ち込んだ後送信ボタンを押そうとしたが、やめた。

これじゃあまるで僕が氷川さんに気があるみたいじゃないか。僕が気になっているのは彼女の音であつて彼女自身ではない筈だ。

文を全て消すと徹夜をしたのだしさっさと寝ようと目を瞑る。

ただ気になる、気になって仕方がない。

どうしても気になった僕は結局『今日○○楽器に行きましたか?』と送った。

やってしまったと思う反面、これでモヤモヤが解消される。氷川さんが気づけば、だが。

メッセージを送ると少しだけ紛れたのか一気に眠気が襲ってきた。無理に逆らう必要はないし逆らう事は不可能だろう。ゆっくりと再び目を瞑ると、今度はすぐに意識が落ちていった。

数時間後目を覚ますと氷川さんから返信がきていた。内容は簡潔に『行ってませんが、どうしてですか?』とのことだった。

どうやらあの人は氷川さんではなく、僕の見間違いだったらしい。もしくはそっくりさんか。

氷川さんに似てる人がいて気になったので聞いてみただけですとだけ送る。

流石徹夜の影響と言うべきか、目を覚ますと午後は吹き飛んでいった。当然こんな時間に既読が着くはずもなく、先程まで寝ていたせいか欠片も眠くない。

生活リズムボロボロだなど何度目かわからない、今さら過ぎる事を思いながらゲームを起動した。

焦燥

『明日、前と同じところでお願いしてもいいですか?』

少しでもやる気のあるうちに課題をしまおうと思い、自分の部屋に向かう前にスマホを開くとそんなメッセージが届いていた。

送り主は氷川さんで『大丈夫です、時間はどうしますか?』と返した。

また、とは言われたものもしかしたらあれっきりの関係かもしれない。そんな風に思っていた僕にとって送られてきたそれはとても嬉しい内容だった。

もしかしなくても僕は彼女の音の虜になってしまったらしい。しばらく待つと『では11時でお願いします』と送り返され、そんな早い時間からやるのかと思いつながら了承の意味で既読をつけた。

「はあ……」

ため息をつきながらスマホをソファアームに投げ洗面台に向かう。スマホが近くにあると気になってしかたがない、昔から課題をするときは遠くに投げてからすることになっている。

ため息をつくときと幸せが逃げる、誰が言ったか知らないが日本では昔から言われている。そんなことを言われたら僕の幸せは逃げすぎて、もう一周回って不幸を取り込んでいるのではないか、そんな風になさえ思う。

眼鏡を外し冷たい水で顔を洗うと眠気が少しだけ消えた気がする。ほんの気休め程度だがしないよりはましだろう。

顔を吹いて眼鏡をつけ直して鏡を見る。映るのは当然自分、髪は長らく切っていないので目を半分くらい隠している程度には伸びきっている。

僕は自分が好きじゃない。『普通』に甘んじて努力をしない、めんどくさいが優先度最高。そんなのでも嫌いになりきれないのは自分が僕だからだろう。自分を嫌いになればどれだけ楽だろう、墮落しきった自分自身のことを。

「厨二病かよ……」

もう一度顔を洗い熱くなってきた頭を冷やしてそんな風に自虐する。こうすればかつこいいとでも、誰かが共感してくれるとでも思っているのだろうか、僕は。

男子高校生なんて大抵がこんなもんだ。非日常が突然やってきて自分が主人公になるのを望んでいる、自虐すれば少しでもかつこいいと思っっている。

ああ、何のために眠気を冷ましたかを忘れそうだった。自分の部屋に入って今週の課題を取り出す。机に広げ椅子に座りシャープンを手を持った。

課題をちゃんとやろう、そう思っていたのは何分間だろうか、気づいたら僕は答えを写している。真面目と正反対、天真爛漫なんてほど素直に生きていない。

『不真面目』そんな言葉が僕以上に似合う人間に合ったことはまだない。

答えを写し終わるとシャープンと課題を鞆にしまうことすらせずにパソコンを起動しNFOを起動する。

クエストを軽く済ませてボスマでやってしまおうと思ったがそれすらも気が乗らない。結局何もやらないままNFOを閉じパソコンの電源も切る。

「僕は変われるのだろうか……」

高校生になったら頑張る、夏休みになったら頑張る、三学期こそは頑張る。幾度となく変わろうとしたが結局変化はないまま三日坊主で逆戻り。

でもようやく僕を変えてくれそうなものを見つけたかもしれない。彼女の、氷川さんの音なら僕を変えてくれるかもしれない。

夢中になれたのは久しぶりだ、心を動かされたことは今までであったろうか。彼女の頑張りを間近で見たいれば墮落しきった僕は白に戻れるだろうか。

ああ、そう思うと明日が楽しみになってくる。課題のために目を覚まそうと顔を洗ったが所詮は気休め程度。寝ようと思えば苦なく寝ることができた。

太陽光に体を焼かれ目を覚ます。眼鏡をかけて時計を見ると10時を示していた。

スマホは何処だっけと思い探し回っていたが、昨日投げたままだということ进行を思いだし取りに行く。充電を確かめると20%と表示されていた。

これでは充電が持たないと急いで充電器に差し込んだ。

着替えたり何か食べたり、無駄に芸術的な寝癖を軽く直すなどの外出の準備が終わったところにはスマホは外で使ったとしてもある程度は持つくらいまでには回復していたので外に出る。

カラオケ店まではだいたい20分、予定よりも早くことはあれど遅刻はないだろう。時間にルーズな僕からしたら5分前で着くなんて奇跡的だな、そんなことを思いながら自転車を漕ぐ。

信号の運も味方してくれたのでカラオケ店には思ったよりも早く着いてしまった。何をして暇を潰そうかなんて思っていると声をかけられた。

「もう来たんですね、それじゃあ行きましょう」

その声の方を向くと氷川さんがいた。なんているのか、そんな僕の疑問を置き去りに彼女はささっと受付を終わらせ早足で奥に進んでいく。

少し待つて欲しい、だいたい10分くらい早くついたのにもういるって何分前にきたのだろう。受付の人にお金を出したあとにある人何分前からいましたか？ と尋ねた。

だいたい5分くらい前にいましたねと返され驚く。約束の時間よりは15分くらい前からいた方がいいですよ、と店員に言われてしまった。

善処します、とだけ言うように氷川さんのいる部屋に向かった。

「今日はありがとうございます、えっと……ヨウさん？」

会うたびに感謝されてる気がする。やはり僕とは違って何処までも真面目だ、まだ数回しかあつていないがそれは充分な程にわかる。

しかしヨウさん？ はて、誰のことだろうか。そうは思わされたが少しだけ考えれば何の事かすぐにわかった。

「悠です、加々美悠かがみゆうって言います」

「悠……ああ、そういうことでしたか」

僕は連絡先はまったくと言っていいほど交換しない。それこそ友人か、ネットの知り合いと通話をするためにしか。

今までそれでなんともなかったが僕のネットでの名前はyouで統一しているから恐らくローマ字読みをってしまったのだろう。

「それでは加々美さん、感想の方お願いしますね」

そう言うとき氷川さんは演奏を始める。

耳から音が僕の中に侵略してくる。身体の中を血液のように駆け巡り体が自然と熱くなってくるのが感じられる。

前に聞いた時よりも良くなっている気がする。何がよくなったのかは僕にはわからない、音の深みとかそんな理論的なことは僕には縁遠いものだから。

でも何でなんだろう。

確かに良くなっている、それは感じる。

それでもこの前より焦りが増しているような……

「どうでしたか？」

そう尋ねてくる氷川さんの顔は少しだけ不満げだった。

どこか失敗したのだろうか、これ程でも満足行かないなんて彼女の目指しているのはどれだけ高いのだろう。

「この前よりもよくなっていると思います」

これ以上は言っていないのだろうか。自分の心にとどめておいた方が恐らくいいはずだ。そう思っていたのに自然と口から溢れ出てしまった。

「ただ……この前よりもより焦っているように聴こえました」

ああ、一度溢れると止まらない。

「僕には、氷川さんがなんで焦っているのかはわかりません」

風船につけた傷からゆっくりと空気が漏れ出すように。

「僕は貴女の音が好きなんです」

ダムに開けた小さな穴から水が穴を広げ水の勢いが強くなるように。

「貴女の音を妨げるのはなんですか」

小さな傷からやがて壁を破壊する人間のように。

「出来るかわからないけど、僕は手伝いたいんです」

「貴方には！」

関係無い……と氷川さんはしりすぼみに言った。

頭に登った血がゆっくりと降りてくる。踏み込みすぎた、そう思った時にはもう遅い。

謝る？ 向こうの反応を待つ？ それとも、逃げるか。どれも選べずにいると氷川さんはギターを置いてソファアに座り俯いた。

会話はない。別の部屋で歌っている声はつきり聞こえてくる。

何分経つただろう、5分だろうか、10分だろうか。もしかしたら既に1時間経つたかもしれないし3分も経っていないかもしれない。不思議な時間感覚に呑まれる。

「私には、双子の妹がいます……」

静寂を打ち破る小さくて弱い声、そして震えている声。

「妹は天才で、何でもすぐに出来る。私の真似をしてきて、すぐに私を追い抜いていく」

先週聞かれた才能に抜かされるとしたらという話は恐らくそのことなのだろう。

ああ、なんとなくわかってきた気がする。

「月曜日に妹は遅く帰ってきて、どうかしたのかと思っていたら貴方のメッセージが届きました」

私は目の前が真っ白になった気がした。また抜かされるのかと思った、そう言われた。辛そうな声で、表情で。

「ギターでは抜かされたくない、ギターだけでは……」

私は、どうしたらいいんでしょうか……

今にも消えてしまいそうな声で、そう言われた。

「僕には……わからないです」

なんて無責任なんだろう、それでも僕にはこの答えしかない。もし

ここで天才的かつ画期的な方法を思い付くのであれば苦勞しない。

自分だけのものを見つける、僕は前そう言った。確かにそうだ、一番の方法はそうだ。だけどそれを見つけないのは僕には出来ない。氷川さんが自分自身で見つけださないといけない。

「氷川さん、明日何処かに遊びに行きませんか？」

何を言っているのだろう。自分でもわからない、氷川さんも全くわかっていない様子だ。

「遊びに行くなんて暇はありません、それならもつと練習をした方が」
「今の状態で練習を続けてもいい方向に進むとは思いません」

練習すれば必ずしもいい方向に行くとは限らない。しっかり休むことも大事だ、中学時代の部活で顧問に言われた事だ。

「ただの休憩って訳でもないです、もしかしたらヒントだって見つかるかもしれません」

「……わかりました。」

ですが、明日の1日だけです」

時間は後で知らせてください。そう言うと氷川さんは部屋から出ていった。

勢いで言ってしまった、ついに理性まで腐りきってしまったのか。でもチャンスは得た。

氷川さんの音から焦りを取り除ければどうなるだろう。きっと今より素敵な音になる。

素敵な音にしたいのは何故なのだろう。氷川さんのため？ 僕が聞きたいだけ？ それとも……

よく回る口だ、汚い思考回路だ。

氷川さんのため？ 言い訳は考えたくない。僕があんなことを言ったのはただの自己満足だ。

今まで生きてきて言われたこと、顧問に、教師に言われた事をそのまま言っただけ。そこに僕の言葉は少しも混じっていない。

僕はただ自分の心を変えられかもしれない氷川さんの音をよりよくしたい、それを手伝えるのならそうしたい。それは紛れもなく自分の為でしかなくて。

そうなるといっただいなんなのだろう、この気持ちは。どうしてこんなにも明日が楽しみなのだろう。

外に出ると想像よりも遥かに寒く、思考をそこでやめて何度目かわからないため息をついた。

遊興

目の前を人が歩いて行く。僕なんか視界の片隅にも映っていないのか、一人で丸椅子に座っている僕に視線を向ける人は一人もいない。男も女も、子供も目の前を歩いていく。

ショッピングモールはいつでも人気なのだが、やはりというべきか休日はその人気は膨れ上がる。特に男女の二人組の数は異常と言ってもいい。

人間観察は趣味でも特技でもなんでもない、ただ暇潰しにはそこそこ役立つくれる。

勿論だがわざわざショッピングモールにまで出向き暇潰しをするだけなんて特殊なことではない。待ち合わせまでの時間潰しだ。

約束の時間までは残り15分。さてもう少し時間はあるが……昨日店員の言っていた通りであれば氷川さんはそろそろ来るだろうか。

そんなことを思いながら座って待っていると目の前で久方ぶりに人が立ち止まり、声をかけられる。

「時間、間違っていたでしょうか？」

「いや、僕が早く来すぎただけ……って氷川さんもかなり早くないですか？」

「私は約束の時間より15分くらい早く着いていないと安心出来ないのです」

昨日カラオケ店員の言った事は本当らしい。昨日来たからといって今日も時間より早く来るなんて確信はないが今日は20分前から来ようと決めていた。

待つのは嫌い、でもそれ以上に人を待たせるのが嫌いだ。自分から誘って相手を待たせるのは嫌だ、そんな考えから。

「それで、今日は何をするんですか？」

「決めているって言うのと嘘になるんですけども……昼食ってもう取りました？」

「いえ、私はまだですが」

「それなら先に昼食取りましょう、どこがいいとかありますか？」

「それなら……いえ、何処でもいいです」

よいしょ、と溢しながら立ち上がると背中が悲鳴をあげる。もう歳なのか、なんて思いながら歩き出す。

何処に行くか決めてるんですか？ と向かっている途中で横を歩いている氷川さんに聞かれた。

僕は氷川さんの好きな食べ物とかの情報は聞いていないが、これは多分好きなのだろうという物はなんとなくわかっている。

それなりには、と返すと返事は返ってこなかった。

「ここですか……」

異性と二人の昼食でファーストフード店は流石にまずかつただろうか。ただ僕はお洒落なイタリアンとか知らないしお金がどれだけかかるかも知らない。

割り勘という手もあるのだが、そんなのあり得ない、という意見を持つ女子は少なくないらしいためよろしくない。

そもこういった時に慣れない物を食べてあまり美味しくないなど思う方が総合的に見て損かなと思ってしまう。

ならここが一番いいのでは？ と思ったわけだ。氷川さんは前にあった時は山のようにポテト頼んでいたのだし、少なくとも嫌いという事ではないだろう。

氷川さんが注文する前に払いますでしょうか？ と聞いたら自分のものは自分で払います、と言われた。

「あれ……」

僕の見間違いだろうか、ポテト好きかと思ったのだが一つ、しかもサイズはMだった。前回のあれはたまたまなのか？ と思いながら僕は珈琲とポテトのLサイズを頼んだ。

クーポンが1つで2つの商品に適應できるためLサイズを2つ、なにもお得なものだと思いながらトレーを受け取り、氷川さんが既に座っているテーブル席に座る。

視線を感じる、自意識過剰な訳ではない。どこからか、それは目の前の氷川さんからのものだった。しかしその視線は僕ではない、ポテ

トに向けられているもの。なので僕は氷川さんに声をかける。

「これ、食べますか？」

「……いえ、結構です」

一つ丸々を差し出しながら聞くが返ってきたのは遠慮の言葉。しかしそう言うものの視線はポテトに向いたまま、時折そらすが結局チラチラと見ている。どうやらこの人は真面目なだけに素直じゃないらしい。

「……安くなったからつい頼んじゃったんですけど、食べられそうにないんですが……」

「そ、それなら貰います……勿体ないですし」

そんなことを言っている癖に視線はポテトから離していない、もしかしてこの人はバレていないと思っているのだろうか。そんな事を思いながらポテトを手渡す。

何処に行くか決めているのかと聞かれそれなりにはと返したが、実はここからは完全に無計画。僕は恋愛経験は一度だつてないし、女友達と二人で遊んだ事だつてない。

勿論僕は男だし、実は中身は女でしたなんてでもない。どうすればいいのかなんて全くわからない。一応昨日1日考えてはいたのだが決まらなかった。

デートなら映画とか見ればいいのだろうが僕は今やっている映画が何かすら知らないし、そもそもこれはデートじゃない。

しかしながら僕はこのショッピングモールで音楽関連の所は楽器店しか知らない。流石に楽器店に行ってヒント的な物を見つけられるとは思わないが、多分音楽的なものの方がいいというのは間違いないだろう。

ショッピングモールで音楽的なものといえば楽器店か、はたまたゲーセンかくらいしかないだろう。

そうなるかとゲーセンしかないか、行くところが決まったので僕はちやっっちゃか食べることにした。氷川さんはもう食べ終わっているようだし

「氷川さんってゲームセンター行ったことありますか？」

「いえ、一度もありませんが……まさかそこに？」

ゲーセンにはヤバい人が沢山いる、世間の大半はそう思っているだろう。まあ間違いではないが。

それにしてもゲーセンに一度も行ったことがないとは、小学生ぐらいにメダルゲームを親とやったことがあるという人は少数派なのだろうか。

僕も親と行ったことはないが友人達は殆どやったことがあると言っていたし、それが普通だと思っていたのだが。

ゲーセンは2階にあるので向かうためにエスカレーターに運ばれる。ゲーセンでは太鼓でもやるとしよう、あれならそこまで難しいわけでもないので氷川さんでもできるだろう、一応音ゲーだし。

ただ僕は音ゲーは苦手なので出来ればやりたくはない、特に太鼓は腕がつりそうになるのが特に苦手だ。

そんなことを思っているとゲーセンに着いたがトイレに行きなくなってしまったので、ちよつと待っていてくださいと言ってその場を離れた。

僕がトイレから帰ってくると氷川さんが何かを凝視していた。僕が声をかけるとなんでもありません、と答えられた。

そんなことを言っているがおそらくクレインゲームの景品のところを見ていたのだろう。僕は氷川さんの隣に行つて100円を入れる。

「欲しいのはどれですか？」

自分で言うのはなんだがクレインゲームはかなり得意な方だ。流石にネットで売つて小遣い稼ぎ、なんて程ではないが。

「それ……です」

氷川さんが指差したのは犬のバッチ、少し意外。氷川さんはこういうものには興味がないだろうと思っていたから。

さて僕はこれを取れるだろうか、100円しか入れていないためチャンスは一回。複数回やってはいけないうって訳ではないがそれではかつこがつかない。

「お、取れた」

どうぞ、と言って氷川さんにバッチを渡す。これがぬいぐるみとかだったら別だがバッチなら持つのに苦労はしないだろう。

「上手なんですね」

「まあ趣味はゲームだと胸は張れませんが言うくらいですし」

趣味はゲームです、これは胸を張って言うことではない。勿論近年のゲーム事情を見ている限り決して恥ずかしいものではないだろう。

ただそれはもう少し歳上の話、僕のような学生は他人に言える趣味を運動か文学的なもの、もしくは芸術的なものにするものという風になっている。

誰が決めたとかそういうものではない。自然と、周りに流されて。それが普通だから。

僕は氷川さんを誘ってようやく太鼓のところに来た。氷川さんに尋ねてみたらやったことはないそうで。これで氷川さんが実は化け物みたいに上手だったらそれはそれで面白そうだったのだが。

氷川さんは初めてらしいので赤は真ん中を叩いて青は縁を叩く、と簡単にルールを伝える。難易度は……やさしいでいいだろう。

「まるでドラムみたいね……」

まあ太鼓なんですけどね、心の中でそう返すと曲が始まった。僕は経験者だから多少気を抜いてもフルコン出来る。氷川さんの方を見てみると多少苦戦しながら、それでもミスはなく終えたようだ。

意外と簡単ね、と氷川さんが呟いていたのが聞こえたので次は難易度をふつうに上げる。僕は経験者なのでまだまだ余裕があるが氷川さんは途中でミスをしまつたらしい。

少し震えた声でもう一回、と言われたので100円を追加する。この人は相当負けず嫌いのようだ。

そこそこな回数はやると手首が痺れてきてしまった。氷川さんはまだまだいけるようで、どうかしましたか？ と聞いてくる。体が鈍って仕方がない。

その後も少しだけやっているといくと100円が底をついてしまったのでゲーセンを出る。

「今日はどうでしたか？」

「ヒントになりそうなものは何も……」

でもとても楽しかった。こんなことは久しぶりだった、そう言われた。自分で言うのもなんだが僕もかなり楽しめた気がする。いや、僕が楽しむのは目的から脱線しすぎな気もするが。

「いい息抜きになりました、ありがとうございます」

途中までついて行きましたでしょうか？ と聞いたが大丈夫ですと言われたのでここで別れることにした。

さて、もうすることないし帰るか、なんて思っていたところで後ろから声をかけられる。

「ねえねえ、君とおねーちゃんって知り合いなの？」

誰だろう、そう思って振り返ると先程別れた筈の氷川さんがいた。

いや、違う。似てるけど違う、この人は氷川さんではない。身長は若干小さくて髪は短い。しかし顔は何処となく似ている。となるとこの人がそうなのだろう。

「おねーちゃんの妹の氷川日菜っていいます。実はちよつと聞きたい事があって」

やはりこの人は氷川さんの双子の妹さんだ。

帰るのはもう少し後になりそうだ。

興味

「あたし、君の名前知りたいなあ。あたしも教えただからいいでしょ」

こういうぐいぐいくるタイプの人は正直苦手だ。向こうから何も話しかけてこない人なら会話が一切起こらないので気が楽なのだが。

そんなことよりもここはゲーセンの前、時間もだいぶ遅くなってきたこともありここへの客足は着々と増えつつある。

そこにこんな可愛い人と一緒にいるととても目立つ。こんなところでこんな時間で来る人なんて大抵が一人か男友達としかおらず、女連れなんてどこにもいない。今にも周りの男の人達に視線で殺されてしまいそうだ。

「周りに人がいるんで先に移動しませんか？」

「あたしは別にここでいいんだけど……じゃあ早く行こ」

そう言われ手を引かれる。異性と手を繋ぐというのはとても恥ずかしい、高校に入ってからどこか記憶にすらないので嫌なほど意識してしまう。

柔らかいそれは不思議と離したくないと思わされた。ただエスカレーターでも手を引っ張るのをやめないのは本当に危険だからやめてほしかった。

この人は本当に氷川さんと双子なのだろうか、行動が真逆すぎる。向こうが真面目ならこちらは天真爛漫とでもいうのだろうか。

なぜ双子なのにこうも差が出るのだろうか。教育のせいなのだろうか？ それとも……

連れてこられたのは某ハンバーガーチェーン、本日二回目だ。流石に一日に複数回もこの物を食べる気は起きないし、金の減りもえげつないので珈琲だけ頼み席を取っておく。

「ここならいいでしょ。教えてよ、名前」

「加々美悠です」

「加々美、加々美ね……おく鏡よ鏡、この世界で一番美しいのは誰ですか？」

「それは貴女ですよ、とでも答えて欲しいんですか？」

「あはは、面白いね。るんつてくる答え」

るんつ、てなんだろう。僕は脳内が鎖国されているため日本語しかわからない。でも多分楽しい、嬉しい、そういうったポジティブな方の意味を持つ言葉なんだということなんだとはなんとなくわかった。

氷川さんのトレーを見てみるとポテトの山、こういうところは双子らしい。

「それで、聞きたいことってなんですか？ まさか名前が知りたかっただけ、つてわけではないですよね？」

「うん、あたしが聞きたいのは……」

—— おねーちゃんと仲良くするには、どうしたらいいの？

そう、寂しそうな声で尋ねられた。

「今日おねーちゃんと君がいるのを見ちゃって、君とおねーちゃん凄く仲良くしてたから……」

姉と仲良くなりたい。それで今日一緒にいた僕を見つけ、仲良さそうにしていたからそうなれる方法を尋ねた、ということらしい。

氷川さんはこの人に対して才能が怖いと言っていた、恐らくはコンプレックスに近いものを抱いているのだろう。そのくせこの人は氷川さんと仲良くなりたいと思っている。

思ったより重たいしめんどくさい話だ。そもそも僕と氷川さんは仲がいいのだろうか、たまたま利益が一致しただけでお互いがお互いを利用している。

僕は氷川さんの音をよりよくする為に、氷川さんはヒントを見つける為に。それだけの関係で、今日はたまたまでしかない。

「仲良くする方法……氷川さんはギターをしていますし、音楽の話でもしてみたらどうですか？」

「うーん、今までもおねーちゃんのやってきたことをしてみただけど、おねーちゃんはあたしがやるとそれをやめちゃうから話ができなくて……」

才能が怖くて、抜かされて、嫌になって逃げた。氷川さんはそう言っていた。頑張ったことも、何もかもすぐに抜かされる。

ああ、そんなもの普通の人なら逃げるに決まっている、やめるに決まっている。それは努力が出来ない僕でもわかる、けどこの人にはわからないのだろう。脅かす側だから、抜かす側だから。

「氷川さんはまだそれらをやってるんですか？」

「え、おねーちゃんは辞めちゃったって言ったじゃない」

「あー、日菜さんのことです」

「あたし？ おねーちゃんがやってた時はとつてもキラキラして見えてただけど、なんでかおねーちゃんがやめたとたんキラキラ見えなくなっちゃうんだよね。だからおねーちゃんがやめたらあたしもやめちゃってるよ」

努力を才能で追い抜かして、それは飽きたからやめる。ふざけてる、そんなこと到底許せないだろう。

「それが駄目なんじゃないですか、氷川さんが辞めるとすぐに辞めるのが」

「うーん、よくわからないなあ」

I Qが20違うと話を通じない。噂程度でしか聞いたことがなかったのだが、多分こういうことなのだろう。

「それならあたし、ギターやらない方がいいのかな……」

「ギターの方はまだやってないんですか？」

「やってないよ。今までと違ってちよつとこれが、ね」

右手の親指と人差し指で円を作ってこちらに見せてくる。それもそうか、ギターなんて高校生が手軽に手を出せる値段ではない筈だ。詳しくは知らないが安くても方は軽く越えるんじゃないだろうか。

「……別にいいんじゃないですか、やっても」

「でもさつきは……」

「やりたいならやった方が絶対いいですし、氷川さんが辞めても辞めなければ少しは改善されるかなと」

氷川さんに辞められるとあの音が聴けなくなるのは大変困る。ただ私情で他人を止めるのはあまり好きじゃないし、あの人もそんな簡単にはやめないだろう。

氷川さんの音に含まれる焦りは明確に増えてしまっただろうが、僕に

この人を止められる権利はない。

それに、そんな才能があるのならこの人の音はどんななのか、そんな風に思ってしまった。

「なるほどねえ。それにしても君凄いなだね、将来の夢は先生とか？」
「夢は今のところないですね、そこら辺の会社で働いてるんじゃないんですかね」

「えー、こんなにきちんと答えてくれるの君が始めてだよ。絶対向いてるって」

先生か、僕には絶対に向かないだろう。情熱も目的もないし子供が好きなわけでもないし加えて勉強も苦手。

これでもかというくらいに駄目な要素がつまっているし、何かとブラックな噂を聞くのでなりたとは思わない。

「もし向いていたとしても勉強面の方があれなので」
「勉強なんて参考書とか記憶すればいいだけじゃん」

とても不思議そうな顔でそう言われた。流石に無理だ、記憶力がそこまで持つわけがない。頭の作りが根本から違うんじゃないか、そう思っただけさえしまう。

「これが一番楽なのになあ」

「それが出来たら人間苦労しませんよ」

「なんで出来ないのかなあ、わかんないなあ」

多分その発言に悪意はないだろう、それでも心にはくる。お前は出来損ないだ、なぜこんな簡単なことが出来ないんだ、遠回しにそう言われてる気分になるから。

「他人のことなんかわかるわけじゃないですよ、その人じゃないんですし」
「えー、でも空気を読めだとか他人のことを考えろってみんな言うよ？」

「他人のことを理解出来るわけじゃないですよ、超能力者じゃないんですし。空気を読めとか他人のことを考えろってというのは考えるだけで、理解しろってわけじゃないと思いますよ」

空気を読め、他人のことを考えろ。それは自分に置き換えて考えろ、ということだと勝手ながらに僕は思っている。どれだけ考えても

それは自分の考え、どれだけ近くても真実とは多少の誤差が出る。

格ゲーとかでよく言われる読みという技術だつて自分がどうしてほしいか、自分だつたらどうするか、これに行き着く。結局他人のことを考えるというのは、自分のことを鏡で見ているようなものだ。

ちよつとだけいい気になって語ってしまった、呆られてしまったかと思うと彼女は凄いきらきらした目でこちらを見てきている。

何かあつたのだろうか。後ろを向くがあるのは壁、絵も何も描いていない無地の壁だけが広がっている。

「すつごく面白い！ 今までそんなこと言ってくる人いなかったよ」

机に身を乗り出しながらそんなことを言われる。どうやら後ろに何かあるのではなく僕の話が興味を刺激したらしい。

「悠君って呼んでいい？ あたしのことも日菜でいいからさ」

名字呼びだとおねーちゃんと被るしわかりづらいでしょ、そうとも言われた。確かにそれもそうか、別に構わないという意味を伝えるとともに喜ばれた。本当に元気な人だ。

そう言えばおねーちゃんと仲良くするにはどうしたらいいのか、という話の筈だつたのに話が逸れすぎではないだろうか。まあ僕としては構わないのだが。

「実はちよつと行きたいところあつただけど、付いてきてほしいな」
「そんな遠くないところなら」

既に珈琲は飲み終わっているのでokを出す。なら早く行こうと言われ後を付いていくと、着いたのは楽器店だった。

ギターを買いたいがどれを買うか決められないので一緒に見てほしい、とのことらしい。今日始めて会った人に普通そんなことを頼むだろうか。

「これとかどうかな、前勧められたんだけど……」

「いいんじゃないんですか、値段以外は」

僕にはこのギターがいいとかわからない。それこそ見た目と値段で選ぶしかない。じゃあどれがいいと思う？ と聞かれても困る。

なんでだろうか、振り回されてるだけなのに楽しいと感じる。日菜さんが楽しそうだからだろうか？ わからない。

「うーん、全然決まらない、今日はもう帰ろうかなあ」

曰菜さんがそう言ったので楽器店から出る。シヨツピングモールを出るまでの間に、連絡先を交換しよと言われたので交換した。

「見て見て、空すっごい綺麗だよ」

シヨツピングモールを出るなりそう言われ空を見る。今日は快晴だったので雲に遮られることなく星が見れた。星を意識に見たのはいつぶりだろうか、凄く綺麗。

散りばめられた星は明るくて、それを引き立てるかのように空は黒く塗り潰されている。それこそ、吸い込まれてしまいそうなくらいに。

「悠君夢中だね、そんなに気に入ったの？」

「……凄く綺麗だと思います、気に入りました」

「もしかしてあんまり星に興味とか持ってなかった？ もったいないなあ」

すっごく綺麗なのに、どうして持ってなかったの？ と聞かれたのでなんででしょうね、と笑いながら誤魔化す。そんな話をしながら僕たちは別れた。

どうして星に興味を持ていかなかったか。意識していなかったから、言われて始めて気づいたから。違う、そうじゃない。

「下ばっか向いて生きてるからだよなあ」

僕は下ばかり見て生きている。現実的にスマホばかり見ているというのもあるが、勉強も人間性も何もかも。大好きなゲームの結果だつて上を見ずに下を見て安心している。

そんな心持ちが空を、この景色を僕から隠していたのだろう。

そう思つて、じゃあこれからは上を見て生きていこうなんて変えられたら人生楽なもの。ため息と同時に視線は地面に落ちていく。

僕の眩きは、白い息と共に空に溶けていった。

予定

「あゝ、彼女欲しく」

「お前は口を開けばそれだな、てか前に付き合ってた人はどうしたんだよ」

僕の前に座る友人からの彼女欲しいという言葉は聞き飽きた。こいつに彼女がいない間は三日に一回は聞いている気さえする。

しかしこいつは口だけではなく行動力があるため今まで彼女がいなかったわけではない、僕とは大違いだ。まあ彼女が欲しかったと言われたら首を縦に振ることはないが。

「なんか合わなかったから別れた」

「そんないい加減だから長続きしないんだろうが」

「付き合い始めはびびっと来たんだがなあ、てかお前だってゲームすぐやめるから似たようなもんだろ」

適當すぎる、別にこいつ自身は悪いやつではないのだがこの性格はどうにかした方がいいとは思う。だが僕はそれを直す方法は知らないし直してやろうとも思わない。

しかしまあ人とゲームを一緒にしてるのはかなり不味いと思うのでそこだけ注意をしておく。

「お前は枯れてるよなあ、気になる女とかいねえの？」

いない、いつも通りの答えを言おうとしたが言い留まる。氷川さん、彼女の事が頭をよぎってきた。

気になっている、かもしれない。どこが気になる？ 見た目か、性格か、それともギターの音なのか。

始めはギターの音だった。しかしこの前の遊んだ時から少しだけ、ほんの少しだけ彼女を意識をしまっているのかもしれない。

「ふくん、お前がねえ……」

「まだ何も言っていないだろ」

「いやいや、お前が黙る時は凶星な時だからな」

「反論しても同じこと言ってるだろお前」

どうせ興味を持っているのは僕だけだ、向こうは欠片の興味すら僕

なんか抱いていないだろう。

友人はトイレに行つてくると言つて席から離れた。スマホでSNSを巡回しながら待っている。一件のメッセージが届く。送り主は日菜さんで、内容はちよつと後ろ向いて、との事だった。

どういうことかと思ひ後ろを向くが何もなし飯を食べている他のグループしかない。なんなのだろうかと数秒考え、悪戯と決めつけて視線を前に戻す。そうすると突然、後ろから声をかけられた。

「やっぱり悠君だ、こんなところで会うなんて偶然だね」

「……そうですね」

ああ、めんどくさいことになるんだろなあ、と思ひながらそう返した。

日菜さんは僕の正面に座るがそこは友人の座っている席、ということとを伝えると、じゃあ仕方ないね、と言つて僕の隣に座つてくる。

これは何も言わずにあいつに隣に来てもらう方が正解だったか？

なんて考えながらちらりと横を見ると日菜さんのトレイの上には大量のポテトがあつた。どれだけ好きなのだろうか。

「そんなにじろじろ見てどうしたの、食べる？」

「いや、大丈夫です」

後ろを向いて、というメッセージはどういうことか気になつたので聞いてみると、僕らしい後ろ姿を見かけたが確信がなかつたためふっかけてみたとのことらしい。

僕らしい後ろ姿って何だろう、無駄に伸びた髪くらいしか身体的特徴はないと思うのだが、それでも伸びすぎというほどじゃないし。そんなことを思っているとあいつからメッセージが来た。

『隣の人だれ？』

知り合いだ、と返すとあいつは席に戻ってくる。日菜さんははじめましてだねと挨拶をする。するとあいつは元気がないかのようにどうもと返す。

おかしい、いつもなら可愛い女を見ればはしやぎまくりなのはどうしたのだろうか。

『めちやくちや可愛くね？ どうやって知り合つたんだよお前』

『目の前にいるんだから口で話せよ』

メッセージが送られてきた、目の前にいるのにメッセージで会話をするな。まあ僕もメッセージで返しているのだから人の事は言えないが。

そう思っているとこいつは好きな人はいるんですか？　といきなりぶつこんだ。最初はメッセージで話すくらいにはチキっていた癖に口を開けば話しかける内容はぶつ飛んでる、落差が激しすぎだ。

「好きな人？　いるよ」

友人がおもいつきしがつくりしたのが見てわかる。しかしそのあと日菜さんが、おねーちゃん好きなんだと言うとそれがふっ飛んだのもわかる。相変わらずリアクションが大きくてわかりやすいやつだ。

こいつはどうなんですか、と僕を指差す。日菜さんが面白い人、と答えると友人が可哀想な人を見る目でこちらを見てくる。その目をやめろ、うざったるい。

「俺そろそろ帰んなきゃなんだけど、お二人さんどうする？」

「あたしは来たばっかだからまだ帰らないよ」

「あー、なら残ろうかな、帰ってもすることないし」

「あつそ、じゃあ片付け頼んでいいか？」

「いいわけないだろ」

ケチだなあ、と言いながらあいつは片付けて帰っていった。

残ったはいいものとする事はない。しかし日菜さんは来たばっかりなので、いきなり帰って一人にしてしまうのはどうなのだろうと思いついてしまった。

とりあえず友人は帰ったので僕がその席に移動する。

「別に移動しなくてもいいのに」

「隣が狭いよりはこっちの方がよくないですか？」

そう会話しながらも日菜さんはポテトを食べ続ける。それにしてもあの大量のポテトは何処に行くのだろうか、もしかして別の人にワープさせてたりしているんじゃないだろうか。

そんなことを考えながら既に飲みきった珈琲カップを口にする。底の底にたまった小さな余りがそこそこ苦い。

「あ、そういうええちよつとお願い、というより提案があるんだけど……」

「また楽器見るんですか？ 今週末なら空いてますけど……」

ううん、と首を振られる。では何だろうか、僕と一緒にする事なんて他にあるのだろうか。そもそも楽器を見るのだから僕がいなくたって出来ることなのだが。

「実は星を見ようと思って人を探してたんだ」

「ごそごそと鞆をあさる日菜さん。暫くすると一枚のパンフレットが出てくる。それには天体観測ツアーとでかでかと書いてあり、それ以外にペア限定とも書いてあった。

「氷川さんと二人で行っちゃ駄目なんですか？ 仲良くなるチャンスになるかもしれないですし」

「昨日誘ったんだけど、練習するからって断られちゃってさ。それで誰か誘おうと思ってたら今日たまたま悠君を見つけちゃって」

天体観測となれば恐らく泊まりになるだろう。日帰りなら行くことはできるだろうが、テストも近いため親がそう簡単に許可を出すとは思えない。

パンフレットを借りて見てみると泊まりではなく日帰りで日時は3月末だった。これならテストは余裕で終わっているし、日帰りなら親も許可を出してくれる可能性はそこそこあるだろう。

しかしまだ2ヶ月先の事なのによくこんなことを企画できるな、と思っただけで見回していたらあることに気づく。

「これ去年のやつじゃないですか？」

「んー？ ほんとだこれ去年のじゃん、まあ毎年やってるし今年もやるんじゃないかな」

天体観測なんて小学生ぶりではないだろうか、星の名前も形も殆ど覚えてない。

今の季節何が見えるのかも高校でやった筈なのに記憶からはとっくに弾かれているし、つまらなくならないように軽く予習くらいはしておくべきだろうか。

予定を立てるのは好きだ、例えそれがどんなことだろうといつもと

は違う事を考えるだけで少しだけ楽しい。勉強だつて建ててる間だけはある程度できる気にすらなるし。

「今年もやるなら行きたいかなつて思っています」

「ほんとー。やったあ」

もう一滴も残つてないカップを口にする。ここまで来ると飲んでる気分になつていけない。話すことがなくなつてしまったので何か話題を出さなければ、と思い切り出す。

「そういえば氷川さんとは仲良くなれましたか？」

ピタリ、と日菜さんは動きを止める。これは出来て無いんだろうなとなんとなく察した。それでもツアーに誘つたんだからある程度は進歩しているのかもしれない。

「あはは、おねーちゃんと話そうとすると緊張しちゃつて」

つて言つてもわからないかと日菜さんは言う。姉に対しては神経質、恐らくそうなのだろう。好きな人だから、大切な人だからこそ慎重になつてしまう。

「わかりますよ」

「悠君もおねーちゃんと話す時緊張するの？」

「氷川さんとは違わなくはないですけど、喧嘩した人と話す時はそんなものですよ、僕も」

喧嘩してしまつたと思つて自分から謝ろうとしようとしてもなかなかできないものだ、相手からの待ちになつてしまう。

恥ずかしい、自分はほんとは悪くない、理由は色々あるが変に緊張してしまふものだ。

「悠君でも喧嘩するんだ」

「僕は聖人でも仙人でもないですから喧嘩くらいします、それこそ今思えばくだらないと思うようなことでも」

そう言うと言菜さんから、悠君は優しいっていうか争い嫌いっていうオーラが滲みでてると言われた。争い事は嫌いだがめんどくさい事が嫌い、と思つてるからなのだが。

「そういう時つてどうしてるの？」

「自分から謝るのが一番だと思えますよ、相手から来るのを待つのも

いいですけど。時間が経てば勝手に直ってるなんてこともあります
が」

ツアーに誘ったみたい氷川さんに話しかけてればどんどんよくなると思いますよ、とも言う。

「そっかあ、参考になったよ。ありがとね」

僕は日菜さんのポテトをこっそり貰う。少し喋り疲れた、飲み物がないから多少は抵抗があったが、やはり食べてみれば気にならない。自分で食べないと先に言ってしまったが、感謝をされたのだからまあいいだろう。

「あ、食べないって言ってたじゃん」

日菜さんはそう言うので急いでポテトを食べきる。ポテト専門の早食い選手権の選手になれるんじゃないかと思う程早く。

日菜さんがポテトを食べきると僕はカップを捨てる。外はだいぶ暗くなってしまっている。少しだけかと思っていたがだいぶ話し込んでしまった。

「ねえねえ、一緒に帰ろうよ」

「一緒について、僕自転車ですし僕は日菜さんの家知らないですよ」

「場所教えるから送って行ってよ、食べ疲れちゃった」

「事故つても責任は取れないですよ」

食べ疲れるって単語始めて聞いた。エネルギー補給の為の食事で疲れるなんて本末転倒ではないだろうか。

自転車2人乗りなんて初めてかもしれない。やっていいのかどうか少し迷ったがまあ事故らなければ問題がないの精神で乗りきった。

ただ安全運転をしたせい二人分の重さだから知らないが、何時もよりも進むのがずつと遅かった。

運転中嫌にドキドキしたのは落ちないように僕の服を掴む日菜さんの息がたまにうなじかかかってきていたせいなのか、それとも警察に捕まらないか不安だったのか。一体どちらだろう。

それと日菜さんの家は、我が家からそれなりに近かった。

偶々

今年度初めての雪が降った。外を覗けば銀世界、なんてことはなくちらちらと降っている程度。

だがちりも積もればなんとやら、明日まで降り続いていれば地面は雪に覆われることになるだろう。

雪が降ったから外に出てはしゃぐということはない。窓からゆつくりと積もっていく雪を見ながら炬燵に入り蜜柑を食べる。

あとはそこそこなバラエティー番組と猫さえあれば完璧な組み合わせ、実現すればの話だが。

実際の僕はインスタント珈琲を飲みながらブランケットに身を隠しゲームをしている。少しだけ理想と現実の差に悲しくなるが、まあこれはこれで悪いものではない。

「掃除するから邪魔、折角雪降ってるんだから外でも行ってきたら」そんな事を思っている矢先にそう言ってくるのは僕の母親。外は寒いことがわかりきっているので出たくないが、逆らってしまえば文句を言われるのに加え機嫌を悪くされる。

機嫌が悪くなった母親は一日中そんな感じになってしまうので、それだけは避けなくてはならない。なので大人しく言うことを聞くのが賢い選択だ。

ちびちびと飲んでいた珈琲を一気に飲み干して外に出る準備をする。きちんと時間を潰す道具を持ったか確認したいのは山々だが、さっさと外に行かないと母親の小言が炸裂してしまう。

終わったら連絡して、と母親に言ってから逃げるように外に出た。

「さて、どこへ行くか」

吐く息には白の着色がされている。幸いというべきか風は強くないので体感的な寒さはそこまでではない。

目的もなくブーツと歩いていると着いたのは商店街、何か買い歩いてくかなと思うも財布が見当たらない、どうやら持ち忘れてしまったようだ。

はて困った、金もないし外は寒い。母親は掃除を終えてくれている

だろうか、そう思つてスマホを確かめるも電源が入らない。どうやら充電が切れてしまったようだ。

これでは時間を確かめるすべはない。とはいえ体感時間はそんなにだし、母親はサボつてテレビを見ているだろうから帰れるのはもう少し先になるだろう。

寒さに指がやられてきているので少しでも暖かい店に行きたいが、金無しで店に入れるほど礼儀知らずな人間ではない。

ああどうするか、何か暇潰しになることは無かろうか、そう思い辺りを見渡すとあるものを見つける。

「犬……」

首輪はついてないし恐らく野良犬だろう。野良猫は結構見るが野良犬というのはあまり見ない気がする。

しかし可哀想に、こんな寒い時にどこかで暖まっていられないなんて。今の僕に少し似ている気がして親近感が沸く。

普段なら目もくれず通りすぎるのだが今は暇を潰すのに忙しい。一步、また一步と近づく。あと三歩、というところで吠えられる。

昔から動物にはなつかれない、僕はそんなに嫌な臭いでも出しているのだろうか。いつか香水でも買ってみるか、そう思っていると後ろから声をかけられる。

「加々美さんじゃないですか」

「氷川さん、今から練習ですか？」

「本当はその予定だったんですけど、この空ですし」

まるで雪はまだまだ降りますよと言っているかのようで、青色は空に欠片も見ることが出来ない。そりゃこの天気で練習しに行くのはないか。

「それで、何をしていたんですか？」

「暇潰しを」

暇潰し？ という顔をされたので犬の方を指差す。この少しの会話の間に折角詰めた距離も元通りになってしまつて少しだけ悲しい。

警戒心が強いのか僕が嫌われているのか。そういえば氷川さんは犬に興味があつたつけ、この前犬のバッチを取つた記憶が新しい。

「ワ、ワンちゃ……」

氷川さんは咳払いして誤魔化す。犬好きなことはバレたくないの
だろうか、まあこの様子だと周りの人には隠しとおせていないんだろ
うが。

「犬、好きなんですか?」

「いえ、別にそんなことは……」

声が震えている、隠せてないですよ、とは言わないことにした。暫
くすると氷川さんは犬に近づくと。

撫でたりするのだろうか、と思っていたがそんなことはなく近くで
腰を落として見ているだけだ。暫くすると氷川さんは犬からこちら
に視線を向ける。

「加々美さんはこのあと予定とかありますか?」

「暇を潰す予定でいっぱいです」

「つまり暇ということですね」

回りくどい言い方をしているがつまり話そういうこと、冗談とか通
じそうには見えなかったが、ある程度はわかってくれみたいだ。

「少しだけ……話をしたいのですが、大丈夫でしょうか」

いいですよ、と了承すると氷川さんは犬と別れを告げる。氷川さん
のやたら残念そうに犬の方を見る姿が印象的だった。

「外は冷えますし何処かお店の中に入りましょう」

「あー、今僕お金無いですよね」

「そうですか、それならいくらからお貸ししましょうか?」

「お金を借りるのは遠慮しておきます」

お金を借りるのは好きじゃない。どんな人も金を前にすると汚く
なる。持っているのに返さない、出来るだけその人と会わなくしだ
す、そういう生き物だから。

でもお金は貸す、金は恩を売るのに最適だから。金を貸している間
は上下関係が出来る。まあ返ってこないことも何度もあるのだが。

「それなら……あそことかどうでしょう、あそここのパンは妹が好きで
よく行くんです」

指を指した店は『やまぶきベーカリー』と書いてあった。あそのパンは何度か食べたことがある。

あその店のパンはたまに親が買ってくるから知っている、僕が行ったことはないが。向かいに喫茶店、その隣には精肉店、なんとも商売争いになりそうな並びだ。

「日菜さんと仲悪いんじゃないんですか？」

「いや、別にこれくらいは……って、日菜の名前何で知ってるんですか？」

仲が悪いと言ってもそこまでではないようだ。そもそも妹の為にパンを買うくらいなら、むしろ仲がいいのではないか。

僕は姉にそういうことをされたことがないのだから、少なくともそれよりはいいと思うのだが。

どうやら好きの反対は嫌いではなく無関心、というのは本当らしい。

「あー、日菜さんとはこの前の後偶々会って……」

「偶々、ですか」

偶々です、と言って店に入る。入るなりいい匂いと暖かい空気が襲ってくる。僕はこういうパンの匂いが好きだ。気分がよくなる気がする、それは刺激的とは違う。

なんと言うのだろうか。気持ちがいい、安心する、心地いい……それだ、心地いい。他にそう思うことは殆どない。

「それで、話ってなんですか」

パンの匂いを嗅いでいると頭がおかしくなりそうだ。おかしくなるといつても薬で覚醒するとかそういういった感覚ではなく、ふわふわするとか気が抜けるとかのもの。

音楽が耳から僕を侵略するなら、パンの匂いは鼻から僕を征服する、という感じだろうか。

「……日菜の事なんですが」

そう言って氷川さんは慣れた手つきでパンを取っていく。素直になりたいのに素直になれない、妹と仲良くなりたいのになれない、そう言われた。

この姉あつてあの妹あり。どちらもどちらと仲良くなりたいのに、プライドか緊張か、それとも別の原因か。もしかしたらその全てが邪魔をしているのか、不思議に仲が悪いまま続いているようで。

何故仲良くなれないのだろうか、むしろ悪くなっている方がおかしいだろうに。

「素直になんてなれる人のが少ないですよ」

恐らく僕がいなくなつたつて二人の仲は戻るだろう。時間や経験がゆつくりと溝を埋めてくれる。僕が下手に仲良くさせようとするよりも、自然と直つた方がきつといい。

僕がすることは、できることは、やるべきことは、何一つとして存在しない。

ふとどうしてそんなことをしたいのかと考える。僕には欠片の得もない、僕がいなくてもどうにかなると思つている。それなら僕はなぜ、二人の事を手伝いたいと思つたのか。

「そういうものですか……」

「そういうものだと思います」

思考を中断し話しながら会計を済ませる。座るところも腰を掛けるところもないため立ちながらの会話だが不思議と嫌ではない。外に出ようにもやはり店の中の暖かさを知ると出たいとは思えない。

「加々美さんと話していると不思議と落ち着きます」

「きつとこの匂いのせいですよ」

この匂いのせいか知らないがだんだん眠くなつてきた。帰ったら布団にくるまろう。温かい飲み物を飲んで誘惑に身を任せて眠りにつこう。今は物凄くそうしたい。

そろそろ帰りますか、と言われたので帰ることにした。そろそろ親の掃除が終わってくれていれば嬉しいのだが。氷川さんに途中でパンを一つ貰つた。

最初は悪いからと断っていたが、この前のバッチのお礼と言われてしまったので遠慮なく受けとることにした。あげると言つてなかなか受け取られなかつたら向こうとしてもいい気はしないだろう。

紗夜さんと別れ靴跡だらけの雪を踏みつけながらパンを食べる。

貰ったのはクロワッサン、ささつと食べ終わりそうだ。

歩きながら食べるのは行儀が悪いと言うが折角少しばかり温かいのに冷えてしまうのは勿体無いだろう。温め直すのはちよつと嫌だ、理由はない。

雪が降る、冷たいそれが降ってくる。ああ、あの店のパンは本当に美味しい、コンビニのそれとは大違いだ。

帰るまでの間スマホは充電がなく弄れないのでとても暇だった。だけど不思議と不快な気はしない、むしろ上機嫌と言ってもいい。その理由は、よくわからなかった。

甘露

バレンタインデー、それは戦争である。

ただかチョコを貰う、それだけの為に人は前々から死力を尽くす。

男はその数で他人との優劣が決められ、女は誰にどのチョコをあげるかと。更にはそのチョコが本命か友か義理か、それも重要である。

「下らねえ……」

いつもなら彼女持ち許せねえ、とかの自分モチないんですよアピールで溢れてるSNSのTLも今日に限っては何個貰ったとか一個も貰ってないだとか、バレンタインの関連の話で溢れている。

僕は当然0、家から出て知り合いに出会えていないのだから仕方ないだろう。

別に僕はバレンタインは嫌いではない、むしろ大歓迎くらいだ。

バレンタインの当日にはチョコの試食も沢山あるし翌日には売れ残りが安売りされる。これを喜ばずにいるのは無理だろう。

『悠君今暇?』

そんなわけでチョコを買わずに試食をして回っていると日菜さんからそんなメッセージが来た。暇ですと返すと今僕がいる場所に来てほしいと言われた。

丁度今そこにいますと伝えると日菜さんからは『悠君もチョコ買うの?』と送られて来た。

もということ日菜さんはチョコを買っているのだろうか。見るだけです、と返すと僕はもう一度試食に向かった。

「悠君おひさー」

「おひさって最後にあつたの二週間くらい前じゃないですか」

「二週間ぶりはお久しぶりじゃない?」

僕の中ではお久しぶりは1ヶ月ぶりから、しかも日菜さんとは毎日会う関係ではないのだから余計にそういった感覚はない。

日菜さんは両手に大きめの紙袋、何が入っているのかはだいたい予想がつく。

「そんなに沢山配る相手がいるんですね」

「これ？ 全部おねーちゃん宛だよ」

十や二十くらいの沢山のチョコ。それら全てが氷川さん宛とは日菜さんの姉好きは相当なものらしい。そもそも氷川さんはこんなにも食べるのかと少し驚いた。

「それにしても、僕に何か用でもありましたか？」

「特別にはないけど……そうだ悠君、おねーちゃんに渡すならどれがいいかな？」

そう言つて展示されてるチョコを眺める日菜さん、あれだけ持つているのにまだ足りないのだろうか。

僕ほどのチョコがおすすめだとかわからないが、試食をし続けたお陰かこれが美味しいとかはなんとなくわかつている。

日菜さんにはその中で美味しかったやつ……の中でも安めのやつを勧めると日菜さんはそれを二つくださいと店員に言う。

一つではなく二つ買うのか、なんて思つてるとその片方を僕の前に差し出してくる。

「悠君にも一個あげる」

「氷川さんあげるようじゃなかったんですか？」

僕がそう言つと日菜さんはあつ、と何かに気づいたかのような視線を向けてくる。

「もしかして手作りの方がよかった？ でも手作りはおねーちゃん専用だからさ」

「いや、そういうわけでは……」

折角の好意を断る訳にはいかないので僕は差し出されたチョコを受けとる。何かお返ししなければとポケットを漁るが、まだ未開封のガムくらいしか出てこなかった。

後で何かお返しします、今これしかないですけど、とガムを渡す。「別に返さなくてもいいよ、そういう事を思つて渡したわけじゃないんだし」

「気持ちの問題です」

「じゃあ貸し一つ、後で何か言うこと聞く」

それでどう？ と人差し指を立てながらそう聞いてくる。僕はそれでいいですと言った。言うこと次第ではあるがそこまでの無茶ぶりにはしてこないだろうと期待して。

その後は軽く店を見て回り、日菜さんは他のところで買って来ると言って別れた。

若干明るかった空も外に出てみればもう薄暗くなってきてそれに伴いだんだん寒くなってきている。試食をしすぎると嫌な目で見られる、何も買わないのなら尚更のこと。

日菜さんが買ってくれたお陰で若干ましになったがそれでも長居しすぎるのは良くないだろう。店員の目も早く帰れと僕に言っているような気もしたし。

とはいえ僕としては試食は満足にできたし運よくチョコも貰えたのでもう帰るか。なんて思っているところある人物が目に入った。

「氷川さん」

「加々美さん、また会いましたね」

「練習帰りですか？」

ええと返事される。相変わらずスティックとか努力家とか、いや、どっちもか。

今日はカラオケ店ではなくライブハウスの方で練習をしていたらしい。というよりそっちの方が多いらしい。

「そういうえば日菜さんは物凄い量のチョコ買ってましたけど、毎年あななんですか？」

「ええ、日菜は毎年凄い数のチョコを渡してくるんです」

この人達仲良く出来ないって嘘じゃないのと思う。それはどうされたんですか？ と手に持ってたチョコの事を聞かれる。

「日菜さんに貰いました」

「日菜に……ずいぶん仲がいいんですね」

「まあ、たまに物凄いですけれど」

「あの子は周りを考えていないみたいですが、ほんとはいい子なので仲良くしてあげてください」

優しい笑みと共にそう言われ、不覚にもドキツとした。顔が赤く

なつた気もする、鼓動が少しだけ早くなつた気もする。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもないです」

氷川さんも日菜さんに渡すようなチョコを買いに来たと言うのでさつきまでいた店に戻る。店員からのまたお前か、という視線が非常に痛い。

「私にはチョコの良し悪しがわからないので、加々美さんが選んでくれませんか？」

「いや、僕にもわからないです。それに氷川さんは一緒に住んでいるのだから日菜さんの好きなのわかるんじゃないんですか？」

「日菜の好きなもの……」

そう呟きながら氷川さんは店内を見て回る。どれがいいのかわからない、そう言っていた癖に氷川さんは殆ど迷わずに選んでいる。きつと日菜さんの好きなものはわかつているのだろう。

ただ少し量が多かったようでも元元場所に戻すのを手伝う。僕が戻している間に氷川さんは買い終えたようなので一緒に外に出る。

ああ、もう外は真つ暗だ。ついさつきまで薄暗い程度だったのに。冬はなんとも日が沈むことの早いこと、冬至はとつくの昔に過ぎたというのに。

折角買い物に付き合つたので氷川さんを送っていくことにした。氷川さんはわざわざ悪い、と言ってきたが別に問題ないと答えた。

嘘だ。

他人を理由にするのはやめろ。

何が折角だ。

別れたくないんだろう。

あの笑顔から僕は何かおかしい。

問題ないなんてことはない、問題だらけだ。

少しでも一緒にいたいのだろうか。

これはなんだろう。

僕にはわからない。

考え事をしていたら既に着いたようだ。一緒に歩っていた癖に会話の一つも振れなかったのは大変申し訳ないが、慣れないし考え事をしていたのだから許してほしい。

僕も家に帰ろうとしたところで氷川さんに呼び止められる。

「あの、これ……」

なにかと思いいてみると氷川さんはチョコを差し出してきていた。

「いつかの傘のお返し、したいと思っていたので」

「いや、あれはもう返して貰いましたし……」

「貴方がよくても私がよくないんです」

僕自身渡すと言って断られるのは嫌なのでこれ以上は何も言わずに受けとる。チョコを受けとると氷川さんとは別れた。

自宅への帰り道、僕は考える。

この感情はなんだろう。特に氷川さんにチョコを貰ってからには更に症状は加速した。どんどん体が熱くなっていった気がする。

今はもうだいたい治まったがあの時厚着をしすぎたかと思いい上着を脱いでしまったほどだ。

これはなんだろう。病気だろうか、それとも熱でもあるのだろうか。だが気持ち悪いと思うことはない、心地いいと感じるこれはなんだろう。

これは今まで経験がなくて、だけど聞いたりしたことは大いにある。ああ、もしかして……

もしかしなくても僕は氷川さんの事が……

そこで思考をやめスマホを開く。もし僕なんかにもそう思われても氷川さんからしたら鬱陶しいだけだろう。

TLではこんな時間になっても飽きもせずチョコを貰えたかどうかで言い争いをしている。もし呟いたら何かしらでマウントを取る輩がいるので今日限りは隠居をしようと思っていたのだが、僕は二つ貰えただけ呟いた。

何故そんなことを呟いたのかわからない。自慢がしたいのかなん

なのか、相変わらず自分の性格の悪さが嫌になる。

眩いた瞬間驚きの早さでリプライがくる。親を含むとか儲かりすぎ、本命？　ということが送られてくる。

「本命、か」

恐らく義理かよくて友だろう。出来れば友だったらいいなあと思うが二人の態度的に恐らく義理だろう。

日菜さんは本命を氷川さんに渡すだろうし、氷川さんはただのお礼だと言っていた。

それでも今日は少しだけ、よく眠れる気がした。

普通

「あんたこれで髪切ってきな」

家でゲームをしながらねっころがっている母親から二千円を渡される。わが校ではテストの時に頭髪検査とかいうのがあるせいで、テストが近くなると髪を切らなければならない。

それは母親も知っているのですがその時期になるとこうやってお金を渡してくる。テストは近いし前々から少し邪魔だと思っていたので髪を切るなら今が丁度いいだろう。

母親は金だけ渡すと今日は温泉行つてくると言つて出ていった。外に出て15分くらいは忘れ物を取りに戻つてこないか待ち、戻つてこないのを確認してからハサミを探す。

髪型なんて坊主だったりパツツンだったりしなければ何だつていい。なので目と耳にかからないくらいに切る。

雑に断髪してもいいが、短く切りすぎると戻せないから長めに切つてしまう。

中学までは親に床屋に連れてかれて切っていたが、高校になってからは連れていかれなくなったので下手なりに自分で切っている。

おしやれに気を使うわけじゃないし、移動の時間も浮く上に小遣いも増えるのでいいことしかない。

多少おかしいが目にかからないくらいにはなつたし検査はこれで大丈夫だろう。なんか食べるかと思ひカッパ麺を探そうとするが、手に持っている二枚の千円札が僕を誘惑する。

「外で食べるか」

結局誘惑に負けて僕は外で食べることにした。テストが近いので一応勉強道具を持って勉強も出来るようにしたので、外だから勉強しないということはないだろう、多分。

結局いつものファーストフード店に来た。体に悪いとわかつてても変な中毒性があるし、勉強しても怒られない店がここしか思い付かなかった。

いつもはポテトに珈琲なのだが今回はハンバーガーまで頼む、まるで貴族だ。普段食べないそれは不健康を極めている感覚がしてより美味しく感じさせられる。

頼んだ物を食べ終わると珈琲を頼みに行く。勉強をするに当たって飲み物は必要だし食べ終わったものだけ並べて何時間も居座るのは印象が悪い。まあ勉強すると言っても課題なのだが。

勉強をしろと言うのに課題を出すのは何故なのだろう。僕みたいに課題を出さないと勉強を全くしないみたいな人は少ないだろうに。

音楽を聞きながら勉強すると集中する、それは本当なのだろうか。確かに周りの雑音からは離れられるがより確かな音がやってきてしまう。それもより近くから。

それは雑音ではないにしても音という点では一緒だ。まあこんな事を考えている時点で集中出来ていないのは確かだろう。

何十分経つただろうか。珈琲を飲み終わり課題を八割程度終わらせた頃に肩を叩かれる。何かと思いイヤホンを片方だけ外し後ろを向いた。

「やつほー、何してるの?」

「見てわかると思いますけど課題です」

「課題かあ、悠君は真面目だね」

答え見てるけど、笑いながら日菜さんはそう言った。仕方がないだろう、実際に課題なんて答えを写しても叱られはしない。課題なんてものは終わらせればそれでいいのだから。

日菜さんは隣に座り僕の外したイヤホンを自分の耳に付けた。いや、何をしているのだろうこの人は。

「なんで僕のつけてるんですか」

「いーじゃん、悠君がどんなの聞くのか気になっちゃった。それにこういうのるんってこない?」

るんっという感情がどのようなものか、大雑把にはわかってはいるが具体的にはまだわからないからどうしようもない。

ただドキドキするのは確かだ。そのまま続きをやろうにもどうにも集中が出来ずに課題をしまう。

ここに居る理由は既にあるのだが、日菜さんが飽きるまでこうして居るか、そう思っていたのだが三曲くらい流れてあることに気づく。

だいたい音が変わった気がする、それはいい方ではなく悪い方に。

ところどころ途切れたりあるはずの音がなかったり。あとは自分の心臓の音がイヤホンをつけてない方の耳から割り込んできたり。それが少し気持ち悪かったので僕はイヤホンを外す。

「あれ、いいの?」

「なんか音が気持ち悪いので」

「うーん、ちよつとだけわかるかも」

そう言うとき日菜さんもイヤホンを外してこちらに返してきた。他人のイヤホンを使うのってどうなのだろう。

再び使うときに洗った方がいいのか、そもイヤホンは洗えるのだろうか。そんなことを考えているとき日菜さんは不思議そうに僕に尋ねてきた。

「答えを見るくらいなら課題なんてやらなくていいんじゃない?」

「そういう訳にはいかないですよ」

「じゃあ悠君はなんで課題やってるの、答え見たら理解出来てないでしょ?」

なんで課題をやっているのか。やらなきゃいけないから、進級するためテストの点を補うため。後はなんだろう、それ以外に理由はあるのだろうか。

……いや、一番の理由があるではないか。

「やるのが普通だからですよ」

「普通って?」

「周りがやってることです」

「じゃあ周りの人がやってなかったらやらないの?」

「やらないと思いますね」

周りがやってるからやる、周りがやってないからやらない。

『普通』というのは物事の是非ではなく多数派の意見のこと、異常とは少数派の意見のこと。それは誰かに教わるのではなく自然と誰もがわかって居ること。

「うーん、でもそれってさ、自分の意見が何にもないじゃん。そんなのつまらなくない？」

「つまらないから普通なんですよ」

「じゃあ悠君は楽しいこととか嫌いなのか？」

「嫌いじゃないですけど、どうしてですか？」

「だって普通だからやるんですよ、楽しいことって普通じゃないでしょ？」

楽しいことは普通じゃないってのはよくわからないけどもなんとなく言いたいことはわかる気もする。普通なことは自分の意志が混じらないからつまらない、そういうことだろう。

「僕は別に普通は好きじゃないですよ」

変わらない普通、変わらない毎日、変わらない日常、そんなの嫌すぎる。

できれば普段と違うことが毎日起きてほしい。異常で溢れる世界になってほしい。

おとぎ話の世界になってほしい、この日常から離れたい。だけど僕は『普通』に囚われている。

「好きじゃないならやらなきゃいいのに」

「そういう訳にもいかないですよ」

「それが普通だから？」

「はい」

全然わかんないと言葉さんは言う。他人の事がわからないって言っていたのだから仕方ないだろう、それにこの話はしたってわかってくれる人の方が少ない。

「ところでさ、ずくつと気になってたんだけど、いい？」

「なんですか」

「その髪型、どうしたの」

今更すぎないだろうか。しかしながらどうしたとはどちらなのだろうか。

僕としては検査に引っ掛からなければどうでもよいと思っただけのためよし悪しは気にしてないし興味もない。だが何となく言葉さん

の言っているのがいい方か悪い方のどっちかはわかる。

「そんな酷いですか？」

「前髪バラバラだし後ろは長いままだし」

「でもどうしたらいいかわかんないなあ……」

床屋に行くのはめんどくさいうえに親から貰った金も今こうして使ってしまった。今から金を取りに帰るのに自分の家に戻るのはめんどくさいし、自分で切るにもどうすればよくなるのかわからないしどうしようもない。

そもそも見た目にそんなに拘っているわけではないのだから別に問題ない、そう思っていたところで日菜さんに提案をされる。

「あたしが切ってあげようか？」

「日菜さん髪切れるんですか？」

「一回やってみたらなんか出来ちゃった」

ああそうだ、この人天才だった。出来るのであれば切ってもらおうと思ったが問題が二つある。

「場所とお金、どうするんですか？」

「お金は別にいいよ、場所は……うーん、今ならお父さんもお母さんもないしあたしの家でいいんじゃないかな」

「いや流石にそれは……」

「じゃあ悠君の家は？」

それもどうだろう。親は許してくれるだろうか、と思ったが母親は温泉に行ってくると言っていたのを思い出した。

父親も今日も仕事だし今なら家に誰もいない、ちゃんと片付けて人が来た痕跡を無くせば問題ないだろう。

「まあ長く居なければ」

「じゃあ早く行く」

トレーを片付けていると手を引かれ店から出る。日菜さんは歩きらしいので今回も日菜さんは後ろに乗ってきた。

ただ抱きつくのはやめてほしかった。何度か事故りそうだったし、なによりドキドキした。

「ここが悠君の部屋かあ」

「急いで片付けしたんでまだ汚いかもしれないですけど……そこら辺に座ってください」

部屋は汚くはないというだけで綺麗というには少しだけ疑問が沸く程度だった。

なので日菜さんをリビングで5分くらい待たせて出来るだけ掃除をしてみたらゴミが目につかない程度にはなった。そのお陰でゴミ箱が爆発しそうだけど。

「いらっしやいませー、今日はどうしましょうか？」

「……おまかせで」

日菜さんは店員に成りきっている。おまかせでと言ってしまったが坊主とかは勘弁したいが、そこは大丈夫と言われたので安心した。

日菜さんはハサミを両手に持ってやる気満々だというのが伝わってくる。僕は眼鏡を外し目を瞑り、暫くの間無抵抗な案山子となった。

「出来たよ」

その声で瞑っていた目を開ける。想像よりもずっと早かったがどうやらもう終わったらしい。

手渡された鏡を使って自分を見る、が眼鏡をまだかけていないのでよく見えない。何処に置いたつけと探し回る。

「悠君って眼鏡かけてない方がいいよ、コンタクトにしないの？」

「コンタクトってめんどくさいじゃないですか」

したことないから偏見だし、こうやって眼鏡も探すのがめんどくさいが。そんなことを思いながら眼鏡を探していると日菜さんに渡される。

しかしまあ随分とバツサリいったものだ、それとも僕の毛量が多かっただけなのだろうか。床に散らばった髪の毛を見て、触りながらそんな事を思う。

リビングから掃除機を持ってきて掃除をする。もし親に髪の毛が散らばっているのがバレれば金返せと言われるのは明白なので、それ

だけは避けなくてはならない。

「ねえ、このままどつか行こうよ。あたし暇になっちゃった」

「無理です、すいません。近いうちに期末テストあるので」

「えく……そうだ！ なら勉強会ならいいでしょ？」

「それならまあ……来週末くらいなら」

じゃあ来週末ね、と言って日菜さんは帰っていった。相変わらず嵐のような人だ、振り回されっぱなしだが悪い気はしない。

しかし勉強会なんて名ばかりでゲームをしていた記憶しかない。何をするのだろうか、たぶんゲームではないだろうし勉強なのだろう。

ただ勉強といっても課題以外なんだろうなと思うと今から少しだけ鬱だ。

理解

今週は本当に散々だった、ソファに倒れこんで今週の出来事を思い返す。

学校に行けばその髪型はどうしたと聞かれ小テストでは点数が悪くて再テスト、友人と一緒に帰っていると並列運転で止められる。

更には寝る前に顔にスマホを落とすし机の角に足の小指をぶつけた。神様とやらは残酷だ、世界は残酷だ。こんなにも不運を一週間に積みなくてもいいだろうに。

「金曜日の午後の解放感は本当に……」

気持ちがいい、つい気持ち悪く独り言が漏れてしまうくらいには。

一週間頑張った自分へのご褒美、期末テストまで僅かしかないがそんなことなんか知らない。やっと解放されたのだから勉強なんてしようと思えるわけがない。

遊んで、寝て、自堕落を極めよう。そんな事を思っていたところにメッセージが届く。

友人からの遊びの連絡だろうか。スマホを見ることすら億劫なくらい疲れているが無理矢理に体を動かして確認する。

『明日図書館ね、1時で』

つい返信もせずにスマホの電源を切ってしまった。ああ、今週はまだ続くらしい。

待ち合わせには15分くらい前につけ、そう言われてから1ヶ月くらい経つのか、本当に時が経つのは早い。

昔は何もかもが楽しく思えて一日がとても長かったが、今ではボーツとしてるだけで一日が終わってしまう。

図書館なんていつぶりだろう。確か中学に入りたての頃に神話とかにハマリ、閉館まで籠る程度には熱中していたくせに三日も経たずに飽きたきりだったか。

どうにせよ、もう二度と来ないと思っていたのだから人生わからないものだ。

チラリとスマホを見ると時間は1時5分を示していた。僕としては五分や十分くらいなら別に遅れてもいいと思っているが、早く来てしまったので長く待っているような気がする。

「悠君、やっほー」

それから更に五分、ようやく日菜さんは来た。こういうところは氷川さんとは全く違う。時間にルーズというか、自由というか。良くも悪くもこういうところは僕と似ている。

どれくらいやるかとか聞いていなかったたので日菜さんはどれだけ持ってきているのかなと確認しようとしたら、日菜さんは手ぶらだった。

おかしい、勉強会ではなかったのだろうか。

「なんで手ぶらなんですか？」

「あたしは別に勉強しなくても点取れるしする必要なくない？」

「それなら勉強会する必要だってないでしょうに……」

頭が痛くなってくる。理解が及ばない、本当にこの人は自由だ。僕が頭をつい抑えている間に日菜さんは駆け込むように図書館に走って行く。

「早くしないと置いてくよ〜」

図書館って走っていいんだっけ、そんな事を思いながら歩いて日菜さんの後を追っていった。

図書館に入るなりその本の数に圧倒される。それと勉強だろうか、何かを座ってしている人達。

無音ではない、しかし騒がしいというわけでもなく静寂というには疑問を持つ紙を捲る音、鉛筆を走らせる音が襲いかかってくる。

これはこれで頭がおかしくなりそう、まるで異世界に迷い混んでしまったみたいだ。

望んではいるが好みじゃない、欲張りな思考を巡らせていると日菜さんが辺りを見回していることに気づいた。

「すっごーい、本がこんなにたくさんー！」

「日菜さん、図書館ですしもう少し声を小さく……」

『図書館では静かにしてください』

やはりこう言われる、周りの人からの視線が痛い。もし視線で人を殺せるのなら僕は既に3回程度は死んだだろうか、そんなことを思うほどに。

あちゃー、と自分の頭を搔く日菜さんに少しだけ恨みを持ちながら出来るだけ入り口から遠くの席に座る。

あれだけ目立ってしまったが図書館はこれだけ大きいのだし遠くなら顔まで見られてないだろう。日菜さんは本取ってくると言って何処かに行ってしまった。

鞆から勉強の道具を取り出す。今週は課題が少なく授業中に既に終わらせた為、追われるものもなくテストの範囲を勉強することができきる。

テストの勉強といっても英語は欠片も理解できないし、国語は勉強の仕方がわからない。物理学に地理は気合いで暗記しかない。

数学はギリギリわかる、となると勉強するべきは英語だろう。脳内鎖国が終わって開国するのはいつになるのか、そもそもの話なぜ日本人が英語の勉強をしなければならないのか。ああ、文句が止まらない、キリがない。

ドンツ、と何かが落ちるような音が近くでする。何かと思いチラリと見ると日菜さんが辞典の用なデカイ本を何冊も積み重ねていた。

「それ、なんですか?」

「百科事典だよ。同じ百科事典でも版によって解釈が違ったり、説明文書がループしたりして面白いの」

「そ、そうですか……」

その楽しみ方はわからない。僕からすれば辞典なんて使った回数よりも枕にした回数の方が遥かに多いのに。

天才の行動は凡人には理解できない、漫画や小説で何度も聞いたその言葉だがそれを事実として体験したのはこれが初めてだ。

勉強というのは謎の眠気がつきまとう。数十分から一時間は地獄、それ以降はもう天国に飛び立っている。

欠伸を噛み殺しながら問題を解き、意識が溶けそうになっていたところで声が飛んでくる。

「そこ、間違ってるよ」

「え、何処ですか？」

「ほらここ、前置詞がこっちじゃなくてこっち」

ああほんとだ、とはならない。何処が間違ってるかはわかる、でもなんで間違ってるのかはわからない。

結局答えを見て解説を読む。理屈はわかった、でも理解は出来ていない。

「悠君ってひよつとして勉強苦手？」

「この前も言った気がしますが苦手ですよ」

「理解出来ないことをするのって嫌じゃないの？」

「嫌でもしなきゃ駄目じゃないですか、勉強なら特に」

人生で理解出来ないけどもやらなければならぬことなんて星の数ほどある。やるのが普通だから、強制されているから、理由は数えられる程度しかないのに。

「まあ理解出来ないから楽しいってことはありますけどね」

「んー、それはなんとなくわかるかも。あたしも宇宙のことゼーんぜんわからなくて考えてても楽しいもん」

「楽しく思えると理解する気が沸くんですけどね」

ゲームのこの場面どうするかとかの答えのない問題とかはいい例だ。答えがないから言い合いになるし喧嘩にもなる。

だけどそれは自分のわかってなかったことを知れたりできるし、なにより自分なりの答えをぶつけるのはとても楽しく思う。

「じゃあ悠君が勉強を楽しく思えるように、あたしが先生をしてあげる」

「それは……無理だと思えますけどもお願いします、先生」

間違えているところを日菜さんに指摘されて、くだらない雑談を交えながらする勉強は意外と楽しかった。

ただ、教えてくれる時にここがこう、とかあれだからとかは抽象的すぎてあんまりわからなかったのは秘密だ。

「悠君ってほんつとに面白いよね。考え方とかあたしと全然違うから

話してて楽しい」

「日菜さんと話していると疲れます」

何時間勉強したのだろうか、ただだいぶやった気はする。

腕は痛いし頭も痛い、しかし疲れはない。楽しく、と言い切ることはできないが、つまらなくない勉強なんてはじめてかもしれない。

「酷いなあ、もしかしてあたしの言ってる事が理解出来ない？」

「理解は出来ないですけどそうじゃないです」

話は終わらない、質問は正論だし悪気がないからたちが悪い。それよりも言ってる事を少しでも理解できるよう自分なりに変換するのが一番大変。

だけどそれは今日一日で勉強よりもよっぽど理解できるようになっていった。

「まだ理解は出来ないけど、少しだけわかるようになってきました」

「あたしの言いたいことが？」

「ほんの少しだけですけれどね」

そういうと日菜さんの目がすっごくキラキラしてるように見えた。まるで始めて見る生き物を見るような目、好奇心を隠そうとしない目をしていった。

「あたしね、今すっごく嬉しい！」

「日菜さんもう少し声抑えて……」

「あたしの事をわかってくれようとする人なんて今までおねーちゃんしかいなかった。他の人はよくわからないって言って離れて行ったけど悠君はあたしの事を理解しようとしてくれてる、それがね、すっごく嬉しい！」

『図書館では静かにしてください』

二度目のアナウンス、そして周りからの視線。日菜さんはまたやっちやった、と笑ってきた。

異性からの笑顔、それも上目遣いのようにされることは始めてだ。顔が赤くなるのがなんとなくわかる、鼓動が早くなって体温が上がって目をそらす。

「あれ、悠君顔赤くなってる。熱でもあるの？」

「……何でもありませんよ、今日はもう帰りましょ」

「えー、あたしまだ話したりないよ」

これ以上話しているとどうにかなってしまう気がする。心臓が破裂する、体が沸騰する、等のありえないことが本当に起こってしまうよ
うな。

日菜さんと一緒に百科事典をあった場所に戻して帰ろうとして出口に向かうと、スーツと雨が降っている音が聞こえてくる。隣の日菜さんの困ったような顔が目に入る。

そういえばこの人手ぶらで来てたっけか。確か折り畳み傘が入っていた筈と思って鞆を漁るとすぐに出てきた。

「これ貸しますよ」

「そしたら悠君どうするの?」

「いいですよ別に、自転車ですし」

「それでもだよ、風邪引いちやうよ?」

「じゃあこの前の借りを返すってことで」

押し付けるように傘を渡すと僕は逃げるようにして帰る。雨に打たれる、冷たい、寒い。

——それでも体の熱は、いつまでも引いてはくれなかった。

そんなことはあったが、期末テストは英語だけかなりできたので勉強会の成果はあったようだ。

溝

練習は本番のように、本番は練習のように。

壇上に立つ薄くなった髪を恥ずかしげもなく晒す我が校の教頭が言う。

練習はどこまで行っても練習でしかないし本番はどうであろうと練習のようにはいかない。あの年でそんなこともわからないのか、と並べられたパイプ椅子に座りながらボーツと考える。

しかしながら卒業式予行練習なんてする意味があるのだろうか。

一年生で三年生との関係なんて部活程度しかない。ならば部活が入っていない僕が知っている三年生なんているだろうか、いや、いない。

二年生はそもそも去年卒業式を経験しているのだからわかるだろうし、三年生は卒業式の主役達だというのに練習するとはなんなのだろうか。

舞台じやあるまいし金をとるわけでもない、こういうのは始めてだからこそ感動というのがあるのではないのか。

にもかかわらず本番では泣き出す三年生がいるのだから僕には全く理解が出来ない。

こういう真面目な場は嫌いだ。息が詰まるし、寝る事はできなくはないが悪目立ちしてしまう。

それにもし寝てしまえば教師に後々永遠と文句を言われるだろう、二つ隣で寝てる友人を欠伸を噛み殺しながら見る。

早く終わらないかな、と時間が過ぎるのを待つ。背筋をピンと、この姿勢を長時間保つのは辛い。猫背になって肘をついて楽な姿勢に今すぐになりたい。こんな姿勢はランドセルのcmの中だけで充分だ。「それでは今日はこれで終わりにします、三年生から順に教室に戻ってください」

ああ、やっと終わったのか。一時間にも及んだ拘束から解放された僕達は大きく息を吐いて友人達との雑談に華を咲かせた。

長つたらしいものが終わったのでようやく帰れると思っていたが

今日のHRがとても長かった。

何やら寝てる奴がいたのだ、もう少し真面目にやれだのを長々と担任が語っていたせいだ。

僕の担任はこういう行事の時は嫌になるほど真剣だ。三年生に気持ちよく卒業させるためにだとか俺の時はとか、誰も聞いていないありがたい話はあるがたく受け流した。

廊下を歩いていく他のクラスのやつらの可哀想な人達を見るような目が気に入らない。結局HRが終わったのは学校で一番遅かった。

週刊誌の最大の欠点とは何か、と聞かれたら僕は間違いなく週刊誌であることと答えるだろう。

一週間前に読んだ内容を思い出さなければならぬのはなかなか大変だし、何カ月前の伏線を回収されだすともう何もわからない。週刊誌なのだからもうその時のものは置いていないから確認のしようがない。すなわち週刊誌を読むというのは自分の記憶力との勝負なのだ。

「学校帰りに立ち読みとは感心しませんね」

今いいところだからあまり邪魔してほしくないのだが。そんなことを思ったがその声から氷川さんだろうと予想をし、本から目線を外して声の方を向く。

やはりというべきかそこには氷川さんがいた。僕は読みかけの週刊誌の開いていたページに指を挟んでから閉じる。

「氷川さんはなんでこの時間に私服なんですか」

「今日は期末テストがあったので学校が早く終わったからです」

「ああ、なるほど」

「それにしてもこの時間となると……加々美さんは何か部活をしているのですか？」

「してないですよ、今日は偶々学校が長かっただけです。氷川さんは何か部活してるんですか？」

「ええ、弓道部に所属しています」

弓道部。それはカッコいい響きをしているし、なによりこの人には

きつと似合うだろうと思わされた。

だがそれ以上に感じたのは驚きだった。

「そんな驚いた顔をしてどうしたんですか？」

「いや……部活をしていることに驚きました」

「それはどういう意味ですか？」

「氷川さんならギターをするのに邪魔になるので入ってません、とか言いそうだなと思ひまして」

少しだけムスツとした感じで言われて焦る。

ギター以外の全てを捨ててギターに全てを注ぎ込む、ギターしかないんですと言われたのもあってそんな人だと勝手ながら思っていた。

僕は少し気になったので弓道部に入った理由を聞くことにした。

「特に理由なんてありません、いろいろな部活を見て自分に合ってる部活が弓道部だっただけです。」

……他の理由があるとするならば、日菜が絶対にやらなそうな部活だったのだ。

「……そうですか」

「ですが今は入ってよかったと思ひています」

集中するということはギターにも役立つていますから、このことから。

何も理由なく何かを始められて、それを何かにかす事ができるのは単純に凄くと思う。僕は理由なく何かを始める事なんてできないから。

ただ、日菜さんが絶対にやらなそうだから……か、二人の距離はだいぶ近いわりに、溝はだいぶ深いようだ。

「そういえば氷川さんは何しに来たんですか？」

「楽譜をコピーしにきました、そろそろ他の曲にも挑戦してみようかと思ひまして」

重たい空気になりそうな予感がしたので話題を無理矢理変える。

ギターの楽譜ってコンピニで手に入るんだ、そんな事を思っていたら氷川さんはコピー機の方に向かったので僕は本の続きを読むことにした。

数分後、丁度全部読み終えたところで氷川さんに話しかけられた。

「加々美さんは今週末空いていますか？」

「今週末は……多分空いています」

「もしよければ私達のライブに来てくれませんか？」

僕は氷川さんの出す音が好きだ、なのでこの誘いは断る理由がない。

場所を聞くと隣町にあるライブハウスとのこと。最近近くにできたライブハウスではないのか、友人がはしゃいでいたのが記憶に新しいのでそつちだと勝手に思っていたのだが。

しかし隣町となれば電車の時間を確認するのもそうだし、そもライブハウスの場所だって調べなければならぬ。

めんどくささがあるのは間違いないが、この楽しみに比べれば安いものだろう。

「そのライブ、日菜さんには言ったんですか？」

「……いいえ、言ってません」

「……それなら僕が誘っておきましょうか？」

ライブに誘えば少しは仲良くなれるんじゃないだろうか、そう思っ
ての発言だったが氷川さんは首を横に振る。

「日菜には……まだ来てほしくないです」

自分のライブに来てギターを始めてほしくないから、氷川さんは小
さめな声でそう言った。

日菜さんはもうギターを始めようとしていることは少しばかりわ
かっているだろうが、一応はつきりとは言わない方がいいだろう。

それにしても……

「まだ、ですか」

「はい。まだ、です」

いつか誘える日は来るのだろう。だがそれは今ではない。

ゆっくりだけど、少しずつだけ進もうとしている、変わろうとし
ている。二人の間にある溝が埋まるのは時間の問題だろう。

「それでは私はそろそろ帰ります」

僕も週刊誌を読み終えたしそろそろ帰るか。そう思ってコンビニ

を一緒に出て、別れる間に今週末楽しみにしてますとだけ言おうとしたら、先に名前を呼ばれた。

「その髪、似合ってますよ」

それだけ言って氷川さんは帰っていった。そんな事言われたのは何年ぶりかわからないし、どう反応すればいいのかわからなかった。だけど、ちよつとだけ嬉しかった。

家に帰ってスマホでゲームをしていると日菜さんからメッセージがきた。今週末遊ばない？ との事で。

残念ながら今週末の予定はついさつきできてしまったので、彼女からの誘いは行けませんと断った。しかしそれでも彼女は下がらなかった。

『えく、テスト終わったんだから暇でしょ？』

『今週末は予定があるので』

『あたしも一緒に行っちゃ駄目？』

いいですよ、とは言えない。別にバレなければ問題ないだろう、だけど僕は一人で行きたいと思った。

何でかはわからない。氷川さんが来てほしくないと言っていたからだろうか。

なので僕は家族と出かけるから無理ですと嘘をついた。嘘をついても心は痛まないし悪いとも思わない、高校生くらいになればもう嘘をつくこと慣れてしまった。

『残念、せっかくおねーちゃんのライブ一緒に行こうと思ったのに』
思わず二度見してしまった。氷川さん言っていないんじゃないのか、それとも日菜さんが独自で調べたのか。

既読をつけたまま無視するのもなんなので一応、それは残念です、僕も行きたかったと送っておいた。

「ああ、嘘なんてつくもんじゃないなあ……」

今から行くのやめようかな、なんて思いながら僕はゲームを再開した。

恋心

あの後ライブに行くべきか行かない方がいいのか迷っていたが結局僕は行くことにした。

誘われたからというのもあるが単純に僕が行きたいと思ったから。理由なんてそれしかない。

普段あまり乗ることのない電車に揺られるが外を眺めるなんて事もせずにスマホを弄る。どうせ外を見てもいい景色なんて見えやしない。

相変わらず電車は慣れない。人が多いであろう時間は避けたと思うがそれでも座りきれない程度には人がいる。

立ちっぱなしが嫌だというわけではないが電車では痴漢冤罪など録な話を聞かないし、そういうのに気を付けていると動きも制限されてしまうので出来れば座りたい。

あとは疲れるしゲームをしてると周りからすぐ見られる。それが一番嫌かもしれない。

しかし隣町までの短い間で座るのはなんか悪いし僕のような健常者が座っていると周りの目が痛い。まるでその席を譲れと訴えられているかのようで。

今日僕には目的が二つある。一つ目は当然だが氷川さんのライブに行くこと、そして二つ目は日菜さんに見つからないことだ。

一つ目はとても簡単だ、それはただライブの会場に行けばいいだけなのだから。

ならば二つ目は難しいのかと聞かれればそうでもない。会場の広さにもよるだろうが特定の人物と偶々鉢合わせるなんてことはそうそうないだろう。

そんなことを考えている内に隣町に到着した。隣町といっても来ることとは殆どない。

電車に乗る事があったとしても大抵はもう少し向こうの町まで行っているため僕はこの町について詳しくない。知っていたとしても駅周辺のみ。なのでスマホで地図を見ながら指定されたライブハ

ウスに向かう。

「それにしても最近はこればっかだな」

ライブハウスに向かう途中地図を見ながら町を歩いていると見慣れたポスターを見かけ立ち止まる。

三年前だったかにガールズバンドブームが来て、それ以来ガールズバンドの話はそこらじゅうで耳にする。

さらに最近では音楽雑誌でアマチュアのバンドですら紹介されているらしい。アマチュアのバンドの紹介をしたところでわざわざ遠方からやってくる人なんていないだろうに熱心なことだ。

まあ友人が一生バンドの話をしてくるし、クラスの子もバンドがどうかの話はしているのである程度の効果はあるのだろう。

ガールズバンドがあるならボーイズバンドもいつかブームが来るのだろうか。それともこれが男女の差というものなのだろうか。

そんなことを思っているとスマホが通知を知らせる。なんだろうかと思つて開いてみると、家族と出かける予定はなくなったの？ と日菜さんからメッセージが送られてきていた。

まさか、と思い僕はゆっくりと振り返る。振り返るだけなのに首が硬くなって動かしづらい、処刑を待つ囚人はこんな感じなのだろうか。

別にそこまで悪いことはしていないはずなのにとても悪いことをした気分になってしまう。振り返るとそこにはやはりと言うべき人物がいた。

「嘘は駄目だよ、悠君」

「……バレなければ嘘は真実になるんですよ」

「バレちゃったから真実にはならないね」

なんでこういう時に限って運悪く会ってしまったのだろうか。

いや、目的地が同じだし、そもそも今まで学校帰りに偶然会つたりしてるのだから絶対にありえないというわけではなかったのだが。

「で、悠君は何しに来たの？」

「ライブハウスに用があったので」

「それならこの前行くって言ってくればよかったのに、どうして

言ってくれなかったの？」

氷川さんに誘わないでって言われましたなんて言える訳がない。どう答えるべきなのだろうか、そもそも答えずに逃げた方がいいのではないか。

それ以外にも話題を変えるのもありだ。どうしようかと考えていると日菜さんが腕に付けた時計を見るや否や急に焦ったように走り出した。いったいどうしたのかと聞くと

「おねーちゃんのライブ始まっちゃー！」

そう言いながら日菜さんは走っていった。いや、何を眺めているんだ僕は、僕も急がないとまずい。スマホで時間を確認すると歩いていては確実に間に合わない事だけがわかる。

僕も日菜さんの後を走って追いかけるがその差は縮まらないどころかどんどんと離されていく。

息は切れるし胸も痛い、自分ってこんなに体力無かったっけと思いつつながら走る。

なんとか見失わずに着いた頃にはもう体はボロボロだ。膝に手について肩で息をする。

中学の頃ならこれくらい余裕だったと思うが人間歳には勝てないものか。それに三月になって少し暖かいせいもあってか体感はとんでもなく熱い。

ライブハウスに入るのは人生で初めての経験だからとても緊張する。

本来ならば受け付け時にチケットを出さなければならぬらしいのだが、近年のガールズバンドブームで大量のガールズバンドができた。

そのせいか、ガールズバンド限定でいろいろなバンドが入れ替わるようにライブを行う、いわゆる対バン形式というところが多いのと。

なのでチケットではなく受け付けで金とドリンク代を支払う、というのをこの店でも行っているらしい。

「その格好どうしたんですか？」

「ん、変装だよ変装」

本当に大丈夫なのか非常に不安だったが無事に入ることができた。そこは外に比べて暑い、原因は恐らくこの中大量の人。しかしそんな室内にも関わらずサングラスをかけキャップを被る日菜さんが待っていた。

「おねーちゃんにあたしがライブハウスにいたことがバレると後で怒られちゃうからさ」

「バレた時に面倒ですよ」

「バレなければ真実になる、でしょ？」

先ほど自分自身で言った通りに返されてしまったのでこちらからは何も言うことはできない。僕としては日菜さんがいることは氷川さんにバレない方がいいのでありがたいのだが。

そんな風に思っているとだんだんと照明が暗くなる。そろそろ一組目の演奏が始まるようだ。

しかし所詮はアマチュアとでもいうべきなのだろうか、下手ではないが特別上手くはない。

だがそれでも目の前にいる客達は盛り上がっている。今出てるバンドに親友でもいるか三人くらいで盛り上がっていたのだが、それは他の客に伝染し始めたのだ。

結局ここにいるような人達は音が優れているかどうかなんてどうでもいいと思ってるのだろう。

雰囲気を楽しんで、吞まれて、流されているだけ。まるで僕の人生みたいだ。

日菜さんも多少は盛り上がってるのだろうか。そう思い彼女を見てみると、退屈そうに大きな欠伸を堪えようともしていなかった。

二組目は一組目の盛り上がりをそのままに引き継いだ。そのバンドは先程のバンドと違いカバー曲を歌っていたがそれは大丈夫なのだろうか。

曲の完成度自体は当然こちらの方がいいし練習の効率はいいだろうが……僕は著作権とかに詳しくないからどうなのかはわからない。しかしストップが出てないということはそういうことなのだろう。

その後も三、四組目と流れるようにバンドが変わる。たまに上手いなど思う組はあったし、全員下手ではないためなかなか楽しめた。そして八組目、遂に氷川さん達の出番になった。

客達はもう充分すぎるという程に盛り上がり過ぎていて中には氷川さんの名前を叫ぶ者がいた。氷川さんはここでは大変な人気者らしい。隣の日菜さんは今まで死んだように黙っていたのにして急に元気になり始めた。

そして、演奏が始まる。

——急に周りが静かになった。

いや、正しくは周りの音が気にならない程に心を奪われたとでも言うべきなのだろう。

今までの人達とは比べ物にならないほどの、抜け出せない底無し沼に引きずり込まれるかのような音。

これで氷川さんの音を聴くのは三回目。たったそれだけしか聴いていないのにここまで夢中になっている。

だがとても残念だ、彼女以外の四人の音が邪魔に思えてしまう。確かに今までに比べればそれなりに上手なのは確かだろう。

でも相手が悪い、仲間が悪い。ギターがよすぎて他が潰されている、そう感じてしまう。

僕は氷川さんの出す音だけを聴いていた。他の音は最低限でしか聴こえない。

僕は氷川さんだけを見ていた、他は何も目に入らなかった。他のメンバーも、前にいる客も、隣にいる日菜さんも……

「……ありがとうございます」

夢のような時間は終わり現実を引き戻される。

今まで聞こえていなかった客のあまりの盛り上がりで耳が壊れてしまいそうになり、熱くなった体は急に冷えだし手には汗が握られている。

急に照明が明るくなる。もう終わりなのかと思ったがどうやらここで一旦休憩を挟み、残りのバンドを後半としてやるらしい。

僕としては氷川さんの音を聴けてこれほど熱中できたのもう充分満足したしもう帰ってもいいのだが、最後までいても値段は変わらないのだし残るとしよう。

「おねーちゃんの音やっぱりかっこいい！ 悠君もそう思うよね！」

「え、ええ、まあ」

「途中であたしが話しかけても反応してなかったし、相当おねーちゃんに夢中だったよね」

話しかけられていたのか、全然気が付かなかった。そして今も話しかけられてはいるが僕の視線はステージの奥に向けられたまま。

まるで、氷川さんの軌跡を追うように。

「ねえ、悠君ってもしかしておねーちゃんのこと、好き？」

その言葉で日菜さんの方を向く。好き、なのだろうか、どうなのだろう。

好いているというのならば確かにそうだろう。奏でる音はとても素晴らしいくて、見た目もいい。好かない理由なんてどこにもない。

そう、好いているというのは間違いない、ならば恋しているとどうなのだろうか、それは僕にはわからない。自分のことだということに、それは今まで経験したことがないから。

元々は自分を変えてくれそうなものとして興味を持った。次には大好きだったりな一面を知れて少し別の興味を持った。

では今はどうなのだろうか。

夢中になれて、頑張っているその姿に憧れて……ああ、もしかしたら、しているのかもしれない。

「わからないです」

「自分のことなの？」

「知識と経験がないので」

恋しているってどういうことなのだろう、恋しているとどうなるのだろう。本で読むか友人から聞いた程度にしか知識がないので僕に詳しくはわからない。

日菜さんが飲み物の追加を取りに行っている間にスマホで『恋しているとは』と調べる。

だが胸が苦しくなったりドキドキする、世界が遅く感じるなど、どこかで耳にしたそれらしい検索結果しか出てこない。

それに若干のイラつきを覚えてしまい閉じようかとも思ったが、やけに気になり続けていろいろと調べ続けていたが日菜さんが帰ってきたので急いでページを閉じた。

後半のバンド達の音は、なんでかわからないけど僕の耳には入ってこなかった。

全てのバンドが終わった後日菜さんに一緒に帰ろうと言われたのでそれを了承する。

しかしながら飲み物を飲みながら立ちっぱなしで二時間程度、当然トイレに行きたくなってしまう。

電車が来るのはもう少し先だし問題はないだろう。先に行つてと日菜さんに言つてからトイレに駆け込んだ。

トイレから出て外にある自販機で水を買う。まだまだ余裕があるので別に急ぐ必要はないのだが、流石に他人を長く待たせるのは忍びない。

そう思いながら歩きだそうとしたところである人物が角から出てきた。

「本当に来てくれたんですね、ありがとうございます」

ドキリと心臓が鳴ったような気がした。

ああ、これはなんだろう。氷川さんに会った瞬間体が異常を訴え始める。

なんだこれは、胸が痛くはないが苦しい、それは蝕むようなものではない。優しく溶かすような感覚。

体が熱い、思考が早くなりここ最近で一番頭を使いどう返答するべきなのかを考える。そう考えている間はまるで世界が遅くなったような感じがした。

それだけ頑張つて考えたにも関わらず出てきたものは演奏凄いや

かったです、それだけのたった10字。

そう、たった10字。それなのにそれすら口に出すことはできない。

別段何でもない会話、何も特別なことなどありはしない。そのはずなのにそれを口に出すのがとても辛い、重い壁を持ち上げるようにしてこじ開ける。

「き、今日の演奏凄くよかったです」

それだけ言い捨てて僕はその場を逃げ出すように早足で去った。

ああ、この胸の苦しさは、熱さは、走った後の物とは全くの別物だ。これではまるでネットに書いてあった通りじゃないか。

言われてみれば今までこの感覚は何度かあった。でも言われて、調べて、体験して、始めてわかることができた。

どうやら僕は氷川さんの音だけではなく、氷川さん本人にも恋をしているらしい。

発熱

馬鹿は風邪を引かない。

日本にて古来から言われてきたその言葉、医学的根拠は……あるのだろうか？ 調べてみると風邪を引いていることにすら気づかないほど鈍感、とのことらしい。

しかしその意味では馬鹿ではなく能天気ではないのだろうか。そんな国語の課題でも出てこなそうなくだららない事を考えるのにも理由がある。

今日の昼、目が覚めるとスマホに『おねーちゃん、風邪引いちゃった』と日菜さんからのメッセージが入っていた。

これは自分が風邪を引いたから氷川さんに送ろうとしたが、間違えて僕に送ってしまったのか。それとも僕に氷川さんが風邪を引いたと伝えたいのかわからなかった。

氷川さんに風邪引きましたか？ とメッセージを送ったが練習中なのか、それとも風邪で寝込んでるのかわからないが10分くらい経っても既読はつかなかった。

『お父さんとお母さんはいないんですか？』

『今日は一人とも仕事だよ、忘れちゃったの？』

それならばと日菜さんにメッセージを送ってみるとそう返された。ただこれで彼女が間違って僕に送ったということがわかった。

しかしだからどうしたというのだ。別に家が隣というわけではないし彼女と付き合つてるといふ訳でもない、特別長い付き合いではないし仲は……そこそこのいい方だと思いたいがそれだけだ。

所詮風邪程度で命に関わることはないのだから見舞いの必要もないだろう。そう考えもう一回寝るかゲームをするかどうするかと悩みながら、お大事にしてくださいとだけ送ってパソコンに向かう。

けどなんだだろう、このもやつきは。寝起きだから頭が回っていないだけだろうか、それに違和感を覚えていたところにメッセージが届く。

『あれ、おねーちゃんじゃなくて悠君じゃん。間違えちゃってたんだ』

『風邪なんだからスマホ弄らない方がいいですよ』

『だって暇なんだもん』

気付かれてしまった、まあ気付かれてしまったからどうというわけではないのだが。

風邪を引いた時は暇になってしまふのはとてもわかる。外には出られないしいやに怠い、その癖することがないのだからこの上なく暇になってしまふ。

とはいっても最後に風邪を引いたのはいつか覚えてない、少なくともスマホは持っていないかった筈であるが。

『ねえ、お見舞い来てよ』

『明日学校あるので移されると困ります』

『悠君って風邪引いたら学校休めるやっ！、って考えるとと思うんだけど』

文の最後にそれっぽい顔文字つきで送られてきた。それはそう、風邪で学校を休めるのならば万歳だ。だけど休むのはなんか嫌いだ。

授業が先に進んで追い付かなくなるからなんて真面目な理由ではない。周りが休まないから、ただそれだけだ。

たった1日休んだだけで周りからアイツ風邪引いたんだ、みたいな目で次の日見られてる気がするから。

同じ理由で学校をサボるのも怖い。サボるなんてしたら周りからどんな目で見られるかわからない。

SNSで今日は学校休んだ、という誰に向けたわけではないであろう眩きをたまに見るが、まったくもって理解ができない。

『出来るだけ早く来てね』

しばらく放置しているとそんなメッセージを押し付けられていた。行くとは一度も言っていないのだが、本当に僕は押しに弱い、所詮は指示待ち人間。

ああ、折角の休日。パラダイスの予定が全て崩壊してしまった。まあパラダイスなんていつでも予定らしい予定はなにもなかったが。

しかし見舞いなんて行ったことがないから何を持っていけばいいのかわからない。暇だ暇だと言っていたから漫画でも持っていけば

いいのだろうか。

出来るだけ早くとの要求をされてしまったので早く向かった方がいいだろうと思い、目につく漫画を適当に持って家を出た。

「普通風邪引いた程度で異性は呼ばないだろ……」

僕は日菜さんの事を少しだけわかっていた気がしていた。だが撤回だ、僕にはまだあの人の事は全くわかっていない、理解なんて程遠い。

あの人を理解できるのにはあとどれだけ、あと何年かかるのだろうか。溶けそうなくらい暖かい太陽の光を浴びながら僕はそんな事を考えていた。

氷川家に着いた僕はインターホンを押す。他人の家のインターホンを押す瞬間は緊張するのはどれだけ年を取っても変わらない。

もしこれで氷川さんのお父さんかお母さんが出てきたらなんて挨拶をしよう、なんて事を今更ながら考えたが二人とも仕事だと言っていたのを思い出し少しだけ安心した。

「悠君、遅い」

「これでも結構早く来た方なんですけれど」

開いたドアの先にはパジャマ姿らしき日菜さんがいた。青色と水色のパーカーに紫と白の水玉のズボン、寝起きからずつとそのまんまですというのが伝わってくる。

「そんな舐め回すように見るなんて……悠君はえっちだなあ」

「舐め回すようには見てないです、そんな元氣そうなら帰りますよ？」
「見てることは否定しないんだ」

下から見上げるように言われるその言葉に少しだけ恥ずかしさが込み上げる。墓穴を掘ってしまった。穴があつたら入りたい、掘った墓穴に潜り込みたい。

そんなことを考えていると後ろに回り込まれ、グイツと背中を押され家の中に運び込まれる。

「それにしても風邪引きたくないって言ってた癖にマスク付けてきてないんだね」

「馬鹿は風邪を引かないので」

「じゃああたしがよく風邪を引くのは天才なせいなのかな？」

その返答は嫌味なのだろうか。もし風邪を引いた程度で天才の証明になるとするならば僕は薄着で外に出て風邪を引いて天才になっている。

日菜さんの部屋に連れていかれたが、部家の中を見回すのはよくない気がしたので出来るだけ壁を一点に眺める事にする。

「悠君はおねーちゃんの事、結局どう思ってるの？」

部屋について暫くすると日菜さんは凄く興味津々なようにそう聞いてくる。

心なしか日菜さんの目がキラキラしているような気がする。もしかしてこういったことには興味があるのか。

どう言うのが正しいのだろう、ゆっくりと考える。あの時の事を思い出しながらこの前出た答えを砕き、溶かして、固めて組み立てて口に出す。

「好き、だと思えます」

そこまでして出てきたのはそんな言葉。沢山の工程を挟んだ割には短くて単純な言葉、だけどこれ以上ない僕の気持ち。

「……この前はわからないって言ってたのに、知識と経験はついたの？」

「経験はないですしついてないです、知識も全く増えてないです」

「それならどうして今度ははつきりと言えるの？」

「……好きだと思つて、気づいたからです」

感情論、僕の嫌いな抽象的な物。それでもそうとしか言いようがない。

恋とは、愛とは、言葉に出来ない。何を馬鹿な事をと少し前まで思っていたが体験してそれは始めてわかった。

「へえ、じゃあ悠君はあたしの事、好き？」

「……唐突過ぎませんか？」

「いいじゃん、気になっちゃった」

「好きか嫌いかで言えば好きですよ」

「でもそれはおねーちゃんに対する好きと一緒、じゃないよね？」

その問いに僕は頷く。恋してるのではない、愛しているのではない、好いている。振り回されたりいろいろされるけど楽しい、でもそれだけだ、それ以外に特別な感情はない。

「急にそんな事聞いてきて、風邪悪化しましたか？」

「……そうみたい、悠君はもう帰る？」

その問いには頷いて返す。日菜さんは見てわかるくらい急に気分が沈んだ。

理由はわからない、なんてことはない。でも予想でしかない、本当にそんな事はあるはずがない。

こんな妄想にすぎない、男子中高生特有の物だ。こんな僕がそう思われるなんてありえない、あつてはならない。

どうせ妄想だ、それも気持ちの悪いもの。こんな風に思われたくないだろうし早く帰ろう、そう思いながら玄関に向かう。

「ね、ねえ悠君、再来週映画見に行かない？」

「再来週は……いいですよ」

忘れないでよねと笑顔で言われる。笑顔は苦手だ、人によっては笑顔は怖い、それはこの人も例外ではない。

別に何か隠しているかのように見えるわけではない。だけどこの人の笑顔はただただ純粹に、とても可愛らしい。

なんだか心を動かされてしまいそうになる、僕はあの時に戻ったかのように顔が赤くなり心臓が早く脈動する。

僕は流されやすい、周りに全て任せる指示待ち人間。だけど一度自分で決めた事はそれなりに押し通せる、そんな人間の筈だ。

「それじゃあ、またね」

「お大事にしてくださいね」

熱い、痛い、苦しい。この感覚には覚えがある、間違えようがない。僕が好きなのは氷川さんの筈だ、日菜さんじゃない筈だ。氷川さんは僕の事を変えてくれそうだから好意を持った。

日菜さんは……きつと僕を今のまま変えてくれないだろう。

ではこの思いは、熱さはなんだろう。まさか、まさか、そんなまさ

か。

——僕は二人に恋をしているのだろうか。

「風邪、移されちゃったかな……」

知らない、ありえない。こんなの知らない、こんなことはありえない。

この気持ちは何よりも理解が出来ない、日菜さんよりもずっとずつと理解が及ばない。

馬鹿馬鹿しい、そう思っただけに家に着くなり熱を測ってみたが結果は残念なものだった。

観賞

映画なんて見るのは何時ぶりだろうか。

小学生の頃はゲームの特典を手に入れるためにわざわざ足を運んでいたりしたものだ。今ではそのようなゲームはやっていないから恐らく来たのは小学生ぶり。

まあロードショーを含めていいのなら最後に映画を観たのはわりと最近なのだが。

待ち合わせの時間より5分早い程度だが、日菜さんはこの前少しだけ遅刻をしてきたしこれでも充分だろう。時間ぴったしでもよかったのだがそれでも早く来たのは多分、待ちきれなかったからだと思う。

多分、自分のことなのにわからない。先日は眠れなくて今日は起きても何故だかそわそわしていた。

こうやってシヨツピングモールに立ち竦んでいるとどうも落ち着かない。

いくら早くとはいえそこまで時間が有り余っているというわけではないので映画の所に向かう。

スマホを見ながら時間を潰していると、わりとすぐに日菜さんが来た。

「待たせちゃった?」

「いえ、それほどでも」

「ならよかった」

生涯無縁かと思っていたそんなやり取りをしながら奥に進んでいく。

それにしても映画を見ると言われたものの僕は最近の映画を全く知らない。知っているにしてもたまにテレビでやっているかSNSで流れてくる物程度、いったい何を見るのだろうか。

ジャンルに関してもこれが好きとかはないのでなんでもいいのだが……全て任せきりでいいだろうか。

「どの映画見るとか決まっていますか?」

「決まってないよ。悠君はどれが見たいとかある?」

「最近の映画はわからないです」

それじゃあどれにしようかな、と日菜さんはそこら辺を歩き回る。僕も一応ネットで今流行りの物を調べてみるがアクション物だったりアニメ物だったり様々だ。

今の一番人気なのは一昨日に上映が始まったホラー映画らしいがこれは勘弁しておきたい。ホラーは苦手だ、怖いとかそういうのもあるがそれ以上に見てられない。

不安を煽る空白の時間が嫌いだ、暗い雰囲気曲が嫌いだ、背中がぞわぞわして気持ちが悪くなる。人工的なものだとかわかってはいるから、絶対来るとわかるから余計怖い。

そんなことを思っていると日菜さんに呼ばれた。

「悠君、これなんてどう?」

「ジャンルは……恋愛映画?」

「恋愛映画は捨てがたいよね、悠君はこういうの好きじゃないの?」
「嫌いじゃないですけど……苦手です」

恋愛物もホラー程ではないが苦手。怖いでもなんでもない、ただ見ているこっちまで恥ずかしくなるだけ。

耳を塞ぎたくなる、目を背けたくなる。映画だけではない、ドラマでさえもチャンネルを変えたいと思うほどには。

こちらには深い理由はない、ただただ単純に苦手だ。

「そうか、じゃあ……ん、これにする?」

「いや、流石にこれは……」

次に日菜さんが指差したのは先ほど紹介されていたホラー映画、やんわりと断るが恐らく顔には嫌だと表れてしまっていることだろう。

そんな僕を見た瞬間日菜さんは、そっかよとにやにやしながら券を買いに行ってしまった。

ひきつった顔を見られてしまったのだろうか。やめてくれ、ホラーは本当に苦手なんだ。

「あ、そういえばポップコーンの味と飲み物どうする!?!」

なんて事を思っていると凄惨な大声でそう聞かれた。場所はある程

度離れてるにしろ日菜さんはこちらを向いて言ってきたので、当然周りの視線は僕と日菜さんに二分される。

ああ恥ずかしい。僕は関係ありません、という風に後ろを向いて、塩とコーラでお願いしますとメッセージを送った。

まさかいきなりこんなことをされるとは。本当に彼女のことは全く理解できていないままだ。

「はいこれ」

「ありがとうございます」

ポップコーンと飲み物と券を受けとる代わりにお金を渡す。出来ればホラーじゃないのであってくれ、そう願いながら券を見てみるとそこにはホラー映画の名前は書いてなかった。その代わりに恋愛映画の方の名前が書いてあった。

「なんでそんな安心した顔してるの?」

「なんでもありませんよ」

なんでもありませんってことはない、おおありだ、心底ホツとしている。恋愛映画は苦手といってもホラーよりは何倍もましだ、しかし既にホラーが苦手だということがバレてしまっているだろう。

言っていないし聞かれていないが日菜さんのニヤついた顔を見ればわかる。

しかしこの映画の名前、何処かで聞いたことがあると思ったがだいぶ前にCMで見た記憶がある。まだやっていたのか。

「悠君は塩派なんだね」

「そういう日菜さんはキャラメルなんです」

「こっちの方が甘くて美味しくない?」

「甘いのが得意じゃないので。それに日菜さんポテト好きなんですし塩だと思っちゃったけど」

うーん、と呟きながら自分のを食べその後僕の方から幾つか取っていく。その後また少し考えるような顔をして、やっぱりこっちの方が好きかなと言われる。

「悠君も食べる?」 はい、あーん」

そう言ってポップコーンを一つだけ渡してくる、恥ずかしいので手で受け取ってそれを口にする。そろそろ入場しておきましょと言うと手を引かれ中に連れていかれる。

それにしても、本当にこれは甘ったるい。

それはポップコーンの味だろうか、それとも何か別の要因だろうか。何かはわからなかったけど、ただただ甘ったるかった。

「いやー、面白かったねえ」

「そうですね」

たかが恋愛映画と少し見くびっていたがそれはかなり裏切られる事になった、いい方向として。

内容としては記憶を失った主人公と他人の心がわからない少女の恋愛物、今さらながらSNSに発信でもしておこう。確か名前は……『心のありか』だったか。

「悠君はさ、心って何処にあると思う？」

映画を見終わってから感想を言い合うのは複数人で映画を見る一番の楽しみだろう、とはいえ今までそのような経験は一回たりともなかったが。

心は何処にあるか、確か映画内ではあなたと一緒にいるところにあるだったか。

「脳か心臓か……それともこの掌？」

「普通なら胸ですけど……やっぱり頭ですかね」

脳か心臓かとは流石に絞りすぎではないだろうか、もしかしたらまだ発見されていない臓器かもしれないのに。

それにしても映画内でのヒロインが言ったこの掌にあるものが、心ってというのは結構お洒落だったと思う。

「ふーん、どうしてそう思うの？」

「やっぱり物を考えるのは頭ですから、日菜さんはどう思うんですか？」

「あたしは心臓かなあ、でもよくわからない」

一生考えたってこの問いはわからないだろう、だって答えがないの

だから。でも答えがないものは楽しいこともある、理解ができないから、しようとするのが楽しいから。

そういう点ではこうやって目の前で笑っているこの人といふことを楽しいと感じるのも仕方がないことなのだろうか。

「このあと寄りたいたいところあるんだけど、一緒にきてくれる？」

「いいですけど……楽器店ですか？」

「違うよ、近くの雑貨屋。おねーちゃんの誕生日プレゼント買いたいからさ。」

「そうだ！ 悠君も買ってけば？」

「……誕生日近いんですか？」

「3月20日だよ」

3月20日となるともう一週間もないじゃないか、何故か少しだけ焦りを感じた。僕が渡せるわけではないのに、渡す勇気だつてないくせに。

でももしかしたら渡せるかも……そんな妄想と終わることだろうとなにもせずに後悔するよりはいいだろう。見て回る、それだけでも十分かもしれない。

「そういえば悠君の誕生日っていつ？」

「9月なんでもまだまだ先ですよ」

「となると……乙女座？」

「27なので天秤座です」

へーと言って日菜さんは天秤のキーホルダーと魚のアクセサリーを手取る。

魚のアクセサリーはわかる、3月20日は確か魚座だから。じゃあその天秤のキーホルダーはなんなのだろう。

「折角だから悠君にも買ってあげようと思つてさ。ほらこれ、実際に測れるらしいし実用性ない？」

「そんな小さいもので何測るんですか？」

「あはは、確かに。実用性なんかないね」

まあ買ってくれたのはとても嬉しいのは本当だ。確か氷川さんと日菜さんは双子、それなら多分誕生日も一緒だろう。

折角ならば何か二人に渡せる物があればいいのだが……あんまり高くないものがいい。ケチと言われようとこれは仕方がないことだ。これとかどうだろう、二つに別れるアクセサリーらしいのでこれなら二人に渡せていいだろう。値段は……そこまで安くはないがまあいいだろう。

チラリと日菜さんの方を見ると渡す時の事を今から考えているのかなんとも楽しそう。

僕自身氷川さんに渡すのを考えると少しだけ顔が赤くなるのが感じられた、僕が渡すわけではないのに。

お会計の後は財布がかなり軽くなった気がして少しだけ寂しかった。

「悠君は何買ったの？」

「これです」

「ん、それ二つに別れるやつじゃん。もしかしてその片方をおねーちゃんにあげるの？ おっしやれ〜」

片方だけあげてもう片方は自分でつける、確かにおしやれだ、そんなことしてみたい。

だが僕にはその度胸がない、やるつもりはない。そも付き合ってもないのだからそんなことしようとも思わない。僕は買ったものを日菜さんに渡す。

「あたしに、なんで？」

「日菜さん氷川さんと双子なんですよね。それなら日菜さんにもあげないとかなくて」

「そうだけど……なんで知ってるの、あたし言っただけ？」

「氷川さんからだいぶ前に聞きました」

そう言うと日菜さんは黙ってしまった。何か変な事を言ってしまったのだろうか。

そう思っていると日菜さんはそのアクセサリーを二つに分けてそのうちの片方を戻される。

「これは悠君が渡した方がいいよ」

「その日に渡せるかわからないですし、日菜さんが渡してくださいよ」

「あたしだって誕生日今日じゃないよ?」

ああ、それを言われたら弱い。恥ずかしいから、そんな理由で断っていたがやっぱり自分で渡した方がいいか。いや、日菜さんに渡すのが全く恥ずかしくないというわけではなかったが。

しかし本当に僕は意思が弱い、他人に少し押されるだけでこんなにも揺らいでしまう。それは今回に限ってはいいいことなのだが。

「それに渡せなかったら、絶対後悔するからね」

「……わかりました、自分で渡します」

「うん、男の子はそうじゃなきゃね!」

なぜ僕は女の人に男はこうあるべきと言われていたのだろうか、文句があるわけではないが疑問を持ってしまう。

その笑う姿はやはり可愛らしくて、しっかりと頭に打ち付けられる。

「そういうばさ、まだ時間ある?」

「あるにはありますけど……こんな時間にどこ行くんですか?」

「屋上」

もう外は暗くなっているような時間だろう、空は黒く染まり星が見えるような。

そんな時間に屋上で何をするのだろうか。そもそもこのシヨツピングモール屋上立ち入りできたんだ。そんな事を思いながら先を急ぐ日菜さんの後を付いていった。

今回は手を引かれなかった。

それが少しだけ物足りないと思ってしまうのは……何故だろう。

「うわ……」

ドアを開けるとそこには当然だが夜空が広がっていた。しかしそれはこの前下で見たものとは違う。やはり高いところから見る方がよく見える。

地面とそんなに高度は変わらないのに、ほんの少しでも手を伸ばせばあの星に届いてしまいそうに思えてしまう。

「えへへ、凄いでしょ」

「……凄いですね、本当に」

「この場所からの星空を知ってるのあたし一人だけなんだよ。あ、今悠君も知ったから二人か」

ロマンチックな事を言ってくれる。それにしても本当に星空を好きになってしまったものだ、この前まで見てすらいなかったのが勿体ないと思ってしまう。

確か今月末は天体観測ツアーがあるはずだ、この人と一緒に。隣を見れば日菜さんは扉に背を預け星空を見上げていた。

この人は僕よりもずっと星に夢中なのだろう、キラキラとした目がそれを僕に知らせてくる。きっと僕なんか欠片も気にしていない。

知らない知識を教えてくれるかもしれない、更に夢中にさせてくれるかもしれない。ああ、本当に……

「今月末の天体観測ツアーも楽しみだ……」
「え？」

溢れた言葉に日菜さんはこちらに視線を向けてくる。何かおかしな事を言ってしまっただろうか、ツアーの事を言ってきたのは日菜さんの方からなのに。

もしかしてもう他の人と予約してしまったのだろうか。だとしたら仕方がないがやはり残念な気持ちもあるが、持ち込んだのは僕ではないので文句を言う気もない。

「覚えてて……くれたんだ」
「覚えてますよ」

「……うん、楽しみだね」

しかしその答えは別の事、この人は僕が忘れていたと思っていたのか。くだらないこと大切なこと、なんでもかんでもすぐに忘れてしまうが……この約束は、忘れられなかった。

それは星への興味か、それともこの人への興味か。

その後は僕も日菜さんも、暫くは星空に心を奪われていた。心は何処にあるかという問い、今ならきつと、この空にあると答えていただろう……

譲渡

「最近お前変わったよな」

「は？」

今日も何事もなく普通に学校が終わり帰路につく、友人からその言葉を言われたのはその時だった。

最近変わった、僕は変われている？ 自分では何かわからない、だがそれは求めていたもの、願っていたこと。

だがこいつとはある程度長い付き合いだから、変わったことといつてもどうせ上辺だけのものかもしれない。

「何処が変わったっていうのさ」

「なんだお前、やけに食いつくじやん」

「気になったんだからしようがないだろ」

もしこれで見た目が変わったとか言われたら僕はこいつを軽く叩くつもりでいる。だからその程度だと高を括るが、それでも期待を失ってしまっている自分がいる。

「教えてもいいが……飯奢れ」

「……それでもしくだらななことだったら殴るけど」

「安心しろ、高いもんは頼まねえから」

「だといいけど」

そう言っつていつものファーストフードに向かった。こいつは高いもんは頼まないとか言っつた癖にいつも頼まないものまで頼まれたので、僕は珈琲だけで我慢することにした。

「うわ、ほんとに奢りやがったよ」

「奢れつて言っつたのお前だろ」

「いやー、それでもケチなお前が奢るとは思わなかった」

「うるさいな、早く教えろ」

「まあ教えるから落ち着けて」

まったく、こいつは相変わらず勿体ぶる。ゆっくりポテトを食べて飲み物を飲まれる。イライラする、僕はそんな待てるほど人間として出来ていない。

待たされるのは嫌いだ、その筈だ。このイラつきはなんなのか、気になるからか、それともこいつだからなのか。

日菜さんを待っている時にはこうは思わないのだから……多分そうなのだろう。

いや、もしかしたら彼女が特別なだけのかもしれない。

「おい」

「ほんとお前短気だよな」

「イラつかせてるのはお前だろ」

「へいへい、じゃあ教えてあげますね〜」

こいつに丁寧語で言われるとなんだか煽られてるようでムカつく。こちらに見せつけてくるように五本の指を立ててきた。

「まず一つ目、見た目が変わった」

「……」

「大丈夫だって他にもあるから……ほんとに殴らないよな？」

「さあな、金返すか他の事によつては考えないこともない」

「じゃあ二つ目、ため息が減った」

「……ああ、言われてみれば確かに」

あれだけやっていたため息は最近ついていないことを言われて初めて気づく。何故だろうか、不満がないから、毎日が変わってきているから。自分ではわからない。

だとすると毎日が変わってきているのは何故だろうか、それは間違いないかあの二人のせいだろう。

平日は会うことは殆んどないが休日はかなりの頻度で会っている、今までと違っているのとするればそれだろう。

「三つ目はお前最近音楽聴いてる事が増えた、四つ目はゲームのログイン時間がだいぶ前になることが多い」

「何お前、僕のログイン時間いちいち見てたの？」

「いや、今まではたまーに見たらずつとオンラインだったのに、今じゃ12時間前とかよくあるからさ」

「あー、休日スマホやPC弄る時間は減ったかも」

「それじゃあ最後な」

親指から順に下げていき残るは小指、最後の一つのみ。小指だけ上げるのが辛いのか人差し指に変えたところはちよつと面白かった。

「お前が女といるとここを目撃した」

「……は？」

「お前今まで女嫌い、ゲームが僕の恋人なんだ、一生を共にしよう！
って感じだったのに女というなんて知った時には明日世界が滅びるかと思つたよ」

「……もしかして奢らせたのってそれが原因か？」

「よくわかつてんじやん」

僕は今までそんな女嫌いみたいな印象だったのだろうか、そもそもゲームと心中しようなんて危険思想は持つてない。

女性には慣れてないし苦手だが、嫌いなんて思っているつもりはなかったのだが。

「それでどうなんだよ、ええつと……なんだっけあの子の名前」

「あの子つて？」

「ほらあれだよ、この前お前と一緒にいた子」

「ああ、日菜さんの方か」

「そうそう確かそんな名前……つて方？」

つい漏らしてしまったその言葉に顔をズイツと近寄せてくる。その顔は怒り、というよりは興味という雰囲気が強かった。

それは純粹にキラついた日菜さんのようなものとは違う、だが確かに好奇心を含ませた目だった。

「何お前、二人もいたの？」

「……悪いか」

「ああ悪いね、それでその人とはどんな関係なんだ？」

「日菜さんと変わらないよ、ただの……」

知り合い、と声を出すことは出来なかった。ただの知り合い、そんな風には決して思っていない。

もっと大事なもの、だけどそれは此方からの一方的な思い。だがそれでも知り合いで済ますには足らなすぎる、表すことはできない。

「何、付き合つてんの？」

「僕がそんなこと出来るん？」

「無理だな」

「……即答するなよ」

「でも実際してないんだろ？」

まあそうだけどと答える。だが好きなのは間違いない、自分で何度も、何度も確認したのだから。

「告白とかの予定は？」

「……ない」

「駄目駄目だな、男からもっと行かないと」

「はいはい、ご忠告どうも」

これ以上ここにおいても永遠とこの話をされ続けるだろう、それは嫌だし特別用事があるわけでもない。

僕が頼んだ珈琲だって飲み終わったし帰ってゲームをやる予定だってある。そろそろ帰るか、そう思い立ち上がるも、ちよっと待てと声をかけられる。

「日菜って子の方はどうなんだよ」

「それは……」

言い淀む、日菜さんの方はどうなのだろう。もしかしたら……好き、かもしれない。

ならばそれは氷川さんとどちらが上？ わからない、決められない。二人とも二人なりの魅力があつて個性がある、だから決めることができない。

「……今まで恋なんかに興味ありませんって感じだったくせに」

「……ちげえよ」

「まあいいけど、保険として片方キープなんて考え方は止めとけよ。絶対片方に力を入れた方がお前も、相手もいい筈だ」

「……それは経験則か？」

「まあそんなとこだ」

ああ、いつからこんな事になってしまったのだろう。氷川さんだけでなく日菜さんにも揺さぶられるようになったのだろう。

もし二人とも好きなのが事実だとするならば……僕はどちらの方

が好きなのだろう。今はどちらでも好きとしか表すことはできない、ならどちらかを選べと言われたら？

僕は流されて生きてきた、自分の意思なんてなく生きてきた。そんな僕がどちらかを選ぶなんて、贅沢がすぎる。

しかし二人は僕のことをどう思っているのだろうか。少なくとも嫌いには思われていないだろうが……好意的に思われているかはわからない。

選ぶ、そんな偉そうな事を言っているが僕にどちらかを選ぶ権利はない。これが正しいのかもしれない。

「これやるよ」

ピン、と硬貨を指で弾かれそれをキャッチする。硬貨を公の場で弾いて渡すなど言う、かつこいいいのはわかるけど。

「そんなの聞いて奢られるなんて気が悪い、返すわ」

「……カツコつけてるとこ悪いけど足りてないぞ」

はあ、と大きいため息をつかれる。レシートを見せるときつちり支払ってくれたからこいつは本当にいいやつだ。

本当にいい友人だ。それこそ、僕にはもったいなくらいには、

今日は水曜日、つまりは週刊誌の新作がでる日、だが先週に合併号として販売されていたため今週はもう読む物はない。

そう知っているならばさっさと帰ってしまったしまえばいい、だが今日に限ってはそういうわけにはいかない。

「まあ来るかわからないんだけど……」

氷川さんに誕生日プレゼントを渡そうと決めている、だが渡したい物があるので来てくださいなんて恥ずかしくて送れてない。

ただただ待っている、開くだけで内容を読まずにある程度内容を覚えてる週刊誌を手持っている。

「チキン野郎が……」

何度メッセージを送ろうとしただろうか、何度メッセージを書いて消しただろうか。

きつと渡せなかつたら後悔する。だがもう遅い、今さら送ったとこ

ろで断られるのがオチだろう。

やはり昨日勇気を出して明日来てくださいとでも送るべきだった。ならば来るはずがない、そんなことはわかつている。

だというのに待っているのは、どこかで来ることを期待しているからだろう。

店内に誰かが入ってくる軽快な音がする。その度に入り口の方を向く。だが期待していた人物ではない。何度目かわからないため息をついてしまう。

「もう帰るか……」

コンビニに来てから大体一時間も経っている、渡すのは多少遅れてしまっても大丈夫だろうか。

今週末は家族との予定があるし、来週は日菜さんと天体観測ツアーの為無理、となると渡せてその後になるが流石に遅すぎるだろう。

本当は渡そうなどと思えていなかったし、そもそもここに来る気もなかった。恥ずかしい、そんな理由で。

それでも来たのは今朝日菜さんから送られてきた誕生日プレゼント渡さなきや駄目だよ、というメッセージのせいだろう。

「自分でつけるかな……」

似合わないだろう、だが日菜さんとお揃いだと考えると不思議と悪い気はしない。前向きに考えてみれば別に渡せなかったといって別に悪いことばかりではない。

外に出て薄暗くなってきている空を見るが今日の予報通りの雨は降りそうにない、こんな日に限ってだ。

結局僕は探してる、彼女を待つ理由を。雨が降ったら傘を持ってきていないしここにいないくは、そんなものを求めている。

「渡したかったなあ……」

「何をですか？」

眩きに反応されて思わず振り返る、その声を聞き間違える筈がない。

視界に入るのは……ああ、やっぱりそうだ。神様とやらは本当にいるのだろうか、世界は案外優しいのかもしれない。

「ど、どうも……」

「こんばんは、それで渡したい物ってなんですか？」

「あれ、僕氷川さんに渡したい物があるなんて言いましたっけ？」

「そ、それは……日菜から聞きましたし、さっき渡したかったなあって
言ってらっしゃったので」

「もしかして今日ここに来たのって……」

「日菜に加々美さんが今日渡したい物があるって言われたので」

彼女は女神様なのだろうか、神様は思ったよりも近くにいらら
しい。

だが声が出ない、荷物から取り出せない、こんなところで欠片の勇
気がないのだろうか。

振り絞ってみたら出てきたちっちゃな勇気と共にプレゼントを靴
の中から取り出そうとするが、震えて掴むこともままならない。よう
やく掴めたそれを氷川さんに渡す。

「誕生日プレゼントです」

「これを……私に？」

「はい、といってもあまり高い物ではないですけど」

「……いえ、それでもとても嬉しいです」

ああ、心臓がうるさい。体を抜けて外まで聞こえてしまいそうだ。
熱い、それは気温ではない。この前は緊張から逃げてしまった。だ
が今なら少しだけこの時間を、熱さを、緊張を、心地よく思える。

「この前のライブ、凄くよかったです」

「そうですね。満足のいくものではなかったですがそれなりにいいも
のが出来たと思っています」

「あ、あれで満足してないんですか？」

「ええ、途中でいくつか指が遅れてしまったりしてしまいましたので
……」

そんなもの、聴いてるこちらとしても全く気にならないものだっ
た。それでも氷川さんには納得のいかないものなのだろう。

凄いい、そんなこと僕ではあり得ないことだ。妥協して、それなりの
もので満足してしまう。努力家、真面目、それを体現している。

「それでは、また」

暫く話し込んだ後氷川さんとは別れた。本当に胸が苦しい、逃げずに耐えきった自分を誉めてあげたい。

二人には、それぞれ違った魅力があつて、個性がある。

僕は氷川さんの努力家で真面目なところに、自分が求めている、あり得ないことにどうしようもなく憧れて、好いていて……恋をしている。

天体観測

暗い部屋の中でパソコンでゲームをする。

時刻は既に3時を回っていて少しばかり眠気がある。ならば眠ればいいと思うが今日は日菜さんとの天体観測ツアーがあるのでそうもいかない。

楽しみで眠れないというわけではない。単純に早いのだ、集合時間

が。

日帰りツアーのためかわからないが集合は朝の5時。本当は9時くらいに寝ようとしたのだが、普段から破滅的な生活を送っている人間が突然生活リズムを戻せるわけがない。

眠気が来るまで待とう、そんなことを思いながらずるずると起きっぱなしでゲームをしているということになる。

『私はそろそろ寝ますけど、youさんはどうしますか?』

『自分はもう少し起きてます。お疲れ様でした』

『お疲れ様でした。(*・o・)ノ』

マルチと一緒にやっていた人もそろそろ眠りにつくらしい。先程までRinRinさんという人とマルチをしていた。

この人はとても効率的というか、動きに無駄がないプレイヤーなので効率よくクエストを進められるのでよく協力してもらっている。

私、という一人称を使ってるし文の中にところどころ女っぽさがあるが顔文字を多用してくるしタイピングが異常に早いので多分ネカマだろう。通話はしたことがないので本当にネカマかはわからないが。

「やることなくなっちゃった……」

伸びをすると大きな欠伸が出てきた。しかし今から寝たら確実に間に合わないだろう。

何をするか、そう考えながら忍び足でリビングに向かい冷蔵庫をそっと開ける。

今は親がリビングでテレビをつけっぱなしで寝ている、もし起こしてしまったりしたならば、この時間まで何してるの! と怒られるの

は火を見るより明らかだ。そんな事を考えながら飲み物を自分の部屋に持ち帰る。

「まだ早いけどもう行くか……」

飲み物を飲み終え、することもなくブーツとしていたら既に時刻は4時を示していた。集合場所はそんな遠いという訳ではないが、このままやることなく家にいたら眠ってしまいそうだ。

荷物を持ちドアをゆっくりと開けて外に出る。まだ太陽は出ていないため真っ暗、というわけではなくうっすらと明るい。

こんな時間に外に出ている人間は僕しかいない。犬も猫も、鳥さえもこの時間にはいない。まるで世界から僕以外全てがいなくなってしまうたかのようなのだ。

いくらなんでもこの季節は寒い。肌当たるそれに不快感を覚えながらも足を進めた。

集合場所に着くと、ポツポツと人がいるのが見えた。ゆっくりと歩いていたらかももう集合時間まで三十分を切っている。

スマホを覗くと起きてる？ という日菜さんのメッセージが送られてきていた。

『もう着いてますよ』

そう送った。日菜さんの家からならここに来るのに10分くらいかかるだろうし暫くは一人だ。

周りの集まっている人を見るがその殆どは男女のペア。凄く仲よくしているので恐らく彼氏彼女か、それに近い関係の人達ばかりだろう。

「ねみい……」

大きく欠伸をする。壁に寄りかかると段々と眠くなってきた、もし目を閉じたら眠ってしまうかもしれないと思うほどには。

それはいけない、こんなところで寝たら恥だ、我慢しなければ。しかし欲望は僕の意思に関係なく目を瞑らせた。

「悠君、こんなところで寝ちゃってるの？」

「……まだ寝てないですよ」

しかし僕は睡魔に身を吞まれる事はなかった。もう少し遅かった

ら確実に寝てしまっていただろうが。

それにしてもまだメッソージは送ったばかりなのに何故こんなにも早く着いたのだろうか。

「三分も経ってないんですけれどなんでもう着いてるんですか？」

「送られた時にはもうここに着いてたからさ」

「ああ、そういう」

そんなことを話していると少し早いバスがやって来たのでそれに乗り込む。

しかしどうして日本人はこうも後ろの席に座りたがるのだろうか、そんなことを思いながらも出来る限り後ろの席に座る。

バスが来ただけでまだ出発には時間があるし目的地への到着時間に関しては二時間ぐらい先。

これなら少しだけ眠れるだろう、そう思い目を閉じるがまたしても日菜さんに声をかけられる。

「何、悠君寝ちやうの？」

「……日菜さんは眠くないんですか？」

「昨日結構寝たし大丈夫かな、もしかして寝てないの？」

「……予想の通りで」

「ふくん、じゃあトランプしようよ」

「話聞いてました？」

「だって悠君が寝ちやったらあたしが暇になっちゃうんだもん」

もしそうならそれは大変悪い事をした気分になってしまうだろう。仕方がない、付き合うとしよう。もし途中で眠気が覚めたら儲けものだし。

「それで、何するんですか？」

「あれ、やってくれるんだ」

「暇にするのも悪いですし」

「うーん、じゃあトランプタワー作りとか？」

「……無難にババ抜きで」

バスの中でトランプタワー作りなんて不可能だろう。いや、この人ならやり遂げかねないが。それを始めて数十分、すべての参加者がき

ているのをバスの人が確認するとようやくバスが出発した。

到着までの二時間弱、ひたすらにババ抜きをしていたが結果は多分勝ち越し。日菜さんはババを掴まれた時顔にかなり出るからかなり分かりやすかった。

この人でも全てが思い通りに出来るわけではない、当たり前だが改めて知れたそれは少し嬉しかった。

「着いた〜！」

「山って感じですね」

「うん、るんってきてる！」

バスから降りると辺り一面緑が広がっていた。山の下では絶対に見ることが出来ない光景。空気が美味しいとかそういうのはよくわからないけど、ちよつとだけ気分がいい。

しかしながら徹夜明けにこの日光は厳しいものがある。体がどろどろに溶けだしそうだし、どろどろと体の中で何か溶けていくのを感じ、少しだけ眠気が飛んだ気がした。

「自由行動の間どうする？」

「どうすると言われましても……」

本命は夜の天体観測なのだから昼間から疲れることはしない方がいいだろう。とはいえ折角の大自然だ、はしゃぎたくなる気持ちがないといえば嘘になる。

「じゃあ鬼ごっこ、悠君鬼ね」

「鬼ごっこですか……まあいいですけどあまり遠くには行かないでくださいよっ。」

「大丈夫だって、もし捕まえられなくても時間にはここ戻ってくるから」

スタートは荷物を置いてきてからねとの事だ。荷物持ちますよと言つて日菜さんの荷物を持ったがそこそこ重い、いったい何が入っているのだろうか。

僕は少し顔を歪めながら運んでいたそれは日菜さんは重いという顔を欠片もせずにつけていたというのに。少しだけ悲しい気持ちになるのは何故だろう。

「それじゃあスタートね、30数えたら追いかけてきていいよ」

そう言つて日菜さんは走つていった。それにしても相変わらず速い、僕の足だと追い付けないのではないのだろうか。

「さて、始めますか」

何処に行つたのだろうかと予想する。こういうのはゲームで何度も経験済みだ。

相手がどう考えてるのかを考えて追い詰める。見つけて捕まえて吊るまでセツトだ。なんてことを心の中で呟きながら、まずはゆつくりと歩き出した。

「悠君体力ないね」

「日菜さんが元氣すぎるんですよ……」

結果として僕は日菜さんを捕まえる事が出来なかった。息は切れ、肩で呼吸しているような僕に対して日菜さんは汗すらかいていない。

これが格差か。いや、徹夜明けだからそのせいだ、きつとそうだ。そうだと思いたい。

見つけること自体は簡単だった、しかし捕まえるとなると話が変わる。

もとより日菜さんの方が足が速いのはこの前でわかっていたし、なにより体力も向こうの方が多し。今考えてみるとなかなか無理ゲーな感じはあったが……楽しめたと思う。

その後はツアーの予定通りに過ごしていると外はもうすっかり暗くなつてきている。外で昼飯を作ったりなどそれらもまあまあ楽しめた。

「それじゃあ行く、他の人達はみんなもう行つちやつたよ」

「そうですね」

いよいよメインの天体観測の時間だ。他の人達はもう既に天体観測に向かった為僕達が最後だ。

それにしても外は結構暗い。これだとこけたりして危ないな、そんなことを思いながらツアーの人に貸してもらつた懐中電灯をつけようとするが、日菜さんに止められる。

「なんですか？」

「いや、せつかく外が暗いのにそれつけちゃ駄目じゃん」

「でもそしたら見えなくなりますか？」

「大丈夫だよ、ほら」

そう言つて日菜さんは懐中電灯を取り出した。それならばこれでもいいじゃないか、そう思ったが日菜さんの取り出したその懐中電灯はライトの部分に赤いセロハンが貼つてあった。

なんだろう、遊んでつけたのだろうか。

「その赤いセロハンって……」

「ああ、これ？ 人間の目つて暗いところに慣れるのに時間かかるでしょ。明かりを見るとすぐに無駄になっちゃうんだけど赤い光は大丈夫なんだ」

「へえ、詳しいんですね」

「一応天文部だからね」

天文部なんて部活初めて聞いた。そんなものがある日菜さんの学校が珍しいのか、それとも天文部は比較的メジャーな部活で、存在しない僕の学校が珍しいのだろうか。

その話は星がよく見える場所に向かうまでの間の話題として重宝した。

なんでも天文部の先輩がUFOの事について調べているとか、OBの人たちのノートの話とか。それらを凄く楽しそうに、笑顔で語られた。

おすすめの観測場所として渡された地図に示された場所に向かつている途中、日菜さんに手を掴まれ止められる。

「そっちじゃないよ、こっち」

「あれ？ でも案内にはあっちって書いてありますけど……」

「鬼ごっここの間に来てみたんだけど、こっちの方がよく見えそうだよ」手を引っ張られ連れていかれる。ほんとにこういう強引で、元気なところは日菜さんの魅力で、個性だと思う。

多分僕は日菜さんのそういうところに引かれている。それは僕に、当然氷川さんにもないところだから。

「ずい……」

満天、という言葉は恐らくこの為にあるのだろう。隠すかのような雲は一つもなく、空を潰すかのような大量の星。目を奪われる、心を奪われる。

「これ貸してあげる」

「これは……双眼鏡？」

「双眼鏡でもよく見えるんだよ」

望遠鏡程じゃないけどねと付け足される。試しにつけてみるとこれがなかなかよく見える。肉眼だと見えなかった星が、輝いた雲のようなもの。

「そういえば悠君、おねーちゃんにプレゼント渡せたんだね」

「ああ、その件は感謝してます」

「どういたしまして」

お互いに星を見ながらの会話、双眼鏡をつけているから今は星しか見えていない。双眼鏡も合間つて視界は更に狭くなってしまってる。そしてそれは多分日菜さんも同じだ。暫く星を見ていると日菜さんに声をかけられた。

「月が綺麗ですね」

「……その言い方、勘違いされますよ」

双眼鏡を外して日菜さんの方を見る。月が綺麗ですね、流石に聞いたことのある言い回しだ。

当然そういったことには憧れがある。中学生の頃そんなことを言われる妄想をした記憶もある。

「別にいいよ、だってほんとの事だし」

体育座りでうつすらと笑いながらそういうその顔は、暗くて隠されていて、しかしどの星よりも明るく僕の目に映っていた。

なにも言えない。聞き間違いかとすら思っていた僕に、日菜さんは続けてくる。

「まだ気づかないの？」

日菜さんは急に立ち上がる。月を、星空を背にして僕に対して言っ

た。

——あたしはね、君の事が好きなんだよ。

その言葉を聞いた瞬間、世界が止まったかのように思えた。

それは今まで聞いたことのない言葉だったから。あれほど輝き僕を魅了して、吸い込んでいた星空も、月も、今の僕には映らない。

理解ができない、頭がその言葉を処理しきれしていない。何を言った、何故言った。嘘なのか、聞き間違いか、ただ弄られているだけなのか。思考がどんどんと加速する。

「悠君はあたしを理解しようとしてくれる、今までそんな人おねーちゃんしかいなかったのに。それがすっごく嬉しくて、るんつてきて、気づいたら好きになってたんだ」

その言葉に僕は返す言葉は準備をしていない、持てていない。喉が異常な程に乾いてくる、焼けるように胸を焦がす何かを感じ取れた。「今すぐ返事を言わなくても大丈夫だよ」

日菜さんにそう言われた。返事は後でもいい、ゆっくり考えてくれ。そう言う意味だろうかと思っていたが、別のものだった。

「悠君っておねーちゃんの事、好きなんですよ？」

「……そうですね」

「だからさ、まだ返さなくてもいいよ」

日菜さんの顔が少しだけ赤くなっている事に気づいた。彼女は心を整えるかのように、大きく深呼吸をしてから、言った。

「あたしの事をおねーちゃんより好きと思うか……おねーちゃんの方が好きだと思ったら、答えて欲しい」

とびきりの笑顔で、弾けるようなそれで。

色々とありすぎて放心気味の僕をさしおして日菜さんはもう戻る時間が近いねと言ってきた。だがそんなことは今の僕には入っていない。

「ほら、あたしばかりじゃなくて星も見よ？　綺麗な物が見れるのもあとちよつとだよ」

日菜さんは双眼鏡で星空を見上げる。僕は星空を見ることはなかった。

なぜか、そんなの簡単だ。今の僕には星空なんかより、日菜さんの方が何倍も綺麗に見えたのだから……

ああ、僕は駄目な人間だ。

氷川さんに恋を、始めてのそれをしたというのに……

日菜さんにも、氷川さんと同じくらい、恋をしている。

「あ、そうだ。あたしの事日菜って呼んでよ、敬語もいらさないから」

「……今でも日菜さんって呼んでるじゃないですか」

「だくから、さんはいらんってこと。それに敬語も、ほら」

口が重い。最近は言葉を出すということに緊張をしていることが多いが今この瞬間は、恐らく今までで一番口が動いていない。

そんな僕に、日菜さんは手を差し出してくる。

「時間だよ。早く帰ろ、悠君」

「わかり……わかったよ、日菜」

胸が痛い、苦しいを通り越して痛い。きつとこの繋いでいる手から僕の心音は向こうにも届いてしまっているだろう。

結局バスに着くまで僕は、星の光に照らされた日菜さんの顔を見れずにいた。

独白

あたしは悠君の事が好きだ、それは間違いない。

何処が好きなのか。体を揺らし指を折りながらそれを数える。

真面目っぽくしてるところ、優しいところに話が面白いところ。おねーちゃんのファンなこと星が好きなど、後は一緒にいてるんつてくること。

他にもいっぱいあるけど……一番はやっぱり、あたしの事を理解しようとしてくれるところ。

ベットにうつ伏せで倒れる。今から電話をかけてからかってあげようか、それともメッセージを送って次に会う予定を立ててしまうか。

「……最初は何ともなかったのになあ」

悠君の事を好きなのかもって気づき始めたのはおねーちゃんのライブの時だと思う。もしかしたらそれよりもっと前かもしれないし、それより後かもしれない。

その日会っていた時は別に何ともなかった。だけど悠君があたしじゃなくておねーちゃんに夢中になってた時、それに気づいた時に何が引つ掛かっている感覚に襲われた。

歯の隙間に何かが詰まったとか魚の骨を飲み込んでしまったとか、そういうちよつとだけ不快に思うような感覚。その時にはこれがなんだったのかわからなかった。

気がきが確かとなったのはその次に悠君と会った時、あたしが風邪を引いていた時の事。あたしがおねーちゃんの事を結局どう思っているのかと聞いたあの時。

多分その時は興味が全てだった、それ以外はなかった。だけど悠君がおねーちゃんの事を好きと答えたその瞬間、あたしの中での感覚が少しだけ形を変えて蘇ってきた。

何か詰まっていたものは刺すような何かに変わり、何かがなくなつたかのようなそれが感じ取れた。それはなんなのか、何故蘇ってきたのかわからなかった。

話を進めあたしとおねーちゃんとの好きは違うよねと聞いて彼が頷いたその時、改めて何かわからないものが溢れてきた。

あの時にはよくわからなかった、その感情がなんなのか。ドロツとしていてへばりつくようなそれ。なのに不思議と心地いい。

そのくせあたしをイラつかせるその感情の名前を、あたしは知らなかった。

あの感情が好きだと、恋だと気づいたのはその次の日の事だった。

風邪気味なまま日を跨いだけど元気は有り余っている、けど外には出られない。そんなんだからあたしは暇を潰すために恋愛小説や少女漫画を読み漁っていた。

なんでその類いの本を選んだのかはわからない。近くにあったから、その程度の理由かもしれないし、もしかしたら知らず知らずのうちに気づいていたからかもしれない。

本を読んでいるとまったくわからなかったその感情のこと、それを知ることができた。

いや、知ったよりも気づいた、の方が正しいかもしれない。海底から釣り上げられるかのように浮かんできたこれが、この感情が好きってことなんだと。

「好きって思ったより汚れたものなんだって知った時は、ちよつと残念だったなあ」

漫画とかみたくドキドキして、世界がキラキラうってなってるんってしたりキュンキュンするだけのものだと思ってた。

だけど実際はドロドロしてるものなんだなって知ってしまった。そしてこのドロツとした感情は……おねーちゃんに向けられたもの。

認めたくはなかった。だけどそれは何度も、何度も自分で確認したから間違いない。

嫉妬、恐らくそれが一番似合う。悠君の視線を、気持ちいを、独り占めしてるのが面白くなかった。

あたしより一歩先にいるのが許せなくて、妬ましくて、そして羨ましかった。

「でも、おねーちゃんの知らない悠君をあたしは知ってる……」

それはホラー映画が苦手なことだったり、ポップコーンは塩派だったりの小さなことばかり。だけどそれは多分おねーちゃんの知らないこと。

だけどそんな小さな事の積み重ねがあたしの中で自信になって喜びになってる。

だけとおねーちゃんもきつとあたしの知らない悠君を知っているだろう。それは少しだけ残念で気に食わない。

唐突にガシヤン、と何かが落ちる音がした。うつ伏せになっていた体を起こす。

辺りを見回せばその原因はすぐにわかる。何てことはない、トランプが柵から落ちてしまっただけ。それを拾いに行くためにベッドから降りる。

蓋が開いて散らかった中から窓から差し込む光に照らされていた一枚をなんとなく手に取る。その一枚を表に裏返すとそこに描かれていたのはジョーカーだった。

「相変わらず運がいいんだか悪いんだか……」

思わず笑ってしまう。思い出されるのはツアーのバスで悠君とやったババ抜き。あたしは自分でも驚くくらいジョーカーを引いた。

悠君は眠かったからなのかわからないけど全然顔に出てなかった。でもあたしは……顔に凄い出てたと思う。

でもそれは仕方ない。だって悠君が眠いからか、それともババ抜き程度に本気になっているのかわからないけど、滅茶苦茶真剣な目であたしの顔を見てくるのが全部悪い。

それがなんだかおかしくて、嬉しくて、思わずにやけてしまっていたのかもしれない。今思うととんでもなく恥ずかしい。

そんなことや鬼ごっこなどいろいろあったツアーだけど、やっぱりあの告白が一番記憶に残っている。これ以上なく緊張したしドキドキした。

気持ち悪くて吐き出してしまいそう、だけどとても気持ちよくて。自分の中から何かを吐き出して、世界を取り込むような不思議な感覚に襲われていた。

「でも、なんであんな事言っちゃったんだろ……」

今すぐ答えなくたっていいよなんて言ってしまったのはなぜだろう。モヤモヤもしているし、それと同時に安心もしている。

あの時に答えを無理矢理にでも聞き出していたら今こんな風に悩むことはなかっただろうに。

もしあの時に、僕も好きですと言われるたら今こんなに苦しむ事も、悶えることも悩むこともないだろう。

でももしあの時、おねーちゃんと言われてしまっていたら、どうなっていただろう。

あたしを理解しようとしてくれる人があたしじゃない人を選んでしまったら凄く寂しいと思う。それ以上は……あんまり考えたくない。

それにあの場の勢いで、妥協してあたしの事を選ばれても全然、ではないけど嬉しくない。

おねーちゃんに悪いつていうのもあるけど、何より彼にはなんとなくで選んでほしくない。本当にあたしの事を好きになってほしい、後々後悔なんてしてほしくない。

彼にはあたしのが好きであってほしい、悩む余地なんてないくらいに。

「でも悠君はあたしの事名前前で呼んでくれてるもん」

おねーちゃんは氷川さんであたしの事は日菜さん……いや、この前は日菜と呼んでくれた。それがあたしがおねーちゃんに今つけられている一番の差。

嬉しいのは間違いないんだけどそれはちよつとだけむずかゆいのは確か。

あの時は名前を呼ばれたのが嬉しくて、恥ずかしくて、それとおねーちゃんへの罪悪感からかわからないけど悠君の顔を見ることはできなかった。

悠君はあの時のあたしを見ていたのかな、多分タコみたいに顔を真っ赤にしたあたしを。

いや、そうじゃなくても気付かれてるかもしれない。だってあの時

の心臓の鼓動は多分あたしの体を通して悠君に伝わっていたから。

彼はどうだったのだろう。あたしみたいに真っ赤になっていたのだろうか、心臓が弾けそうになっていたのだろうか。月明かりの逆光が彼の顔を隠して見ることが出来なかった。

トランプを片付け終わって元の場所に片付けるとふと鞆につけていたアクセサリーの片割れが目に入る。

「もう片方はおねーちゃんが持つてるんだよね……」

悠君からのおねーちゃんとあたしへのプレゼント。本当はもう片方は悠君につけてほしかったって気もするけどおねーちゃんとのお揃いってのも悪い気はしない。

お揃い、悪い聞こえはしない。なんでもお揃い、髪色もやってることも、好きなものだって。けどなんでもかんでもお揃いなら、この気持ちもお揃いなのかもしれない。

「おねーちゃんも悠君の事、好きなのかな……」

おねーちゃんの部屋の方を向く。壁越しだから映るのは当然壁だけ、けどあたしはおねーちゃんを確かに見ている。

おねーちゃんも悠君のことが好きなのだろうか、少なくとも嫌いじゃないだろう。でなければ彼と一緒にいたときにあのような笑顔は見せないはずだ。

「好き、じゃなければいいんだけどなあ〜」

ライバルは少ない方がいい、という訳じゃない。おねーちゃんの事も好きだから、同じくらい好きだから悲しませたくない。

もし悠君があたしを選んだとしてそれでおねーちゃんが悲しんだら凄く嫌だ。もしおねーちゃんも悠君の事が好きだったらあたしはおねーちゃんと悠君、どっちを取るのだろうか？

今度はあお向けでベットに倒れ手を顔の上に持ってきて視界を遮らせる。

どうなんだろう、どうするのだろうか。どっちが……好きなのだろうか。彼に聞いたあの言葉、それを自分自身に問い直す。

それは何度もしてきたことで、そして何度やっても変わらないもの。

——おねーちゃんへの好きと、悠君への好きは……違う。

あたしは近くに置いておいた音楽雑誌を手取る。これはおねーちゃんの部屋から無断で借りてきた物で弾き方とかの役立ちそうなところはマークしてある。ほんとにおねーちゃんは真面目だ。

あたしはギターをそう遠くないうちに始めるだろう。

それはおねーちゃんがやっていたから、それだけじゃない。今まではそれだけだったけど、他にも理由ができた。

「……負けないよ、おねーちゃん」

悠君はおねーちゃんに夢中だ。ずるい、許せない、羨ましい。その視線を、興味を全てあたしに向けてほしい。

彼はおねーちゃんのファンだ、それはこの楽器の出す音のせい。なら彼を……あたしのファンにしよう。

文字と記号の羅列、初めて知るそれらは苦にはならない。それは新しい知識が面白いのではない。彼のために知れるそれが、嬉しいんだ。

気がつけば、外には夜の帳が下りていた。

敬語

優しい風が肌を撫でる。

三月も終わりが近づいてはいるが花粉の猛威はそのままに、さらにその猛威に乗っかるように桜が咲き始めている。

外を歩けばつぼみが開いたばかりの桜の周りには人だかり、写真を取ったり眺めるだけだったりしている。

「にしてもだいぶ暖かくなったな」

暴力的な冷たさは消え去り、今まで着ていたコートも今では必要がなくなり部屋の奥に投げ捨てられている。

何もなかったただ散歩というのも考えられない季節ではない。だが今回外に出ているのはそうではなく、ただ誘われたから。

しかし春休みということもあり、課題は終わりきっていないし、溜まったアニメやゲームを消化したい。

だがこの誘いは断れなかった。もし誘ってきたのが友人なら悩んで了承したかどうかはわからないが、相手が相手なのだからこの誘いには迷う余地などなかった。

集合場所といわれた公園では絶賛花見祭り、とはいかない。やはり満開になってから来る人の方が多いのだろう。

そんなことを思いながら辺りを見渡していると公園の真ん中で一人立ちながらこちらにおもいつきり手を振る人が見えた。

一応後ろを確認するが誰もいないため僕を呼んでいるということを確認できたのでその人のところに向かった。

今まで何回か見てきたその顔はなんだかいつもと違うように見えた気がした。今までは見れたその顔が真っ直ぐに直視することが出来なくなっていた。

しかし見てる限りではどこが変わったとかはない。意識をしてみても髪型だって多分変わっていないと思うくらいなのだから本当に何も変わっていないだろう。

つまり変わったのは……日菜さんではなく僕が日菜さんを見る目。

仲のいい人から、個人的に好きな人に。軽い片思いをしていたはず

の相手から、向こうもこちらのことが好きな人に。

「悠君遅い〜」

「……日菜さん何時からいたんですか？」

「ち〜が〜う〜で〜しよ〜」

日菜さんは人差し指で自分の耳を塞ぐ。僕が何度か呼びかけてみてもその体勢を維持し続ける。

そんな体勢をとりながらも聞こえないというわけでは無さそうで、呼んでも首を横に振られ続ける。

違うとは何だろう、何がどう違うのだろう。わからずに悩んでいると日菜さんは呆れた用な顔をして目を瞑ったまま僕に答えを教えてください。

「名前、あと敬語」

「日菜さんそんなことで拗ねてたんですか？」

「……………」

やはりなにも喋らないし体勢も崩さない、きっと僕が折れるまではこれは続くだろう。

呼び捨てはこの前一度やってしまったがそれでもやはり、緊張する。

「……そんなんで拗ねてたの、日菜」

「悪い？」

「別に、むしろ可愛いと思いました」

「……敬語抜けきってないよ」

「ほぼ癖だから直すの難しいですね……」

「敬語が癖ってなんで？ 友達っぽい人と話してるときはタメ口だったじゃん」

敬語が癖な理由。この話し方だと怒られる事がないから、初対面でも便利だから。

まあそれらはあるだろう。だが本当の、適当な理由は一つしかない。

「嫌われたくないから」

「好きになつてほしいじゃなくて？」

「誰かに好きになられるよりも、他人に嫌われる方が怖いじゃないですか」

普通を守るのも嫌われたくないから。日常から逃げた異端者を待っているのは糾弾。嫌われて、弾かれて、孤立する。それは怖いし、嫌だ。

タメ口だとキレる人もいる、だが敬語で怒る人なんてそうそういない、嫌だと思う人もそうそういない。

だからこそ僕は敬語が癖になってしまっているのだと思う。

友人にタメ口を使えているのは……多分それでも嫌われないとわかっていてから、長い付き合いからの信頼から。

「ふーん、でもあたしは悠君のこと好きだよ？」

「……直球ですね」

「この前も言ったんだから別にいいかなって」

この真っ直ぐな言葉は苦手だ。好きと伝わってくる、少しの歪みもなく伝わってくる。恥ずかしいも嬉しいも混ざったなんとも表現できない感覚は広がって染み渡る。

だけど心の奥底でその感情は止められる。その染み渡りを阻止するものはやはり、もう一人の存在だろう。

「まだ答えは出てない？」

「……ごめんなさい」

「いいよ、急かしてるわけじゃないから」

そんなことはわかっている。覗き込むように下から見ってくるその視線に自分のものを合わせられない。どうしようもなく申し訳ない気持ち止まらない。

「……それで今日の予定は何かあるんですか？」

「まだ決まってないんだよねえ」

近くのベンチに腰かけながらそう言われる。隣をトントンと叩いているのは座れという合図だろう。

「何処か行きたいとことかないんですか？」

「うーん……別にないかな」

隣に座って空を見上げる。今日は予報が正しければもう少しした

ら雨が降るらしく、雲がうつすらと拡がっていて太陽を隠している。そんな天気だからなのかしらないが公園だというのに子供の遊ぶ声ができることはない。静かな空間、その静寂がどうしても二人でいるという事をわからせてくる。

「……悠君はおねーちゃんの、何処が好きなの？」

「……相変わらず突然ですね」

「いいじゃん、減るものじゃないんだし」

何処が好き。真面目なところ、努力家なところ、たまにあるギャツプも魅力的だ。

他にはあんなどころも。ああ、まだまだ足りない、止まらない。

それでも僕は彼女の事をまだまだ知れていない。そんな風に思うのは何故か、そして多分その知れてない所にも好きな所は隠れている。

「……悠君はほんとおねーちゃんの事が好きだね」

「氷川さんだけじゃなくて日菜さんの事も好きですよ」

「……へー、じゃああたしはどんなところが好き？」

「元気で、強引で、普通じゃなくて話が途切れないところとか」

他にもある、それも語るがどうも本人の前でここが好きだと言うのは恥ずかしい。

しかしそんな考えとは裏腹に自分のものではないかのように口からはすらすらと言葉は出てくる。ふと日菜の方を見た時、日菜は顔を伏せていた。

「どうかした？」

「……悠君に好きって言われたの始めてだからものすごいドキドキしてる」

「……そういえば好きって言ったのは始めてか」

「そうだね。気づいてはいたけど言われたのは始めて」

やっぱりバレていたのか。人の事がわからないと言っている癖に人の事は勘が効くのかすぐ気づくのだろうかこの人はズルい。都合がよすぎだ。

しかしそれを気づかれていたとなると余計に恥ずかしくなる、予想

はしていたがはつきりと言われてしまうのはとても。

こんな言ってしまったのは自分だというのに。

「それにあんなに語ってくれるとは思わなかったし……」

「そ、それは……まあ」

思い返すとやはり恥ずかしい。きつとオシヤレな人や女慣れして人ならそっちは僕のどんなところが好き？ と返せるのだろうか生憎僕にはそんな勇氣はない。

「行きたいところあったんだって、一緒に来てくれる？」

急に立ち上がりそんなことを言われる。予定があるわけではないので大丈夫と返して僕も立ち上がる。

しかしあまり遠いところだと行きたくないわけではないが面倒くさい。公園を出て少ししたところで何処に行くのか尋ねてみた。

「ギターを見に行こうかなって」

「……結局やるんだ、ギター」

「うん、決めたの」

その目には迷いはない、それなら僕が口を出すのは不粋というものでしょう。

氷川さんはしてほしくないと言うだろう、思っているだろう。それだけ僕は日菜のギターを聴きたいと思った、思ってしまった。

理由なんて特にない、深くはない、欠片も見つからない。

氷川さんの音が好きな癖に、焦りを取り除きたいなんて思っていた癖に、その原因たる日菜がギターを始めるのは止めようとしな。

彼女はどんな音を奏でるのだろう。氷川さんの妹である彼女はどんな音を出すのだろう。

その性格通り激しい音か、それとも元気な音か。もしかしたらギターは得意じゃないかもしれないし……いや、日菜ならそれはないだろう。

どうであれ、それを心待ちにしているのは間違いない。

結局のところ僕は、どうしようもなく自分勝手だ。

やってきたのはいつものショッピングモール、ではなく『江戸川楽

器店』という店。

ドアが開いたかと思うと飛び込んでくる景色にはやはりというべきか楽器しかない。

人はそこそこいるがその殆どが女性。ガールズバンドブームと休みの力の偉大さを教えられる。

「ねえ、どれがいいと思う？」

「値段が値段だし自分で選んだ方がいいと思うけど……」

「るんっ、てくるのが見つければ話は早いんだけどね」

ギターの知識なんてない、僕が選ぶくらいなら店員に選んでもらった方がいいだろう。そう思っていたがふと一つのギターが目に入った。

「……これは」

「なにに、なにか見つけたの？」

それは水色のギター、目に入った理由はそれだけでしかない。特別な見た目もしていないし、派手な装飾もない。ただの色、本当にそれだけ。

「……これ買う」

「え、そんな適当な……」

あまりに急過ぎないだろうか。万を超える買い物なのだからそう簡単に決めていいものではないだろう、と言ってみたが日菜は首を横に振る。

「違うって。これすっごくビビッときた、買ってって声が聞こえた気がしたの！」

そう言っただけは店員のところに向かった。声が聞こえたっていうのは僕にはわからない、けど自分でそれがいいって思ったのならそれでいいのだろう。

直感というのは運命の人を見つけるのに一番適している、なんてキザ風に言った友人はその人とは付き合って一番長く続いていた。

直感というのはあながち馬鹿に出来ないのかもしれない。そんなことを考えていると日菜がこちらに戻ってきた。

「ねえ、悠君は今お金ある？」

「ない」

「そんなく、それじゃあ買うのは次回になっちゃう」

嘘ではない。金はまったくないわけではないがそんな大金があるわけでもない。

それに貸したくない、変な貸しを作るのは嫌だ。なんとなくけど対等でいたい。日菜は残念そうに店員に対してあのギター残しておいてくださいね、と言って一緒に店を出る。

空はだんだん黒い空がやってきてそろそろ帰らないと雨が降ってきてしまいそう。傘を持っていないし帰るとするならば今のうちだろう。

そういえば折り畳み傘は返してもらってないな、なんて思いながらそろそろ帰るといふ事を日菜に伝える。

「また今度ね」

「それじゃ」

そう言って帰り道を進もうとしたところで日菜に呼び止められる。何か忘れ物でもしていたらどうか、そう思いポケットを確認するが忘れ物はない。何なのかと尋ねようと振り返ると彼女は見たことのないくらい笑顔だった。

上機嫌、それを隠しもしない。言葉は出なくて、目をそらせない。見惚れていてまばたきすら忘れていた僕に向かって彼女は言った。

「敬語、抜けてるよ」

それだけの言葉に少しだけ呆けている間に彼女は帰ってしまった。確かに先程から敬語は使わなくなっていた気がする。だけど、敬語だけではない。

僕の中で日菜は呼び捨てになっていた、気づかぬまに。

「……はあ」

なぜかため息をついて帰り道を進む。別に敬語が抜けようと呼び捨てになろうと何も変わりはない。

理由はわからないけど少しだけ、足が軽くなったかのような気がした。

進級

時が経つのは早い。最近年が明けたばかりだと思っていたのにもう4月を迎えてしまった。

なんやかんやで言われ続けたが単位を落とすなどの問題はなく無事に進級できた。

しかし、進級し暫くたったからといって変わったことなんて殆どない。

後輩ができたところで部活動には入っていないから関わることなどないし今までとにも変わらない。ふわふわとしていて、目的もなく努力もしない日々が相変わらず続いている。

友人とは変わらず同じクラスだし、期始めのテストだって下の中程度には落ち着けた。

変わったところをあげると言われたらクラスに知らない顔がいることと教室の階が変わった程度しかない。

「結局、何も変われてないんだよなあ……」

いつものファーストフード店で目の前に置かれたポテトを食べながらそんな言葉を溢す。外はすっかり暗くなっているが帰る気にはならない。

親に適当に外で食べるとしてと金を渡されたから。それもあるが理由はそれだけではない。

「何か言いましたか？」

「いえ、何も」

たまたま、そう、偶然。練習終わりの氷川さんと会ったから、それがもう一つの理由だ。今は氷川さんと横に並ぶような形でカウンターのよう席に座っている。

氷川さんのトレーの上にはやはりというべきか大量のポテトが乗っかっている。僕なら食べきるのすら苦痛、そう思う程の量がまるで魔法のように消えていく。

「最近日菜はあなたの事ばかり話してきます」

「それは……迷惑をおかけします」

「いえ、迷惑にはなっていない……それにしてもまた随分と仲がよくなってますね」

「まあ、それなりには」

それなり、本当にそうなのだろうか。多分それなりでは足りない。僕が一方的にそう思ってるだけではないだろう。だって向こうは好きと言ってきたのだから。ああ、思い出すだけで恥ずかしくなってくる。

好き、それには二つの意味がある。

好き、人として。面白い人、仲のいい人。好いている、それは間違いない。

好き、異性として。友達では抑えきれない、この人となら恋人になつてしまつても構わないと思つてしまう。恋してる、それも間違いない。

好いている、二人とも。恋してる、どちらにも。ふと隣を見ると美味しそうにポテトを頬張っている。そんな彼女が、想像とは違う姿がとても可愛らしい。

「……最近バンドはどうなんですか？」

「あのバンドはもう抜けました」

話がなかつたので何かしら話題を振ろうと思ひ無難と思われる問いかけをしたが、どうやらハズレを引いてしまったようだ。

バンドから脱退。音楽性の違いとか熱意の違いとか、よく聞くそんな理由かもしれないし、もしかしたら喧嘩でも起きたのかもしれない。

気にはなる、だが僕には関係のないこと。実際そんなことは聞かれたくはないだろうし聞かない方がいいだろう。

「……そうなるは今バンドは組んでないんですか？」

「いえ、既に別のバンドを組みました。バンド、と言つてもまだメンバーが集まりきつてはいないですが」

だけど今のバンドなら妥協のない、遊びのない最高の音楽が出来る、頂点を目指せる気がする。氷川さんはそう言った。

顔を上げて真っ直ぐと前を向き、そして無意識なのかしっかりと握

られたその手を見ると……どうしようもなく遠く感じてしまう。

「……バンドの目標はあるんですか？」

「FUTURE WORLD FES. に出場することです」

「……だいぶ大きな目標ですね」

『FUTURE WORLD FES』といえばプロですら落選すると言われているくらいハイレベル、恐らくこのジャンルのものでは頂点とも言われているものだ。

だけどそれはバンドをやるもの誰しもが夢見るもので誰もが諦めてしまうものともも言われている。

だというのに、氷川さんの目は冗談を言っている風には欠片も見えない。

「出場したい理由ってもしかして……」

「誘われた時にそう言われたからというのがありますが、やはり一番の理由は……」

そこから先は氷川さんからあまり語られる事はなかった。欲しいものは頂点、ただそれだけを言われた。

頂点というのは一番ということ、一番ということは……負けていないという証明。

ならば、出てくる答えは一つしかなかった。

「日菜、ですか？」

「っ……ええ」

溢れる辛そうな声、隠すことのない辛そうな表情。決して純粋な理由ではない、邪とでもいうべきか、多分それは自分でもわかっているのだろう。

「仲は……相変わらず良くなってないんですね」

「以前のようにになりたいとは思ってるんですが……」

「……素直になれないと」

「ええ。それに今回もこんな風に音楽を、バンドを利用しようとしていますし……軽蔑、しましたか？」

「いいえ、まったく」

邪だからなんだ、純粋だからなんだ。目標というのは持てればなん

だっていい。僕みたいは何も持っていないよりは何千倍もましだ。それで音がよくなるのならそれでいい、氷川さんがそれでいいのなら何も言うことはない。

「……本当に加々美さんは優しいですね」

「まさか」

僕は自分の事を優しいとは思わない。

見知らぬ困っている誰かを助けるような事はできないし、本当に優しかったらきつと二人の仲直りの手伝いやらを積極的に出来ている筈だ。

だけどやはり、こういう事を言われるのは少し嬉しい。

また暫くの間無言が続く。食べてるポテトも、飲んでるコーヒーも味がなく感じる。それはこの黙りとした空間に引かれてだろうか。

「……そういえば日菜のこと、呼び捨てなんですね」

「本人からそう呼んで欲しいと言われましたから」

「……もしかして日菜は貴方の事が好きなのかもしれないですね」

静寂を打ち破るのは向こうから。その言葉は柔らかくてまるで子を思う母親のよう。これで仲が良くないというのだからお笑いものだ。

「らしいですよ」

「……言われたんですか」

「ええ、それも直球で」

「……なんて返したんですか?」

随分と踏み込んでくる。氷川さんもまだ高校生だし、真面目という雰囲気はいくらだそうがこういうことには興味があるのだろうか。

問いかけるその声が少し震えているように感じたのはおそらく僕の気のせいだろう。僕はその問いに対して首を横に振った。

「まだ答えてないです」

「それは……どうしてですか?」

「……秘密です」

言えるわけがない。日菜と貴女の好きな方を選べと言われ、まだ選べていないからだなんて。

そんなもの遠回しに貴方の事が好きですと言っているのと同じことだから。

日菜には好きと言えたが氷川さんには言えない、この違いはなんなのだろうか。

どんだん周りの客は減っていく。帰る人はいても入ってくる人はもう殆どいない。

別方向の隣の人も帰り二人きり。すべての客がいないわけではないがそれでもこの静寂は気まずいもの。なにも喋れない時間が続く。ふとポテトを取ろうとした手が空を切る、いつの間にか食べきっていたようだ。珈琲は既に飲みきっているので片付けを済ませる。

「……そろそろ帰りましょうか」

そんな僕を見てか氷川さんはそう言ってくる。その申し出は大変ありがたく、氷川さんもあんな多かったポテトも綺麗に消え去っていてそれを片付けて外に出る。

帰り道を歩きながら軽く話をした。そして別れ道に着いたところで振り替えて、こう言われた。

「……また今度、ライブ来てくださいね」

「……ええ、行きますよ、必ず」

そう言ってお互いに別々の道を歩き出す。暖かくなってきているとはいえ夜はなかなか冷える。空を見上げると星が広がり月は大きく輝いている。

なんてことのない日常、好きではないし出来れば抜け出したいとも思っている。

だけど今日のような日はほんの少しだけ、魅力的に思えた。

路上

「今日は残念だったなあ」

「来月もあるんだからいいだろう」

「そういうもんじゃないだろ、お前なんかもう少しだったんだし」

電車から降りながら友人とそんな話をする。

今日は二人でゲームの大会に行ってきた僕の結果として準決勝敗退で三位決定戦も負けて4位。

聞くだけなら凄い結果なのだが、僕とこいつ含めて8人しかいなかったのだから誰かに自慢出来るものではない。

「お前この後どうする?」

「金無し」

「つつかえねえ」

そう言われ手を振られながらあいつと別れた。多分あいつはこのまま駅前のラーメンでも食いに行っただろう。

外は暗いし少しお腹も減ってきた。今日は親もいるらしいし早めに帰るか、そう思い駅から出るとそこにはいくつかの人混みができていた。

何かを囲うようなその人混みの中心には決まって楽器を持った人達が演奏をしていた。

「路上ライブってやつか?」

二人や三人で固まって演奏をしている人達もいれば、一人でギターを弾いている人もいる。

そういえば明日も休みだな、なんて思いながら演奏をしている人達のところに向かう。どうせ親はまだ夕食を作っていないだろうし少しくらいはいいだろう。

僕が向かった人のところには客は三人程度しかいなかった。来た理由は冷やかashiではない、人混みが苦手という意味でもない。

ただ純粹に上手だなと思ったから、今ここで演奏している誰よりも。だけどこの人には客がほとんどいない。

「まあ、仕方ないか……」

誰にも聞こえないような声でそう呟く。この人は上手だ、きつと
いっぱい練習したのだろう。

指は固くなっているかもしれないし怪我だっけしているのかもしれない。女性というのに爪も伸ばせないかも知れない。

それでも人が少ないのはやはり人数の問題なのだろう。

質より量、というわけではないだろうがそれでも出す音が多い方が、豊富な方が魅力的に聴こえるのは仕方がない。

それを踏まえても上手だと感じるこの人のギターは素晴らしいと思う。まあ僕はこの人より練習熱心で、上手な人を知っている。

暫くその人の演奏を聞いていると異変が起きた。異変と言っても人が倒れたや不審者が現れただとか、火事が起こったなどの大きなことではない。

客が全員、それもここだけではない。他の演奏をしていた所にいた客さえも一斉に離れたのだ。

原因は恐らくこの音だろう。この人の音ではない、少し離れたところから聴こえる甘い音、激しい音。

上手なんてレベルではない。弾き始めてからもう何年もやっているかのような素晴らしい音。

もう少しやれば氷川さんに追い付いてしまうんじゃないかと思わされてしまうような。

それに引かれてその音の方に向かっていているのだろう。実際に僕だってその音が聴こえだしてからこの人の演奏を集中して聴けていない。

「っ……っ!!」

目の前の人は今の曲を弾き終わるとギターを片付け、辛そうな表情で逃げ出すように何処かに去っていった。

あの人はギターを続けるのだろうか、それとも辞めてしまうのだろうか。

辞めるとしたら勿体ないな。そう思うけれどそれだけしか思わない。

あの人の音は僕に聴かせはしたが、変えてくれるようには思えない。

かった、響かなかった。

氷川さんとはどうしても差があつたからどうでもいい。気にはなるが興味はない。三日もしないうちにあの人の事は記憶から消えているだろう。

だけどあの表情はどうしても記憶に残る。見ていて気持ちのいいものではないからというのもあるが、それ以上に何処かで見たことがある気がしたから。

何処だったっけ、誰がしていたんだっけ。思い出せない。

そんなモヤモヤを捨てるためか知らないが僕はこの音の方に向かう。

気づけば演奏している人はこの音の人だけ。他の人はもう帰ってしまうか、その場に立ち竦んで聴き入っている。

どちらにせよ演奏しようとしている人はこの人以外誰一人としていない。

「うわ……」

近くに来るとよくわかる、この音の凄さが。演奏している人は目の前の人混みが邪魔で見えないがギター一つしか聴こえてこない。

楽しい音、いの一番に感じたのはそれだ。楽しくて楽しくてしょうがない、それこそ今日始めて弾いたかのように。

だがこんな長年しているかのような音を出すくせに全く真逆の印象を持たせられる。

その楽しそうな音は氷川さんのどこまでもストイックな風な音とは真逆のもの。

同じ楽器なのに人によってこんな違う感じがするんだな、そんな事を考えていると、ありがとうございました〜という声が前方から聞こえてくる。

それと同時に何人かの人はその場を去りだした。残っている人はもう一曲やるんじゃないかとでも思ってるのだろうか。

僕もその場に残る。もう一曲を期待したんじゃない、違和感を覚えただから。

何に、この声に。それは聞いたことのある声、頭に刻まれた声。

もしかして、いや流石にそれはないだろう。だってつい最近ギターを買うと話していたのだ、そんな人がこんな音を出せるわけがない、出している筈がない。

ギターをしまいだしたのか、もうやらないとわかったらしく残りの残っていた人は海を割ったかのように人は去っていく。

そうしてようやく演奏していた人の顔を見ることができた。

嘘だと誰か言ってくれ、どうしてそう思ったのだろう。ゆっくりと進む視界に映った人は……

「悠君、来てたんだ！」

「……日菜」

どうしようもない天才だとわかっていた、理解の出来ない天才だとわかっていたつもりだった。

だけどさすがにこれはおかしいだろう。氷川さんはずっとこんなものと戦っていたのか。

「ねえねえ、あたしの演奏、どうだった!？」

「……よかったよ、凄く」

「えへへ、じゃああたしとおねーちゃん、どっちが上手？」

走ってこつちに近寄ってきた日菜はそう問いかけてくる。どっちが上手か、その問いは難しいものではなかった。

「氷川さんのがまだ上手だと思うけど……」

「そつかく、おねーちゃんのが上手なんだ」

やっぱりおねーちゃんはすごい、日菜はそう言う。当然だ、それは嘘ではなんでもない、本心から出てきたものだ。

まだ氷川さんの方が上手だと思う、意識を飛ばされ心を鷲掴みにされるようなものは日菜の演奏にはなかった。まだ。

「そういえば悠君なんでここにいるの？」

「遊んだ帰り、他の人の聴いてただけどき」

「あれ、いつの間にか他の人達帰っちゃってる、どうしたんだろ？」

無自覚、悪気がない、それ故にたちが悪い。きつとあの人も、他の人達も日菜の音を聴かされて心か自信かが折れて粉々にされてしまったのだろう。

もしあの人達が日菜はギターを始めたばかりと知ったらどうなるのだろう。

少しだけ興味はあるが……全員辞めてしまうのは確かだろう。

「あの、少しよろしいでしょうか？」

「えつと……あたし？」

「はい、あまり長くはしませんので」

会話の途中急に割って入ってきたのはスーツを着た女性。日菜に何かカードみたいなもの、見た目からして名刺だろうか、それを渡していた。もしかしたら何処かの偉い人なのだろうか。

部外者の僕が聞くのも悪いと思い少しだけ遠くに移動して話が終わるのを待つ。

20分くらいだろうか、それくらい待つとようやく話が終わったのか女性は去っていった。それを確認してから日菜に近づいて話しかける。

「なんだった？」

「なんか、オーディション？ に出てみませんかって言われちゃった」

「オーディションに？」

「そうそう、バンドのオーディションなんだって。書類審査は飛ばすから是非参加してくださいって言われてさ」

「てなると……あの人は芸能事務所の人？」

「らしいよ、ほら」

そう言っ紙を渡され、それを確認する。やはりカードに見えたのは名刺だったのか。

それにしてもこの事務所、名前聞いたことあるしそこそこ大きかった筈だ。誰が所属しているかとかはあまり詳しくないが。

調べたら出てくるかな、そう思いながらその事務所の名前を覚えておこうと決め日菜にそれを返す。

「どうしたらいいかな？」

「日菜は出たいの？」

「あんまり興味ないかな」

「でもせっかくだから出てみたら？」

「うーん、暇潰しにはなるかな？」

日菜は受かるのだろうか、腕前は間違いなく合格ラインに行けるだろうが、オーデイションともなればライバルもたくさんいるだろう。

今の日菜より上手い人、当然そんな人もいるだろうが……日菜ならそんなもの一瞬で飛び越えてしまいそうだ。

やはり技術などの面では問題はないだろう。ただ一番の問題といえば……

「……性格面かな」

「何か言った？」

「何でもない」

協調性とか敬語とかそういう感じのもの。まあ日菜ならそんなことですらなんとかしてしまいそうという気はするが。

オーデイションはいつなのと聞いてみると来週とのこと、まあ随分と急なことだ。

「あれ、悠君もう帰っちゃうの？」

「そろそろ帰らないと母親にキレられる」

「そっかー、じゃあ一緒に帰ろ。」

「そういえば今日は悠君歩きなの？」

「まあ、自転車のがよかった？」

そっちの方が早く帰れるから、そう思っていたが日菜は首を横に振り僕の手を取って笑顔で言う。

「歩きの方が長く一緒にいられていいなって」

ずるいなあ、本当に。いつもと変わらない帰り道はなんだかいつもと違う気がして、歩幅が自然と小さくなって、体は熱くなって顔は赤くなった。

鼓動は足と反比例するかのようになくなって体感時間も物凄く早い。

キラキラと輝く月と星はとても眩しくて綺麗に感じた。隣の日菜は……あまりに眩しくて見ることは出来なかった。

偶像

芸能人と知り合うにはどうしたらいいのだろうか。

ただ芸能人とはいつでも様々な種類があるが、今回はアイドルとか俳優だとか、そういった類の人とさせてもらう。

町中でばったり会ったり、公演に行くということとは知り合うとはまた違うだろう。そうなると運命的な出会いか、それとも元々の知り合いが芸能人になるしかないだろう。

つまり何が言いたいかというところ……

「それでイヴちゃんがブシドーってね」

目の前に座る女の子、日菜はアイドルになってしまったのだ。

いや、なつてしまったという表現は間違っているかもしれない。なることができた、うん、こっちの方がいいだろう。

この前あった時オーディションで他に上手な人いなかったから当然かな、なんて言ってきた時には軽く目眩がした。

アイドルは随分と楽しい、というよりはメンバーに面白い人が何人かいるらしく、とても楽しそうに練習のことについて話してくる。

「大丈夫なの？」

「何が？」

「確か今Pastel*Paletteって活動自粛だかだよね？」

「そうだけど……それがどうかしたの？」

「いや、僕なんかと会ってていいのかなって」

日菜の所属するPastel*Paletteはお披露目ライブだったかで演奏をせずに後ろで音を流していたのだが、トラブルでその音が急に止まってしまった。

当然大ブーイングが起こってしまい、メディアの格好の的になってしまった。

事務所はほとぼりが冷めるまでと違って活動自粛、メディアへの露出も控えるとのことらしい。

こんなことが起こってしまったのでもし再度活動する時にはきち

んと楽器を演奏しなければならぬはずだ。

だとすれば再開する為に自主練などもしなければならぬだろうし、僕と会ってる暇はないはずなのだが。

「大丈夫でしょ、あたしの顔もあまり知られてなさそうだし」

「いや、そうじゃなくて自主練とか……」

「しなくても出来るからよくない？」

あ、でもたまーに出てるよと言われて少しばかりホツとする。

メンバーが自主練に出なかつたらいくら自主練とはいえ他のメンバーはどう思うだろうか、少なくとも快くは思わないだろう。

そんなことを考えると突然後ろから汚い笑い声が聞こえてきた。いや、汚いという表現はいささか失礼かもしれないので元気な笑い声ということにしておこう。

その耳に障る笑い声は女性特有の高いもので、とても大きい話し声も聞こえてきた。

「あのグループほんとに面白くなかつた？」

「それぞれ、アイドルバンドとか言ってる癖に演奏してなくてさ」

「そうそう、特にボーカルの子なんかさあ〜」

ちらりと日菜の方を見てみると、聞こえてませんよと表すかのよう目を見つめて飲み物を飲んでいた。

それは聞いていて気持ちのいいものではなく、イヤホンを付けて少しでも音を遮ろうとイヤホンを取り出したその時、どうしようもなくイラつく言葉が聞こえた。

「ギターの子もかわいそうだよね〜、弾けないのに選ばれちゃって」

「ほんとほんと、私みたいに長くやってなきや弾けるわけないのにさ」

「ちよつと顔がいいだけで選ばれちゃった子にはいい気味じゃない？」

確かに〜、という同意の声は何処までもイライラを加速させた。他のメンバーのことをどうこう言ってるのならまだ我慢できた、どうでもよかった。

役者としてドラマに出ていた白鷺さん以外は見たことない人なのだから。

もしかしたら他のメンバーの人はモデルをやったりしている人も
いるかもしれないが、僕は普段雑誌とかは全く見ないからそんなこと
わからない。

そんな個人的に無関係な人間のことなら聞き流せた。でも日菜を
馬鹿にされるのは無性にイライラする。だけど僕が本当にイライラ
しているのは彼女達じゃない。

こんなにもイラついてるのに何も言い出せない自分が、行動できな
い自分にどうしようもなく、イライラする。

空のカップが手の中で潰れていくのが感じられる。

「ねえ、悠君」

「なに？」

「自主練、今から行つていいかな？」

「……いいんじゃない」

急に言われたその言葉は僕を驚かせた。出来るから行かなくてい
い、さつきまでそう言っていたのに突然そう言われたのだから。

聞かないふりをしていた日菜もやはりイラツときていたのだろう
か、それとも単純にここに居たくないだけなのか。

そうして日菜はゴミを捨てて店の外に出た。僕もここにいる理由
は何一つないし一刻も早く離れたい。そう思ってゴミを捨てて行く。

捨てたゴミの中で、握り潰されたカップが嫌に目立った。

『あのトラブルを乗り越えて復活！』『アイドルバンドなのに本当に楽
器を演奏!』『ファンへの徹底的な献身がもたらした奇跡!』『俺ファ
ンになった』

「手のひらくるーだな、ほんと」

SNSを覗けばそんなことばかりが流れてくる。何とも勝手なも
のであれほど叩いていたのが嘘のよう、でもそれでもいい。世間が認
めてくれたのならばそれで。

それにしてもライブが成功したのは自分のことのように嬉しい。

「悠君もう見てくれた？」

「見たよ」

「えへへ、ありがと」

日菜はメンバーとの仲間かなりよくなったらしく、特にボーカルの丸山さんはお気に入りらしい。

理解できなくて面白いとか、頑張る姿が気に入ったとか。そう話されるのはいいが……少し妬いてしまう。

「それにしても他人って面白いよね」

「……変わったね」

「前の方がよかった？」

「いや、他人のことわからないって言ってたなって思い出しただけ」

「変わったのは悠君のお陰だよ？」

「そんなわけないよ」

首をこてんと倒して聞いてくる姿は何とも愛くるしい。

始めてあったときは他人のことがわからないと言っていたが、まずわかるうともしていなかった。その時に比べればかなりの成長だろう。

だけどそれは多分僕がいなくてもPastel*Paletteに入れば変わったこと。こうして興味を持てるのだからきつとそうなっただろう。

ならば決して僕の手柄ではない。そのはずなのに日菜は、違うよと言って首を横に振る。

「悠君に凄く興味を持ったから、悠君が興味を持たせてくれたからだよ」

「……アイドルがそんなこと言っているの？」

「大丈夫でしょ、うちの事務所恋愛禁止とかなかったし」

「……暗黙の了解みたいなのがあるでしょ」

「言われなきやわからないよ」

屁理屈だ、普通はそれがわかるはず。まあこの人は普通じゃないからわからない。いや、わかってはいるがわかっていないふりをするだけかもしれない。

まあルールの穴をつくのはゲームでも基本だし責めることはしな

い。むしろそういったものは好ましくすら思ってしまう。

「……日菜にもファンとかできるのかな」

「できる、というよりもうできてるんじゃない？」

「そうかあ、そうだよなあ……うん」

懐古厨とかネタプレイヤーはこんな感じだったのだろうか。自分の知っているものが世に認められるのは嬉しいのは間違いない。だけれど少しばかり、モヤッとくる。

支配欲、独占欲、例えるならそんな感じだろうか。そんな重いものではないかもしれないし、もしかしたらもつと深いものかもしれない。

「ねえねえ、悠君はあたしのファン？」

「え、まあ……そうなるね」

「じゃあ悠君はあたしのファン、日菜ちゃん印の記念すべきファン1号だよ！」

小悪魔的に笑う日菜はズルくて可愛らしくて、とても僕を魅了した。

「悠君はズルいなあ……」

ポツリとそう呟く、本当にズルい。

意識してやったのだろうか、それとも無意識でやっていたのだろうか。どちらにせよズルいことには変わりはない。

「あたしの為になんて怒ってくれるなんて……」

あの握り潰されたカップはその証拠。彼は気付いてないかもしれないけど小さく貧乏ゆすりもしていたし、本当に、演技ではなく怒りを持ってくれたんだとわかった。

悠君は優しいから、自分のことを低く見るから、言えなかった、行動できなかったと自分のことを責めているかもしれない。

そんな風には思っただけでほしくない、まあそれがまた彼らしいのだけだ。

「はあ……本当に好きなんだなあ」

彼を見てしまう、彼を追ってしまう、引っ張ってしまう、独占した

くなってしまう。

悠君への好きは彩ちゃん達パスパレみんなへの好きとは違う、おねーちゃんに対する好きとは違う。

好きだ、恋^好してる、独り占め^大したい^好。

「ずるいなあ……」

ずるい、それは悠君じゃない。ずるい、それはおねーちゃんの事。悠君に強い興味を持たれている、多分あたしよりも。

どうして、あたしの方が会ってる回数は多い筈なのに。あたしの方が距離が近い筈なのに。初恋だから？ 先に知り合ったから？ それともまた別のこと？ どれにせよずるいよ。

どうしてなの、こんなこと始めて。あたしの思い通りになってくれないことは始めて、不思議で不思議で仕方がない。

今まで少しやろうと思えばなんでも思う通りになって、他人だろうとほんの少しやる気になればよくわからないけど思う通りに動かせた。

だからこうした今がどうしたらいいのかわからなくて、辛くて、もどかしくて苦しい。

「もう聞いちゃおうかな……」

おねーちゃんに聞いちゃおうかな、悠君のことをどう思っているのか。それで好きだと思ってるかと言ったら……それを悠君に教えちゃおうかな。

そしたら悠君はあたしをもっと見てくれるだろうか。今よりもっとあたしの事を理解しようとしてくれるだろうか。

「でももし、好きって言われたら……」

もしおねーちゃんが彼のことを好きって言ったらどうだろう。

あたしは悠君に嘘を教えるしてしまうのだろうか、あたしはおねーちゃんの事をどうするだろうか、どうかすることができるのだろうか。

おねーちゃんの事も間違いなく好きだ、苦しんでいる姿は見たくない、争いたくなんかない。

じゃあ譲れるだろうか、そんなの無理だ。

奪えるだろうか、それも無理だろう。

「もうわからないよ……」

ドロツとした感情は溢れ出て、周りの音を遮断して焦げた匂いを感じさせる。

カーテンの開いた窓から外を見上げると綺麗な月が浮いていた。

月が綺麗ですね、その答えはまだ返ってこない。

宿泊

その言葉は予想していなかったこと、だけどここの人の事を少し考えればすぐに思い付いたこと。

彼女は何かを言っているが今の僕には聞こえない。聞こえているけどわからない、理解しようとしていない。

「最後に、名前で呼んでください……」

僕は彼女を名前で呼んだ。呼び方なんて表し方の一つでしかない、何でも変わらない。そうわかっていても緊張するものだった。

「さようなら」

嘘ですよと言ってくれ、僕はそれさえ言うことが出来なかった。

どしや降りの雨、言い表すならそれしかないだろう。

空を黒い雲が覆い、視界は黒い雨が埋め尽くす。久し振りに身に纏うコートがなんとも違和感を覚えさせる。

ある程度予想は出来ていたのだから外に出なければよかった。しかし予報では大丈夫と言っていたし、それに降るとしてもここまで降るとは思わなかった。

今日は母親は旅行に行くから家を空けると言ったし父親は相変わらず仕事。更にラストスパートとか言って最近では会社の方に泊まりっぱなし、どうせ今日だって帰ってこないだろう。

これを放任というのは僕にはわからない、これが僕の普通だし周りの家庭事情なんて知らないから。

何かしら夕飯になり得るものを買って帰ろう。そう思って僕はコンビニに行くとそこには何故か見知った顔がいた。

どうするべきか。彼女は下を向いている、濡れないようにか壁に寄りかかっている。多分まだ気づかれていない、一体どうするべきなのか。

立ち去る、声をかける。選択肢は2つであの人じゃなければ迷わず

一つ目を選んでいた。あの人だとしても平常時ならこの選択肢はなかなか迷って一つ目を選んでいたかもしれない。

だけど今回はそうならなかった。理由はよくわからないけど多分、放っておけなかったんだと思う。

「……氷川さん」

「加々美さん……」

声をかけるとゆっくりと顔を上げ僕の方を見てくる。雨に打たれていたのか髪も顔も、服も何もかもずぶ濡れだ。

少しずつ近づくとよく見えてくる辛そうな表情。雨にかき消される筈なのに何故か透き通って聞こえてきた掠れた声。

そんな姿がなんとも危なくて、壊れてしまいそうに見えるのどこか艶かしくて、僕の視線を釘付けにした。

数メートル、少し歩けば届く距離。そのはずなのにどこまでも遠く感じた。

雨が降り注ぐこちら側と屋根で雨が降っていない向こう側、その隙間にはどうしようもない厚い壁があるかのような感じがした。

「傘、ないんですか？」

返事はない。雨の音が嫌なくらい気になるが、何かが錆び付いたかのような匂いは不思議と不快な気はしない。

今の氷川さんは普通じゃない。狂ってるとかそういうのではなく、危なっかしい。触れれば崩れてしまう、なんとなくだがそんな風にする感じる。

よく見れば氷川さんの近くには傘が立て掛けられている。だというのにこれ程びしょ濡れなのだ、なにもない筈がないだろう。

どうかしたんですかとか、大丈夫ですかとは言えない。放っておけなかったけど、どうにかしようとはできなかった。

崩れてほしくなかった。僕が声をかけて地雷を踏んでしまうのが怖い。

高く積み上げたジェンガやトランプタワーを崩すのが勿体ないというようなものではない、崩れたのが僕のせいであってほしくないというだけのこと。

崩れてほしくないのは確かだけどそれ以上に自分の責任になることが何より怖くて、それで嫌われるのが嫌で僕にはどうすることもできなかつた。

しかし僕はその場を離れることはなかつた。

やっぱり気になって夜も眠れなさそうだからとかではない。嫌われても構わない、そう思えたわけでもない。それは物理的な事のせいだ。

「少しだけ……一緒にいてください」

今にも泣きだしそうな声を出し、感じられないくらい弱々しく僕の服を引っ張る彼女は、僕をその場に縛り付けた。

「……寒くないんですか？」

「……そちらこそ、コートを渡して寒くないんですか？」

「僕は濡れてないので」

あれからどれだけ時間が経っただろう。数分か数十分か、もしかしたら既に一時間が過ぎていくかもしれない。

スマホの充電はこんな時に限って切れているので確認できず、コンビニ内の時計はなんとも絶妙な位置にあるせいでそちらでも確認することができない。

手を横に伸ばせばぶつかるだろう。あと少しお互いに手を出せば当たってしまうだろう。多分今はこの人と今までで一番近づいている。

側にいる間に会話は殆どなかつた。全身が濡れたままで風邪を引いたら大変だと思いついていたコートを渡してから先程まで、会話と思わしきものは一つたりともなかつた。

聞くに聞けない、当然興味に近いものはある。でもそれに踏み込むことは出来ないでいた。何よりそれは僕が聞いていいものかわからなかつたから。

「……家、帰らなくていいんですか？」

「今日は……帰りたくないです」

雨は勢いを緩めず降り注いでいる。滝のように叩きつける雨の音

にかきけされてもおかしくない氷川さんの消えてしまいそんな声は不思議とはつきり聞こえてくる。

体にへばりつくかのような服を見て無意識に視線を引っ張られ、髪から水滴が落ちるその姿から目を離せない。

「家族には伝えたんですか？」

「いえ、まだ……」

「……心配してますよ、多分」

僕がそう言うのと氷川さんは、そうですねと呟いてふらふらと倒れてしまいそうな足取りで歩き出す。

水溜まりを避けることなく踏み抜きながら進む氷川さんを見て、僕は無意識に言葉を発していた。

「今日、僕の家誰もいませんよ」

ピタリと氷川さんの足が止まった。何て事を言ってしまったのだろうか、我ながら相当に気持ち悪い。

言ってしまったてからの後悔、もし僕がもう少し歳を取っていたら刑務所にさよならされていたかもしれない言葉。

突然こんなことを言って嫌われてしまっただろうか、いや、嫌われなくても仕方がない。

しかしそんな考えとは裏腹に、氷川さんは振り返りながら驚きと、少しだけ喜色を混ぜたような声で聞き返してくる。

「……いいんですか？」

「……氷川さんがいいなら」

氷川さんがボソリと何かを呟いたが、何故かその言葉だけ雨の音にかき消されて聞こえなかった。

立て掛けていた傘を指すと、氷川さんが右側に入り込んでくる。彼女が先程まで指していた傘は閉じられて、少し待ったがそれを指す気配はなくて。

「……傘、指さないんですか？」

その答えは返ってこなかった。大きい傘ではないのだからとても狭いがそれに対しての文句は欠片も抱かない。

ちよつとだけ濡れていく左手に不快感を抱きながらも緊張やドキ

ドキなど、色んな感覚に襲われていた。

「珈琲しかなかったんですけど大丈夫ですか？」

「大丈夫です、ありがとうございます」

氷川さんには適当に風呂に入ったあと姉の服を着てもらった。

申し訳ないが姉の服も氷川さんの服も僕が触るわけにはいけないので自分で選んでもらったし自分で干してもらった。

しかしそうなる则今日の風呂はなしになってしまう。明日の昼くらいに入ればいいだろうか。

二人で向かい合うように座ると痛いくらいの静寂がやってくる。雨の音と時計の音しか聞こえなくてテレビをつけて誤魔化してしまいたい。

そんな風に思っていると氷川さんから声をかけられる。

「何も、聞いてくれないんですね……」

「……聞いてほしいんですね？」

予想が全くつかない、ということはない。多分……日菜関連。日菜がアイドルになって、ギター担当で、もうデビューしている。

氷川さんもバンドをしていて高い目標を持っているが、それをふつとばして追い抜かした。

ギターには異常ともいえる執着を時おり見せる氷川さんのことだ、今回はかなりこたえたのだろうか。

「……優しいんですね、本当に」

心が痛む、蝕んで塗り潰す。この前も言われたその言葉は今回ばかりは喜べるものではなかった。

でも仕方がないだろう。だって日菜にギターをやることを駄目と言えなかったのも、オーディションやってみればと後押ししたのも、全部、僕なんだから。

だから氷川さんがこんな風になってるのも……全部、僕のせいだ。「優しくなんてないですよ……少しも」

吐き捨てるように言いながらキッチンに向かう。適当なインスタントで済ませようとしていたが氷川さんがいるとなるとそうもいか

ない。

幸い料理が出来ない何て事はないし冷蔵庫を漁れば何かしらあるだろう。

作ったのは肉じゃが。料理アプリをわざわざダウンロードしたのだから不味いなんて事はないだろう、途中で味見したが悪くなかったし。

そう思いながら出したのだが氷川さんは食べようとしなかった。

「何か食べられないもの入ってましたか？」

「そ、その……にんじんが……」

アレルギーとかそんなものだろうか、それは大変失礼な事をした。にんじんだけ取り出せば大丈夫だろうか、成分が染みでてく、みたいな事はあるのかもしれないけれど。こういう時に自分の知識のなさが嫌になる。

とりあえず氷川さんの器からにんじんだけ僕の方に移して食べる。

「よく食べられますね」

「……もしかして嫌いなだけなんですか？」

「……はい」

ちよつとだけ顔を赤くしてそういう氷川さんを見て思わず、あんな空気であつたにも関わらずくすりと笑ってしまった。彼女は好き嫌いしなさそうだなと勝手に思っていたから。

「な、何がおかしいんですか！」

「いやあ、意外だなんて」

食事が楽しいなんていつぶりだろうか。友人と食べる時は食事じゃなくて他の話が面白いということが殆どだし、親と食べることはあつても話は何も無い。

こんな風に、楽しいと感じたのは久し振りだ。

「そういえば寝る部屋ですけど……僕の部屋使ってください」

本当なら僕の部屋ではなく姉の部屋を使ってもらいたい。しかし姉の部屋は正真正銘の地獄、アイドルのポスターやら服やら何かよくわからないものまで溜め込まれている。

僕にはそういった類の物の価値は一切わからないが姉にとっては

ゴミではないのだろうか、一応ゴミ屋敷ではなく地獄と呼んでいい。

「そういえばお姉さんはどうしているんですか？」

「県外の大学に行ってるので家にはいないですね」

それもなかなかいいとこの大学に、僕とは大違いだ。

姉がもつとだらしなくて頭も悪かったら僕は姉と比べられなくてすんだのに、なんて思った回数は数えきれない。

だけどそれは自分のことじゃないのだから後悔なんて何にもできないし、嘆いたって何にも変わらないからとつくに諦めた。

「あの……明日って暇ですか？」

「暇ですけど……練習とかないんですか？」

「この状態で練習してもいい方向にいくとは思わないので」

そういえばそんなこと言った記憶あるななんて思いながら会話を続ける。

初めて会った時に比べれば距離が縮まった気がする、少しだけ心を許してくれた気がする。気のせいかもしれないが、気のせいでないと嬉しい。

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

電気を消してソファアームにねっころがる。眠れないかもしれないという不安は不思議なくらい感じない。

そんな疲れていたのだろうか、なんて考えていると気づかぬ間に僕の意識は消えていた。

決意

「ここは……」

知らない天井に慣れないベット、更に少しだけ散らかっている部屋。

ここはどこだろう、そう思ったのは目が覚めて数分の間だけ。時間が経つにつれてゆっくりと昨日の記憶が戻ってくる。

彼はズルい、ズルいくらいに優しい。いくらこの時期でも雨が降っていれば寒いはずだ、それなのにコートを貸してくれた。

何も聞かずにずっと一緒にいてくれた。私が家に帰りたくないと言ったら逃げ道を提示してくれた。

傘に入れてもらった時だって私を気遣ってか、彼は少しだけ濡れていた。私が傘を指していないことに対して強くは言わなかった。

その優しさは嬉しくて心地よくて、慣れていなくて辛かった。

「加々美さん……まだ寝てるんですね」

リビングに向かうと彼はソファーに寝転がって眠っていて、今まで見たことがなかったその姿に何かを刺激される。

彼が起きないようにゆっくりと近づいて彼の顔を覗き込んだ。

「こ、こんなこと悪いですよね……」

ドキドキと心臓が高鳴るのを感じる。普段なら絶対にしないであろう自分の行動に変な感覚を覚えるがその感覚は不思議と悪い気はしない。

もう少しだけ、そう思っているのと彼の目が開かれる。びっくりしてその場を飛ぶように後ずさるが彼は、おはようございますとだけ言ってキツチンに向かった。

「き、気づかれてないでしょうか……」

激しく心臓が鳴る。それはさつきまでの鳴り方とは違う。ふと先程までの行動を思い出すと恥ずかしくて顔が赤くなった気がする。

「それで、今日はどこに行くんですか？」

珈琲をこちらに渡しながらそんなことを聞いてくる、まるでなんとも思っていないかのように。

ズルい、私はこんなにも緊張しているというのに。

「……少しだけ、遠くに行きたいです」

「遠くとなると……明日は平日ですし早めに出ないといけないですね」

「……嫌じゃないんですか？」

その問いに対して加々美さんはまさか、と軽く笑って返してくる。

明日は休みでもなんでもない。いたって普通の平日、私も加々美さんも当然学校がある。

彼だって学生だ、部屋を貸して貰った時に見えた教科書から察するに多分同学年。

彼だっと思っていたこと、するべきことだっただけであるだろう。だということに彼は嫌な顔一つせずを考えてくれている。

「……本当に、ズルいですね」

「何か言いましたか？」

「いいえ、なにも」

溢した言葉は昨日と全く同じで、昨日と同じく聞かれずに済んだみたいで安心した。

「氷川さんはこういうところによく来るんですか？」

「小さい頃に何度か、加々美さんは？」

「僕は始めてですね」

バスに揺られて一時間と少し、私達が来たのはワンちゃんとのふれあいができる公園。最近は来ていないが小さい時に来たことがあるので懐かしい気持ちになる。

思えばあの時はまだ日菜と仲がよかった。ここで走り回る日菜に迷子にならないように注意をして、私自身もワンちゃんとの触れあいをとても楽しんでいた。

「今日は雨降らなさそうですね、傘持ってるんですか？」

「降りそうな気がしたので」

私の手には傘が握られている。天気予報によれば今日は一日中晴れとのことだがなんだか雨が降りそうな気がしたので持ってきた。

空は快晴、雲なんてものは一つもない。ならば何故そう思ったのか、私にはわからない。

「それでは早く行きましょう」

時間は有限、ワンちゃんとの触れ合いの時間が短くなってしまおう。せつかく練習を休んでまで来たのだ、やりたいことはたくさんある。そう、やりたいことはたくさんある。でもその全ては彼と一緒にやりたい。手を繋ぐことができたらしいのに。そんなことすら思っていたのに私は、この手を伸ばすことはできなかった。

「氷川さんホントに犬の扱い上手ですね」

「そうですね？」

ただただワンちゃんと触れ合って楽しんだ。

「加々美さんは相変わらず嫌われていますね」

「なんでなんですかね？」

加々美さんがワンちゃんに吠えられてる姿をみて笑っていた。

「美味しいですね」

「そうですね、思ってたよりも美味しいです」

二人で休憩と言ってご飯を食べた。

「これとか可愛くないですか？」

「か、可愛くなんか……」

お土産屋さんで色々買った。

「日菜は本当に……」

「あはは、大変そうですね」

「加々美さんは振り回されてないですか？」

「まあ……ええ」

日菜の事で話し合った。

「今のバンドはどうなんですか?」

「やはり意識が足りてません、頂点を目指すというのに……」

Rosealiaについて話した。

「氷川さんは真面目ですからね」

「そうですか?」

「いや、そうですよ」

私について話した。

「加々美さんは優しいですよね」

「……そんなわけではないですよ」

彼について話した。

夢のような、考えられないような幸せな時間も終わり。バスを降りると加々美さんは疲れたのか、酷くぐったりとしている。

この人は本当に男の子なのだろうか。そう思ってしまうほど体力がない、そして気を許すことが出来る。それでも本当に男の子なんだなど、この気持ち嫌でもわからせてくる。

「今日は楽しかったです」

「そんな疲れた声で言われても説得力ですよ」

「楽しいから疲れたんですよ」

そう言う彼は嘘をついていないんだなということはわかる。私も楽しかった、今までないくらいに楽しかった。

だからこそ私はあることを決めた。今までもうっすらと決めていた事、だけど言い出せなかった事。

でも言わなければいけない。昨日助けられて、今日一緒にいてそう決めた。

「加々美さん」

「なんですか?」

日は落ちて通る人は少なくなっている。口が開かない、言ったら駄目だと体が止めてくる。

私だって言いたくない、でも言わなくてはならない。覚悟を、決めなければならぬ。

冷たい風が、背中を押した。

——もう私と、会わないでください。

周りの木々がざざつと揺れる。辛い、苦しい、なんでこんなことを言わなければならぬんだ。ほんとはこんなこと言いたいはずもない。

だけどこれ以上彼といたら私は彼の優しさに犯されつくされてしまう。きつとまたすぐに逃げ道を作ってしまう。

私にはギターしかない、Roseliaに全てを賭ける覚悟はもうできている。それなら私は今最も大切なものを捨ててそれを証明しよう。誰にでもない、私自身に。

「そう……ですか」

弱々しい声はいつもと違っていて、悲しんでいることが伝わってくる。それだけではない。驚きも含み、それでいてやっぱりといった風なものを感じ取れた。

悲しんでいるのは友達だと思っていた人にこんなことを言われたからだろうか、それとも仲のいい人の姉にこんなことを言われたからだろうか。

もしかしたら……いや、それはない。彼には日菜がいるのだから。どうにせよ罪悪感が溢れてくる。

「理由も……聞かないんですね」

彼からは何の反応もない。察しているのだろうか、聞きたくないだけなのだろうか。それとも私に言わせないためなのか。

その優しさは甘い蜜、深い毒。花の匂いに誘われた蝶のように私を魅了する。

「最後に、名前で呼んでください……」

それは未練なのだろうか、この気持ちに区切りをつけるためだろうか。

もしかして日菜は名前で呼ばれているのに自分は名字呼びなのが最後の最後に気になってしまったのだろうか。

空白の時間が肌を突き刺してきて痛い。そして彼は深呼吸をして、告げる。

「紗夜……」

その言葉には不思議な魔力があった、思わず目を瞑ってゆつくりと噛みしめる。

ああ、この暖かいものはなんだろう。わからない、どうして呼び方一つでこんなにも心が安らぐのだろう。どうしてこんなにも、後悔を増幅させるのだろう。

「さようなら」

この場を早く離れたい、長く居たらこの気持ちが折れてしまいそうだから。それなのに足は動いてくれない、この場所から動きたくない体が訴えているみたいに。

そんな私と対照的に彼は何も言わずに去っていった。何故そんなにもあつさりと去れるのか、浮かんだ怒りと悲しみは長くは続かず私を包む後悔に切り替わる。

嘘ですよと言え、追いかけて手を掴んで言えと心が囁いてくる。足が私を戻そうとしてくる、闇が手を引っ張ってくる。それを切り裂きながら私は足を進めた。

その日、私の生活から『加々美悠』という人物は消えた。

その日、私の記憶から『加々美悠』という人物は消えてはくれなかった。

傘を持ってきてよかった、やっぱり雨が降っている。

周りの視線が痛いくらいに突き刺さる、なにもおかしなところなどありはしないのに。

さようならを言ったのは私から、だからこんなことはありえない。傘を指しているのに頬が濡れる、どうしてだろう。傘に穴は空いているわけではない。

傘から音がしない、雨を弾く音が聞こえてこない。おかしい、こんなにもどしやぶりなのに。

後悔がないなんてわけがない、間違えてるのかどうかもわからない

い。空に浮かぶ星は滲みきって黒に濁っている。

これは雨のはずだ、雨でなければならぬ。これは雨なんだ。自分に言い聞かせるかのように、そう呟いた。

雨が降っているのは私だけ、周り是一滴たりとも濡れてはいない。雨が降っていないのは私だけ、周りはどうしや降りのように濡れている。

雨を止めるために、空を見上げた。

ああ、もうなにも考えたくない。空っぽでありたい。

R o s e l i a と頂点を取ればポツカリと空いた何かは満たされるだろうか、こびりついた記憶は消えてくれるだろうか。

頂点を取った時、その時私は忘れられるのだろうか。彼のことを、この気持ち。好きだというこの気持ちを。

明日になったら何もかも忘れていればいいのに。たまたま見えた流れ星に、私はそう願った。

嘘

「いつまでも寝転がってるなら買い物行ってきて」

そう母親に言われ僕はスマホにメモを取り外に出る。いつもなら少なかれ思うであろう文句は何も思い浮かばない、今は誰かに言われるがままに何かをしていたい。

もしもあれをしてたら何かしていたら、何もしていなければ、たればの現実逃避が止まらない。

その癖たればは過去のことなんだと現実を直視させてくる。見せつけられた現実から逃げ出す現実逃避の連続。

そんなのがいったいどれだけ続いただろう。何日も続いているのに終わりは見えてくれない。無限にループしているかのようさえ思えてくる。あの出来事は僕に深く傷をつけているようで。

懂れて恋をして、舞い上がって思い上がる。そして手を離されて突き落とされる。それでも尚僕の中から氷川さんは消えてはいない、忘れられないし消せやしない。

女々しいのか重いのか、でも一度知ってしまったこの感情を無くせというのは理不尽だ。それなら最初から教えないでくれ。

日菜がいるのだから切り替えろというのも無理だ。そもそも別人なのに、まったく違う二人なのに切り替えるなんて事が出来るはずがない。

「寒いなあ……」

日に日に思いは膨れ上がる。どうして僕はこんなに弱いのだろう。それは今回だけだろうか、氷川さんだけだろうか。

もしこれが学校のクラスの人なら、友人だったらどうなのだろう。家族だったら、日菜だったら、僕はこんな風に思えるのだろうか。

自問自答、答えは出題者だってわかりはしない。

自問他答、答えてくれる人はいない。

他問自答、誰も聞いてやくれやしなない。

他問他答、誰かに知られたくなくやしなない。

季節外れの風が妙に冷たく感じて、ため息を一つついた。

「めんどくさ……」

買ってこいと言われた物の殆どは食材で量も種類も多くはないが、それが更にめんどくさを加速させる。

思考の海に溺れていた時はそんなこと全く思わなかったが、こうして実際に行動すれば嫌でもそう思わされる。

「やつほく。こんなところで奇遇だね、悠君」

「……どちら様ですか？」

「あく、これじゃわからないか」

買い物を終え出口に向かっていると変な人に話しかけられた。

向こうから走ってきた人は室内にも関わらず深く被った帽子、大きめの眼鏡をかけて右手には大きめの紙袋、見た目だけみれば不審者としか言いようがない。

しかしその声は、呼び方には覚えがある。眼鏡を外すと、これでわかるかな？ とその人は聞いてくる。

「完全に不審者だけど」

「まあアイドルだから変装くらいはね？」

「前のサングラスよりはましだけどね」

「やつぱりそう思う？ 我ながら結構似合ってると思うんだよね」

日菜はくりりとその場で回転したせいかわらりと服が少しだけ持ち上がる。眼鏡の話なんだからその行動は少し違うのではないのだろうか。

「何買ったの？」

「服だよ服、女の子は大変なんだよ？」

「持とうか？」

そう聞くと日菜はありがとと言って持っている紙袋を渡してくる。

それを受けると向こうから誰かが走ってくるのが見えた。

「日菜、急に走らないでよ」

「ごめんってリサちー」

「まったくも……ってそっちの人は？」

「悠君だよ」

「君が悠君かあ、いつも日菜から話聞いてるよ。」

アタシは今井リサ、リサでいいよ」

「……加々美悠です、よろしくお願いします」

いかにもギャルですよ、という見た目と雰囲気をしているその人は押しが強い人だった。こういった人は嫌いではないが、苦手だ。

日菜は……押しは強いがどこか引かれるところがあるから悪い気はしない。多分長く付き合えばリサさんに対しての苦手も減るだろう。ただ長い付き合い合うことになるかはわからない。

「リサちゃんね、おねーちゃんと一緒のバンドなんだよ」

「あれ、悠は紗夜とも知りあいなの？」

「っ……そうですね」

知り合いです、とは続けられなかった。この前はそうだと思わなかったから、その程度じゃないと思ったから。

じゃあ今回は？ もう会わないでくださいと言われて今はどうなのだろう、それは知り合いと言えるのだろうか。

それは知り合いとは言えないかもしれない、だけどまだ知り合いであってほしい。そんな事を思っていると細めた目で日菜に問いかけられる。

「……ねえ、おねーちゃんと何かあったの？」

「……ないですよ」

本当にこの人は察しがいい。目をじっと見つめられる。いつもなら浮かんでくる恥ずかしいとかそういうものは今は出てこない、嘘を通すのに全てが注がれる。

「ちよ、ちよっと、喧嘩はやめなつて！」

僕達の間にはリサさんが割って入ってくる。ほぼ強制的に離された僕は目を逸らす、日菜はそれでも僕を見ている。

「……本当に何も無いんだね？」

「……ないよ」

「ならいいけど」

リサさんはホッと胸を撫で下ろしていた。何も無い、そんなことがあるはずがない。

気づいて欲しい、でも知られたくない。助けてほしい、でも心配してほしくない。それは日菜だから？ それとも氷川さんのためだから？ 僕にはわからない。

「えーっと……この後日菜とご飯行くんだけど、よかつたら悠も来る？」

「やめておきます、悪いですし」

「えー、あたしは全然いいよ。リサちゃんもいいよね？」

「うんうん、アタシも悠の話聞きたいし」

「……買い物用事があるので、ごめんなさい」

それは残念だなあと言ってリサさんは歩き出す。日菜に紙袋を返すとリサさんを追うように日菜は歩き出すが、急に立ち止まって話しかけてくる。

「ねえ、悠君は気付いてるの？」

「何を？」

「嘘をつくとき目が一段と細くなること」

一瞬にして身体中の血が凍ったかのような感じがした。思わず自分で目を触ってみるがいかんせん違いがわからない。

本当にそうなのだろうか、そう思っていると日菜はうっすらと笑って声に出さずにゆっくりと口を動かす。

——嘘

気のせいではなければそう言われた気がした。その後日菜は何事もないかのようには走ってリサさんを追いかける。

僕は何も言わない、言えなかった。日菜に氷川さんの事について聞いてほしいのだろうか、手伝いを求めているのだろうか、わからない。氷川さんが決めたことなのだから僕は不満を持たない。それは彼女が頑張っているから、僕を変えてくれようとしてくれたものだから。

それを妨げるといのが僕だというのなら自分の気持ちだって押し殺せる。

「別に元通りになんか……」

望んでいない、僕にそれは思えない。言い訳で自分の心を塗りかた

め蓋をする。

溢れるな、鎮まってる。押さえつけていたのに飛び出してきた吐き気と目眩に襲われた。何も無いのに口の中が酸っぱいような感じがして近くの椅子に座り込む。

僕は氷川さんの音が好きだ、僕は氷川さんが好きだ。じゃあ……それはどちらの方が上？ 氷川さんの音の為に氷川さんを捨てている今は果たして正しいのだろうか？

答えは見つからないし答える機会はもう、存在しない。

目を閉じたのに、手で目を覆った。

「何があっただらろ……」

そう思うのは悠君のこと。おねーちゃんと何かあったんだろ？ なあつてのはわかった、気になるけど深くは聞けなかった。

もしかして喧嘩？ 恋人になったとかなら……嫌だけど、それならあんな辛そうな表情はしないだろう。

だとすれば仲違いっぽそうだけど……

「どうして……」

どうして仲違いしたのか、ではない。どうして悠君はまだおねーちゃんを見ているの、あたしを見てはくれないの？ あんな辛そうな表情をしながらも、どうしておねーちゃんから目を離さないの？

この感情はなんだろう。どうして悲しい、辛いだけじゃなく、嬉しいと思ってしまうのだろう。

悠君がそんなにもおねーちゃんの事が好きなことが嬉しい。そうじゃない、そうであつたらいいのに違う。これは、おねーちゃんが悠君と仲が悪くなつて嬉しい……

「違う違う違う」

そんなのない、ありえない。あたしは悠君のことも好きだけどおねーちゃんの事も好きだ、ならこんなのあつてはいけないんだ、思っちゃいけないんだ。

ねえ悠君、君はおねーちゃんと仲を戻したいのかな。あたしだつて二人とも好きだから仲良くなつてほしいと思ってるよ。二人とも好

きだから笑っていてほしいよ、そのはずなんだ。

神様っているのかな、いるんだったら答えてよ。悠君とおねーちゃんの間がこのままなくなってしまうばいと思ってしまうのは、悪いことですか？

「……なーんてね」

思考を切り替える、纏めて捨てる。こんなこといいはずがない、そもそも今日の悠君はるんってしてなかったし、見ててこちらもるんってしなかった。

今後も悠君がずっとこんな感じならばそれはあたしも嫌だ。だから二人の間を戻そう、戻して笑いあってもらおう。

「……でも、ちよつとだけ」

でもちよつとだけ、ほんの少しだけ。今だけ悠君を独り占めさせてもらおう。

おねーちゃんから仲直りの手伝いをして欲しいと言われるまで、本当に壊れてしまう直前まで。悠君に言われるまでの間だけ独り占めさせてもらおう。

何をしよう。連絡を取ってゲームをして、いろんな話もしたいしご飯も食べたい。なんなら悠君の家に押し掛けるのもいいかもしれない。

そんなことを考えるとするんとしてくる。あたしの胸を締め付けるかのように罪悪感が蝕むが、そんなものは目障りだな程度にしか思わない。

悠君が悪いんだよ？ そんなに優しいから悪いんだ、あまりに魅力的だから悪いんだ。

少ししたらおねーちゃんとも仲を戻してあげるから、だから今は、あたしだけを見て？

太陽が沈んでいく、昼から夕方に変わっていく。好きが止まらない、抑え込めない溢れでてしまう。

空を眺めていると月が浮かんできた。それはこれ以上ないくらい綺麗で、大きな満月だった。

作戦

雨が降りそうで降らない、そんなどんよりとした重い空気が世界を包む。

太陽は有給休暇を取ったかのごとくサボりを決め込んでいて、その代わりと言わんばかりに雲が空を埋め尽くす。

重なりあつたそれは退く気配は微塵に感じられない。事実、ここ一週間近くはずつとこんな天気が続いている。

「あつっ……」

太陽は見えない癖に無駄に暑い、夏が近くなってきている証拠なのだろう。

SNSを覗きながら待ち合わせ相手が来るのを待つ。何故だか面白みを感じないでいると目の前が暗闇に包まれた。

「だーれだ?」

「……遅刻だけど」

「こーたーえーてー」

日菜、と言うと世界に明かりが戻ってくる。今日は珍しく遊ぼうではなく話がしたい、と言われたのだがいったい何を話すのだろうか。

「今日は何の話を……ってなに見てるのさ」

「いやー、悠君ってどんなのに興味あるのかなって」

「ゲームや音楽だけだし見てもつまらないよ」

そう言う时日菜さんは自分のスマホを弄りだす。何をしているのだろうかと見ているとスマホが通知を知らせてくる。

何かと見てみると先程のSNSからフォローされましたの通知、相手は『氷川日菜』と書いてあった。

「いや、そのアカウントでフォローは駄目でしょ」

「どーして?」

「そのアカウント公式じゃん、そんなのにフォローされてたら刺される気がする」

「えー、じゃあどうすればいいの?」

「……別のアカウントでフォローしといて」

「……フォロワーするのは別にいいんだ」

「見られて困ることは眩かないから」

他人のフォロワー欄を見る人なんてそうそういないだろうがもしものためだ。フォロワーにはP a s t e l * P a l e t t e sファンが何人かいるし警戒しておいて損はないだろう。

「ところで今日は何するの？」

「お話……だけど先に遊ぼう！」

「遊ぶって何するのさ」

「そーだなあ……決めた！ ゲームセンター行こー！」

そう笑顔で言われ手を差し出される。

掴めばいい、握ればいい。それだけでいいしそれに意味は殆んどない。それでも僕はその手を掴めない。

その手を振りほどかれるのが、突き落とされるのが怖くて掴めない。

日菜の姿に氷川さんが重なって見える。双子なのだから見た目がある程度似てるのは仕方ないだろう。でも今までこんなことはなかった、氷川さんと日菜を重ねて見た事なんてなかったのに。

「……わかったよ」

差し出された手は掴まない、握めない。こんなにも暑いのに震えてしまうのはなぜだろう。こんな自分勝手な事があるだろうか。

日菜と氷川さんは違うのに、日菜に嫌われる事が怖い。

別にこうして会うことは何も怖くなかったのに、こうやって手を差し出されると急に日菜と氷川さんが重なってしまった。

それはただの妄想。別に氷川さんにも実際に手を振りほどかれた訳ではないのにこうしてこんなにも怯えてしまっている。

日菜の横を通りすぎショッピングモールに入ろうとしたその時、手を掴まれる。強く、離せないくらいに。

「……ねえ、なんで悠君はおねーちゃんしか見ないの？」

「っ……氷川さんの事を見てなんか」

「嘘ばっかり、じゃあなんでさつき無視したの？」

「それは……」

手を振りほごうとするが出来ない。痛い、それは手ではない。ちよつとは手も痛いけどそれ以上に心が痛い。

嘘をつくことも、答えられない事も、凶星な事も、その全てが僕を痛め付けてくる。

「何かあるならあたしに全部言つてよ」

「……どうして日菜は僕にそんな優しくしてくれるの」

「そんなの決まってるじゃん」

——悠君の事が好きだからだよ。

あの時言われたその言葉、それをまた言われる。

なぜだろう。嫌われたくないと思っただけなのに、好きと言われるとどうしても安心してしまう。

掴まれていた手が離される。それについて声を漏らしてしまうが、もう一度先程と同じように手を差し出される。

「えへへ、じゃあ行こっか」

今度はその手を無視することはなく握る。離さないように、取り逃さないように。

さつきとは違い優しく握られたその手は、とても暖かった。

「あ、これおねーちゃんの持ってたバッチだ。ほしーなー」

「取ろうか?」

「取れるの?」

「多分ね」

そう言ってお金を入れて取る。日菜に渡すととても喜んでいて、失敗なくてよかったと思うと共にこちらまで少し嬉しくなってしまう。

その後も太鼓だったり射撃ゲームだったり色々やったがどれもいつも以上に楽しかった。

日菜はやったことがないのか最初は少し苦戦していたが、終わる頃には僕と同じくらいにはできるようになっていた。

「いやー、悠君はゲーム上手だねえ」

「まあ、数だけはやってるから」

「そう言えば悠君夢ないって言ってたけどプログラマー？ にはならないの？」

ゲーム好きなんでしょと付け足される。プログラマー、なんていい響きだろう。憧れたことだってあるに決まっている、けどもうその夢は持てていない。

「ならないよ、好きを仕事にしたいから」
「なにそれ」

「仕事にして嫌いになるかもしれないならなりたくないってこと」
「悠君ってときどきめんどくさいよね」

ときどき、多分めんどくさいことの方が多いと思うが。なんて思っているとはあれ行こ、と手を引かれてたどり着いたのはキラプリといわれる機械のところ。

写真を撮ってそれを加工するもののだが、わざわざ金を払って更にはスマホでも出来るのにする意味がわからない。

人生においてやることはもうないだろうと思ったのにこんな形ですることになるとは。

「悠君はこれはじめて？」

「姉に一回だけやらされたよ」

「なるほどね、えーっと、相手より後ろに下がって……」

「何してるの？」

「彩ちゃんにやり方教えて貰ったんだけど難しくて、やらなきゃいけないことが多いんだよ」

立ち位置は一緒に撮る人より後ろに立ったり、撮った後も加工の仕方がなんたら、なんともめんどくさいものだ。加工の手伝いを軽くして機械から出る。

「写真取ってないよ、ほら」

「別にいらな……いや、貰っとく」

出てきた写真を取り忘れていたらしい。別にいらなかった、そう思っていたのだが折角だし貰っておく。

折角、そう、勿体ないから。日菜と一緒に撮ったからとかは関係ない、多分。

部屋にでも飾っておこうか財布にでも入れておこうか、どうしよう。

「あー楽しかった……」

「そうだね、でも今日の目的はそうじゃないんでしょ？」

「……うん、取り敢えず場所を変えようか」

それは先程までが嘘みたいな重苦しい雰囲気。思わず呼吸が深くなる。

日菜の後を付いていくとたどり着いたのは屋上、周りに誰もいない
そこで二人きりになる。

「もう星が見えそうだよ」

「雲があるんで見えないでしょ」

「それもそっか」

手すりに腰をかけながら言う。少し押されたら落ちてしまいそう、
そんな危険が少しだけ気持ちよくて癖になってしまっそうだ。

「落ちたら死んじゃうよ？」

「まあ……落ちないでしょ」

「やっぱり悠君っておかしいね」

日菜も僕の隣にくる。姿勢も僕と一緒に危なっかしい。落ちたら
死ぬ、言われて気づいたそんなことが少しだけ体を前に倒してくる。

「それで、話って？」

「おねーちゃんのことどう思ってるのかなって聞こうと思ったけど
……やめた」

よっ、と軽快な声と共に日菜は手すりから離れる。僕と日菜は向か
い合って目を見つめ合う。重たい空気、それは湿気でも気温でもな
い。

そんな空気に流されるように、だけど引き裂くように重く、弱く声
を出す。

「おねーちゃんと仲直り……したい？」

「……それは日菜の方なんじゃないの」

「あまりふざけると……こっ、だよ？」

その場で両手を前に付き出す。それを意味することはわかってい

るし、怖いので手すりから体を離す。

その声はちよつとだけ笑っていたが、多分奥では笑っていないと思う。

仲直りしたい、それはそうだ。これを仲が悪くなったと言うのかはわからないが今はそんなことはどうでもいい。浮かんだ答えは二つ、だけど出せる答えは一つだけ。

日菜の方を見る、空を仰ぎ見る。本当は言いたいそれは言うことができない。

日菜の方を見ると、氷川さんの事を思うと、どうしても言うことができない。

「別にそうでも……」

「あたしは悠君の答えが知りたいの、あたしとかおねーちゃんのことには考えないで」

「僕の……」

答え……か。日菜とか氷川さんのことを考えるなどいうのなら、僕の願いというのなら先程切り捨てた答えしかありえない。

「したいよ、仲直り」

「……やっぱり、そうだよね」

残念そうな声がある。悪いことをしてしまった気がしてしまう、日菜の顔を見ると本当に残念そうにしているのが伝わってくる。

ああ、でもこれが僕の思いで答えなんだ。捨てきれないこの思いを持った僕は、救いの糸に迷わずに手を伸ばした。

「あーあ、悠君がしたくないって言えばなあ」

「そしたら月が出てる日にあの問いかけを答えてるよ」

「……それってあたしとおねーちゃんのどっちがいいか、まだ決まっていなくて事じゃん」

それはどういう意味なのか僕にはわからない。僕と日菜は手すりに肘をかける。

心が軽い、さつきよりも。何トンもの重りがぶら下がっていたかのようにだったのに空気のようにふわふわとなっている。

「日菜は優しいね……」

「悠君のが優しいでしょ……それよりどうやって仲直りする？」

「どうしよつかなあ……会うのは無理だし」

頭をガシガシと搔く、どうしよう。連絡先は残してある、でもきつと出てくれないだろうし確認してないが切られているかもしれない。せめて会えればどうにか出来るかもしれないのだが。

「リサちーが近いうちにコンテストがあるって言ってたしそこに行けば？」

「なるほど……場所とかがってわかる？」

「あー、後でリサちーに聞いておくね」

「何から何までありがとう」

悠君はかっこいいセリフを考えといてね、と言われたがかっこいいセリフなんて……厨二病の影響か結構知っているな。僕目線がかっこいいだから他人から見たらどうなるかわからないが。

「後で何か埋め合わせしてね」

「わかってる、何がいい……とかは後でいいか」

「別に、今でもいいんだよ？」

なんだろうと思いい日菜の方を向くと日菜は自分の唇に指を当てていた。思わず顔が赤くなって、逸らしてしまふ。

「なに想像しちゃったの？」

「……高校生にそういうことしない方がいいよ」

「えー、別にあたしはされてもいいんだけど？」

馬鹿な事を言わないで、そう言って二人で空を見上げる。月も星も見えないけど、雲の奥に何かが見える気がした。

曇り後

ああ、駄目だ。これでは駄目だ、まだまだこんなものでは駄目だ。より良く、もっと完璧に、さらに高くしなければ。そうでなければあの別れは何の意味も成さなくなってしまう。

「宇田川さん、やる気がないなら帰ってください」

「ご、ごめんなさい」

口ではそう言うものの彼女はやはり集中しきれていない。もう一度注意しようとしたところに今井さんの声が入ってくる。

「どーしたのあこ、いつもみみたいな元気がないじゃん」

「あ、あのね、あこ、見ちゃったの……」

「あこちゃん……!」

「ごめんりんりん、それでも気になるんだもん」

「……何を見たって言うんですか?」

どうだっという。宇田川さんの事だ、どうせUFOを見たとかそんなことだろう。

興味はないが宇田川さんが集中しきれない、そしてそれはなぜか湊さんも白金さんも同じ。もしかしたらその原因と同じかもしれないと思ったから一応聞く事にした。

「友希那さんがスーツの女の人と話してて……」

「湊さんにもプライベートはあるでしょう」

「だ、だけど、コンテストに出られないなんて絶対嫌だもん!」

「……どういうこと?」

「今日りんりと待ち合わせしてて、そしたら……」

宇田川さんの口から語られるそれは私にとっては裏切りに等しい行為だった。

それは私にとって……どうしても許せない事だった。

「……湊さん、認識に相違はないんですか?」

「……………」

「誰でもよかった。別に私達じゃなくても、自分だけステージに立てればいい、そういうことですか?」

「……私……は」

「……否定しないんですね」

「ちよ、ちよっと待って紗夜、まだ何も言っていないじゃん。

友希那の言い分も、ね?」

「答えないことが最大の答えだわ!」

思わず声を荒げてしまう。ふざけるな、怒りが心を覆い尽くす。

私の決意はどうすればいいんだ。私の証明はゴミみたいになっていいものなんかではない。

私の捨てたものはもつと大切なもの。もう取り戻せないもの。それが、その事実が、どうしても私のイラつきを加速させる。

「そんな……あこ達の技術を認めてくれたってのも、Roseliaにすべてをかけるって言ったのも、全部嘘だったの!？」

「あ、あこちゃん、待って……」

宇田川さんがスタジオを飛び出し白金さんがそれを追いかける。

ああ、こんなところ居たくない。去れるのなら少しでも早く去ってしまいたい。そう思うが私も自分の思いを口にせずにはいられない。

「私は貴女の信念を尊敬していた……だからこそ、失望したわ」

「待ってよ。そしたらアタシ達、これからどうするの?」

「知らないわ、そんなこと」

「そんなことって言い方……」

言い方なんてどうでもいい。そんなことでしかない、私からしたらどうだっていいことなのだから。

苦しんだ、後悔だつてした、なんなら今でもずっとしている。それこそ恥ずかしげもなく泣いてしまう程度には。それなのにその結果が、こんななんて……

「私は大切なものを捨てたの、Roseliaの為に! それなのにこんな……」

「……大切なんて、悠の事?」

「……だったらなんですか、申し訳ないけど私は失礼させて貰うわ」
「紗夜、待つ……」

後ろで私を呼ぶ今井さんの声を無視してスタジオから出る。

どうだつていい、もう何だつていい。なぜ知っているのかなんて気にもしない。どうせもう彼女達とは会わないのだから。

彼と別れてからずっと空っぽのままだった心の穴は更に大きく空いてしまった気がする。

雨でも降ってしまえばいいのに。弱くても強くてもどちらでもいい、ただ願わくは強い雨が降ってほしい。

もし降れば……泣いても隠せそうだから。

それでも長い間空を覆い続けている黒い雲は、少しも変わってくれなかった。

「あ、おねーちゃんお帰り」

いつもと変わらないようなその声が忌々しい。日菜は私と違って加々美さんと会っている。

この前だつて楽しそうにメッセージを送っているのが見えてしまった。その相手が加々美さんと決まってはいいないが、なんとなくそれはわかった。私は返事もせずに自分の部屋に向かいギターを手にとる。

先ほどまでと何も変わっていないにも関わらず、何かが違っている気がする。

軽く弾いてみるとそれが顕著に表れる……ということにはなかった。ではこの喪失感は一切なんなのだろうか。

「あれ、やめちゃうの?」

「……勝手に入ってこないでつて言ったでしょ」

「入ってないよ。ほら、ドアが開いてたから」

「そんなの屁理屈よ」

私にはギターしかない。あんなことをしたのだから、してしまったのだからギターしかないんだ。

例えRoseliaが無くなってしまったとしてもそれは変わらない、変えられない。

「ねえ、おねーちゃんの音、また何か変わった?」

「……何かって何よ、あなたの言葉はわかりづらいの」

「今まではピシッ！ って感じだったけど最近まではおねーちゃんって気がしてた……だけど今はちよつと苦しそう」

苦しそう。なんだそれは、相変わらず言っている事がわからない。だけど、苦しいというのは確かかもしれない。日菜にもいわず抜かされると思っていて、Roseliaもなくてこの音を聴かせたい相手がいないのなら……

もう、ギターなんてやめてしまってもいいかもしれない。

「……おねーちゃん、ギターはやめないよね？」

「……何よ、急に」

「だっておねーちゃんの顔、凄く辛そうだよ」

誰のせいだと思っっているんだ、思わず怒りが沸いてきたがそれはすぐに収まった。

誰のせいなのだろう。日菜がやるからやめてしまうのは本当に日菜のせいなのだろうか。この音を聴かせたい相手がもういないのは、私のせいじゃないのか。

頭の中がぐるぐると回る気がした。まるで洗濯機に叩き込まれたように。

何もかも全部、全部私のせいではないのだろうか？

「……やめるわけないでしょ。私はもつと高みを目指さなきゃならんんだから」

「……ねえおねーちゃん、本当にそれでいいの？」

「何が？ それとも私にギターをやめてほしいわけ？」

そう言うと言葉は焦ったように首を横に降り、そうじゃなくてと言ひ直してくる。

「なんでそんなに辛そうなの頑張ってるの？」

「あなたにはわからないでしょ！」

「うん、わからないよ。あたしには努力がなんなのかわからないもん」

ああ、本当にイライラさせる。私を煽りたいのだろうか、馬鹿にしたいのだろうか、凡才と見下して優越感を覚えたいのだろうか。思わず口を出そうとしたが日菜はそれを許さない。

「あたしには頑張るってことがどういのかわからない、けど今のよねーちゃんは努力してるっていうよりも……自分を傷つけてるようには見ええないの」

「……自分を傷つけてる？」

「そんなことしてなんになるの？ 辛いだけじゃん、痛いだけじゃん。どうしてそんなことをするの？」

「……それでも私にはこれしかないの、これの為に私は！」

「ギターの為に悠君と仲違いしたの？」

答えられて、言い当てられて体が凍ってしまったかのように感じた。思わず息が止まり背筋が冷えてしまう。

気づかれたからといって何も無い、何もすることができない。むしろ日菜からすれば加々美さんの事を好きなのだから好都合だろうに。

「だったら何、もうどうしようもないんだから……」

「なんで？ 仲直りすればいいじゃん」

「そんなの出来るわけ……」

出来るわけない、そう言おうとしたが自分でも言い留まる。

どうして？ 仲直り出来ない理由なんて一つもない。したくないなんてことは当然ない。

「……ただ彼を私を許してくれるだろうか、自分の事を捨てた私を。いや、彼ならきつと……」

「あたしが手伝うよ、悠君とおねーちゃんの仲直り」

「……私にはそんな資格は」

「あるよ、だって悠君もしたいって言ってたもん」

その言葉は私を驚かせるものだった。彼は酷いくらいに優しいから多分何事もなかったかのように許してくれる。

それはなんとなく思っていたからそこまで大きな驚きはない。私を驚かせたのは日菜が手伝いをしたいと言ったこと。

「……あなたも加々美さんの事が好きなんですよ？ なのにどうして……」

「もって事は、やっぱりおねーちゃんもなんだ……」

小声で、殆ど聞こえないような声でそう呟かれる。そして少しの空

白の後、私の問いかけに日菜は答えた。

「私も悠君の事は好きだよ。でもおねーちゃんの事もそれと同じくらい好きなんだよ。だからこんな風に苦しんでほしくないの」

「日菜……」

「ほんとはもう少しだけ悠君を独り占めしようと思ったんだけどね」

えへへ、と笑って言う姿はいつもの日菜と少しだけ違って見えた。

そんな日菜の優しさに、無意識のうちに言葉が漏れた。

「……ありがとう、日菜」

「どういたしましてだよ、おねーちゃん」

今までの私だったら考えられなかった事だろう、変わったのは何故だろうか。

変わったのは誰のおかげだろうか……やっぱり、彼のお陰なのだろうか。

「それじゃあ明日、悠君のところに突撃しよ?」

「急すぎるわよ、きつと加々美さんも困惑しちゃうでしょ」

「悠君なら多分大丈夫でしょ、行けるって」

いつも暇そうにしてるしと言った後、悠君に連絡しとくねと言って日菜はドアを閉めて去っていった。そしてその直後、スマホが鳴った。

「宇田川さんからの動画メール?」

開いてみるとそこにはとても楽しそうに、笑顔でギターを弾いている私が映っていた。

これはいつの練習だっただろうか、記憶にはない。私はいつ、こんな風に笑っていたのだろう。いや、いつからこんな風に笑っていたのだろうか。

そう思うと消えたかと思っていたRoseliaに対しての思いも燃え上がるかのように蘇ってきた。

「私は……どっちを……」

加々美さんかRoseliaか、どちらを取るべきなのだろう。その答えは簡単には出てこない。

今思えばそれはどちらも大切なものだから簡単に出していいもの

ではない。

選べない、天秤は傾かない。ああ、それなら、両方取ってしまうのはどうだろうか。

「……欲張りね」

思わず自分で自分を笑ってしまふ。二兎を追うもの一兎を得ず。だとしても、それでも少しくらい高望みしてもきつと許してくれるだろう。

「明日は晴れるかしら」

外を見れば永遠に続いてしまうかのような気がする曇りの空。

もう一度ギターを弾く。さつきとなにも変わらない、だけど喪失感は何かに満たされ消えて。

これからはずっと続いていそうな雲だけれど、不思議と明日は晴れる気がした。

晴れ

仲直りするときと言う言葉とはなんだろう。何から始めるべきなのだろうか。

「ごめんなさいから入るべきか、また仲良くしてくださいと言わなければ。それに答えは存在しないからいくらでも考えられるし、どれだけ考えてもわからない。」

「なに言えばいいんだか……」

思えばここ数年喧嘩らしい喧嘩なんてしていない。

友人と言える人が少ないのもあるが軽い言い合いや、ふざけながら喧嘩紛いな事をしたことならある。

だけどそれは何も言わずに、せずに解決してきた。次にあつた時には何もなかったかのようにいつも通りになっていたのだから。

「無難にまた仲良くしてくださいから適当な話題広げて……いやほんとにそれでいいのか？」

どうにかなるだろう。それは僕の中で今まで揺るがないものだった。僕の人生はなんやかんやでどうにかなってきたものだから。

高校だって周りより勉強の量は少なかったが運よく受かったし、留年するぞと親なり教師に言われたが赤点もなくどうにかなった。

悪く言えばギリギリとか危機感がない。逆によく言えば楽観的、ポジティブ。物は言いようとはよく言ったものだ。

「どうすんだよ……」

ソファーに寝転がりながらそんな事を呟く。こんなにも怖いのは、失敗するかもしれないと怯えているのはいつぶりだろうか。

スピーチみたいく人前で失敗して恥ずかしいというのとは違う。今回を逃したらこの機会は二度とない、どうにもならない、そう思ったから。

『明日いつものファーストフードでね!』

スマホを開くとそんなメッセージが目に入る。二人きりではなくもう一人くるらしいがその人は僕の知っている人とのこと。

となるとりサさんだろうか、まあ人数は多い方がいい。何を聞いた

らしいのかを二人に聞くとしよう。そう思い僕は何の準備もせずに次の日を迎えた。

ファーストフード店でいつものように珈琲だけ飲みながら日菜を待つ。

約束の時間まではもう少しあるし日菜は遅刻癖があるのでまだまだ待つことになるだろう。

いや、連れの人がいるというのなら流石に遅刻はしないかもしれない。

「悠君おはよー」

「もう昼だからおはようじゃ……」

出そうとした言葉はそこで止まる、驚きで止められる。それは他でもない、日菜に手を引かれてきた人のせいだ。

「氷川さん……」

その姿を見ると胸が痛む。今すぐにも逃げ出してしまいたい、しかし視線は外せない。ブリキの人形みたく硬い動きで日菜に助けを求める目を向けるが日菜は笑うだけ。

焦り、緊張、恐怖、それと……歓喜。いろいろな感情が入り交じる。

「……呼ぶなら先に言っつてよ」

「駄目だった？」

「流石に急すぎだった」

ヒソヒソと日菜と話す。氷川さんには何を話しているんだという目で見られている。

何も呼ぶことを咎めているのではない、むしろ仲直りするためには会わなければならないのだからありがたいくらいだ。

しかし急すぎる、せめて前もって言っつてほしかった。それなら昨日だって寝ないで考えていたのに。

「でも早い方がいいでしょ」

「それはそうだけど……」

そう言っつた直後に日菜は何かを思い出したかのような、そしてどこかわざとらしい声を出した。

「今日パスパレの自主練習に行かなきゃいけないんだっ。一時間くらいしたら戻ってこれると思うから二人とも絶対ここにいてね」
「いや、ちょっと待って……」

物凄い感情のこもっていない声でそう言うとき日菜はさっさと店から出ていった。もしかしなくても最初からこのつもりだったのだろうか。

「えっと……」

「……………」

気まずい、そんな言葉がこれほど似合う状況はそうそうないだろう。

どうする？ とりあえず話題を出そう。何の話題をどう広げる？

普段使わない頭を一生懸命動かしていると氷川さんから話しかけられた。

「加々美さんは……どう思ってるんですか？」

「……何をですか？」

「私の事です」

「どうと言われても……」

真面目でギャップがあつて音楽が好きで、とでも言えばいいのだろうか。だけど氷川さんはそんな答えを求めていないだろう。

多分そんな事ではない。もっと浅くて表面的な、イラついているとかめんどくさいだとかそういう事。

例えば……好き、とか。

「……言えねえよ……」

小さくそう呟く、恥ずかしいったりやありやしない。日菜に言えたのはその場の勢いと、向こうから言われた故のおうむ返しだから。

氷川さんだけじゃなくて日菜に対しても自分から好きというのは無理だろう。

「答えられないなら質問を変えます。私の事……嫌いですか？」

振り絞るかのようにして出されたそれ。それに対し与えられた選択肢はたった二つ。

はい、いいえ、ただそれだけ。迷うなんて考えられない、少しの間もなく僕は答えた。

「いいえ、嫌いじゃないです」

「……どうしてですか？」

「どうしてって、逆になんで嫌いになるんですか？」

嫌いになんてなるはずがない、なれるはずがない。こんなにも苦しんだから、嘆いたから、そこまで思える相手をどうやって嫌いになるっていうんだ。

「……普通、あんな事言われたらもう会いたくないくらいに嫌いになると思いますよ」

「そしたら僕は普通じゃないですね」

そう言うのと暫くの間沈黙が続き、お互いに小さく笑う。

ああ、おかしい、とつてもおかしい。あんなにもピリピリしていた空気が嘘みたいに和んだ気がする。

やっぱり人生、案外どうにかなるものだ。

「連絡先、交換しますか？」

「そうですね」

そう言って二度目の連絡先交換を行う。『氷川紗夜』という名前がメッセージ欄に久しぶりに記されていた。

「これからもまたよろしくお願いしますね……ヨウさん」

「悠ですよ、加々美悠です」

「ふふっ、懐かしいですね」

「そうですね、もう半年くらいも前なんですね」

時間が経つのは本当に早い、気を抜いたら置いてけぼりにされてしまうようなスピードで過ぎ去っていく。

ついこの間4月になったと思ったのにもう期末テストが迫っている。

「改めてお願いします、悠さん」

「……ええ、よろしくお願いしますね、紗夜さん」

名前で呼ぶからなんだ、変な恥ずかしさはこの前と違って感じられない。

「だけどやっぱり名前で呼ぶのも呼ばれるのも、少しだけ嬉しい。

「そういえばバンドの方はどうなんですか？」

「……Roseliaの方は、少しだけ問題が」

「……大丈夫なんですか？」

そう聞くと紗夜さんは首を横に振る。その問題がなんなのかは僕にはわからない、メンバーの問題か、思ったように音が合わないのか。もしかして……解散問題とかかもしれない。でも、多分、自信はないけど、不思議な確信がある。

「大丈夫ですよ、きつとどうにかかります」

そう言った直後、紗夜さんのスマホが通知を知らせる。ごめんなきいと言われ、別に大丈夫と伝えると紗夜さんはスマホを確認する。すると少しだけ強ばった顔をした。

「……どうかしたんですか？」

「なんでも……いえ、バンドのメンバーからです」

「大変そうですね」

「……実はRoseliaは今解散しそうでして」

少しだけ寂しそうに言う紗夜さんに対してきつと大丈夫だともう一度言おうとした、だけどその言葉は僕の口からは発せられなかった。

「ですが、きつと大丈夫です」

「……ええ、僕も願っておきます」

僕達は無事に仲直りをする事ができた。日菜がくるまで適当な話をしている改めてそう感じたし、不思議と離れる前までよりもずっと仲良くなれた気がした。

だから紗夜さんもRoseliaの皆さんも、きつと出来るだろう。

窓から空を見上げてみると久しぶりに雲の隙間から光が差し込んでいた。

「友希那さんも紗夜さんもWハンバーグ&エビフライ&チキンソテーのプレート、ご飯大盛りデザート付きでいいですか？」

「……………」

「よしっ、じゃあ五人ともそれで、よろしく、燐子」

「はいっ…………スーパーやけ食いセット…………五人前ですね…………」

宇田川さんから出たその言葉はまるで呪文のようなものだった。はたしてそれにポテトは付いてくるのだろうか、なんて事を考えながら頼んだものが届くのを待つ。

「それにしても残念だったね。でも凄く認めて貰えたし、アタシ的には悪くないのかな、って」

「私は認めないわ」

「そうよ、このジャンルを育てていきたいのなら私達を優勝させてもっと大きな活動を…………」

コンテストの結果は予選落ち、入賞すらしなかった。

それだけ聞けばとても悪く聞こえるが審査員曰く、あなた達は結成して日が浅いのに私達をここまで感動させた、あなた達には来年優勝してフェスに出てほしいとの事。

今考えればなんともおかしい話だがその時は妙に納得してしまった。このバンドなら、Roseliaなら偽りなく頂点をとれる、そう思ったから。

「そーいえば紗夜、終わった後に観客の方に手を振ってたけどもしかして…………悠でもいた？」

「ま、まさか、そんなわけ…………」

「紗夜の知り合い？」

「違うよ友希那。悠は紗夜にとって大切な人らしいよ」

「い、今井さん、変な事を言わないでください！」

「あれれ、でもこの前大切なくって言ってたよね？」

ニヤニヤとした顔でそんなことを言われる、そういえばこの前そんなことを言ってしまった記憶がある。

あの時の私はイラついていて少しだけ感情的になってしまったからついつい言ってしまったのかもしれない。

「え、紗夜さん付き合ってる人いるんですか!？」

「氷川さん…………意外…………です」

「ち、違います！ 悠さんとはそんな関係では……」

「悠さんね、紗夜が下の名前で呼ぶなんて珍しいじゃん」
「っ……！」

言い訳を重ねれば重ねるほど墓穴を掘ってしまう。それに宇田川さんや今井さんは何を言っても認めないだろうし食い下がらないだろう。

「……悠さんには日菜が……」

「あれ、悠と日菜って付き合ってるの？」

「多分まだだと思いますが……」

「へ、悠も罪な男だね。まさか姉妹二人から好かれてるなんて」

「リサ姉、その悠って人はどんな人なの!？」

「わ、私も気になります……」

「どんな人かく、そう言われると難しいなあ、会ったの一回きりだし」

今井さんがそう言うのとそれならと言った風に宇田川さんと白金さんは私の方を向く。特に宇田川さんはキラキラとした目で私を見るくる。

「紗夜さん、どんな人なんですか！」

「どんな人……優しい人ですよ。あとゲームが好きみたいなので二人とは気が合いそうですね」

「へ、会ってみたいね、りんりん！」

「わ、私は……遠慮しておこう……かな」

「そんな、紗夜さん、後で紹介してくださいよ」

そんな事を話していると食べ物を持ってこられた。ようやくこの話からも解放される、そう思って飲み物を飲むと今まで黙りを決め込んでいた湊さんが話しかけてくる。

「紗夜、よかったらラブソングでも作ってあげましょうか？」

「……何を言っているんですか？」

「あら、どうせ伝えるなら音楽の方がいいでしょ？」

思わずむせてしまった。湊さんからこんな言葉が出るとは全く思わなかったから。

「紗夜、アタシは応援するよ、いやでも日菜も応援したいし……」

「あこは紗夜さんのこと応援します！」

今井さんも宇田川さんも飽きもせずはこの話題を続けてくる。

もし私と日菜が同時に悠さんに告白したらどうなるのだろう。彼は……どちらをとるのだろう。そんなことをふと思った。

もし日菜と答えた時私は彼を無理矢理に奪ってしまわないだろうか、奪えるのだろうか。

「そう言えば今日雨って予報だったのに外れたね」

「そう……ですね」

「ほんと降らなくてよかった、もし降ったら髪の毛サモサくってなっちゃうもん」

「はいはい、あこは髪を整える余裕くらい持つて起きようね」

そんな会話を聞きながら窓から空を見上げる。

今日は雨が降るでしょう、そんな予報が嘘かのように今日の空は雲一つない快晴だった。

願い

知り合いの異性とばったり会うというのは幸運と思うのだろうか、それとも不幸と思うのだろうか。

勿論それは相手に対する好感度も関係するだろうが、やはりそれによつて起こりうる事の方が強く関係しているだろう。

「いやー助かったよ、つい買いすぎちゃってさー」

「全然大丈夫ですよ」

つまりはこういう事もしリサさんに会わなければ荷物を持つ事はなかった。リサさんが知り合いでなければ完全スルーしたものを。

いや、本当はスルーしようとしたのだがこちらのことを覚えていたのか視線を受けてしまった。

「ちよつと休憩しよつか、流石にそんなに持つてると疲れるでしょ?」

「まあ……休憩つて何処ですか?」

「そーだなー、あそことかどう?」

「じゃあそこで」

そう会話をしながら店の中に入る。入ったのはカフェなのだが僕はこういう類いの店は全くと言っていいほどこない。

勿論珈琲は好きだがわざわざ拘ろうとは思わないし、味の違いだつて舌が肥えてる訳ではないので甘い苦い程度にしかわからない。

そのためメニューの内容どころか注文の仕方までわからないので荷物を一度全て預かりリサさんに頼んでもらう。

「SNS映えねえ……」

可愛いからでも珍しいからでもなくただ漠然と写真を撮つてそれをSNSにあげる。

百聞でも一見でも無駄にしか思えないのだが、やはり周りもやっているから……と流されてやってしまう。

とはいっても僕があげるのはこんな女子向けみたいな店ではないのだが。

「はいござ」

「ありがとうございます、お金は……」

「大丈夫だよ、アタシの奢り。手伝って貰ったお礼」
そう言われ渡されたのは見た目から甘そうですよ、と伝わってくる物。

果たしてこれは美味しいのだろうか、罰ゲームにぴったりとすら思えるのだが。写真撮ってポイが一番正しいんじゃないかと勘ぐってしまう。

「それ一番のおすすめなんだって。クラスみんなもおいしーって言ってたよ」

「……のわりにはそっちは普通のやつ頼んでるんですね」

「あはは、一回だけ味見させて貰ったけどアタシにはちよつと合わないくて……」

心を決めて飲む。感想は人が飲むものでない、それしか出てこなかった。

砂糖だかなんだかわからないがストローにへばりついてる気がするのが多分気のせいだろう。でなければ販売許可が降りるはずもない。

スツと中央に移動させると、やっぱり駄目だったかーというリサさんの表情が目に入る。

「……ところでこの荷物どうするんですか、とてもじゃないですけど二人で持ち帰れる気がしませんけど」

「助っ人呼ぶから……って悠手伝ってくれるの？」

「まあ……」

一度手伝ったらもう最後までやってしまえというやつ、後味が悪いかそんなもの。別に特別な理由なんてありはしない。

「いやー助かるよ……ところで連絡先交換しない？」

「……急ですね」

「思い立ったがなんとやらだよ、それに紗夜と日菜の事ちよつとなら教えられるかもよ？」

「……何処で知ったんですか？」

「それは教えられないかなー」

この申し出は断れる筈がない。というかこの人は僕が日菜と紗夜

さんの事が好きだと何処で、誰から聞いたのだろうか。

「そんなことよりもさ、実際どっちのが上なの、今」

「そんなことって……上って何がですか？」

「決まってるじゃん、日菜と紗夜だよ」

「……どっちが上もないですよ、二人とも」

「ふーん、見かけによらず欲張りさんなんだなあ」

「こんなの正しくないのはわかっている。どっちが好きか何て悩み許されるものではない。」

「日菜は僕の事を好きだと言ってくれている、だけど僕は紗夜さんにどうしようもなく憧れているから忘れられない。」

「ああ、いつそ紗夜さんも僕の事が好きだったらこの日菜の問いを先送りしている事への罪悪感も少しは減ってくれるのだろうか。」

「まあそんなことはありえないだろう。ため息を一つついてしまおう。」

「でもさ、二人って見た目以外の殆ど真逆じゃん、どうして二人とも好きなの？」

「二人とも僕に無いものを持ってて、どうしても……好きな所があるからです」

「その好きなのところって？」

「……秘密です」

「え〜」

「どうしても二人に優劣がつけられない、その理由は好きな所が二人で真逆だから。」

「それは言い訳だろうか、言い訳だろう。僕が決めきれないだけなのに二人のせいになっている。言い訳以外の何物でもない。」

「そういえば助っ人呼ぶって言ってましたよね？」

「一応連絡したから来るとは思うけどももう少しかかるかな」

「やつほー、リサちゃんに悠君」

「おー、思ったより早いね」

「丁度暇だったからね」

「のわりには汗をかいてるじゃないか、多分走ってきた、急いできたのだろう。」

時間にルーズな日菜が軽い理由で急いでくるとは思わないし……
なんだろう、気紛れだろうか。

「あ、これあたしの好きなのやつだ！」

ストローであるの甘さの怪物を一気に吸い込む、その姿を見ているだけで胸焼けしてくる。

「はー、ほんとこれるんって感じがする！」

「……よく飲めるね、それ」

「悠君も飲んでみる？ あ、リサちー勝手に飲んでやってごめんね」

「それ私のじゃないよ」

「え、それじゃあ……」

こちらを見てくる日菜を見ると先程までと別の胸焼けが襲ってきた。

先ほどまでのみぞおちがジリジリと焼けるような感覚と似ているけど今度は気持ち悪い感じがしない。何でか心地いいとすら思える。

「……悠君、これ飲んだ？」

「……一口だけ」

「お、これってもしかして間接キス？」

ああ、わかっていたのだから言わないでくれ。リサさんのその言葉でどうしようもない恥ずかしさは増幅して、弾けてしまいそうにすら思える。

「……リサちーあんまりそういうの言わないでよ」

「あれ、駄目だった？」

ごめんごめんと謝るリサさんをじろーつと睨み付ける日菜。意識してしまおうとしても唇の辺りが寂しくて仕方がない。

そんな僕を見てか日菜はもう一度ストローを啜える、さつきより深く。

「ありやー、日菜は大胆だねえ」

「……はあ」

「悠君も飲む？」

ストローから口を離しながらそんなことを聞いてくる。答えは当然N.O。

味だつて全くわからなくなつてしまつたらうし……それはそれでいいかもしれないが、恥ずかしさには打ち勝てない。

「ねえねえリサちゃん、最近おねーちゃんつてどうなの？」

「相変わらず練習の鬼だよ、でもこの前までの棘は抜けた気はするかな」

誰かさんのお陰でねと言ってくる。さあ、誰のせいなのだろうか。それがいいことなのかどうかはわからないが、少なくとも悪いことではないだろう。

「そういえば日菜は紗夜さんと仲直りできた？」

「……まだ、つていつの間にかおねーちゃんのこと名前呼びになつてる」

「それはまあ……手伝おうか？」

今度は僕が、前は手伝つて、助けて貰つたから今度は僕が手伝いたい。

それが余計なお世話だとしても、多分僕がいない方がいいとわかつていても。

「……いや、大丈夫、これは二人で解決したいんだ」

「……そうか」

「ごめんね、せっかく手伝おうかつて言つて貰つたのに」

「大丈夫、ただの自己満足だし」

そう、ただの自己満足、借りは作りたくないだとか、恩は返したいとかそんなもの。

だけどこれが自己満足じゃないものとしたら……二人の役にたつたかつた。好きな二人だから、その二人の為に何かをしたかつた。

「明日はうちの練習もないし日菜は紗夜と仲直りしちやいなよ」

「……急だなあ」

「明日以外は殆ど練習があるから明日がいいと思うよ」

「明日はパスパレもないし……うん、わかつた」

「はい決まり、ちゃんんと仲直りしたら連絡してね」

紗夜にも聞くから嘘は通じないよとリサさんは言う。この人がいれば僕なんかいらんじやないか、そう思うくらいには話を切り出

すし纏めてる。

「ねえ、悠君」

「……何」

「何か言ってるよ、るんってなる魔法の言葉」

「……僕は魔法使いでも30歳でもないけど」

ああ、でもこの言葉だけは送りたい。おせっかいでも迷惑でも、自己満足だっていい。

「……頑張ってるね」

「うん！」

そう言っていると、帰ろと言われ手を引かれる。

何か忘れている気がするがきつと忘れるくらいだから大したことではないだろう。

「ちよつとー、少しは持つの手伝ってよ〜」

そんなリサさんの声に僕と日菜は軽く笑いながら元の場所に戻っていった。

日菜が紗夜さんの前でもこんな風に笑えますようにと、ただそれだけを願っていた。

修復

足が重い、手が軽く震える。
やるんだ、今まで出来なかったことを今日やらなきゃいけないんだ。

深呼吸をして自分を落ち着かせようとする。少しだけ楽になった気はするけどやっぱり手の震えは止まってない。

その生まれたての小鹿みたいに震える手を無理やり動かして目の前のドアをノックする。

確か家族とかには三回だけ。昔おねーちゃんに教えてもらった記憶がうっすらと蘇ってくる。

「ねえ、おねーちゃん」

「何?」

「開けていい?」

「……いいわよ、入って」

少し前までならあり得なかった返事、それはやっぱり嬉しくて暖かい。

ゆっくりとドアを開けるといつも通りおねーちゃんの部屋があったて、いつもとちよつと違うおねーちゃんがいた。

「どうしたの? 何か落ち着きがないように見えるけど……」

「……あなたは逆に落ち着きすぎよ、何かあったの?」

「そうかな、まあいいや」

そう言つてベッドに座つてるおねーちゃんの隣に座る。

何を話そうか。いや、まず最初に仲直りしたいと言うべきなのだろう。

そうわかっているても喉元でせき止められるかのように言葉がでない。

「……何よ」

「あはは、緊張しちゃって言葉が出ないや……」

「そう、なら先に私の言いたい事を聞いて貰つていいかしら?」

「おねーちゃんのこと? うん、いいよ」

その会話きり沈黙が続く。先に言っただけいいとはなんなのだろう。いや、あたしだって言えてないんだから似たようなものか。

もしかするとおねーちゃんの言いたいことってあたしと同じだったりするのかな。それだと……いいな。

「……ごめんなさい、日菜」

「……それを言いたいののはあたしの方だよ」

「あなたは何も悪くない、全部私のせいよ」

「違うよ、そうさせたのはあたしなんだからあたしのせい！」

「私のせいよ！」

「あたし！」

「私！」

そんな言葉のドツチボールは続く。お互いに受けて、投げて、かわさずにぶつけ合う。

あたしもおねーちゃんも自分のせいだと張り合い続ける。譲れない、これは絶対に。

「おねーちゃんは、あたしがおねーちゃんのやったことばかりするのが嫌だったんでしょ!?!」

「っ……どうしてそれを」

「やっぱりそうだったんだ……」

「……ええ、そうよ、私はあなたがすぐ私の真似をして私を追い抜かして行くのが嫌で嫌で仕方がなかった」

何で気づけなかったんだろう、それは今のあたしにはわからない。

じゃあなんで今は気づけたんだろう。多分それはパスパレのみなど、彼のお陰。

「でもギターは辞めてないよね」

「ええ、私にはこれしかないから」

「……それはどうして？」

「どうしてもこうしても、理由なんてないわよ」

「ほんとに？ 悠君がいるからじゃないの？」

「……そんなわけないわよ」

本当はどうなんだろう。顔を少しだけ背けながら答えるおねー

ちゃんからは読み取れない。

「もし……もしだけどき、あたしがギターを始めた理由がおねーちゃんじゃないって言ったら……仲直りしてくれる?」

ねえ、お願いだからうんって言つてよ、頷いてよ。これは、これだけはおねーちゃんじゃないんだよ。本当なんだよ。だからまた前みたく仲良くなるうよ。

聞いたけど答えは返つてこない。時計の針が時間を正確に刻む音が嫌に大きく聞こえる。

「……別に理由はどうでもいいわよ」

その言葉は小さくて聞こえたのが奇跡なんじゃないかとすら思えた。

だけど、それでも聞こえた。奇跡的に聞こえた。それは紛れもない目の前にいるおねーちゃんから。

「ほんと!」

「……ええ、本当よ」

「やったあー!」

思わず大きな声を出しちゃつて、抱きついちゃつておねーちゃんに怒られる。

でも嬉しかったんだからしょうがない、溢れちゃったから仕方ない。溢れてこぼれて涙が頬を伝う。

「ほら、ハンカチよ」

「うう、ありがとう……でもどうして?」

「……私も、逃げてばかりじゃ駄目だと思つたから」

その言葉は強そうで、そのくせ脆そう。でも折れるような気は微塵もしなかった。

「……じゃあさ、来週の日曜日、映画行かない?」

「……午前はRoseliaの練習があるから午後でね」

「うん!」

笑顔が隠せない。隠す気はないけど飛び出ていく。久しぶりのおねーちゃんのお出掛けできるのが嬉しくて、嬉しくて、止まらない。

「いつか悠君も一緒に三人で行きたいね」

「……そうね」

「あれ、嫌だった？」

「そうじゃなくて……：そういえば気になってたんだけど、あなた悠さんに告白したらしいわね」

「うん、そうだよ。あれは3月の後半だからもうだいぶ前の事なんだなあ」

「それでまだ答えてないって言うていたけど、あなたは理由を知ってるかしら？」

「あれ、もしかしておねーちゃん知らないの？」

「秘密ですって言われたから……」

悠君はやっぱり変な所で恥ずかしがり屋だ。ここであたしがおねーちゃんに教えてしまっついのだらうか。

きつとおねーちゃんは悠君がおねーちゃんの事を好きな事を知らない。

それをあたしの口から言うてしまっついのだらうか、悠君の口からじゃなくていいのだらうか。

いや、私はこの事実をおねーちゃんに伝えてしまっついのだらうか。

「……まあいいか、へたれな悠君の代わりに教えてあげよ」

「何か言った？」

「なんでもないよ」

特別だ、今回だけは特別に教えてあげよう。仲良くなったのだから教えてあげよう。

少しでも気分がいいから、後は少しでもかわいそうだなって思ったから。あたしはゆっくりと口を開いた。

「あたしが言ったんだよ、まだ答えなくていいって」

「あなたが？ どうしてすぐに答えを要求しなかったの？」

「悠君には選んで欲しかったんだ。だからその場の勢いとかで選んで欲しくないかなって」

「選んで欲しかった……？」

「そうだよ、あたしとおねーちゃんのどっちが好きか。それにその場

の勢いでOK貰っても悠君の中にはおねーちゃんがいると思って、それが嫌だったから……」

「……その言い方だと悠さんが私のこと好きってことになるわよ」

「うん、だってそうだもん。もしかして気付いてなかった？」

おねーちゃんは驚いたかのような顔をする。つていうことは知らなかったんだ、本当に。

「悠さんが……私の事を」

「どこが好きっていうのは……自分で聞いてね」

「そ、そんなの聞けるわけないでしょ！」

顔を赤くして顔を背けながらそんなことを言われる。こんな様子じゃおねーちゃんからは告白出来ないんだろうなあ、そう思ったけど手伝おうとは思わない、思えない。

こんなおねーちゃん知らない。こんなおねーちゃんの横顔は見たことがない。

それもこれも悠君が変えてくれたんだろう。だけどあたしの好きなおねーちゃんの知らない顔を引き出せる悠君が羨ましくて妬ましい。

……だけど、おねーちゃんもあたしの知らない悠君を知っているのだろう。

でもあたしだっておねーちゃんの知らない悠君を知っている筈だ。

それが少しだけ、いや、とてもモヤモヤする。

「ねえ、おねーちゃん」

「何、日菜」

「これからもあたし達三人が、ずっと仲良く一緒にいらればいいね」

「それは……できるかしら？」

それはきつと無理、均衡はいつか崩れる。天秤は傾く。

あたしかおねーちゃんが我慢できなくなるか、悠君がどつちかを選んだらきつと仲良く一緒にはなれないだろう。ずっとなんて夢物語。

「できるよ、きつとー」

「……ええ、そうね」

でもこんな日だから、おねーちゃんと仲直りできた日だからこそこ

んな理想を掲げ溺れるのも悪くはないだろう。きたるべき日までだとしても。

「来週の日曜日、忘れないでね」

「忘れるわけないでしょ……」

でも今はせっかく仲良くなったおねーちゃんとの関係を、決まった約束を楽しみに、大切にしていこう。

たとえ終わりがいつか来るのだと、わかっていたとしても。

予約

カフェなんて全く来ない筈なのにまた来ることになってしまった。今回の来店理由は日菜に誘われたから。しかしながら前のようなチエーン店ではなくちゃんとした、商店街にある『羽沢珈琲店』という店。

待ち合わせには他にも人がいるらしいが僕はその人達を知っているらしいとのことなので、あまり緊張せずに店のドアを開けた。

「へいラツシエーイ！ なに握りやしようか！」

開けた瞬間そんな声が飛んできた。無言でドアを閉じて店の看板を見る。書いてある言葉は何度見ても『羽沢珈琲店』のまま変化はない。

これはドツキリ番組なのだろうか。もしそうだとしたら題名は、もしカフェの看板をしているのに中身が寿司屋だったらとかになるだろうか。そんなことを思いながらも一度入店する。

「へいラツシエーイ！ なに握りやしようか！」

「あはは、イヴちゃん面白い！」

「えっと……いい、いらっしやいませ〜」

カオスな現場とはこのようなことを言うのだろうか。今度は看板は確認しない。日菜がいるのだからここで間違いないというのはわかったから。

とりあえず立ち竦んでいるとアルバイトだろうか、茶髪の高校生くらいの人に席を案内される。

「つぐちゃん、その人はこっちでいいよ」

「え、日菜先輩？」

「いいからいいから。ほら、悠君もこっち来て」

日菜の方を見ると既に人が一人座っている。その人はどこか見覚えがあるがどこで見たかは覚えていない。

一体どこで見たのだろうか、そんなことを考えながら日菜の隣に座る。

「……日菜ちゃんの知り合いって言うからどんな人かと思ったら意外

と普通の人のね」

「むー、千聖ちゃん酷いなあ、あたしをなんだと思ってるの?」

千聖ちゃん、ああ、思い出した。どこかで見たというのはテレビでの事だった。点と点が繋がってきたような気がする。

そういえばあの店員さんにも見覚えがある。日菜はあの店員さんの事をイヴちゃんと呼んでいた、つまりパスパレの若宮さん。そしてこの人は同じくパスパレで、女優の白鷺さんだろう。

「初めまして、白鷺千聖です」

「初めまして、加々美悠です」

「あなたの事は日菜ちゃんからいろいろ聞いてるわ」

「……いろいろって?」

「たいしたことではないわよ?」

さてどうだか。信じる事が出来ないというわけではないがいろいろという範囲は広すぎてわからない。

知り合いだとか友達だとかそんな軽いことだろうか。それとも……いや、流石にメンバーに知られるのはよくないだろうし日菜は言っていないだろう。

「えつと……ご注文は何になりますか?」

「あー……とりあえず珈琲だけで」

「珈琲ですね、わかりました」

珈琲店と店名に書いてあるくらいだから珈琲にはある程度自信があるのだろうか。

この前のカフェみたく甘さの爆弾みたいなのが来なければいいのだが……流石にあればないか。

「そういえばなんで白鷺さんと若宮さんはここにいますか?」

「あら、別に名前でもいいのよ?」

「遠慮しておきます」

「女性からの好意は受けとるべきだと思っけど」

「……はあ、それで、どうしてここにいますか?」

「別に特別な事はないわ。私はこの常連で、イヴちゃんはここでバイトをしてるからよ」

「でも今日は違うんだよね〜」

「というと?」

「なんだと思う?」

特別な事じゃない。そう言うもののアイドルグループの一人が常連で、更にそこでバイトをしているメンバーすらいると言う。Pastel*Paletteファンの人にとっては夢のような場所だろう。

しかし今日は違うと日菜は言った。ちよつと嬉しそうな声で問いかけてくる。それはなぞなぞを出す子供のような楽しそうな声。

「……Pastel*Palette全員で食事会?」

「ざんねーん、でもそれいいね。ねえ千聖ちゃん、いつかやろうよ」

「ふふ、みんなの時間があえばね」

「素敵です、アヤさんもマヤさんもきつと喜びます!」

「だよねー、考えたただけでるんってしてきた!」

結局答え教えて貰ってないんだけど。まあ日菜も楽しそうだしいいか。

というより若宮さんは接客しないでこっちにきてもいいのだろうか、と思ったがランチの時間は過ぎていくせいかわ他に客はいなかった。

まあ他に人がいたらこの人たちも、自分達はPastel*Paletteのメンバーですよみたいな事は言わないだろう。アイドルだし承認欲求の塊ということはなさそうだろうし。

「珈琲とケーキです」

「ありがとうございます……ケーキ?」

「あたしが頼んだんだよ」

「ああ、そういう」

届けられたのはイチゴのショートケーキ、嫌いではないがわざわざ買うほどではない。

確かクリスマスに食べたのが最後だったろうか。そんな事を考えながら珈琲を飲む。

「すごい、甘くてふわつとして食べてるんってくる!」

「……誰に説明してんの？」

「実は再来週にこの店の取材……というより紹介をすることになってその練習」

「アイドルも大変だな」

「そーなんだよ、でも楽しいよー！」

「はい、すごく楽しいです！」

「ふふ、私も凄く充実してると思うわ」

来た理由は練習のためか、というよりもうそんなことを任せられるなんてパスパレは相当人気らしい。

それにしても珈琲が美味しい、普段飲んでるインスタントとは全然違う。

まあ当たり前だしインスタントと変わらなかつたらそれはそれで問題な気がしなくもないが。

「悠君美味しそうに飲むね」

「……そうか？」

「うーん、なんとなくそう思っただけ」

「なるほどね」

何が美味しいのだろう、深みとかコクがうんたらとかはわからない。い。

わからないが何かしらがあるのだろう、ただ苦かったりするだけではないのだけは少なくともわかる。

「あたしも飲む」

「……全部は駄目だからな」

「大丈夫だって、かわりにこっちを一口あげるからさ」

あーん、とケーキの欠片をフォークに刺してこちらに向けられる。

視線が痛い、これを食べたならそれこそ刺さるんじゃないかという視線で見られるのは間違いないだろう。しかし食べなきゃ目の前の日は折れないだろう。

どうするべきかと悩んでいたら少しだけ開けていた口に何かを突っ込まれた。

「……甘」

「口をちやんと開けとかないと危ないよ？」

「なら突っ込むなよ……」

「二人は仲がいいのね」

「そう思う？」

「ええ、そう見えるわよ、まるで恋人みたい」

恋人、そう言われると恥ずかしい。日菜も恥ずかしそうに顔を背けているが少しだけ嬉しそうな顔をしている。

そんな顔をされたらこちらは余計に恥ずかしくなってしまうじゃないか。

「……悠君はおねーちゃんとかこういうことしたことある？」

「……ないよ」

「えへへ、そつかあ……」

「あら、加々美君は紗夜ちゃんとも知り合いなの？」

「まあそうですね」

「ふーん、あの紗夜ちゃんとかねえ……」

「……紗夜さんと知り合いなんですか？」

「同じ学校なのよ、紗夜ちゃんとは」

「ちなみに学年は違いますが私も同じ学校です！」

あの、とはなんだろう。とても気になる。

「どうしたの？ そんなに驚いて」

「……いや、世間って狭いなって思ってたさ」

「ちなみにあそこのつぐちゃんはあたしの後輩だよ」

頭が痛くなってくる。こんなのありえるか、こんなに学校が重なる事なんて普通に考えてあり得ないだろう。

「それに麻弥ちゃんも日菜ちゃんと同じ羽丘よね？」

「そうだよ、彩ちゃんは花咲だしね」

「……流石におかしくない？」

「そう？ 近くの女子高が羽丘と花咲しかないしこうなるのも普通じゃない？」

「……それもそう……なのか？」

考えるのはやめだ、これ以上考えてもより疑問が浮かんできそう

だ。

そういえば紗夜さんといえば日菜は仲直りできたのだろうか。

「ところで日菜は紗夜さんと仲直りできたの？」

「うん！ ばっちり！ 明日一緒に映画見に行くんだ！」

「仲直りできたんだ」

「あ、そうだ！ 明日悠君も来る？」

「……いや、二人で行ってきた方がいいよ」

一瞬行くと言ってしまいそうだった、だけどこれは二人で行った方がいいだろう。

今まで仲直りしたいと思いついて二人の願いがようやく叶ったのだから僕はいない方がいいに決まっている。

「そつか……そういえば悠君テスト近いよね？」

「まあ……近いな」

「そんな嫌な顔して、そんなに嫌なの？」

「嫌でしょ、テストは」

うんうんと頷く若宮さんは僕の味方だろう。勉強は嫌いだが、苦手だ、頑張りたくない。

それはずつと変わらぬし、これから変わることはないだろう。

「この前みたいによろうよ、今度はおねーちゃんと一緒に」

「……いつ？」

「うーんとね……来週でいいんじゃない？」

「じゃあそれで」

そんな事をしばらく話していたら三人は店から出ていった、どうやらパスパレの練習があるらしい。

一人になってしまったし僕も帰るとしよう。

「珈琲もう一つ貰っていいですか？」

まあもう一杯飲んでからでもいいか。それにしてもこの珈琲は美味しいし気に入った。金と時間に余裕があったら来るとしよう。

内心

朝起きるとほぼ同時に親に掃除の邪魔だから少しくらい早く出てけと言われ外に叩き出された。まだ予定している時間まで一時間以上あるというのに。

しかしそんな事をされたからといって僕は予定より一時間以上早く勉強をし始める程真面目じゃない。なので時間潰しもかねて『羽沢珈琲店』にお邪魔させてもらう。

「ご注文は何になさいますか?」

「珈琲でお願いします」

15分くらい前につけばいいしここからなら図書館もそう遠くない。

スマホを弄りながら珈琲を飲んで適当に時間を潰していればわりとすぐだろう。

「いらつしやいませー」

カラン、とドアベルが鳴る音がした。スマホでゲームをしていたのでその人の方を見ていなかったのだが入店してきた人はなぜか僕の前に座ってきた。

「少しお話がしたいのだけれど」

「……他の席空いてるのになんでここに座るんですか?」

「大きな声で話されても困るでしょう?」

その人、白鷺さんはそんな事を言ってくる。まあ確かに大きな声で話すと店の人に迷惑がかかるだろうし話すのであれば近い方がいい。聞かれて困る内容なら尚更のこと。

しかし開店したばかりだからか周りに人がいないからいいものの、もし他の客が入ってきたら他の席に移って貰いたい。それこそネットに顔とかあげられたくないし。

「それで、話ってなんですか?」

「日菜ちゃんと紗夜ちゃんの事なんだけど……」

紅茶か何かを飲みながら目を瞑りそう切り出す。そしてカップを置くとその閉じていた瞳をゆつくりと開いて聞いてくる。

——あなたはどっちの方が好きなの。

店員に聞こえないくらい音量で言われたその言葉はとても冷たくて、喉元にナイフを突きつけられた感覚を覚えさせる。

「……なんで知ってるんですか？」

「日菜ちゃんに聞いたのよ、あなたが二人とも好きだって」

「……たいしたことじゃないって言ってたじゃないですか」

「その場の空気ってものがあるでしょう？」

リサさんにもバレていたし白鷺さんにもバレている。僕にプライバシーというものは無いのだろうか。

「日菜との関係を解消しろってことですか？」

P a s t e l * P a l e t t e s としてアイドルとして、やはり恋愛というものはご法度なのだろうか。

しかし首を横に振った白鷺さんから発せられた言葉は僕の考えとは真逆のものだった。

「あなた、どうして日菜ちゃんと付き合わないの？」

「……アイドルとしてどうなんですか、それ」

「バレなければいいのよ、マスコミにさえ注意してればいいんだから」
「だからって……」

「日菜ちゃんはあなたの事が大好きなのよ、それはあなたもわかっているでしょ？ あれだけ言われてそれでもなの？」

わかっている、わからないはずがない。僕は鈍感系ではなく敏感、むしろ勘違い系といってもいいくらいだと自分で思っている。

それにも鈍感だとしても気づかない筈がない。あれだけ好きだと言われたら嫌でもわかる、嫌と思うかどうかは別だが。

「……あなた、紗夜ちゃんのどこが好きなの？」

紗夜ちゃんに魅力がないなんて意味じゃないと付け足される。

どこが、それは前と変わっていない。いや、むしろ増えているかもしれない。

会う度に、日が進む度に、少しずつ積もり重なるかのように増えている気がする。

「いろいろありますけどやっぱり、真面目で努力家で……そんなところ

ろに憧れてるから」

「……なるほどね」

珈琲が目の前に置かれる。白鷺さんの紅茶の方が先に渡されていたのは種類の違いからだろうか。

しかし店員には聞かれてないだろうか。他に客はいないのだからいくら小さな声だったとしても聞こえてしまっただろうか。

「あなたのその恋って本物かしら？」

「……どういことですか？」

「憧れてるっていうのは自分には手が届かないって気づいていることですよ？」

憧れは理解から最も遠い、白鷺さんが言いたいのは漫画で見た台詞に近い意味だろう。

自分では届かない、そうわかっているからこそ憧れるものだと。

「届かないものにする恋って本物じゃないと思うのだけれど？」

「……届かないから諦めきれないんです」

「一生届かないかもしれないのよ？」

「だからこそです」

この手では掴めないかもしれない、一生かけても無理かもしれない。だからこそ、届かないからこそ憧れる。憧れるからこそ、好きになる。

「……これは日菜ちゃんも大変そうね」

舌の上に珈琲の苦味が広がっていく。どうしようもなく痛い、辛い、苦しい。

それは比喩的で実際に五感で感じているものではない。だけどそれは確実に感じている。

「あなたが日菜ちゃんの方が好きになるにはどうしたらいいのかしら？」

「さあ、どうでしょうね」

「随分と適当なのね」

「元からこんな性格ですし」

「でも、あなたは日菜ちゃんの事が好きなんですよ？」

「……二人とも同じくらい好きだから選べないんですよ」

僕は自分が好きになれない、日菜と紗夜さんのどちらが好きというのに答えが出せないから。

日菜のどっちかがもう一人よりも好きになるまで、という言葉に甘えている。

自分でわかっているのにどちらか嫌いになることはなく加速度的に好きになる。倍々的に好きになっている。

「でも、選ぼうとしてるのね」

「……はい」

「それはとても辛いかもしれないわよ」

知っているさ、知っているつもりさ。そんな事は最初から……いや、それは嘘かもしれない。最初からではない、僕が辛いんじゃない、苦しいのは僕だけじゃない。

僕がもし紗夜さんを選んだとしたら……僕は日菜の思いを無かったことにしてしまうことになる。

それに気づいていなかったわけではない。それが怖くて遠ざけていた、考えようとしたくなかった。

「……そろそろ時間なんで」

嘘、まだ時間に余裕はある。だけど逃げるために、考えないようにするために早くここから立ち去りたい。

珈琲を飲み干し金を払って店を出た。

約束の時間より20分くらい前に図書館に着いたが紗夜さんも日菜も姿は見えない。

紗夜さんはいるかと思っただが別にいい。今は少しだけ一人で考えたい。

「選ぶ……僕が？」

何様のつもりだ。お前程度が、お前なんかそんな権利はあるのか。あるわけない、あるはずがない。

僕みたいな人間が誰かの思いを踏みにじってまで自分の意見を通していいわけがない。

好きなものだから仕方がない、憧れてるから仕方がない、恋しているのだから仕方ない。それは言い訳、とてつもなく都合のいい。

「二人とも……選ぶなんてのは」

駄目だろうか。欲張りだと言われるだろう、思われるだろう。

だけど僕自身の欲望と日菜の思いを潰したくないという思い、その二つが他を押して潰す。

いっそ平行線で一生この関係が続けばいいのに。こんな事を思うのは最低だろうか、答えは考えなくてもわかる。

もし選ぶ時が来るとするならば本当に決まった時か、日菜か紗夜さんのどちらかに明確な拒絶をされた時。

「……僕はそれでも求めたじゃんか」

この前紗夜さんに拒絶されたとき僕は戻りたいと思っていた、なら次だってそう思ってしまうだろう。

僕は依存しているのかもしれない、二人に深く、強く。

この恋と飾った感情は汚ならしくて、だけど捨てられない。黒くて重くて、大切なもの。

「悠さん？」

「……紗夜さん、日菜は一緒じゃないんですか？」

「日菜は後から来るって言ってました。それにしても大丈夫ですか？」

「何がですか？」

「顔色、凄く悪いですよ」

今僕はどんな顔をしているのだろう。鏡はない、自撮りはする気もない。

青いだろうか、白いだろうか。どうであれそんなことはどうだっていい。

「……大丈夫ですよ」

「……そうですか」

「ごめーん、遅れちゃった」

「日菜、何にそんな時間かけたのよ」

「せっかく三人でお出かけなんだから何着ようか迷ってたらさ」

「まったく、それに今日はお出かけって程でもないでしょう?」

「そうだけどさ、それでも服くらいちゃんを選びたいでしょ」

悠君もそう思うよね、とヒラヒラと服を揺らしながら聞かれる。

さあ、僕は自分で服をまったく買わないからお気に入りの服……はあるけど選ぶのに迷う程ではない。

「まあ、わからなくはない……かな」

「ほら、悠君もこう言ってるじゃん」

「……それでも時間には間に合いなさい」

「え、3分くらいじゃん」

「遅刻は遅刻よ、3分も10分も変わらないわ」

「じゃあ次は10分遅れてこよ」

「そういう意味じゃ……はあ、もういいわよ」

これはいつか終わってしまうのだろうか。この日常は崩れてしま
うのだろうか。

永遠に続けばいい、永久に終わらなければいい。少し前までの僕な
らありえない事を思う。

日常が嫌いだと、普通が嫌いだと思っていたのに今ではこの日常が
永遠に続けばいいと思っている。

「悠君、早く行かないと席埋まっちゃうよ?」

「それはあなたが遅かったからでしょ」

なぜ変わったのか、なぜ変わったのか。それは二人に出会えて毎日
が変わったから。

依存だつていい、飾り付けでできた恋だつていい。

それでもこの好きという気持ちは本当だ、偽りなく。

購入

夏休み、なんと甘美な響きだろうか。学生が望む最高の時、夢の時間。

そんな夏休みは今日から。昨日はながったるい話を聞き、うんざりするほどの課題を確認して学校は終わり。僕らに天国への扉が開かれたはずだった。

「あつつ……」

天国への扉は開かれて片足どころか半身くらい突っ込んでいるのだが、いかんせんこの暑さは天国ではなく地獄なのではとしか思えない。

今日はショッピングモールで友人と待ち合わせなのだが、遅れるという簡潔なメッセージが送られてきた。部活動してるやつは大変そうだ。

「それにしても暇だ……」

癖というのは恐ろしい、予定時刻より20分早く着いてしまった。

最近休日で誰かに会うというのは日菜か紗夜さんとの事が多かったからこうやって二人ともいないことを久しぶりと感じる。待つことに苦痛を覚えるのも久しぶりだ。

待っている間にスマホでゲームをしてみるが酷くつまらない。このゲームも長らくやってきたがそろそろ潮時なのだろうか。

どうにかして時間を潰そうとしていたら後ろから声をかけられる。

「あれ、どうしたのこんなところで?」

「友達を待ってるんですよ、遅れるらしいので」

「ふーん、それって何分くらいかわかる?」

「……だいたい30分くらいじゃないですかね」

「30分!? それはまた随分待つね」

リサさんは見たところ一人なのだが僕と同じく暇なのだろうか、アイスでも食べないかと誘ってくる。

僕としては時間を潰せればなんだった方がいいのだから了承する。

「それじゃあそこ、この夏限定のアイスがあるんだって」

「毎年その言葉聞きますけどね」

「それはそうだけどさく。あ、ちよつと待つてね」

リサさんはスマホを弄りだす。やっているのはメッセージを送っているのかそれともSNSのチェックか、まあどちらであれ僕には関係のない話だ。

「えくと……まあ高くもなく安くもなくって感じかな」

ここで奢りましようかと言えればかつこがつくのだろう。

ただリサさんは性格的に絶対に遠慮して気まずい雰囲気になるだろうし、僕自身そんなにお金を使いたくない気持ちがある金欠だし。

これが日菜だったら、紗夜さんだったら、お金を出していただろうか。記されている値段と財布の中を比べながらそんなことを考える。

「どうしたの、考え込んで？」

「いや、なんでもありませんよ」

そんな会話をしながら席につく。僕もリサさんと同じでコーヒ―アイスだがまあ美味しい。

おすすめというだけあつて単純に味がいいのもそうだがこのアホがつくほど暑い今ならではの美味しさもある。

「ところでさ、どうなの？」

「何がですか？」

「もく、言わなくてもわかるでしょ？」

ニヤニヤとした顔で言ってくるその声は少し楽しそう。その内容は確実に紗夜さんと日菜の事だろう。

「……何もありませんよ」

「えく、一つや二つあるでしょ？」

「……」

何も無い、それは間違っているだろう。何かそういった類の事はあつたかと聞かれたらないと答えるが、どう思っているかと聞かれたら間違いなく変化している。

「……なに、また喧嘩したの？」

「してないですよ」

「じゃあどうしてそんな顔してるの？」

ああ、この人は聞き上手だ、話させるのが上手い。するりと紐がほどけるように言葉が出てきてしまう。塞き止めきれず流れ出してしまう。

「……わからないですよ」

「二人のどつちが好きかって事？ それは前にも……」

「違います」

正解がわからない。日菜を選ぶか紗夜さんを選ぶのか、はたまた現状維持を続けるのかそれとも、僕が二人から離れるか。

より好きな方が正解だと言われたらそれまでだし正解はないかもしれない。もしかしたら全部不正解なんてオチかもしれない。

「……リサさんはどうしたらいいと思いますか？」

「あはは、ちよつとわからないかな……なんて」

それを境に会話はなくなる。やってしまった、こんなこと他人に聞かずに自分の中で閉じ込めておくべきだった。

しかししばらくするとリサさんが手を振りだす。その表情は助けがやってきた人みたいに安堵が浮かんでいた。

「悠さん、どうしてここに？」

ああ、やっぱりなんやかんや思っているけど僕はこの人の事が好きだ。それは僕の心臓が激しく鼓動する事で教えてくれる。

日菜と同じ、全く。この胸の苦しみと心地よさは寸分の狂いもない。

「……友達を待ってるんです」

「ほら、紗夜も座って座って」

リサさんは僕の隣に紗夜さんを座らせようとしてくる。嫌ではない、しかしそれは僕の話であって紗夜さんがどう思っているかは別の話。

彼女がどう思っているかは知らないが紗夜さんは僕の隣に座った。

「……紗夜さんはどうしてここに？」

「買い物です」

「で、アタシはその付き添い。まさか紗夜から買い物付き合っつて言われるなんてねえ」

「付き添いなのになんでバラバラに来たんですか？」

「Roseliaの練習の後紗夜は自主練習してたんだよ」

夏休みの初日だというのに練習があつて、なおかつ自主練もとは、やはり根本から違うんじゃないか。

凄いなというのとやっぱりなという二つの気持ち。それと届かないと改めて思わされてしまう。

「そういえば明後日には夏祭りがあるけど二人は何か予定でもあるの？」

「私は別に……ギターの練習をする予定です」

「僕も特には」

「それじゃあ二人で行ってくれば？」

その言葉に思わず隣を見てしまう。それは紗夜さんも同じようにで驚いた顔をしている。多分、僕も。

「私は……遠慮しておきます」

「どーしたの、もしかして嫌だった？」

「いえ、私はそういった催しに行ったりすると雨が降ることが多いのできつと迷惑を……」

「考えすぎだって、偶然だよ偶然」

「ですが……」

「悠はどう思ってるの？」

雨が降るということなら間違いなく勘違いだろう、偶々の積み重ね。

「だけどりサさんの聞いてきている事はそうじゃないだろう。行きたいか、行きたくないか。」

「まあ、行けるなら……」

「ほら、悠もこう言ってるし紗夜も行きなつて、なんなら日菜にも言うておこうか？」

「日菜には……言わないでおいってください」

チラリとこちらを見てくる紗夜さんは何を思っているのだろう。ふと考え付いたものはあるがそれはないだろう。

こんな僕にそんなことを思う物好きは日菜くらい、ましてやこの紗

夜さんがそんな事を思うはずがない。彼女に僕の手は届かないのだから。

「そろそろ時間なので……」

「もうそんな経ったの？」

「らしいですね」

スマホには、着いた、という簡潔なメッセージが友人から送られてきていた。

暇だなんだで時間を潰そうと悪戦苦闘していたにも関わらずいざ話が始まると時間とは恐ろしい速度で過ぎ去っていく。

「悠さん」

席を立ち上がったところで紗夜さんから声をかけられる。その先は彼女から何も無い、ただ名前を呼ばれただけなのかもしれない。

だけど何か言おうとしているのは伝わる。そして言いたいことはなんとなくわかった。

「忘れないでくださいね、夏祭り」

「……わかってます」

忘れるなどどこか期待した風に言う。そして返ってきたのはわかっているとい言葉。それだけ話すと僕は友達の待つゲーセンのスペースに向かった。

遠くのはずだ、手が届かないはずだ。けど少しだけ、もう少しだけ遠くに伸ばしてみたら届く気がした。それは夜空に浮かぶ月のように。

「はあ……」

「どーしたの、折角悠と一緒に出かけられるんだからもっと喜びなつて」

「そうですけれど……」

思い返すだけで顔から火が出てきそう。明後日忘れないでくださいね、私から言おうと思ったのに彼が先に言ってしまった。

いや、私が言えなかったから彼が先に言ったのだろう。

「それにしても日菜には言わないで、ねえ」

「い、今井さん、その事は忘れてください！」

「んー？　じゃあ日菜に言っちゃおうよ？」

「それは……」

ああ、これで彼にはバレてしまったかもしれない。もしかしたらまだ気づかれてないかもしれないし、実はずっと前から気づいていたかもしれない。

「だけど……それは悪い気は、しない。」

「それにしても面白い物がまさかここだとはねえ……」

「し、仕方ないでしょう、普段こういうところはあまり来ないから……」

洋服屋なんてめったに来ないし、来たとしてもそんなに考えずに派手になりすぎない服を選んでいる。

だから自分に似合う服を探すなんて経験はしたことがない。

「今井さんはこういうのが得意そうなので選んで貰おうかと思いましたが……」

頭に浮かぶのはこの前の図書館前でのやり取り。服くらいちゃんを選びたいという日菜の言葉にたいし彼は、わからなくはないと返した。

彼もやっぱりこういうことに気を配る女性の方がいいのだろうか。

「もしかしてその服って明後日着ていくつもり？」

「え……まあ一応……そのつもりですが」

「それならアタシは選べないかなあ」

どうしてですか、その問いが私の口から発せられる前に今井さんがその理由を述べる。

「悠が好きなのはアタシじゃなくて紗夜だよ、それなら紗夜が選べるって」

日菜から聞いていたけど今井さんも知っていたのか。やっぱり彼は私の事も好きなのか。私は知らなかったのに、気づけなかったのに。

ああ、確かに。彼が私の事も好きだと言うのなら、それなら私を選んで方がいいだろう。

「あまりに酷かったら私も言うけどね」

服を選ぶというのは私にとって新鮮な行為だ、不思議と楽しくて、明後日の事を思うと胸が高鳴って仕方がない。

彼はどんな反応をするのだろうか。そんな事を思いながら様々な服を手にとってみる。

明後日は雨が降るだろうか。別に私は雨が嫌いなわけではない、むしろ好きなくらいだ。

折角買った服が濡れてしまうかもしれないのは少しだけ嫌だが、それでも私の特別な日には必ずといっていいほど雨が降る。

もし明後日、雨が降ったのならば……この思いを彼に自分の口から伝えよう。

天気予報では晴れとの予報だが……もし雨が降ったなら、その日はきっと特別な日だ。

この思いを伝える日は、特別な日にしたいから。

しかし服の値段というのはもう少し安くなってくれないものだろうか。

夏祭り

雨が降る。白くて弱い、ちよつと意識すれば何もなかったかのように思えるであろうもの。

加えて今の時間帯は夜、それこそ実際に当たってみなければ雨だということには気付けない程度のものが降り続けている。

「人ばつかじゃん……」

その程度の雨だからこそというのものもあるのだろう。神社の近くで開催される祭りに向かう人、何処で買ったか知らないが浴衣まで着て傘を差さない人までいる。

時間まではまだまだある、だけどあの人はおそらくいるだろう。そんな理由のない確信を抱きながら約束の場所に向かった。

「待たせちゃいましたか?」

「私が早く来てしまっただけなので悠さんは悪くないですよ」

待たせたことは否定しないのか。相変わらず正直で、そんなところは日菜と似てる。

その服は今まで見たことのないもので、思わず上から下に見下ろしている、小さな声で確かめるかのように話かけられる。

「……似合って、ますか?」

「……似合ってますよ、とっっても」

彼女らしくない。水色、最近のトレンドと検索をかければ出てくるような服。

だけどそれはとても似合っていて、その姿を見ているだけでゆつくりと心臓が早くなるのがわかる。

「悠さんはまず行きたいところとかありますか?」

「ないですね、どこでもいいです」

あなたと一緒に、その言葉は飲み込んで口にしない。

だけどこれはこれで問題だ、行くところが決まらないというのはとても面倒くさい。

日菜なら僕が何も言わなくてもどこに行こうと言ってくれるだろうからこんなことで困るのは久しぶりの気がする。

「それなら……歩いて回りませんか？」

その提案はなんとも魅力的なもの、少なくとも僕にとってはあるが。そも祭りなんてものはなにも考えずポケットと回るのが基本かもしれない。

「じゃあ……行きましよう」

そう声をかけて歩き始める。周りにはこのような催しということもあり手を繋いで歩く男女のペアがとても多く、それを見ているとポケットにいれた手が何故か少しだけ寂しい。

雨が鬱陶しい、少しの手も伸ばせない。ああ、傘が邪魔だ。

「どうかしましたか？」

傘を持つ手を変えて少しだけ近寄るとそんなことを言われる。なんでもないですよ、そう答えてまた少し離れる。

結局僕は、紗夜^憧さんに手を伸ばせない。

「悠さんはこういうの得意そうだと思ったのですが……」

「練習出来ないのでも上手くないんですよ」

射的というものはなんとも苦手だ。そもそもあれは裏に何か置いてあるんじゃないか、立っているおじさんを倒したらおじさんを貰えるのだろうか。

そんな事を考え始めた時からそこまで楽しめなくなりました。

「それにしても紗夜さんが上手なのが驚きでした」

「日菜に取って、と言われて少しだけ頑張った事があるので」

今度はあれをやりましようと言われ付いていく。その似合わないような無邪気な横顔はとても可愛らしくてやっぱり姉妹なんだなということをうつつすらと思わされる。

雨はすっかり気にならなく、というよりも止んでいた。

僕達は傘を閉じて、だけど手は繋げずにいろいろなところを巡り型抜きも金魚すくいも、亀すくいなんでもものもやった。僕は家で金魚を飼える環境がないので返したが。

「うわ……」

「どうかしましたか？」

「いや、ちょっと嫌なものを思い出しまして」

僕の視線の先にあるのはわたあめの屋台、ピンク色のそれはとても大きくてあまりに甘そうだった。

それはあの甘さの爆弾を思い返させて少しだけ胸焼けしてくる。

「一つお願いします」

その言葉にギョツとさせられる。それを受け取った紗夜さんはとても嬉しそうで機嫌がよくなってているのがとてもよくわかる。もしかして彼女は甘党なのだろうか。

「悠さんは甘いもの苦手なんですか？」

「嫌いじゃないですけど……珈琲に合うものなら大抵好きです」
「なるほど……」

そのなるほどはなんのなるほどだろう。そんなことを思っているのだいぶ先の方に見覚えのある人達が見えた。

「日菜……？」

隣にいるのは……リサさんだろうか。思ってもいなかったのでもいい、ちよつとだけ近づこうとしたら急に手を引かれた。

「あ……えつと……」

紗夜さんが僕の手を痛いくらい強く掴んでいた。

その顔からは何故か困惑が読み取れて、なぜ自分はこんなことをしたのだろうと思っっているのがなんとなくだがわかる。

「ごめんなさい」

「い、いえ、悠さんは別になにも……」

「なにも、ではないですよね？」

ああ、うつすらとしていたものがはつきりとしてくる。モヤモヤとしていたものが確信に変わり形を成していく。

妄想は現実には、憧れに手を伸ばせるように。

「……少し移動しませんか？」

もう夜は深くなって人は少なくなっている。その言葉に従い僕達は向かう。付いていくではなく向かう。手を繋いだまま。

何処かは僕にはわからない。だけど離れないように見失わないように、ゆつくりと歩きだした。

神社の石段の途中で立ち止まって先ほどまでいたところを見下ろしてみる。

ボヤーツとした闇の中、明かりは少なく、ざわめきが少しだけ遠くから聞こえてくる気がする。

しかし特別遠く離れたわけではない。ただただ意識から外れてきただけ。今ここには二人しかいないから。

「……私が言いたいこと、わかりますか？」

「……まあ、なんとなく」

「そうですか……」

そう言つて階段を一步、また一步と登る。

十何段しかないそれを登るその間に会話は何一つとしてなく手もいつの間にか離れていた。

「……私は、あなたの事が好きです」

登りきる少し手前で振り返りながらそう言われる。予想はしていてもやはり言われるとどこか嬉しくて恥ずかしい。

月を背景に、絵画のようにそこにいる彼女に心を奪われてしまい返す言葉が出てこない。

「悠さんは……どうなんですか？」

「……好きです、僕も」

「……どんなところがですか？」

その返答に驚きは隠されてなく、まるで既に知っていたかのよう。僕の気持ちの情報は相変わらず安い値段で売り買いされてるのかもしれない。

「……ギターの音や時々見せる普段との違う様子だったり、真面目なところだったりいろいろあります」

ああ、本当に恥ずかしい。本人に向かって言うのは他の人に言うのとは比べ物にならないくらい恥ずかしい。

何処が好き、そんなものあげ始めたらキリがない。いろいろありすぎて言いきれない、語っていたら月が沈んで日が昇ってしまうかもし

れない。

「だけど、一番好きなどころは間違いなくこれだと言える。」

「……頑張ってる姿が、努力家なところが、一番好きです」

「頑張ってる……とこころ」

何かを呟くと紗夜さんは階段を下り始める。既に立ち位置は入れ替わるが見ている方向は変わらない。そのためお互いに顔は見えないが今はそれがありがたい。

今、自分がどんな顔をしているかわからない。赤いのかにやけてるのか、もしかしたら普段と何も変わってないかもしれない。

「あなたは私と日菜と、どっちが好きなんですか？」

チクリと胸に何かが刺さるなんてものではない。殴られるかのような強い衝撃が襲ってきたかのような気がした。

聞かれたくないこと、答えがでてないこと。なんて答えるか、答えられるかわからないその問いには何も返せない。

「……今すぐには言いません」

「……いいんですか？」

「日菜にも同じことを言われたんですね？」

それは救い、延命、逃げる手助け。答えられないことに答えなくていいと、まだいいと言われとても安心していている自分がある。

「ですから、私は待ってます……ずっと」

それだけ言うと言夜さんは止めていた足を動かし始める。時間がだいぶ遅いというのもあるし恥ずかしいのか一人で帰りますと言われた。

ここで一緒に帰りましょうとは言えなかった。言ってもよかったが僕も少しだけ一人で考えたかったからここに残ることにした。

「待ってます……か」

現状維持では駄目だと、このままは永遠には続かないと遠回しに言われてしまった。

僕はどうすればいい、どちらを選べばいい。誰か教えてくれ。妖怪でも友達でも知り合いでも、幽霊だって二人だって神様だっていい。

「……どうしたらいいんですかね」

偶々ここは神社だし聞けば神様が答えてくれるかもしれない。

ここに祀られているのが何の神か知らないし、徳だつて少しも積んでいないだろうが。

「苦しい時の神頼み……か」

人はサンタクロースを信じていない癖に神様は信じたがる。自分に都合のいいように勝手に信じている。

わからない。今は苦しいのだろうか、この迷いは苦しいものなのだろうか。こんなにも贅沢な悩みなのに苦しいという感情は合っているのだろうか。

「決めなきや……だよなあ」

待つのは嫌いだけど、待たせるのはもつと嫌いだ。相手に悪いから。

そう遠くないうちにこの思いを決めなきやいけない、選ばなければならぬ。例えば僕が選ぼうとしなかったとしても二人はいつか聞き出してくるかもしれない。

ポツリと弱々しい雨でも降ってしまったばいい、鉛のように黒くて強い滝のようなものだろうと構わない。

ああ、洗い流してくれ。それが悩みを消し去ってくれれば楽なのに。

上を見たところで星も月も、空は黒く濁りきつて見えやしない。

空に手を伸ばしても雨は降っていない。心は迷いが溢れきつて止まりはしない。その器は、空っぽのままだ。

そのくせそれは一人でも大変だ。もし二人ともなればそれは……許容力を超えてしまう。幸せが、溢れて全てを押し潰してしまうだろう。

階段を下つっていると近づいてくる明かりと音に、僕は意識を釣り上げられていった。

想起

あれから一日、私は自分の部屋に入ってベッドの上に座り込み昨日の事を思い出す。

昨日のことは私の中で消えてくれないものとなった。既に1日経っているというのに今思い返しただけで顔は赤く染まり、胸がゆっくりと鳴っていくのが感じられる。

「悠さん……」

前日の夜はどうしても眠れなくて、当日の朝は天気予報に加えいつもなら欠片も気にしていない朝占いの結果に少しだけ喜んだ。

昼にはRoseliaの練習も思ったようにすることができずらしくないと注意されてしまった。そして夜は……自分でもよくわからない。

全てが楽しかった。金魚すくいだって、亀すくいなんてものまでやった。それ以外にわたあめも美味しかった。

ただ射的に関しては彼はああいった遊びが得意だと思っていたから私の方がよく取れて少しだけ驚いた。

久しぶりにやったのに、勝負をしたわけではないが少しだけ嬉しかったのは本当だ。だけどあの後日菜を見かけてしまった時。気づかないでと心から願ってしまった。

それはどちらにも。日菜に気づいてほしくなくて、悠さんにも気づいてほしくなかった。

「別に謝らなくても……」

どうして彼の手を掴んだのか。それはあの時にはまったくわからなかった。

日菜のことは見てほしくなくて、私だけを見てほしくて反射的に掴んでしまったのだと今ならわかる。彼はそれを、そんな私の気持ちを知っているからこそ謝ったのだろう。

気づかれていたのかそれともあれで気づかれたのか。わからないけどとても恥ずかしかったことだけは覚えている。

手を繋いだまま神社に向かうあの時間はとても不思議なものだっ

た。

夏、それに加え雨が前まで降っていたのだからいくら夜とはいえ暑い。だけど繋いだ手は暖かった。暑い、ではなく暖かい。不快な感じは欠片たりもしなかった。

進む度に人が減り周りの音がどんどん聞こえなくなっていく。それに比例するように明かりもどんどんなくなっていく。暗くなっていた。

それは他に誰もいないんだな、二人きりなんだなと嫌でも思わされた。

私は言った、彼が好きだと。彼も言った、私が好きだと。だけど彼の好きは私の好きと一緒にではない。私の好きには彼しかいない、私の恋^{好き}してるには彼しか見えない。

じゃあ彼の好きは？ 悠さんの好きには私以外にも映っている。私だけじゃなくて日菜もいる。

彼は言った。真面目なところが、普段と違うところが、私の音が好きだと……そして、頑張っているところが好きだと。

「頑張っているところが……」

それは私のすべて。才能に溢れているわけではない私の。

それは日菜にはなくて私にしかないこと。彼は結果じゃなくて頑張るところが好きだと言ってくれた。それが嬉しくて泣いてしまいで、しめつけられるように胸が痛いのに心地がいい。

それは時間がたった今でもあの日握っていた手を見るだけでゆっくりと浮かんでくる。

それを胸に持つてくるとなんだか幸せに思えてくる。心が溶けてしまふと思う。

あの後は顔を見れなかった。赤くなっていた、綻んでいた。下りる時に見えた悠さんの顔はそうだったけれどきつと私も同じような、もつと酷い顔をしていただろう。

「……はあ」

ため息を一つつくつとベッドに横になり天井の明かりに手を伸ばす。あの時間けなかったのは、私と日菜とどちらが好きなのか聞けな

かったのは日菜は聞かなかつたのに私だけ聞くのは不平等だから。

……なんてのは言い訳にしかすぎないだろう。怖かった、ただそれだけだ。日菜と言われるのがどうしようもなく怖くて聞けなかつた。

彼は私の努力を好きだと言ってくれた初めての人の。親も教師も、知り合いだつて頑張つて偉いとは言つてくれる。

だけどそれは偉いと認めてくれるだけで日菜の方がいい結果を出せばそつちをより褒めるのは当然だ。

今まで耐えてきた。堪えてきたそれを、彼は壊してくれた。

もしそんな彼にまで日菜と言われたら……どうなつてしまうか、自分でもわからない。

「おねーちゃん」

「……どうしたの？」

相変わらずノックをせずに日菜が勝手に入ってくる。体を起こしながら返答をするが、もう慣れてしまったそれには前までと違ってイライラすることはない。

けどその理由は慣れたからじゃなくて少しだけ、でも確実に仲を戻せたからなんだと思う。

「あのね、昨日……なんだけどさ」

——告白、したの？

普段からは想像のつかないその声色は興味、感心、そんなものは大きく感じとれなかつた。

少しは気にはなるのだろうがやはりそれ以上に怖いのだろう。なんて答えられたか、私と答えなかつたか。

「……やっぱりしたんだ」

「……それは今井さんから聞いたの？」

「ううん、あたしも悠君に告白したときは今のおねーちゃんみたいだつたからさ」

私の隣に座ってきて日菜は言う。

「告白したらさ、すっごく胸がキュツてなつて苦しくて、あとその時の事を思い出すとちよつと独り言が多くなつちやつて」

「……漏れてたかしら？」

「うん、聞こえてたよ」

恥ずかしい、顔から火が出るというのはいくらなのだろうか。しかしそんなに大きな声で呟いていたのだろうか。

もしかして、そう思い思い返してみると扉を閉めていなかったことに気づき更に恥ずかしくなる。

「……それで、どうだった？」

「聞いてないわ、私も」

「……それはあたしが聞いてないから？」

「それもあるけれど……怖かったからよ」

そっか、そう呟く日菜は先ほどとはうって変わって安堵した表情を浮かべている。

いつもならなんでと聞いてきそうだがそれがないということは……やっぱり私と一緒に、怖いのだろう。

「……案外知らないものね」

「どうしたの？」

「なんでもないわよ」

こんな日菜、今の今まで知らなかった。全てを自分のものにするかのような日菜がこんなに何かに怯えたような姿を見たのは初めてのこと。

それを見て私は全然日菜の事を知らないんだと気づく。彼は私の知らない日菜をどれだけ知っているのだろう。

「そういうええおねーちゃん、悠君にどこが好きか聞いたの？」

「……聞いたわ」

「そっかー、あたしは努力ってできないからさ」

この前は嫌みのように聞こえたが今回はそうは聞こえない。本当に羨ましがっている、そんな風に聞こえた。

日菜にはできなくて私にはできること、彼がそれが好きだと言うのなら日菜は辛いだろう。

日菜は努力ができない。しないじゃなくて、できない。才能があるから、私やそこらの人とは比べ物にならないほどの才があるからこそもの。

「……あなたは才能があるしね」

「むー、それならおねーちゃんだつてあるじゃん」

「私にも?」

「努力するのも才能なんじゃないの、あたしができないことなんだから違うなんて言わせないよ」

努力するのも才能。考えたこともなかったその言葉は私の心にス
トンと落ちて劣等感の雨を覆う傘になる。

もしこれが誰でももない、見たこともないような人の薄っぺらい言葉
ならこうはならないだろう。

日菜だから。私の中で勝手に雨を降らせていた相手だからこそ傘
になつてくれる。

「……確かに、人間誰しも才能を持つてるのかもね」

「そうだよ、他人つて面白いんだよ!」

本当に日菜は変わった。理解できないものを少しの思考もせず
に掃いていた頃とは違う。

今ではその個人による違いを理解しようと、人は違うのだと考える
ようになった。そしてそれを良しとするように。

それはPastel*Palettesの人達のおかげか、それと
も……彼のおかげでもあるのか。

「じゃあさじゃあさ、おねーちゃんは悠君の才能つてなんだと思う?」

「悠さんの才能?」

遊びが得意なことだろうか。優しい事は……才能に入るのだろうか?
か?

こうして考えてみると私は彼の事を全く知れていないということ
に気づく。

寄り添えて私達の仲を戻させてくれた。そんな彼の事を私は何も
知れていない。夢中になつて、好きと思つているにも関わらず何も知
らない。

「そうね……」

悠さんの才能か。一つ思い付いたがこんな事彼に失礼ではないだ
ろうか。

そもそも彼にそんな気はないのかもしれないがそれでも事実なのだから仕方がないのかもしれない。

「女誑しの才能……かしらね？」

「……あはは、確かに！」

手を叩いて笑う日菜を注意することはしない、しかしながら私も我ながらいいことを言ったと思う。

そう、彼は女誑しだ。私も日菜も、こんなにも夢中にさせられている、好きにさせられている。

他の人にやっているかはわからないけどそれでも言いきるには十分だろう。

「あー、笑いすぎてお腹痛いよ」

「……悠さんには内緒よ？」

「わかってるって」

私と日菜はもう一度小さく笑い合う。ああ、こんな日はいつまで続くのだろう、いつまでも続くのだろうか。

いや、きつと彼がいる限り続くだろう、ずっと。

……だが彼の一番は私だ。それは、譲れない。

睡眠

1日の時間は決まっている。誰が決めたわけではない、ただ誰もが、全世界がそれを基本として過ごしている。

「ねみ……」

暗い部屋、明るい空、空になった飲み物に光を発するパソコン。駄目な人間のお手本みたいになってしまっている。徹夜なんてするもんじゃない、そんなことはわかってる。

だけど1日をほんの少しでも長く過ごしたい、この夏休みを一瞬でも長く感じていたい。そんな子供らしい考えからやることのないゲームをして二日も徹夜してしまってる。

そんな事を考えていると急にインターホンが鳴った。母親がまた使えないダイエツトグッズでも頼んだか、はたまた姉がゴミを送りつけて来たのか。

今家にいるのは僕一人だから面倒くさいが僕がでるしかない。腕を伸ばすと軽快な音が肩から鳴る。座りっぱなしで痛んだ背中を叩きながら判子を持って玄関を開ける。

「やつほー、遊びに来たよ」

「……来るなら先に連絡しといてよ」

「……別に来るのは大丈夫なんだ」

扉を開けるとそこには日菜がいてなんでもないかのように家に入ってくる。少しは驚いた方がいいのかもしれないが徹夜のせいでそんな元気はない。

別に来るのが駄目な理由は何一つとしてないがやはり来るなら先に連絡の一つでもいれておいて欲しい。もし親がいたらめんどくさいことになるのは確定だろうし。

「……で、今日は何しに来たの？」

「遊びに来たって言ったじゃん」

そんなことを言いながら日菜はリビングのソファアーに飛び込む。僕の家遊びに来たと言われてもとても遊べるであろうものはない。

家庭用のゲーム機だっただいぶ前に売ってしまったし、それ以外の

ものも……そも他人の家で遊ぶって何をするのだろうか。

中学の頃他人の家に遊びに行つたとしてもゲームしかしなかつたし、こういうことは何一つとしてわからない。

「なにか飲む?」

「ジュースがいい!」

ジュースといえる類いのものはなかつたので唯一それっぽいコーラを冷蔵庫から取り出す。リンゴとかオレンジのやつがあればよかったのだが、我が家は飲み物に関してはそのままで品揃えが豊富ではない。

酒とコーラと栄養ドリンクしか入っていないのは豊富ではないどころではなく悪すぎるかもしれないが。

「で、何するの?」

「うーん、トランプとかでもいいけど……まずはちよつとだけ話したいな」

そんなことを言われながら日菜の隣に座りコーラを手渡す。話したいこと、それはなんとなくわかる。こうやってあんまり元気がなさげに話してくる時は大抵紗夜さん絡み、最近気づいた事だ。

「おねーちゃんに告白されたんだよね?」

「……見てたの?」

「いや、おねーちゃんから聞いたんだ」

なんだろう、日菜が遠くに行つてしまふんじゃないか、不思議とそう思つてしまう。天井を見ながらそう言う彼女は事実なんと思つているのだろう、僕にはわからない。

「それで、どうだったの!?!」

「……急に元気になるね」

「だって悠君とおねーちゃんの話だよ、気になって夜しか寝れないもん!」

口ではそう言っているものの明らかに無理をしている、それはちよつと見ただけでもわかる。空元気というやつだ。

どうしてなのか何故なのか、それが嫌なくらい気になって仕方がない。

「ねえねえ、教えてよ」

「……何かあったの？」

「それは私が聞いてるんだって……」

「日菜のことだよ」

「……なんのこと？」

「無理矢理元気になろうとしてる感じがしてさ、ちよつと引つ掛かった」

僕の好きな日菜は元気な日菜だ。それは心の底から元気な日菜であつて、表面だけ元気なものじゃない。そんな日菜だから、好きになつてしまったからこそ笑つていてほしい。

「……わかるんだ」

「わかるさ、なんとなくだけど」

「……やっぱりなんでもお見通しなんだね」

あーあ、と腕を伸ばしながら呟く日菜は下を向き少しの間黙りこむ。なんとも緊迫した感じで肌にチクリと刺さるような何かすら感じてしまう。

空白の時間はとても長く感じて、我慢してた欠伸がついに漏れだしてしまった。

「悠君、もしかしてまた寝てないの？」

「……寝てない」

「別に寝てもいいんだよ？」

「……そしたら日菜が暇になるけど」

「大丈夫だって、ほらほら早く寝ちやいなって」

ブランケットを投げつけられる。気にはなるしどうにかしたいと思う。だけど聞かれたくないのだろうか、だんだん早口になつていつている。

ブランケットを投げつけられるのは異常に早かつたのだから聞かされたくないのは確定だろう。まあ、嫌ならばそれを無理矢理聞こうとは思わない。

いつか聞かせてくれればいい、解決していなければ。できればそんなことない方がいいのだが。

「適当に起こして……」

「わかった、おやすみ」

悪いとは思う、だけどこれは徹夜をした罰。いつかポテトとか奢らせて貰うとしよう。目を閉じると痛みがやって来ると同時に思考が急に鈍くなつて、あつという間に意識は落ちた。

「ほんとに寝ちゃったんだ……」

あたしの隣ですやすやと眠る悠君は気持ち良さそう、そんなに眠かったのだろうか。

「なんでも知ってるんだなあ」

ずるいよ、どうしてわかるの。おねーちゃんにだって気づかれなかったのにどうして悠君は気づいてくれるの？

なのに聞かないのだから相当質が悪い。こんなこと聞かれたくないっていう私の気持ちもわかってているのだろうか。

一番最初は理解しようとしてくれる君を好きになった。今でもそれは変わらないし、増えていつてる好きなどころはそれこそ日が暮れるくらいには言い続けられる自信だつてある。

それに今では悠君は私の事を理解してくれる、誰よりも。それこそ……おねーちゃんより。

だから怖い、どうしようもないほどに。君が遠くに行ってしまうんじゃないかと思ってしまう。もし君を取られたらどうなるのだろうか。君はあたしの事をそれでも好きでいてくれるのだろうか。

だけど、そんなことを思っているけど悠君はあたしじゃなくておねーちゃんの方が好き。それは勘だけど、あたしの勘はよく当たる。だけどこれだけは外れて欲しいな心から思う。

「聞いても……どうせ答えてくれないもんね」

悠君の顔を見ながらそう呟く。優しいから、あたしを傷つけない為にきつと彼は答えない。わからないと言って答えない。

その優しさはとても辛いけど凄く安心したりする。もし本当にわからないのならそれでいい、それでいてくれるのが一番だ。

ふと肩に何か乗った。何かと思い見てみるとそこには悠君

の顔があつた。

顔が一気に赤くなつた、心臓が破裂しそうになる。やっぱりどうしようもなく好きなんだな、そう思わされる。

優しく彼の頭を私の膝の上に移動させる。こんなことおねーちゃんはしたことはないだろう。ごめんねと心の中で謝りながらも彼の顔を見下ろす。

「暇になんか……ならないよ」

普通の顔、探せばどこにでもいそうなのにこんなにも特別に見えるのはなんでだろう。いつもと違い眼鏡が外れた君が少しだけかっこよく見えるのはなんでだろう。

どうしてこんなにも夢中になるのかわからない、それはおねーちゃんを見てた時と似ているが少し違う。

あたしの好きなおねーちゃんは悲しませたくない、だから彼には是非ともおねーちゃんを選んで欲しい。だけど大好きな悠君はあたしを選んで欲しい。

絶対に同時に叶うことのない二つの願い、強欲だ。そんなことはわかつてる、それでもどっちも叶えて欲しい。

方法は何一つとしてわからない。なればこそ、どっちも叶えないでいてほしい。

ああ、もしあたしが悠君に愛されなかつたらどうするのだろう。泣いちやうのかな、怒るのかな、狂っちゃうのかな、もしかしたら……死んじやうかも。

……まあ流石にそれはないか、だって死んだら悠君に会えなくなっちゃうし。こんなことを考えさせられるくらいに悠君のことが好き、大好き、愛してる大好き。

「しても……バレないかな？」

ちよつとだけ悪戯したくなつてしまった。寝ちやつた彼が悪い、私を置いてしまった君が悪いんだ。唇の一つや二つ、奪つてしまつても構わないだろう。

それに君とおねーちゃんの仲直りを手伝つた時のお礼もまだ貰つてないしね。少しでも近づけると酷くいけない事をしようとしてい

る感覚に襲われる。

合意も得ていないし誰かに見られたら大変だ、もしこんなところを撮られたらきつと大変な事になる。

だけどそんなことはどうでもいい。思いきったかのようにゆつくりと彼の唇に自分のものを落とすと、何かが、全てが溶けるような気がした。

あたしの始めて、小学生くらいの頃眠ってるおねーちゃんにやった時を含めなければの話だけど。

今この瞬間思うものは、感じるものはたった一つ。

夏は感じない。おねーちゃんもここにはいないしもう振り切ってやってしまったと思うことはない。ただそれは、キスという行為は。

——あまりにも、刺激的なものだった。

脳が焼けて焦げて壊れてしまいそう。離れた唇が少しだけ寂しくて悠君以外がボヤけて見える。

こんなことをしてるのに起きないのは少しだけ悲しい、けどもちよつと安心する。今こうして恥ずかしいと感じているのも嬉しいと感じているのもあたしだけ。君は、何も知らない。

どれだけの時間が経っただろう。彼の頭を飽きずに撫でていると彼の目が開いた。

今の状況が理解できていないのか暫く動かなかつたけど、膝枕されていると気づいたのか顔を赤くして跳ね起きる。

きつとこういうのは始めてだったんだろう。ちよつと悪戯気味に、どうしたの？ と聞いてあげると、こういうのは恥ずかしいからやめてと言われた。

やっぱり気づいてないんだ、キスのこと。他人のことにはすぐ気づく癖に自分の事は本当に鈍感だ、そこがまた可愛かったりするんだけど。

時間だから、と嘘をついて悠君の家を出る。コーラは飲みかけのまま置いてきた。

君はどうするのか、もしかしたら飲んでくれるだろうか。いや、彼の性格的にどうせなにかしら理由をつけて次あった時に渡してく

るだろう。

「ほんと、かわいいね」

そんな純粋な君の知らない間に汚してしまったと思うと、どうしようもなく興奮する。

この感覚は癖になってしまっそうで不安で、この感覚と一緒に何か、何か薄れていく気がした。

その薄れていく何かはとても大切なもの、そんな気がする。だけどそれがなんなのかは、あたしにはわからない。

当落

外は体が溶けてしまいそうなくらい暑い、というのにコンビニの中というのは驚くほど冷たい。

電気代どうなってるんだとかそんな事を考えてるわりにはその涼しきは恋しく、目立った理由がなくてもふらっと立ち寄ってしまう。

わざわざ週刊誌の新刊を読むためだけにコンビニに出向くのは馬鹿らしいと思つたが、こういうのは一度でも怠るとめんどくさくなつてそれ以降来なくなってしまう。

まあ立ち読みなんてやめた方がいいんだろうけど、そんなことを思いながら頁を捲る。

「これも終わりか……」

人気がない故の宿命か、次回作にご期待くださいと書いてそのまま釈然としない終わり方。

主人公がガールズバンドのメンバーの誰を選ぶか決めて、その相手は誰かわからないまま。

まあ誰を選ぶとかなると読者側から文句が飛んでくるからこういうのが一番いいのかもしれないが。

「あーあ、ほんと糞」

そう溢しながら本を元の場所に返す。気に入っていた作品にこう言うのはどうなのかと思うが気に入っていた故に文句がある。

話を伸ばすためか知らないが主人公がどんどん優柔不断気味になつていったのが気に入らなかつた。それは読んでいて心地のいいものではなかつたし、何より自分を見ているようだったから。

先伸ばしにして逃げているのが重なつて、とても気持ち悪かつた。週刊誌も読み終わったのでコンビニを出てもいいのだが、折角来たのだし外の気温もあるのでアイスの一つや二つは買っておきたい。

ポケットに手をつ突っ込むとジャラジャラと……鳴ればどれだけよかつただろう。実際はアイスを買えば殆どなくなってしまう程度にしかない。

しかし一度誘惑されると人間弱いもので金に余裕はないとわかつ

ているのについつい手にとってしまう。

「袋に入れる？」

「お願いしま……」

店員らしからぬ対応をされふと相手の顔を見たらその相手は見知った顔、リサさんだった。向こうはわざとらしく驚いた顔をするが流石に無理があるだろう。

「……何してるんですかこんなところで」

「バイトだよバイト、そんなにおかしく見える？」

はい、とは答えられないので適当に誤魔化しておく。用事もないのに長くいても涼しい以外に何もいいところはないので店を出ようとしたところをリサさんに呼び止められた。

「あと十五分程度で終わるからさ、外で待つててくれない？」

「……わかりました」

冗談じゃない、それならコンビニ内で待たせてくれ。とは思ったものの一度了承したものを守らないわけにはいかなかったので外に出る。

ああ、本当に暑い。家に帰って扇風機の前でアイスを食べるかという計画が僕の中にはあったのだが、この地獄のような暑さの中少しのオアシスがあれば求めてしまうのは人の性。青い空を眺めながらアイスを口にする。

「どうすんだろなあ……」

他人事のようにそれを口にする。僕はどうするのだろうか、どうすればいいのだろうか。

怖い、自分の選択が。自分だけではなく他人までも動かすこの選択がどうしようもなく怖い。もしこの選択で二人が悲しむのは嫌だ。

選ぶにしてもどうするんだろう。なんで選ぶんだどちらを選ぶんだ、どこで、いつ選ぶんだ。そんなことすら決まってる。

だけどただ決まっているのはいつか選ぶということだけ。早い方がいい、そんなことはわかっている。わかっているでも考えたくはなくて思考をそこで止めてしまう。

空を流れる雲は夏の癖に冬の頃と変わらぬ形をしていて、時間が止まってくれている気がしたのは僕の妄想か。

選ばなくていいかな、何度考えたかわからないその選択肢。足元にあつた石を蹴つてみれば見失い、食べ終わったアイスを見てもそこには当たりと書いていない。それを思考と一緒にゴミ箱に捨てた。

「お待たせ〜」

リサさんがコンビニから出てくる。ただただブーツと空を見上げていただけだったのだが案外時間はすぐに経ってくれるものだ。それは怖くもあるのだが。

「どうなの、二人とは?」

「どうもこうもないくらいには順調ですよ」

「ふくん、順調ね〜……」

僕の言葉が信じられないというかのように聞き返してくる。何も進展がないというわけではないが、特段何か大きな事が……告白されたいしそれはあるか。

まあどうにせよ嘘は何一つとしてない。こんな風に怖がってるのも悩んでるのも、どうせ僕一人なんだから。

「……ここじゃ暑いしどつかで飲みながら話さない?」

「生憎ですが金がないので」

「ふぶん、そこはお姉さんに任せとけて」

後で返してよ? ときつちり付け足されたが。別に言われなかったら返さないというわけではないけれども。そんなことを考え話ながら移動する。

「Roseliaの皆さんは最近どうなんですか?」

「いやーそれがね、夏休みだつてのに練習練習。少し休みをつて言っても全く聞いてくれないんだよ」

「……の割には不満は無さげですけどね」

「あれ、わかっちゃう?」

そんな楽しそうな声で言われたらわからない方がおかしい。そんな皆さんと対称的に僕は夏休み何をしていたのだろう。

夏祭り行って……それ以外は家でニートか友人と遊ぶしかしてない。まあそれ自体が悪いことは欠片も思わないが。

「いやー、友希那も楽しそうだし、なんやかんやでアタシも楽しいって思ってるから」

「友希那……ボーカルの人ですよね？」

「そうそう、幼なじみなんだ」

家も隣だしね、と付け足される。その後は延々と友希那さんの話をされる。猫好きだとか苦いのが苦手なんだとか、最近はこのことがあつたとか終わる気配がない。

まあこちらから話せることは何もないし、楽しそうに話しているのだから止めないが。

「あ、ごめんね、アタシばかり話しちやつて」

「別にいいですよ。それにしても仲いいんですね」

「まあね、でも悠と日菜もそう見えるよ？」

「……そうですか」

そんなこんな話をしながら歩いていると、ここでいいかなと言われたカフェに入る。そこは外に比べると涼しいがコンビニを味わった後だとやはり物足りなく感じてしまう。

「……それで、まだ悩んでるの？」

「決まる気がしないですよ」

だよねえ、と目をそらしながら言われる。僕に度胸がないから決めきれない、勇気がないから振り切れない。

あの作品みたく僕は優柔不断な駄目人間。経験がない、知識がない、そんな言い訳をして遠回しにしている。

「うーん……もしアタシが悠の事好きって言ったらどうする？」

「……………は？」

「もしもの話だよ……紗夜とアタシだったら？」

「……選べないですよ」

「相変わらず優しいね、素直に紗夜って言えばいいのに」

笑いながらそんな事を言ってくる。事実僕は間違いなく紗夜さんを選ぶだろう。リサさんには悪いけど迷う暇もなくそれは決まった。

決してリサさんに魅力がないわけじゃない。だけど思いの深さが、時間の差が、見えなくなるほど違うから。

「日菜でも一緒でしょ?」

「……まあ」

「なら大丈夫だって、紗夜と日菜の二人で悩めるんだからいいじゃん。他の女の人に目移りしてるわけじゃないんだし」

「ちゃんと時間かけて、後悔しない選択をできれば大丈夫、と言われる。」

時間をかけてか、それでいいんだ、それでもいいんだ。少しだけ、気休め程度だとしても楽になれた気がする。

「ありがとうございます」

「いいっていいって、この前は聞かれたのに何も言えなかったしさ」

「律儀な人だ。そもそも僕の問題だというのにわざわざ考えてくれるだけでも申し訳ないのに、こうやって助けられるような事を言われるとなると感謝してもしきれない。」

そんなことを思っているとリサさんは何かを思い出したかのよう
に鞆を漁りだし、何かを取り出した。

「迷える君に助けを与えてあげよう」

「これは?」

「Roseliaのライブチケット、偶々一枚余ってたからさ」

「……偶々、ですか」

「偶々、だよ」

「偶々か、それなら断る必要もないし貰うとしよう。いくらか尋ねてみたが、いらなと言われたのでありがたく頂戴した。」

「今週末だよ、絶対来てね」

「行きますよ、絶対」

「うんうん、紗夜には言わないでおくね」

「ここまでしてもらって支払いを任せるのは大変心苦しいが今は手持ちがない。料金のかかるものを頼んでないのでそれで許して欲しい。」

店を出た後スマホを見てみたら、友人から遊びに行かないか、という趣旨のメッセージが届いていた。

しかしその日は丁度このライブと同じ日、しかしこいつはこの前僕

がその日遊びに誘った時は、予定があると断っていた筈だが。

『予定はどうしたんだよ』

『実はライブのチケットが買えたら行く予定だったんだけど買えなかったからさ』

『なんのライブだよ』

『Roseliaってバンド、最近凄いいんだぜ？』

『残念ながらその日は予定あり』

『そうかい、他のやつ誘うわ』

何が偶々売れ残っただ、なんとなくわかっていたがやっぱり嘘じゃないか。

もし僕がRoseliaのチケットを持っていると言ったらこいつはどうするだろう、金を出して僕から買い取ろうとするだろうか。

「ま、いくら出されても渡さないけど」

偶々手にいれたんだ、手放すはずがない。

ああ、夏休みの楽しみが増えるのはいいことだ。

作文

課題というのはどれだけやっても慣れやしないう好きにもなれない。特に夏休みとなるとその量は莫大と言っても誇張にはならないだろう。

ただ答えを横に置き、そこに書いてあることを教師にバレないようにある程度間違えながら写す。それでいいという事は頭ではわかっているのだが、それでも面倒くさいものは面倒くさい。

しかしそんなロボットに成り下がってしまったても出来ないことがある。

「夏休みの思い出……ねえ」

作文、それも夏休みの思い出。夏休みはまだ始まったばかりだし、何かしら書くことくらい起こるだろう。もし起こらなかったとしても最悪ネットに載ってるやつを写せばいい。

しかしもし写したことが教師にバレたらどうなるだろう。怒られることもやり直しをくらうことも想像に容易い。

そんなのバレないだろうなんて何度も思ったし、実際にやった友人はバレてない事が多い。だがもしも、ほんの少しでもあるのであればやらないにこしたことはないだろう。

『今週は待ちに待った流星群ですね』

『街から見えるかわかりませんが楽しみですね』

つけっぱなしのテレビからはそんな音声が流れてくる。最近のニュースはこんなんばつかで流星に飽きぐる、別にニュースは見えて面白いと思うことはとても少ないが。

もし行けば作文のネタくらいにはなりそうなのだが、生憎天体観測ツアーの申し込みのチラシを見つけた頃には募集期間は終わっていた。もし終わってなかったとしても一緒に行く人がいないから行かないだろうが。

街から見える流星群なんて程度が知れてるだろうがある程度楽しみにしているのは本当だ。作文のネタ程度になつてくれるのを期待しておこう。

ショッピングモールの屋上ならよく見れるのではないだろうかとは思っていたが、満身に流星群が見れる時間は屋上に立ち入れるかわからないから諦めた。

外は隠すものがなく太陽が照りつけている。こんな日は外に出たら溶けてしまいそうなので家に籠るのが吉。それに今日は日菜がまた遊びに来るらしいので家から出ないのが丸い。

前回言った反省を生かしてくれたのか、今回は日菜から遊びに行くとの連絡が事前にきている。と言っても今朝に送られてきたのであまり大差ないが。

しかし今日も今日とて運よく家にいない。夏休み中は旅行や仕事、古い友人と会うなり忙しいよう家でいる時間は少ないようだ。

少しは家にいると思うのは本当だが、いないはいないで自由度が段違いなので出かけてくれて構わない。

そんなことを考えているとインターホンが鳴る。何時に来るとかは言われてなかったがもう来たのだろうか、まさか午前中に来るとは思わなかった。前回は寝てしまったので大変申しわけないことをしたと思っている。

なればこそその反省を生かし、きちんと寝るべきなのだろう。だがいかんせん今朝に連絡がやって来たので生かせるわけもない。ただ徹夜はしてないからどうにかなるだろう。そう思いながらドアを開ける。

「今日は早……」

「お届け物です」

予想とは全く違う人物で思考が止まった。だが数秒で頭は回りだし少し待ってくださいとだけ告げて判子を取りに行き、それを押す代わりに荷物を受けとる。幸いお金は払わなくてもいいらしく、配達員はそのまま帰っていった。

期待していたのだろうか、割れ物と書いてあるその段ボールをリビングの机に置いてからソファに横になる。それは間違いないだろう、期待をしていなければドアの向こうを勝手に想像したりしない。

待つなんてゲームやSNSを眺めていれば一瞬だ、しかしそれは

過去の話。今は待っている間……と言っても紗夜さんと日菜に限った事だが、ゲームやSNSが酷くつまらなく感じてしまう。

どんなゲームでも、他人の眩きを眺めていても、早く来ないかなと思ってしまう。あれだけ気に入っていたゲームでも、二人を待っている時間には何かは抜け落ちたかのように面白くなく思えてしまう。

「はあ……」

一体僕はどこまで好きなのだろう。山より高く好いている。ありふれた表現だが間違いはないかもしれない。だがこれは、高いではなく深いもの。

海より深い、何処までも深いもの。落ちてしまえば戻れない、墮ちてしまっているから手を伸ばす。

手を伸ばせばそれだけで気が紛れる、少し触れれば安心する。そこそ待っている間は心が渴いて仕方がないとすら思える。

これは普通ではないのだろうか、過剰なのだろうか。何分初めての事だから全くわからない。好きになるというのは、恋をするということとはここまでのことなのだろうか。

そんなことを考えているとインターホンが再度鳴る。ふと日菜が来たのかと期待する自分が出てくる。しかしどうせ来るのは宅配、そんな期待をさせるならば一度に届けてくれればいいのに。そんな事を思いながらドアを開ける。

「今日は眠そうじゃないね」

「……早いね」

「ほんとはもう少し早く来ようと思ったんだけどね」

「何してたの？」

「新曲の練習。録音したやつ持ってきたかったんだけど、事務所の人に止められちゃってさあ」

「そりやそうでしょ」

「でもさでもさ、別に一人くらいならよくない？」

「それなら僕じゃなくて紗夜さんに見せた方がいいでしょ」

まだ世間的には未発表の新曲、それを録音したものを持ってくるなんて流石にそれはどうかと思う。アイドルとして一人を特別に扱う

のはよくないだろう、それも家族でも何でもない人を。

「わかってないなあ、悠君だから見せたいんだよ?」

僕だから、か……嬉しいのは当然だし恥ずかしいのも本当。この前コーラを飲みかけのまま帰られてしまったのでそれを取りに行く。

一度蓋を開けてしまっているが時間が経ちすぎた訳ではないし、冷蔵庫に閉まっておいたから問題ないだろう。それに僕が飲むわけにはいかないし。

僕が飲み物を取ってくる間に、日菜は机の上に置いておいた夏休みの課題一覧を見つけたらしく、自分のものではないのに少しだけ顔を歪めていた。

「悠君のとここんな課題あるの?」

「まあね、日菜の方はどうなの?」

「あたしのところはもう少し少ないかなあ」

出されてもどうせ全部はやらないけどね、と付け足される。飲み物を持って隣に座ると日菜は急に笑いだす。

何かあったのかと聞いてみると、これだよこれ、と日菜は課題一覧に指を指す。

「夏休みの作文って、小学生じゃないんだから」

「……やっぱり他所はないのか」

「なにになに、夏休みの思い出……」

テーマを読み上げると日菜は急に静かになる。どうしたのだろうか、そう思っていると顔をこちらに向けて言う。

「悠君はこれの書くことって決まってるの?」

「決まってるないね、まだ」

「それじゃあさ」

ずいっ、と顔を近寄せて、続けて言われる。

「あたしと作ろうよ、思い出」

笑顔で言われた。太陽のような眩しきで、月のような優しきで。強調して言われた、あたしと、というところを。その問いの答えは二つ、しかしその選択は実質的には一択。

「……そうだね」

「やった！ 何にしよっかな」

漫画とかでよくある台詞の最後に音符がつくそれ、まるでそれが見てとれるくらい日菜は楽しそうだ。

「そうだ！ 今週って空いてる？」

「今週って……流星群の日？」

「そうそう、その日」

「でもツアーの申し込み終わってるし……」

「大丈夫だって、あたしに任せておきなって」

任せておけと言われてもどうするのだろう。バスとかは取れないだろうし……いや、そもそも山で見るとは一言も言っていない。

確か日菜は天文部に所属しているのだし、街中でよく見える場所でも知ってるのだろうか。

「楽しみにしておいてね」

「……そうしとく」

楽しみ、それは間違いない。楽しみじゃない筈がない。だけどなんなのだろう、少しだけ引っ掛かる。

これはなんだろう、何か欠けている。いったい何が足りないのだろうか。先ほどまでの会話を思い返してみてもそれがなんなのかわからない。

「あ、ちゃんと荷造りしておいてね」

その言葉に思考は中断された。荷造りとなると本格的なものじゃないか。いったい何処に行くんだと聞いても内緒の一点張り、こうなると親にも許可を取らないと駄目そうだ。

「ねえねえ、これからどうする？」

「……外でも行くか、この前寝ちゃった謝罪もかねて」

「わーい、あたしポテトが食べたいな」

遠回しながらに奢れと言われてる気がする。だけどまあ、こんな笑顔で言われたのなら断れるわけもない。

その後は昼飯を食べて色々買い物して。引っ掛かった何かは何なのか、それはもう考えることすらしなかった。

すっかり暗くなった空には、綺麗に欠けた月が浮かんでいた。

渦

夏というのは天然サウナのように蒸し暑い。家に籠ってエアコンをつけてゲームが出来れば最高なのだが、親に電気代が勿体ないと自室を追い出されてしまった。

リビングでは自室以上に低い温度でエアコンが設定されていたのでパソコンは弄れないにしてもそこに行けば冷たさは獲得できた。

しかし夏休みだからこそ勉強しなくちゃ駄目と言われてしまい、それから逃げるようにして家を出て今に至る。

「いらっしやいませー」

カラン、と扉は軽快な音を立て店に入ると同時に今まで求めていた冷たい風が肌に当たった。しかしそれは外との気温の差のせいか、少しだけ寒いとすら思わせてくる。

自分には似合わない。そんなことはわかってはいるが僕はこの店のリピーターになってしまった。とはいってもまだ指で数えきれる程度にしか来ていないが。

「あなたもすっかり常連客ね」

「……もしかして毎日来てるんですか？」

「まさか、あなたが来る時が偶々私がいる時なだけよ」

僕がこの店に來ると白鷺さんは高確率でいる。芸能人ってこんなにも会ってしまうものなのだろうか。

それにしてもこういう店に変装もしないできていれば白鷺さん見たさに行列が出来ていてもおかしくはないはずなのだが。

ちなみに白鷺さんを見たときは大抵相席になる。普通なら別の席、それも遠くの席にいると思うのだが白鷺さんは連れ人がいないときは僕を誘ってくる。

理由を聞いてみてら、席が離れたらあなたは話してくれないでしょうと言われた。

「私は人のいる時間帯を避けているからあなたと会うのかもしれないわね」

「……なるほど」

確かに僕はちよつと並んでいたり、並んでいなくても中に人が多そうだなと思えば店には入らない。だから白鷺さんと会う確率がそこまで低くないだけかもしれない。

「珈琲とクッキーです」

「ありがとうございます」

最近リサさんに合ったときにクッキーを貰った。何やらRoseliaの皆さんに配ったが作りすぎたとのこと。

珈琲に合うよと言われたので試してみたら、珈琲の苦味とクッキーの甘さがいい感じにマッチしててやみつきになってしまった。

またお願いできますか？ と頼めば作ってくれるだろう、だがそれを言うのは少しだけ気が引けた。なので気に入りましたとだけ伝えておいた。

そんなに欲しいのなら自分で作ればいいと一度は思ったが、自分で作ろうにもどうせ録な物は作れないだろうしなによりめんどくさい。優しい甘さと珈琲の苦味は癖になりそう、というよりなってしまう。財布には優しくないが。

「そういえば、あなた今週末日菜ちゃんと出かけるのよね？」

「そうですね」

「日菜ちゃん凄い楽しそうに言ってたわよ」

そう言う彼女はまるで保護者のよう。されど紅茶を口にするその仕草は流石女優と言うべきか、とても様になっている。

「Pastel*Palettesは最近どうなんですか？」

「どうもこうも大忙しよ、テレビは見ないの？」

「……すいません」

「まあ、日菜ちゃんが出てるやつくらいは見てあげなさい」

ため息混じりにそう言われる。あなたに見てもらえたら日菜ちゃんももつとやる気になると思うからと付け足される。

頑張る、ではなくやる気になるというのは日菜らしい。

「日菜ちゃんも大忙しなんだから、あなたからも構ってあげなさい」

そう言つて白鷺さんは立ち上がる。夏休みは稼ぎ時だとかでアイドルは引つ張りだとのこと。今度何処かしらに誘ってみるか、そん

なことを考えながら珈琲を口にする。

「あなた、今日予定はあるかしら？」

「今日ですか？ 特にないですけど……」

「それなら一時間くらいここにいなさい」

面白いものが見れるわよ、そう言い残して白鷺さんは店を出ていった。面白いものとはなんだろう、お笑い芸人でもやって来るのだろうか。しかし先程の通りそういった人は全く知らなくて。

しかし十数分ならともかく、一時間ともなると暇になってしまう。それに加え店からしても邪魔だろう。

一時間後にまた来ればいいか、そう思い立ち上がると店員さんから別にも構わないと言われてしまった。そんなことを言われると逆に帰り辛いので席に着きなおす。

大体一時間くらい経ったと思う。日菜が言っていた通りならばつぐさんだったかが帰ってきたくらいで、他には何一つとして起こっていない。

誰かに聞こうにも白鷺さんの連絡先は知らないし、知っていたとしてもすぐには出てくれないだろう。

そんなことを考えているとカラン、と扉の方から音がする。この時間帯なら一時的な休憩とかで客足が戻ってくる頃なのだろうか、どんな人が入ってきたのか扉の方を見る。

「紗夜さん？」

それはこういった場所が似合っていて、しかし来そうには思えない人。

もしかしてここでバイトでもしているのだろうか。とても紗夜さんがそのようなことをしそうとは思えないのが……白鷺さんの言っていた面白いこととはこの事だろうか。

後ろ姿ならいざ知らず、振り返っていたのだから当然向こうからも気づかれる。驚いたような顔をされてしまったが、そんなに僕がいるのがおかしく思えたのだろうか。

「悠さん、どうしてここに？」

「暑かったので……紗夜さんは？」

「えつと……私は……」

少しだけ顔を赤くして言い淀まれる、言い辛いことなのだろうか。そんなことを思っているとつぐさんの、準備できましたよ、という声が聞こえてきた。

僕の方と声の方を困ったように交互に見るその姿は小動物のようで可愛く見える。

理由もわかったしそれがこれならもう少しいてもいいが、僕がいて困るのであればいる理由はない。そう思い立ち上がった所で紗夜さんから声をかけられる。

「す、少しだけ待ってて貰っていいですか?」

「……わかりました」

今日はよく呼び止められる日だ。そんな風に思いながらまた一つ、珈琲を頼むことにした。

「紗夜さん、凄い上手になってますよ!」

「そ、そうでしょうか?」

私は羽沢さんにお菓子作りを教えて貰っている。毎週この日のこの時間は休みのわりに何故か人が少ないので、Roseliaの練習が早めに終わって羽沢さんが忙しくないという日はこうやって教えて貰うことにしている。

このようなこと意外だと誰もが言うが今井さんがクッキーを持ってきて、それのお陰でRoselia全体の空気が和む事は既にわかっている。

自分もそのような形でRoseliaに貢献できれば、そう思いお菓子作りを始めた。

羽沢さん以外にも今井さんに教えて貰う事はあるが、最近あの人にはどちらかという味をみて貰う事が多い。

理想は今井さんの味だった、Roseliaに渡すのだから寄せた方がいいと思っていた。

「でもまだ納得がいけてないんです」

「こ、これでもですか?」

「ええ、まだまだです」

そうだ、こんな物では足りない。ここからでは見えないが悠さんのいるであろう方を向く。

彼が今井さんの作ったクッキーを美味しいと言っていたと、気に入りましたって言われたんだと聞かされた。

そこで黒く渦巻いている何かが自分の中で感じ取れた。わからないなんてことはなくはつきりとわかった。それは、薄汚れたものなのだ。

とりあえずの目標は今井さんの味を超えること。だけど今井さんも悠さんも優しいから比較をお願いすれば必ず私の方を言ってくれるだろう。

しかしそれでは駄目だ、なので最近は湊さんに頼んで味見をしてもらっている。

音楽以外のことにも妥協をしない彼女はきっぱりと言ってくれる。それに今井さんのクッキーを長年食べて舌が肥えているのか、改善点すらも言ってくれる。

「とりあえず今日はここら辺にしておきませんか？」

「私はまだ……いえ、そうしておきましょう」

満足のいつていないまま終わるのはよろしくない。だが悠さんに待つてくださいと言っていたのを思いだし、流石に悪いのでここら辺でお菓子作りを切り上げる。

なぜあんなことを、少し待つてくださいなんて言ってしまったのか。先ほど作ったお菓子を袋に入れながら考える。

こんな程度の物を悠さんに渡していいのだろうか、何より自分ですら満足がいけないような物を渡すのは失礼ではないだろうか。

そんなことわかつているが待つてくださいと言ったのは私だから何も渡さないわけにはいかずそれを手渡す。彼はありがとうごさいますと言って会計に向かった。

ふと会計の内容が聞こえたが相当量珈琲を飲んでいたらしい。というのも一時間以上はいたらしく、何も頼まないでいるのは悪いという彼なりの考えからだろうか。

本当に珈琲が好きなんだな、そう思つて眺めていると目に入る、彼の少しだけ嫌そうな顔が。頼みすぎたかと、高い買い物をした今井さんのようなその顔が。

だがそれは小さなもので、羽沢さんも、きつと会計をしている人でさえも気づいていないだろう。

私だけが気づけている。そう、私だけが……

「紗夜さん、あの人とどんな関係なんですか？」

「どんな、と言われましても……」

「も、もしかして付き合つちやつてたり……」

「い、いえ、まだそこまでは……」

沈み混んでしまつていた思考が羽沢さんの言葉でつり上げられる。その質問はされるだけで恥ずかしくついでに顔を背けてしまう。

まだ、それは確定ではない。まだ、それには乗り越えなければならぬものがある。だけどそれは確かな目標だ。だけどそのためには……

「羽沢さん、私に珈琲の入れ方も教えてもらえませんか？」

「……え？」

「無理にとは言いません。今でもお菓子作りを教えて貰っている身ですし、これ以上の負担は……」

「だ、大丈夫です。でもいいんですか？」

「何がですか？」

「紗夜さんもRoseliaの練習とかで忙しいんじゃない？」

忙しい、そんな理由で中断するわけにはいかない、頑張らない理由にはならない。

もし少しでも妥協したら、頑張らなかつたら、私は氷川紗夜彼が好きになった人ではなくなつてしまう。

「私は大丈夫です」

「それなら……まずは少しだけ休憩しませんか？」

折角ですし珈琲とお菓子持つてきますね、と彼女は言うとお腹に消えていった。

私は日業に勝てる何かを探していた。色々なことをやって、それで

何もかもで抜かされてきていた。

だけど今は違う。日菜にだけではない、勝てる何かではない、一番になれる何かを求めている。

勉強ではない、運動でもない。なれたらいいとは思いますがそこまで固執しているわけではない。

——負けたくない。

どうぞ、と珈琲を差し出される。

——ギターも、お菓子も、珈琲も、頑張ることも。

羽沢さんは珈琲が苦手なのか砂糖を入れていた。

——今井さんにも、この店の出す物にも。そして、日菜にも。

私も少しだけ砂糖を入れてかき混ぜる。

——私は、彼の一番になりたい。

黒く渦巻くそれを、ゆっくりと飲み込んだ。

期限

まだ太陽が昇りきっていないほどの朝早く、夏休み期間中ではそろそろ寝ようかなと思いつき出すその時間に珍しく眠っていたら電話がかかってきて叩き起こされた。

『悠君、朝だよ！』

「……………早いよ」

イヤホンをつけていないのに耳がキーンとなるほどの音量でそう言われる。寝起きというのもあり頭の中でその声は響いている。

『そろそろ着くから、準備して待っててね』

「……………こんな時間に？」

『もー、今日は朝早いつて言ったでしょ？』

「いくらなんでも早すぎるって……………」

楽しみにしついでと言われたそれは今日のことと確かに朝早くとは言われた。泊まり込みだから着替えは持てとも言われたので一応準備した。

最近よく聞く泊まりでのキャンプなのかと思ったが、それ以外は大体あると思うから持たなくても大丈夫だよと言われたのもうなにもわからない。

準備は昨日のうちからしておいたので今さらすることもない。しかしこの時間はゲームをしてる人は非常に少ないわけで、当然SNSも動いている筈もない。

特にお腹が空いているわけでもないのに軽くお菓子を食べ珈琲を飲んで外に出る。満足なほどには睡眠が取れていないので大きな欠伸をしてしまい、そのせいか視界が濡れてしまう。

その後こんな時間には不釣り合いな大きな車が見えた。白いそれはトラックと表すのが最も正しいのだろうが、後ろの積み荷があるはずのところは扉がついているのが見えた。おそらくキャンピングカーというものなのだろう。

こんな時間にこんな大きな車を走らせる人間もいるんだな、そんな事を思っていたらその車は僕の目の前で止まり、その後ろにつけてい

た黒い車から何人かの黒い服の人達が出てきた。

その人達の姿はスーツにサングラス、不審者というよりかは護衛をする人という方が似合っているかもしれない。

テレビでしか見たことがないようなそんな人達は、何を思ったのか僕の目の前で立ち止まった。

「加々美様ですね？」

「……………」

「お嬢様と氷川様がお待ちです、どうぞあちらに」

なぜ僕の事を知っているのか、お嬢様とは誰なのか。この人達は氷川様と言った、おそらくこの場合は日菜だろうが、日菜はこの人達とどんな関係なんだろう。

黒い服を着た人達が一列に並んでいるこの状況が飲み込めず、頭の中で逃避するかのように思考を繰り返す。ふとあのデカイ車の窓から日菜が顔を乗り出しているのがみえた。

「悠君、早く早く」

僕は何を見ているのだろう、夢を見ているんじゃないだろうか。眼鏡を外し目を擦るも何も視界は変わらないし目の周りには少しばかりの痛みを感じさせられる。それのお陰かこれは現実だとわからされる。

楽しみにしててとはこの事なのか、戻してしまいそうな酸っぱさを口内に感じながらも諦めて日菜の元へ向かうことにした。

「あなたが悠ね！ 会いたかったわ！」

びくつきながら乗り込んだその瞬間そんな聞いたことのない声が飛んでくる。僕の手を取って上下に振って来るその姿は日菜を重ねさせた。だけどその姿は日菜とは似ても似つかない。

髪の色も違えば長さも違う、ならばなぜ重ねさせたのか、それはその目が似ていたから。

好奇心に満ち溢れたかのようなそれ、始めて会った時こんな感じの目を向けられた覚えがある。

やはりどうしてもこういった押し強い人は苦手で、どうしたもの

かと思ったていると、日菜が真ん中に割り込んできて手を離させた。

「ごころちゃん、悠君が困ってるよ」

「そうかしら？ とりあえず着くまでに時間はあるからお話しましよ」

ごころちゃん、そう言われたその人は高そうなソファに座りながらそう言ってくる。

まるで部屋を思わせるような場所、それも僕の部屋よりもよっぽど金がかかってそうなここで座る勇氣はなかったが、日菜に手を引かれて座らされた。

「あたしの名前は弦巻ごころよ！ よろしくね！」

「加々美悠です、よろしくお願いします」

「そんなに改まらなくてもいいのよ？」

「いや〜……」

あの黒い服が言っていた通りならば弦巻さんはお嬢様、何処かで聞いたことのある名前なのだから八割くらいは確定だろう。

そんな人に向けてタメ口だとかはできないし、失礼な事を言ってしまうわないようにと自然と口数も少なくなる。

「……ところで今日は何しに行くんですか？」

「あたし達は人の住める星を探しに来たの！」

「そうそう、もし見つけたらあたしがその王様になるの！」

「そういうえば、どれくらいの人を住ませる予定なのかしら？」

「うーん、あたしと悠君、ごころちゃんは確定として……」

日菜は顎に手を当てて考える。指折りながら言っていくそれは、どれくらいの人というよりかは自分の仲のいい人達の名前をあげていったという方が正しいだろうに。

これくらいかなあと言ったそれだが大事な人が欠けていた。それはわざとなのか、それとも本当に忘れているだけなのか。

でもこの人が忘れるだろうか。天才なこの人が、しかもあの人の事を。

「ねえ、日菜」

「ん、どうかした？」

「ぎつきの、一人抜けてない?」

困惑したのは一瞬で、声を漏らすと同時に忘れてたよ、と笑いながら言ってた。

何故だろう。笑顔なのに、いつも見てるそれなのにどうして、怖いと感じてしまうのだろう。

「それにしても悠は本当にすごいわね!」

「何がですか?」

「あなたの話をしてる時の日菜は凄い笑顔なのよ、あたしでも作れないくらいには」

「……そうなんですな」

「もしかしたらあなたは魔法使いかもしれないわね!」

やはり気のせいだろうか、怖いという感覚は苦手なものでなるべく体験しないようにしているからだろうか。正しく認識できていないだけなのかもしれない。

それにしても魔法使いか……あと14年、魔法使いになってしまうまでのカウントダウンは半分を過ぎてしまったわけだし片足程度は突っ込んでいるのかもしれない。

「……ちよつと笑ってみて」

「悠君、急にどうしたの?」

そう言いつつもこちらに笑った顔を向けてくれる。今度は怖さを感じない、やはりあれは気のせいだったのだろうか。

そのはずだ、日菜には理解できないとは思うものの怖いなんて思うはずがない。昔ならわからないが、今なら確実にそう言える。

「悠はゲームが得意って聞いてたけどどれがいいかしら?」

そう言っただけの目に並べられるのはトランプにオセロ、チェスや将棋といったものもあれば、人生ゲームなんてものさえもある。

キラキラとした目でこちらを見てくるそれを見るとスマホのゲームなんですとは言えないことはできなかった。

人生ゲームは流石にしたくないし、チェスや将棋などの駒を使うものは車ということもあつてなし。

そもオセロなどのタイマンものはこのように奇数だと一人余って

しまう。つまるところ選択肢は最初からトランプしかない。

「それじゃあやりましょー！」

そのままトランプで遊ぶことになった。しかし着くまでの間に日菜が途中で飽きてしまい、結局色々と話して時間を潰すことになってしまった。

「着いた〜」

その声を聞き外を見てみると、金持ちといえどというかのような別荘が目に見えた。

しかしたただでかいというわけではないし派手さもそこまで感じさせるない。もちろん派手さを感じさせないといえども僕の家よりは断然大きい。外にはベンチまで置いてある。

「入って入って！」

「失礼しま……」

見た目はそこまで派手じゃない、そんな風には言ったがそれは外見の話。

中に入り、リビングまで連れていかれると不安になりそうなくらい高そうな絨毯に、テレビでしか見たことがないような暖炉が置いてあった。

「お腹が空いてきちちゃったわ」

「わかる、あたしもちよつとだけ空いちちゃったかも」

2時間程度、だいぶ早く走っててくれたのか、それとも本当に近いのかわからないがその程度でここには着いた。

ただそれだけの時間があればお腹が空くのは当然。僕は起きてすぐだったし、長時間食べないことに慣れているからまだ大丈夫だが。

「お外で食べる用のお弁当ができています」

「ありがと、黒い服の人！」

「それじゃあ外いこうよ」

「そうね、行くわよ！」

「あー、荷物って何処に置けば……」

「加々美様のお部屋にご案内します」

先ほど消えたと思った黒い服の人が再び現れ、僕を案内する。

「……先に行ってもいいですよ？」

「駄目だよ、悠君もいないと」

「そうよ、一人にはさせられないわー」

迷子になりそうな子供じゃないんだから、場所だけ言ってもらって先に行ってもよかったのに。その後はピクニック感覚で外に向かい、弁当を食べた。

……ただあれを弁当というカテゴリーに含めてしまってもいいのだろうか、と疑問を抱くくらいには豪華だった。

「ねえねえ、こころちゃんとか散歩に行くんだけど、悠君も行かない？」
外はだいぶ暗くなっていた。星を探すにはまだ足りないが、それでも見る分には充分なくらいには。

弁当を食べた後は、話をしたりゲームをしたりと様々な事をしていたので少しだけ疲労を覚えているのだが、弦巻さんと日菜からはそれは見られない。

「……行く」

「疲れてるなら別にいいんだよ？ 悠君体力ないんだし」

悪びれもなくそう言われる。事実として体力はないのだがもう少しオブラートに、と言っても伝わらなさそう。

それでも僕は尚行くと言った。疲れているのは事実だし、出来れば休んでいたいのも本当だ。だけど……

「ここで休んでたら余計疲れそうだし」

貧乏性の僕はここでいる方が疲れそう、それに一人ともなればそれは確実だ。確かにね、と言われ一緒に外にでると弦巻さんが手を振りながら呼んでいるのが目に入る。

「あら、悠も一緒なのね！」

「いたら駄目でしたか？」

「そんなわけないわよ、楽しいことは大人数で探した方が見つかりやすいじゃない！」

「楽しいこと？」

「ごころちゃんの趣味は楽しいこと探しなんだよ」

「散歩ついでにって事ですか？」

「ええ、そうよ！」

歩きながらそんなことを話す。いくら疲れてるとはいえそんな長距離歩くわけではないだろうし、走ったりするわけではないから問題は無さそうだ。

それにしても弦巻さんは笑顔だ。日菜もよく笑うけど、この人はそれ以上だ。多分今のところ笑顔でないところは見ていないかもしれない。

それは話の時でもトランプの時でも、特にトランプの時なんか表情が笑顔のまま動かないからやりづらいことこの上なかった。

「日菜も楽しいこと探しするの？」

「ごころちゃん自体が面白いからいいかなーって」

あ、でも、と付け足される。

「悠君と一緒にならなんでも楽しいからいいかな」

「顔が赤いわよ？ やっぱり休んでた方がいいんじゃないかしら」

「……大丈夫ですよ」

そうやって言われるのはやはり恥ずかしい。日菜は恥ずかしがっている様子はないが、耳を少しだけ赤くしているのが見えているのだからそういうことだろう。

「ほんつとに……」

「なーに、どうしたの？」

「かわいいなってだけ」

ちよつとだけやり返したくなつてそう言う。我ながら気持ち悪いな、なんて思いながら日菜の方を見ると、耳だけだった赤みがじわじわと広がっていた。

「……悠君の馬鹿」

「あら、日菜も顔が赤くなってるじゃない」

もしかしてあたしも赤くなってるのかしら？ と弦巻さんは自分の顔に手を当てる。

この人はこういう方面の知識はないのだろうか。あれだけ車も別

荘も大きかったのだし、黒い服の人達のサポートを見る限り箱入り娘というやつなのかもしれない。

「こころちゃんは大丈夫だよ」

「もしかして日菜は理由を知っているの？」

「もちろん」

ね、とこちらを向かれながら言われる。赤みはもう抜けてきているし、恐らく僕もそうだろう。

頷くと弦巻さんは、教えてと僕と日菜の周りを行ったり来たりする。僕も日菜も、内緒としか答えられなかった。

「これは？」

「ギター……の音？」

「行って見ましょー！」

暫く歩いているとこんな山には似合わないようなギターの音が聴こえてきた。その音の方へ弦巻さんは走っていき、その後を追いかけるように日菜も向かった。

ここにくるまでにかなり歩いたので走る元気はないので僕は歩いて向かうと、そこには見たことのある人が一人と、初めて見る人が二人いた。

「悠君もこっち来なよ！」

話し込んでいたし知らない人もいたのでいつ向かおうと考えていたが、呼ばれたので何も考えずに向かう。そこに着くなりあっ、と声をあげられる。

「つぐみ、知ってる人？」

「えっと、うちのお店によく来てくれる人なんだけど……」

その人は羽沢珈琲店の娘さんだと思われる人でこちらのことは知ってくれているようだった。自己紹介でもするべきかと思っていたら、猫耳っぽい髪型をした人が先にしてきた。

「戸山香澄です！」

「……加々美悠です」

「……美竹蘭」

「は、羽沢つぐみです！」

どうやらつぐみさんではなくつぐみさんだったらいい。そんなどうでもいい事を考えていると、羽沢さんが尋ねてきた。

「加々美さんは日菜先輩とどういう関係なんですか？」

「どういうって言われても……」

知り合いなのか、好きな人なのか。どういう答えを求めているのだろうか、どんな答えをすればいいのだろうか。

そんな事を考えていると日菜に手を繋がれて持ち上げられる。

「こういう関係って言ったら、どうする？」

「え、え!? 確か紗夜さんとも……」

「……痛いんだけど」

「あ、ごめんね」

急に握る力が強くなって、それについて言うのとパツと手を離された。これは朝と一緒に、朝は感じたただけだったが今回は確かなものとして感じられた。

もしかしたら何かあったのかもしれない。紗夜さんが日菜を嫌っていたあの時みたく、今回はその逆で。

でも、それは本当にあるのか？

日菜は歩きながら戸山さんと話している。あの日菜が紗夜さんの事を嫌うなんてことはあり得るのだろうか、それどころか好きじゃなくなるということすら怪しい。もしそうなのだとしたら理由はなんなのだろう。

笑いながら話してる日菜を見て、勘違いである事を願った。

「ふぁ……」

「眠くなってきたやつた……」

「もうすぐ流星群見られるから頑張つて！」

「あたしも眠くなってきたやつた……ちよつとくらい寝ても大丈夫よね」

「蘭ちゃんは眠くないの？」

「あたしは普段から起きてるから」

「あたしも！ 夜の方が頭がスッキリするんだよね」

「加々美さんは大丈夫なんですか？」

「僕も寝る時間は遅いから」

別荘について少し話していたが戸山さんと羽沢さん、弦巻さんも眠くなってしまったようだ。

あと一時間もすれば流星群が見られる頃だろうし寝ない方がいいだろうが、起こして上げればいいのだから寝かせてもいいのではないのかと思ってしまう。

「それなら何か眠気が覚める話をしてくれないかしら？」

「うーん、怖い話とか？」

「そ、それはちよつと……」

「じゃあなんにしようかなあ……」

羽沢さんは明確に嫌だと言つて、日菜がじゃあと言つた瞬間美竹さんはほつとしたかのように息を吐いていた。もしかして苦手なのだろうか？

「それじゃあ私が小さい頃聞いた星の鼓動の話をするよ！」

「星の鼓動？ 面白そうね！」

「あれは家族で森のキャンプに行ったときなんだけどね……」

何とも信じられないその話だが否定するのは野暮というものだろう。それを聴いて何かが始まる気がしたと言うくらいなのだから、彼女の中では本当のことなのだろう。

「何かが始まる感じか、面白そうだなあ」

「何かが始まる気が……か」

「悠君はそういうの感じたことある？」

「……ないかな」

始まる気がしたことはないと思う、だが変わるような気がしたことはある。

実際に何も始まっていない、でも変わってはいる。単純に人間関係が増えたというだけかもしれないが。

「うー、もう楽しみで眠気なんか飛んでつちやったよ！」

「私も、星を見るまで眠れないね！」

「……テンション上げすぎて疲れなきやいいけど」

「流星にこれだけ元気なら寝なさそうですね」

「そうそう、蘭ちゃんは心配しすぎ、みんな起きてられるって」

「だといいですけど……」

「こんな元気なのだから流星に寝ないだろう、そう思っていたのだが……」

「むにゃ……」

まず戸山さんが落ちた次いで弦巻さんも落ちてしまった。羽沢さんは頑張つてはいたがどうやら睡魔には勝てなかったようだ。

「……起きませんね」

「そろそろ星を見に行くのいい時間だと思うんですけど……」

「ちよつと窓から見てみるね」

夜空はどんな風に笑っているのかわからず、と言って日菜は窓の方に行く。カーテンを開けたところから覗き見える程度でも沢山の星が見えた。

「すつごい、香澄ちゃん、つぐちゃん、こころちゃん！ 起きて起きて〜！」

「うう……眠い……」

「ほーら、流れ星も見えたよ」

「え、流れ星？」

「……やつと起きた」

「香澄ちゃん、起〜き〜て〜」

羽沢さんと弦巻さんはわりとすぐ起きたが、戸山さんは日菜が揺すっているにも関わらず起きる気配はない。

一分くらい揺すり続けていると戸山さんの閉じられていた目が開けられた。

「……どしたの、みんな？ そんなに騒いで？」

「流星群だよ！」

「本当ですか!？」

日菜に言われると先程まで眠っていたとは思えないような動きで窓際まで行く。見とれているようで目をキラキラとさせながら空を

眺めていた。

「折角だし外で見ようよ！」

日菜がそう言うのと全員が外に出た。窓越しから見るのと実際に見る、大差はないはずなのにまるで違うもののように見える。

星降る夜。そんな言葉がこれ以上なく似合う光景に、僕達は視線と心を奪われた。

「昔本で読んだんだけど、今輝いて見える星の光は何百、何千年も前のものなんだって」

「な、何千年!?!」

「なんだか不思議ですね……」

「何だかランダムスターを弾きたくなくなってきちゃった!」

突然戸山さんが星形のギターを取り出す。いつの間にも持つてきていたのか、それとも最初から持つていたのか。弦巻さんも一緒に歌いましよ! と演奏しだそうとする。

「だ、ダメだよ、こんな時間じゃ管理人さんに迷惑になっちゃう!」

「……香澄、夜はやめときな」

「え、でもでも、今すつごく弾きたいの!」

「……星の鼓動が聴けなくなっちゃいますよ」

「あ、そっか……うん、そうですね」

「今はもう少しだけ楽しんでいよ、この星空を……」

輝く夜空、降り注ぐ星。立ったまま見る、草の上に座り込む、ベンチで座って見る、走り回りながら見る。そんな人それぞれの見方で楽しんでいた。

「……今見えてる悠君は、本当に今の悠君なのかな?」

「何言ってるの?」

「あたしが勝手に思ってるだけなのかなってさ、都合のいいように」

僕が日菜の事を好きだという気持ちは日菜が勝手に思ってるだけなのか、多分そう聞いているのだろう。

頭が悪いから論理的な証明なんかできない、哲学的な答えだって出せやしない。僕は日菜の手の上に自分の手を乗せた。

「触れるって事は、今の僕っていう証明にならない?」

「……ズルいよ」

「それはどうも」

手を退けようとすると、もう片方の手で押さえられた。

「始めて悠君から触ってきてくれたんだから、もう少しだけこうさせて」

「……そうだったっけ」

その姿勢のまま、僕達は夜空に吸い込まれていった。

「こんな車で送って行って貰えるなんて！」

「香澄ちゃん達のコテージまでは結構距離があるしね」

「なににせよ送ってもらえてよかった。流石に眠くなってきたし……」

「うん……私も……」

「えー、私は興奮しちゃってむしろ目が冴えちゃったよ！」

「確かに興奮はしたけど、眠いものは眠いつて……」

「そんなあー、日菜さんは起きててくれますよね!? ……つてもう寝てる!」

「車に乗ったら眠くなってきたらいいですね」

そんなあー、とガツクリという表現通りに肩を落とす戸山さん。見ればもう美竹さんと羽沢さん、弦巻さんももう既に旅立ってしまったようだ。

「そうだ! 加々美さんは起きててくれますよね!」

「僕はいいけど……何について話しますか?」

「やった! それじゃあ星について話しましょう!」

確かにある程度は好きなのだが知識はないので話に付き合えるだろうかと不安だった。

しかし戸山さんもあまり詳しいわけではないのか、キラキラでとか綺麗でとかそういったものだったので充分に話すことができた。

「うー、話してたらランダムスターを弾きたくなってきちゃった! さっきは止められちゃったし思いつきし弾いちゃえ!」

「ちよつと、戸山さん」

「なんですか？」

今にもギターを弾きだしそうな戸山さんを止める。どうかしたんですか？ という表情を向けてきたので、日菜を指差してみる。

「あっ……静かにしなきゃですよね」

「時間も時間ですし」

そう言うのと突然日菜の頭が僕の肩に乗っかってくる。少しだけビクツと跳ねたが、それでも起きずに寝続けている。

「加々美さんにとって日菜さんってどんな人なんですか？」

「どんな？」

面白い、元気、強引、表す言葉は大量に。好きな人、恥ずかしさからは言えない言葉は一つだけ。

「どうなんでしょうね」

「日菜さんとは付き合ってるんじゃないんですか？」

「いや、してないよ」

好きな人、それは本当だ。ならば紗夜さんとはどちらが上なのか、それはいまだにはつきりとしていない。

決まっていない、決める気は……あると思う。どちらも好きで、どちらにもドキドキして、どちらも裏切りたくはない。

僕の肩に乗ったままの日菜を見て、そう思った。

最近、自分が何処か変わっていくのが感じられる。元から変わっているとは言われているけどそうじゃない。何処か、変わっていつてる。

あの時だつてそう、なんでかイラついてしまった。あたしが一緒に星に住む人を決めていて、ついおねーちゃんを抜いちやつてそれを悠君に指摘された時、どうしようもないイラつきに襲われた。

その次はつぐちゃんがおねーちゃんの名前を出した時、それも悠君とおねーちゃんの間係を言った時。悠君の手を取っているにもかかわらずつい強く握ってしまった。

「こんなところで何してるの？」

「……悠君寝てないでしょ、まだ起きてていいの？」

「まあ少しは眠いかも」

そう言つて悠君はベンチに座っているあたしの隣に座ってくる。君はなんでもなさそうにしてるけど、あたしはもう止められない。

君は気づいていないかもしれないけどあたしは起きてたんだよ。君の肩に乗つかつちやつたその時に目が覚めたんだ、そして君の話している事が聞こえたんだ。

「ねえ、悠君」

「何？」

「目、瞑つて」

そう言つて悠君は目を瞑つた。君にはあたしがどう映っているんだろう、どうなんでしょうと言つた君の本音は一体なんなんだろう。

あたしは君にちゃんと残つて欲しいんだ。そう思うと同時にあたしは悠君を押し倒し、覆い被さっていた。

慣れないそれは初めてのものより長くて、初めてのものより深かった。

求めるようにすぎる。彼が逃げないように腕を抑え、足に体を預けて。彼は抵抗しない、頭が追い付いていないのか、それとも満更でもないのか。

いくら彼が体力がなくて運動ができなからうと男女の差という覆せない程に大きなものがある。それなのにそれをしないのは……つまりはそういうことなのかもしれない。

これは慣れない、でも始めてのそれに比べ罪悪感は薄れている。呼吸の仕方も忘れるくらい、その行為に身を委ねた。

「……はあ……はあ……」

離すとどこか寂しさがやってくる。胸が苦しい、どうしようもなく痛い。

頭がガンガンするし視界も少し揺らいでいる。それは恋をした痛みとは違う、肩をも動かしながら息をする。それはあたしだけじゃなく、悠君も。

「どうして……」

「これがあたしの答え」

「……どういうこと？」

「あたしにとつて君は……」

——すべてなんだよ

わからせるにはこうするのが一番いいと思った。どうしようもないくらい好きなのだ、堕ちているのだとわからせるにはこれがいいと。

それにこれなら、君にあたしを無理矢理にでも深く残せるだろうと。

君は、あたしのすべてだ。この世界の誰よりも好き。理解しようとしてくれる君が好きだ、理解してくれる君が好きだ。優しい君が、恥ずかしがりやな癖に時折キザな君が好きだ。

隣にいてくれる君が好きだ。君をあたしから遠ざける何かは……嫌いだ。

「ねえ、悠君」

返事はない。暗闇の中訳がわからないとこちらを見てくる彼の顔が目に入る。

「覚えてる？ あの約束」

「……好きになったら選んでつてやつ？」

「やっぱり覚えてくれてるんだ」

やっぱり君は記憶力がいい。無駄と思えるくらいには覚えていてくれる。約束も、予定も、好きなものも、全部覚えててくれている。

それと同時に嬉しかった。はぐらかして、選ばずに逃げようとしていることはないと彼自身が示してくれたようだから。

「あれさ、もう決まった？」

「……………」

「どうしてこんな急についておもってるでしょ？」

あれだけしたのに君にはおねーちゃんがいる。君はあたしの全てなのに、あたしは君の全てにはなれていない。

「まあ、今日中には言わないよ」

「……………ありがとう」

「別に、感謝されるものじゃないよ」

もうこれ以上は駄目かもしれない、もしもの保険が効かなくなってしまうかもしれない。

これ以上君の事を好きになってしまったら、最悪の選択をされてしまった時にどうなってしまうかわからない。

それもある、だけどこれが、沈みこむような黒いこれこそが、回答を急ぐ本当の理由かもしれない。

「確か二ヶ月後だよ、誕生日」

「……よく覚えてるね」

「そーでしょ」

覆い被さっていた体を退ける。ふと唇を舌でなぞると、体がゾクゾクしてくるのが感じ取れる。

「じゃあさ、その日に出してよ」

「………わかった」

絞り出すかのように出されたそれはどんな思いで口にしたのだろうか。

俯いたままじゃ君はあたしの顔が見れないよ、手で覆い隠したら君はあたしを見てくれないよ。

だけど声をかけてあげるとこちらを向いてくれる。だけどすぐさま赤くしてそらしてしまう。それでいいんだ、君に^傷あたしをつけられたのならそれでいい。

まるで天秤、あたしが君に買ってあげたあれみたい。片方が沈めば……もう片方は上がってしまう。

「………お願いだよ、悠君」

空を見上げながら呟いた。

面白い人から気になる人、そして気になる人から好きな人、大好きな人に。最終的に君はあたしの全てに成り上がった。

「あたしにおねーちゃんのこと」

大好きな人から好きな人に、そして好きな人から……

お願いだよ、悠君。あたしにおねーちゃんのこと……

「嫌いにさせないでよ……」

そんな事を思いながらも君の事を好きになるのが止まらない。そのせいであたしの中でおねーちゃんが薄れてしまうとわかってるのに。

見あげる月は綺麗で、だけど何か足りないかのように欠けている。

通話

暗闇に染まる部屋。照明は勿論、外からの月明かりですら遮断して、おおよそ光と認識できる程度のもは何もない。

だがそんな部屋の中であるにも関わらず僕は手で目を覆って仰向けで寝転がる。

暗闇の筈なのに、覆っている筈なのに、視界には空が映る。星が映る、月が映る。そして、あの顔が映る。

「……なんなんだよ」

ふと覆っていた手の指を唇に持つてくると、少しだけあの時と似た感じがした。

痺れて、ふわふわしてきて、息がつまる。離れない、消せないし消そうとも思わない。思考の隅から隅まで覆い尽くされる。

「……どうしてこんなことに」

日菜は言った、嫌いにさせないでと。それも僕のことではなく、紗夜さんの事を。

あの日菜がそんな事を思うなんて夢にも思わなかった。何処までも紗夜さんLoveというのを貫いていた彼女が、嫌いにさせないでなんて言うなんて。

バレンタインにはあんな大量に渡そうとしていたのに、誕生日にはプレゼントを買いおうなんて言っていたのに。あれだけ好きと、大好きと言っていたのに。

そんな事を考えているとスマホが電話がかかってきた事を知らせてきた。誰かと思ってみると、『氷川日菜』と書いてあった。

「っ……」

何故だか手が震えた。暫くの間明かりを浴びていなかった目としてはだいぶ負担の筈なのに、その画面からは目を離せない。

許可をしてスマホを耳に当てるが声が出ない。こんな時間にどうしたのと何時もなら返せている筈なのに。

掠れて出ないわけではない、口が開かない。ピツチリと閉じられて、こじ開けることが出来ない。

『もしもくし、悠君く?』

「……何」

『もく、起きてるならちゃんと反応してよね』

向こうから話しかけられると少しだけ緩んだ気がして声を出すことができた。

その声はいつもと変わらない。あんなことがあったのに、してきたというのに。まるであれが夢かのように。

『明後日おねーちゃん達のライブがあるじゃん?』

「……そうだね」

『悠君は行くの?』

「……行くよ」

『……ふくん』

「日菜は行かないの?」

『明日からパスパレの仕事でちよつと離れちゃうからさ』

行くと言った後の日菜の声は、少しだけ低かった。

「……それで、何か用事でもあった?」

『べつにつにく、ただ声聞きたくなっただけ』

じゃあねく、と電話を切られる。ただ声を聞きたい、それは明日からPastel*Paletesで仕事があるせいなのだろう。そんな中わざわざ僕の声が聞きたいと言ってくれたのは嬉しかったりもする。

やはり瞳を閉じれば映ってしまふ、しかし開いても見えてしまふ。焼き焦がすかのように、日菜は僕の脳裏にこびりついている。

ライブ会場に来たのはいいが早速帰ってしまいたい気分になってしまった。

こんな季節にも関わらず、まるでエレベーターの中かのような超満員の部屋に入れられて死ぬほど暑い。エアコンをつけているのかどうかわからないが、汗が出てくる程度には暑苦しい。

まだ始まっていないどころか、照明すら落ちていないということにも関わらず前の方は団子状態。

そして今日は対バン形式ではなくRoselia単騎のライブ、ということはここにいる全てはRoseliaのファンということ間違いなさそうだろう。

「すげえ人気なんだな……」

そう呟くと同時にうつすらと暗くなる。ステージに立つのはRoseliaの人達とは違う人。所詮前座と言われるものだが、ライブの盛り上がり的にもいたほうがいいのだろう。

「普通はこっちはずなんだがなあ……」

Roseliaはまだ結成から半年も経っていない超がつくほどの新人バンド。その筈なのにこれほどの客がつくというのだから、ブームというものとRoseliaの人達の力がわかる。

そして前座の人達が退いて、Roseliaの人達がやって来た。僕の視線は流れ、客の叫び声は耳に入らなくなる。

あれ、おかしい。

眼鏡を外して拭いてみる、目を擦ってみる。再度つけ直してみたがやはり変わらない。

場所を変えてみようと思ったが足は重い、顔は動かない。その場所に、その姿勢で固定させられる。

「紗夜ー!」

客の一人が叫び、それは小さく耳に入ってくる。ああ、そうだ、あれは紗夜さんだ、紗夜さんなんだ。なのにどうして……

——日菜に、見えてしまうのだろう。

水色の髪はその色で、長い髪は気にならない。パーツはやはり似ていて、持っている楽器は一緒。

ない、ないない、こんなものない。重なってしまうなんて何故なのか、間違えるまではいかなくても、見えてしまうなんて。

「逆は……あつたつけ」

日菜が紗夜さんに見えてしまったことは……ある、重ねてしまったことはある。ならばこれは？ それは何故？

そんなことを思っている割に音はきちんと聴こえてくる。やはり紗夜さんの音は好きで、それは重ならない。日菜の演奏を聴いたこと

はほぼないが、これだけは紗夜さんだとわかる。

二曲目が終わったくらいで目が合うと、向こうは少し驚いたかのような表情を浮かべていた。しかしそれも一瞬だけで、すぐに演奏に集中するかのように視線を少し下に落とす。

そらしてしまいたいのに吸い寄せられ、息を吸えば張り裂けそうになる。流れてくる音は確かに聴こえてくる。

目を閉じて、息を止めた。

それなのに、耳だけは塞げなかった。

ライブが終わり外に出る。帰ればいいもののそちらに足は動かない。ライブハウスから出てきた人達が僕の横を通りすぎていく。

道の真ん中に突っ立っているのもなんなので少しだけ端に避けて人の波を見ていると、改めてその人の多さに改めて驚かされる。

「あつっ……」

人の波は収まるが僕は動けない。やはりこの季節、部屋の中も暑いのが外も十分に暑い。風は弱々しく吹いているが冷たいとは感じられない。

僕は何をしているのだろうか、待っているのだろうか、それとも会う気でのいるのだろうか。そんなことを考えていると、首元が急激に冷えた。

「なーにしてるの?」

「……他の人はどうしたんですか?」

「今反省会中、飲み物買ってきてって言われたからさ」

はいこれ、と缶コーヒを渡される。奢りなんてされたくないのに断ろうと思っただが、首に当てられた缶なので断ろうにも断るわけにはいかず貰うことにした。

「なんで悠さんがいるんですか! って紗夜に怒られちゃったよ」

「それは……すいません」

「渡したのはあたしなんだから謝らなくてもいいって」

リサさんは笑いながら話してくる。頼まれたのだから早めに戻った方がいいだろうに話を続けてくる。

「それで、どうなの？」

「……後2ヶ月です」

「あちゃー……ついに決められちゃった感じ？」

「はい」

「でも決められてないんでしょ？」

決められてない、いまだに。あんなことをされたのに、重なってしまふというのに決められていない。

「……戻らなくていいんですか？」

「あつ、つい話し込んでしまった。」

あんまり待たせないからここにいてね」

あこが会ってみたいって言ってたんだよねと付け足される。確かドラムをやった人だったつけ。そんな事を考えているうちにリサさんは消えていた。

まだいると答えた訳ではないのに。そんなことを思いながら、逃げるようにSNSを開いた。

「あなたが悠さんですか!？」

SNSを巡回しているとそんな声が飛んでくる。視線を向けると、そこには先程ステージの上にあった背の低い人がいた。

まだ他の人は来ていないのかと思ったが、小走りでキーボードをしていた人が向かってきているのが見えた。

「そうですけど……」

「やつぱり！ 聞きたい事がいっぱいあるんだけど大丈夫ですか？」

「ええつと……」

「あ、あこちゃん、少し落ち着いて……」

「そうだよあこ、悠は逃げないんだからさ」

僕は足があるし逃げられるんだが、なんて事を思っていると紗夜さんともう一人の人がやってくる。確かあれはボーカルの人だったか。

紗夜さんの方を見ると、火傷してしまいそうなくらい胸が熱く感じた。今度は紗夜さんと日菜は重ならない、明るいからだろうか、はっきり見えるからだろうか。

頭を軽く下げると二人からも同じようにして返される。

「悠さんは紗夜さんとどんな関係なんですか!？」

「どんな……って言われても」

「宇田川さん、そういうのはやめてください」

「え、でも紗夜さんは絶対答えてくれないじゃないですか」

「当然です」

「わ、私も、気になります……ます」

「だってよ、答えてあげたら?」

「……嫌ですよ」

その質問はこの前似たようなものをされたしその時は日菜が答えてしまったが、自分自身で答えられる筈がない。恥ずかしいし、なによりどのラインなのかわかっていない。

「え、それじゃそれじゃ、ゲームが好きって聞きましたけど、好きなゲームってなんですか?」

「NFOってゲームなんですけど……わからないか」

「え、悠さんもNFOやってるんですか!？」

「宇田川さんもやってるんですか?」

「はい! すっごくハマってます! ね、りんりん」

「え、あ……はい……それなりには」

「フレンドコード教えてください! 今度一緒にやりましょうよ!」

決してマイナーというわけではないが、スマホゲームではなくpc専用なので、勝手な偏見から女子でやっている人なんて殆どいないと思っていた。

それに宇田川さんと……りんりんさんはこうやってバンド活動をしているのだし、そういうのに興味はよりないものかと。

しかし、NFOをやっているあことりんりんという風の名前は既にフレンドにいたはずだが……流石に違うだろう。

「あれ、このコードって……」

「ん、どうしたのりんりん?」

「多分フレンドの……ほら、この前一緒にクエストをやった……」

「え、もしかしてyou兄なの!？」

「その呼び方するのって……」

「あれ、二人はもう知り合いだったり？」

「はい……NFOのフレンドでした」

しかし……ネカマをしていると思っていた人がホントに女性だったとは。もしかしたら別かもしれないがこの前一緒にクエストをやったということはほぼ確定だろう。

「……三人はいつから知り合いなのかしら？」

「あこはフレンドになったのわりと最近ですね」

「わ、私は……一年くらい前から……」

「……そう」

そう、短いその言葉には何かが感じ取れた。何かといってもよい方向のものではない。不機嫌、恐らくそれが一番正しいだろう。何故なのか、それは考えてもわからない。

「悠兄は紗夜さんとNFOのマルチとかしたことないんですか？」

「いや、新しく始めさせるのは流石に……」

「……私はたまにやってますよ」

「紗夜？ あなたまだあれをやってたの」

「折角作ったのにやめるのも勿体ない気がしたので」

紗夜さんがNFOをやっているのは流石に予想外だった。そんな時間無駄だと、その時間があればギターをすればいい切りそうだから。

「……今度やりますか？」

「私はあまりやってないのですが……それでもいいのなら」

「それじゃあ……暇な時に言ってくれば」

やはりゲームをするということには抵抗があるのだろうか、段々と声が小さくなっていつてるのがわかった。リサさんに、見せつけるね、と言われ、つい顔を下に向けてしまう。

「そろそろ練習に行くわよ」

「え、もう少し話してもいいじゃん」

「駄目よ、反省点を見つけたのだから早めにやった方がいいわ」

「……というわけです」

「頑張ってください」

「また今度マルチしましょうね〜!」

宇田川さんがライブハウスに向かい走りながらそう言ってくる。手を振ってみるとあつという間にライブハウスの中に消えていき、見えなくなってしまった。

やはり僕はゲームが好きなのだろう、あんなに悩んでたのに今では楽しみが勝ってしまったている。一体いつやるのだろうか、そんな事を思いながらもその場を離れた。

その日の夜、PCでNFOをやっているとスマホが電話を知らせてくる。こんな時間、といってもそんな遅いわけではないが、一体誰なのだろうか。

相手を予想しながらスマホの画面を見ると、そこには予想外の人物の名前が示されていた。

「……………どうしたんですか?」

『宇田川さんに、やるなら通話をした方が楽しめると言われたので……………』

「そうですけども……………とりあえずフレンドになりましたよ」

女の人と通話しながらゲームなんて始めてなので、どの程度の話題を出していいのかわからない。面白い話だって振れるはずもない。

しかしそれは余計な心配に終わってくれた。やはり真面目さはこちらでも発揮されるのか、システムの事や進め方など色々聞いてきてくれたので会話が途切れることはそうそうなかった。

「あー、そこはこうしないと……………」

しばらく会話がないう時間が続き、紗夜さんのキャラの操作が止まったので話を振ってみるが反応がない。

もしやと思っただけ耳に意識を集中させると、ゆっくりと息をすする音だけが聞こえてきた。

「もう日付回ってんのか……………」

画面を見てみれば既に午前の一時を指し示していた。日菜は夜の

方が頭がスツキリすると言っていたが、紗夜さんはあまり得意ではないのだろうか。

画面の向こうを思ってみると、紗夜さんが映る。どんな寝顔をしているのだろうかとか、とても気持ち悪い妄想が捗ってしまう。

『眠いときは言ってくれて大丈夫ですよ』

そうメツセージを送って通話を切る。することもなくなったのでそろそろ寝ようかと横になって目を瞑る。

目を瞑ると、そこには何も映らない。

それは喜ぶべきことか、悲しむべきことか、酷いことなのか。僕には、わからない。

成長

毎日が物凄く充実している気がしていた。Roseliaの練習もより一層とレベルが上がってきているしお菓子作りだって珈琲だって、そこそこできるようになってきていたから。

それ以外にも夜は悠さんとNFOをすることで、普段なら話せないような時間に話すことができたから。

——でもそれは、私一人だけのものだった。

一人で夢を見ていただけ。充実という名の自己満足に、溺れていただけだった。

「加々美さんと日菜先輩って付き合っているんですか?」

つい用具を落としそうになってしまった。何時ものようにお菓子作りを教わっている時に羽沢さんからそんな事を聞かれた。

なんでも天体観測ツアーの時に一緒にいて、日菜に聞いたらそういう風を匂わせるような回答をされたとのことらしい。

「多分違う……と思います」

「凄い仲よさそうでしたけど……」

「……そうですか」

ゆつくりと視界が揺れていくような気がした。意味がわからなくて、耳にしたくなくて、きっぱりと否定ができなくて、息も荒くなつた。

羽沢さんが何かを聞いてくる、焦るようなそれは心配をしているのだろうか。だけど何を言っているのかはわからない。

その日は、いつもより早く帰らされた。

「悠さん……」

『なんですか?』

「……いえ、なんでもありません」

その夜のうちに悠さんと通話をしながらNFOをしたが、その事についてを問うことができなかった。

知ることが怖くて、恐ろしくて聞くことができな。なのにその時間は、二人で話しているこの時間は酷く心が落ち着いていくのが感じられた。

夜中にこうやっていることは増えたが朝起きる時間は変わっていない。こんなことはよくないとわかつているが、時間が足らなすぎる。

朝にやるギターの練習だって、昼の練習も、夜中の悠さんとの遊びの時間も全て削れない。ならば削るものなど一つしかない。

日が昇り始めそうな時刻、彼が眠ると同時に私も横になる。充電をしながら先程まで通話をしていたスマホを枕元に起く。

最近は不思議と、記憶はないがいい夢が見れているような気がする。

朝、目が覚めて働いていない頭のまま顔を洗いに行く。冷たい水がこの季節だと少し気持ちがいいが、やはり夜更かし後のこの慣れない感覚は拭えない。

朝食変わりに昨日作ったお菓子を食べながら珈琲を淹れてみる。そこまで好きというわけではなかったが、やはり数を飲んでみるとだんだんと良し悪しがわかるようになってきた。

只觉得感じる、わかつてしまう。それらはやっぱり、まだまだ届いていない。

その後指を軽く動かす目的でギターを弾いていると、日菜が部屋の中に入ってきた。

今までは昼過ぎまで寝ていることも多かったが、パスパレの仕事のせいか最近では起きる時間が早くなってきている。

「おねーちゃんもう起きてるの？ 昨日も遅くまで起きてたんでしょ」

「別にあなたには関係ないでしょ」

そう、関係ない。これは全部私の行動で、そうさせるのも私自身。なのになぜ、ならばなぜ、日菜を見てこんなにもイライラとしているのだろう。私は、こんなにも短気だったろうか。

私がそんなだから知らないが、日菜が話しかけてくるのが以前

に比べてうんと少なくなった。

煩わしさから解放されたようなものもあるが、あれほど騒がしかったものが静かになると少し寂しくも感じたことを覚えている。

「それにしてもおねーちゃんがゲームをやるなんて夢にも思わなかったよ」

「偏見よ、私だってそれくらいするわ」

「……それ、ちゃんと息抜きになってる?」

「……練習があるからもう行くわ」

息抜き? なんだそれは。楽しんではいるがその程度のものだとは思っていない。

白金さんは悠さんと大体一年くらい前からゲームで知り合っていると聞いた。それは私より早い、それも倍近い。

今更どうにもできないというのに、それに私は関わっていないということもわかっている。

それなのに、どうしようもないのに、どうしようもないからこそ、余計にイラつかせてきたのを鮮明に覚えている。

私は何もかもで彼の一番になりたいというのに何もかも一番になれていない。

多分なれているとしたら……ギターしかないだろう。でもそれも今はどうかかわからない。日菜がどれくらいなのかわかっていない。

彼のゲームは息抜きなんかではない。感じる、彼にゆっくりと近づいていくのが。彼が白金さんとする時間を無くしてその時間を私がやっている。

それは決して簡単に埋められる時間ではない。それでも、確かに少しずつ上書きしていくのを感じる。

多分、楽しいと、嬉しいと感じるのはやったことが明確に、目に見える形として現れるというのもあるだろうが……やはり一番の理由は、それなのだろう。

私は、こんなにも嫉妬深かったのだろうか。それともこうなってしまうのだろうか、誰かのせいだ。

頭が睡眠が足りないと訴えてくる。そんな頭に響く蝉の鳴き声で

すら私をイラつかせてきて、そんなだから練習にはやはり集中しきれなかった。

本当に、何もかもが中途半端になってしまおう自分が嫌になる。

「紗夜、聞いてる？」

「……ごめんなさい、聞いてませんでした」

「もく、最近そういうこと多いよ？ 大丈夫？」

確かに最近こういった風に何かを聞き漏らすことは増えたと思う。原因はなんだろう。

睡眠不足か、ストレスのような何かを感じているのか。それとも、両方か。

「……今井さんは心配しすぎです」

「あはは、それならいいんだけどね」

今井さんはそういういいながら水を渡してくる。そういえば長らく水分補給はしていなかった。ありがたくそれを受け取ったはいいものの、急な目眩がやってきて手に力が入らずそれを落としてしまう。

蓋が開いていないのは幸いだっただなんて思考をする余裕はなくフラついてしまう。

立っている筈なのに、動いていない筈なのに足からは地面の感触が感じられない。浮いているような、沈んでいるような、不思議な感覚。倒れないようにゆっくりと座る。視界がねじ曲がったかのように歪み、それを落ち着かせるかのように手で頭を抑える。吐き気まではしないのが幸いだろうか。

「ちよつと、ほんとに大丈夫!?!」

「……大丈夫、です」

「大丈夫なわけないでしょ。紗夜、今日は帰りなさい」

「私はまだ……やれますー!」

振り絞るかのように声を出す。既に視界の不調は止まっていて、感じるのは頭の中の一部が自分のものではないかのようにふわふわした感覚だけ。こんなものなら少しすれば治るはずだ。

「だめよ、それと明日も休んでいいわ」

「そんなことしたらー!」

「もちろん、家でやるぶんには構わないわ」

今井さんだけではなく白金さん、宇田川さんも驚いたかのような表情をして湊さんの方を見る。

しかし湊さんはただ、と目をうつすらとだけ開きこちらをみながら続ける。

「あなたが倒れたら二日なんてものではすまないわよ」

「……わかり……ました」

「今日はもう終わりよ、どうせ集中もできないでしょうし」

全員が私の方を見てくる。責められているわけではない、そんなことはわかってはいるが自分がどうしても嫌になる。

それが重りとなって伸し掛かり立ち上がろうにも立ち上がれない。心配そうにこちらを見てくるその視線が、さらにそれを強くしてくる。

「ほら、立てる?」

「……ありがとうございます」

手を出され、それを取ると立ち上がらせて貰う。少しふらつくがだいぶましになったと思う。

「うーん、悠を呼んでみようかな」

今井さんはまるで冗談を言うかのようにこちらをみながらそう言ってくる。

やめてください。発しようとしたそれはまるで自らが望んでいないかのように外に出なかった。

心配をかけたくない、こんな姿を見られたくない。もし見られたら、知られたら、彼は自分を責めてしまうから。そんなこと今以上に許せない。

ならばなぜ、声に出なかつたのだろうか。どうして自らが望んでいないかのように飲み込んでしまったのだろうか。

——心配、してほしいのだろうか。

スタジオに一つだけある鏡を見ながらそんなことを考える。してほしくないのにしてほしい。それは背反するはずのもの、なのにこう

して存在する。

もしこうして別れているとしたら、鏡に映る私はどちらを持っているのだろう、こうして見ている私はどちらなのだろう。

どちらの私が正しいのか。混ざりあって、溶け合って、区別がつかなくなる。

「冗談だつて。そういうこととしてほしくないでしょ？」

頷くことすらできずにいるとギターを片付けられ外に連れられる。今井さんは私が心配で家まで送るとのことだ。

外は焼き焦げてしまふかのように暑さではなくじめつとしていて、まとわりつくような暑さがある。

ああ、今夜は雨が降りそうだ。

「……もう夜なのね」

帰って少しすると、疲れからすぐに眠ってしまった。昼頃だったというのにもう外は真つ暗で、ザーザーと雨の降っている音も聞こえてくる。

充電の残り少ないスマホを見ると三つのメッセージが届いていた。

もしやと思い見てみるがそこに映っていたのはお母さん、今井さん、羽沢さんの三人。少し落胆してしまったのは事実だ。

お母さんからは今日は帰れないという趣旨のこと。今井さんと羽沢さんからはお大事にという内容。

羽沢さんには明日行く予定だったものを取り止めてもらうという事を伝えた時に理由を聞かれ、それについて話した後返事が返ってくる前に眠ってしまった。

しかし二人の文は少し強めで、怒っているかのように思えた。それだけ心配しているという裏返しなのだろうか。もし彼が知ったら……怒ってしまうの^{くれる}だろうか。

「それにしても……」

このように何もすることがないなんてものは久しぶりだ。最近はずいぶん何かをしていたから、休む間なんてなかったから。

別に今だってギターをやってもいいのだがあんなことを言われた後に、起こしてしまった後にやろうとは思えなかった。

ふとテレビをつけるとそこには日菜が映っていた。Pastel * Palettesのライブの一部切り抜きらしいそれ。

今ではどの程度の差なのかを確かめるにはいいだろうと思いきい軽い気持ちでそれを見る。

「技術力は……まだ」

私が勝っている、そう思えた。他にもテンポは早めでまるで走っているかのよう、されど暴走列車というように他の演奏は潰していい。

そして日菜のギターソロのシーンがやって来た。一転、合わせるようなそれは全てを巻き込みそのまま離さないような音をしていた。それは単に音だけでない。日菜の楽しそうな表情すらも味方して。

背きたい現実から目を離せない。親指に少し力をいれれば消せるだろう。それなのに、押すことができない。その演奏は魅力的で見入ってしまった、何かが崩れる音がした。

全部負けないためにやってきた。だからこそ客観的にわかる技術力に全てを注いだ。

私は日菜より正確に、正しく弾ける。でも、だからこそ、それだけでしかない。

「こんな……こと」

つまらない音、そうとしか思えなくなってしまった。そうわかると同時に私は外に飛び出してしまった。

両親はいないし日菜も今日は仕事だと言っていた。その事実も後押してきたのだと思う。

行き先すらわからずにただただがむしやりに走る。雨に打たれ髪が濡れ、服が重くなり頬が濡れた。その不快感は微塵たりとも感じなくて、そんな暇はなくて。

「たすけて……」

耳に届いた誰の発したかすらわからないその言葉は、雨の音に潰されて打ち消された。

「……って……」

靴の中に水が入ってきているのがわかる。感じる暇のなかった不快感を感じる程度には頭が冷えると私はある場所に着いていることに気がついた。

そこはコンビニエンスストア、それも彼と会ったそこ。なぜここまで来たのだろう。偶然か、それとも狙ってなのか。別に近くもなく遠くもないここに来たのは何故なのだろう。

「……はあ」

地面は濡れている、とても座ろうとは思えない。ただそこに呆然と立っている。

雨が酷い。少しでも弱くなったら戻ってしまおう。そんな風な甘えた考えを許さないかのように雨の勢いは増すばかり。

ああ、確か前にもこんなことがあった。だからこそここに来たのかもしれない。

でも外はこんなにも真つ暗で、雨はこんなにも酷い。どうせ無駄な期待に終わってしまうだろう。

傘を買ってしまったおもうかと思っただが飛び出して来てしまったため当然お金は持ち合わせてはいない。スマホすらも充電中で、本当の本当に何も無い。

もうここまで濡れてしまったのだしどれだけ濡れたとしても大差はないだろう。そうわかっていても足は動かない。待っている、彼を。来るはずのない彼を。

そんな思い振り払ってしまおうと目を瞑る。来る筈がない。そう、来る筈がないんだ。彼は何も知らないのだから来れる筈がない。

「……どうしたんですか、こんな時間に？」

「……………え？」

聞き覚えのあるその声に目を開く。なんだろう。あなたがここにいる筈がないのに来れる筈がないのに。どうしてあなたはここにいるのだろう。

疑問は瞬く間に膨れ上がる。しかしそれは別の感情に食い潰され

る。嬉しい、そんな感情によって蹴散らされた。

「……とりあえず、これ」

そう言って彼は私の横に来て上着を渡してくる。こんなずぶ濡れだと風邪を引いてしまうと思ったのだろうか、しかしそれならば顔を背けるのは何故なのだろう。

もしやと思い自分の服を見てみるとたまたま白い服ということもあってなかなか透けていた。

その事実気づくとどうしようもなく恥ずかしくて、つい奪ってしまふかのように着を取ってしまった。

暖かい。こんな布一枚で変わる筈がないのにそう感じる。ずるい、あなたは本当にずるい。都合よく現れて、こんな風に優しくしてくれるあなたは本当に。

「……どうしてここに来たんですか？」

「……それは僕も聞きたいんですけど」

「それは……言いたくはありません」

日菜の音を聴いて飛び出してきた、なんて言える筈がない。嫌になったなんて言いたくない。彼は一体どんな風に思っているのだろう、私のつまらない音を。

「……今日は雨が降っていたので」

「だから、ここに？」

「ついでに夕飯買うのもかねてですけどね」

なんだそれは、可笑しくって小さく笑ってしまう。ああ、本当に可笑しい。

何がついでだ、それなら逆じゃなければおかしいじゃないか。そんなの、まるで私がここにいとわかっていたと言っているようなもの。

「……夕食を買いに来たつてことは」

「今日も親は仕事ですね」

だったら、と声は出せない。あなたの側にいさせてくださいとは言うことができない。

恥ずかしいから、眩しすぎるから溶けてしまいそうだから。あなた

の優しさに溺れてしまいそうで、離れられなくなってしまおう自信がある。

あなたを求めることは心ではずっとしているけれど、実際の行動としては何一つとして起こすことができない。

「……そつちもご両親はいないんですか？」

頭を軽く搔きながら尋ねてくるあなたには全てお見通しなのだろうか。はいと答えるとそれっきり、何も言葉は返ってこない。二人並び、ただただ強くなる雨を眺めていた。

「……白菜もいないんですよね？」

「……よく知ってますね」

「仕事なんだ、ってメッセージが送られてきましたから」

そつちから誘ってください。あの時みたく、優しく逃げ道を示してください。逃げるなんてよくないとわかっている。でも、今だけは……甘えさせてください。

「そういえば何も持ってないですけど……家の鍵って閉めたんですか？」

「……あつ」

ふと、今まで忘れていたことに気づかされる。何故今まで忘れていたのかわからない。これではどうしようもないではないか。

「送っていきましようか？」

「……お願いします」

こうなることを予期していたのだろうか、傘はこの前のものより少し大きくなっていた。そのせいかわらないが私と彼の距離はあの時に比べても離れてしまっている。

体が当たり合う程度には近いのだがそれでは少し物足りない。一歩小さなそれで近寄ると、彼も同じく一歩寄ってくれたかのような気がした。

ああ、家に着かなければいいのに。ずっと二人で、いれたらいいのに。

そんな思いから歩幅を少しだけ小さくすると、やっぱり彼も合わせてくれた。

いつもより遅く歩いていたせい加倍、とまではいかなくてもそれなりにかかっている気がする。だがそれは嫌ではなく、むしろ嬉しく感じられた。

たどえ会話が数える程度しか出来なかったとしても、外が暗くて彼の顔が見えなかったとしても。

こんな雨だからか周りに人の姿はない。自転車に乗っている人は勿論歩いている人も。雨音しか聞こえなくて視界は暗く、二人だけの世界を作り出してくれた。

「着きましたね」

「……そうですね」

しかし歩みを止めていたわけではないので当然終わりがくる。寂しさを感じてしまうとうとうしようもない喪失感も付いてくる。

もう着いたのに私は入ろうとすることができない。もう着いたのに彼は帰ろうとはしない。ただただ立ち尽くす。

「……タオル、取ってきてくれませんか？」

「お風呂場でもいいですか？」

「はい」

そう言っただけは家の中に入っていった。体が濡れている状態で玄関にいるのもなんなので待っているのは外だが、やはりどこか寂しいものがある。

しかし彼はお風呂場でもいいですか？ とは聞いてきたもののその場所までは聞いてこなかった。

単純に聞き忘れたのか、それとも少し探せばわかると思ったのだろうか。それならばいい。だがもし、もし彼が既に知っているからだとしたら？

それは一度来たことがあるということ、私が知らないということ
は、白菜と。

「取ってきましたよ」

「ありがとうございます」

しかしそんなこと聞ける筈がない。傘を閉じ、タオルを受け取り軽

く体を拭く。

「少しだけ、上がっていきませんか？」

雨が弱くなるまで、そう言うとは彼は頷いていくれた。彼をリビングに案内し、待っててくださいと言ってお風呂場に向かう。流石に濡れた体は気持ちが悪くてシャワーを浴びる。

しかし待たせるわけにはいけないので長くは入らない。本当にただただ体を濡らす物を別に変える程度に済ませておく。

「何か飲みますか？」

「あ、お願いします」

そう言われ珈琲を淹れる。何度も練習したというのにこうしてやるにはやはり緊張してしまう。

緊張してしまうのは練習が足りない証拠だと思っているが、これに関してはどれだけでもしてしまおうと思う。お菓子も作っていたやつを取り出して珈琲を淹れ終わるとそれらを出す。

どうしても評価が気になってそわそわとしてしまう。彼はなんと言ってくれるだろう、どんな気持ちで言ってくれるだろう。建前か、それとも本音でか。

「これってインスタント、じゃないですよね？」

「……わかるんですね」

「まあ、普段飲んでるのと違ったので」

「私が淹れたんです。最近羽沢さんに教わってて」

そこまで言っついでついでにやってしまったと思う。何故今になるまで気づかなかったのか。彼の今までの行動からして今井さんに聞いているのだろう、今日のことを。

「……そうなんですね」

しかし彼はそれだけ言っついで珈琲に再び口をつける。それ以上は何も言っつこない。それがほんの少しだけ気になった。彼は、心配してくれないのだろうか。

「怒らないんですか？」

「……なんでですか？」

「知っているんですよ、今日のこと」

「……リサさんから聞きましたね」

「それならー」

どうして私の事を、心配怒っしてくれないんですか。声にならないそれを、心の中だけで発してしまおう。

「……最近、ほぼ毎日夜は遊んでましたよね」

彼はただ、小さく言い始める。

「これだって、僕が珈琲が好きだからやってくれてるんですよね？」

「……はい」

珈琲を持ちながらお菓子を持ってそう言ってくる。何もかもが見通されている気分になる。

「リサさんが、最近紗夜さんは寝不足っぽくて、そして色々やっていて大変そうって言ってました」

その顔は、少しだけ嬉しそうに見えた。

「日菜も、最近紗夜さんは疲れてそうって言ってました」

だけど、それ以外にもその顔は……

「僕のためにやってくれてるのに、怒れる筈なんてないですよ」

とても、寂しそうに見えた。

「でも、心配はしちゃうのでできれば倒れるまではやめて欲しいかなって」

若干下を向きながら言うそれは自分のせいだと責めているのだろう。それがどうしようもなく心苦しくなった。

「……雨が強いですね」

「……ええ、物凄いですね」

外は叩きつけるかのような雨が降っている。それは彼を帰したくないという私の思いが空に伝わったかのように。

今日は泊まっていけますか、それを言えないのは私に度胸がないから。

もし私が日菜だったら言えたのだろうか。迷いもなく、緊張もなく、恥ずかしさもなく。ただただもつと降り注げと、外を眺める。

「ご両親は……いつ帰ってくるんですか？」

「えっと、明日の夜かと」

「それなら……」

しかしその次は出てこなかった。降り注ぐ雨の音、室内と室外なのでそこまで大きな音に聞こえない筈なのにいやに耳に響いてくる。

「……今日は……泊めて、もらっても……」

「……はい」

お互いに尻すぼみになりながら、それに顔も見合わせることもできない。彼は顔を赤くしてしまっているが、私はそれより酷いかもしくない。

彼はそれを望んで言ったのだろうか。私が心配だったのか、それとも本当に雨が強いから帰りたくないと思ったのか。

どちらにせよこれでいい、これがいい。だからといって何をするというわけでもないが。

「寝る部屋は……」

「あ、僕はここで大丈夫です」

「それは……」

やはり来客をリビングに寝かせるを悪いと思うしこの前は彼の部屋に泊まらせて貰った。だからここではなく、そこまでは思ったがそれでは一体どこで寝てもらおうのだろうか。

私の部屋？ それは少し抵抗がある。だがそれは嫌悪感を覚えていくわけではない。何故かわからないけど部屋はあまり見られたくない。

ならば、日菜の部屋？ それは嫌だ。上手く言い表せないが、とにかく嫌だ。

「いえ、それでお願います」

少し前ならもう眠っていた時間だ。最近はまだ起きていたし、昼に眠ってしまったとしてもやはり少し眠い。

だが彼は夕食をまだだと言っていたし何か作らなければ、そう思っ

て聞いてみたが、彼は大丈夫ですと言うだけだった。

「おやすみなさい」

その後特段会話はなかった。そう言い合って私は部屋に向かう。眠気はある、しかしそれとは正反対に眠ることができない。気になっ

て仕方がない、彼のことが。

30分は経つただろうか、やはり眠ることができないのでリビングに向かう。そこには私とは正反対に器用に座ったままソファで眠っている彼が見えた。

「日菜とはどこまで……」

彼を起こしてはいけないと明かりはつけずに隣に座る。ああ、あなたは日菜とどこまでやったのだろう。私ときほど変わらないのか。それとも学生としてのラインを越えたところまでやってしまっているのか。

そう思うと暗くてよく見えないとはいえ彼の方を見ることができなくなる。羨ましくて、妬ましくて、疎ましい。

「……おやすみなさい」

でも、これくらいならできる。あなたの隣で、同じように座ったまま目を瞑る。それだけで心が安らいでうとうととすれば、あなたの肩に頭が当たってしまった。

びくりとしたが彼は起きる気配はない、もう熟睡してしまったのか。それならば……いつそのままで。

横になっていないのに、座ったままだというのに。その筈なのにここ最近、いや、記憶にある中では一番、気持ちよく眠ることができた。

「おはようございます」

「……おはようございます」

朝は弱いのか眠たげな声でそう返される。雨は未だに止むことはないがそれでも昨日に比べれば明確に弱くなっている。

雲は消え雨音は聞こえなく、外の明るさに雨は溶けて意識しなければ見えてこない。そんな天気だからか不思議と心が軽くなる。

珈琲を淹れてテレビをつけると、そこにはPastel*Palettesの人達のライブの切り抜きがニュースで流れていた。当然、日菜のギターも。

「凄いですよね……私と違って」

珈琲を手渡すとそんな事を聞いていた。昨日聞けなかったという

のに、今こんな風に切り出せたのは何故だろう。

こうして流れてきたからだろうか、心が軽くなつたからだろうか。それとも何故か余裕といえるものを感じているからだろうか。

「私の音は……つまらない、ですよね」

「僕はそう思わないですよ」

「私は、自分だけの何かを見つけれられてないんです」

だから、空っぽ。

哀を謳う程度なら乗せない方がいいに決まっている。

一定の音しか出すことができない、乗せるべき感情が存在しない。

「……思っていることを、そのまま弾いてみたらどうですか？」

「……思っていること？」

「その場限りでも、感じていることじゃなくて自分のことじゃなくても、なんでも」

その言葉を聞くと私はギターを取りに行っていた。思ったことのない考え方だったから今すぐに試したいというものもあるのかもしれない。

今思っていること、長らく思っていること、それは既にある。そしてそれは悠さんに聴かせたい、伝えたい。

私がギターを持ち彼は座っている。久しぶりだ、長らくライブハウスでしか彼に聴かせられなかった。そういえばカラオケも最近行っていない。確かあれは半年くらい前だっただろうか。

緊張は欠片もなく不思議と落ち着いている。目を閉じて、深く息を吸い、指を動かし始めた。

私が伝えたいことは一つだけ。

それを乗せて、音に語らせる。

——私を、私だけを見て。

あなたと私の二人きり、そこには他の誰も混じらない。

テレビはついたままで Pastel? Palettes の演奏も流れ続けている。そして今は、日菜のソロパート。

でも彼は少しも視線をそらさず私の事を見ている。ああ、日菜を見ないで私を見て、せめてこの演奏の間だけは。

私も、あなたの事しか見ないから。

演奏はいつの間にか終わっていた。これは私の音なのか？ そんな疑問すら抱く音を奏でられた。

集中していたためかあまり強くは耳に残せていない。それですら、こう思っている。

「……どうでしたか？」

「……あつ、よかったです、凄く」

やつぱり、あなたはズルい人だ。全部、いつでも、なんでも支えてくれる。

彼はその後暫くすると帰ってしまった。もう外に雨は降っておらず、ふと見上げてみれば、虹が架かっていた。

「いつか、必ず」

あなたに哀ではなく、愛を、素直に、歌ってみせます。

花火

空は眩しい程に晴れていて雲なんてものは一つたりとも見当たらない。道行く人の中にはその日差しからか、傘すら差している人までいる。

柱の影に身を潜めて少しでもそれを軽減しようとするがやはりそんなことで防げるのはほんの少しで、体が溶けてしまいそうと錯覚してしまう。

「……どんな顔して会えばいいんだろ」

日菜と会うのは、これがあれから始めて。キスをされて、あんなことを言われ記憶にぐざりと刻まれてから。

わからない、どんな風に接すればいいのかわからない。いつも通りにできればそれが一番いいのだろうが、生憎そんな風にいられる自信はない。

待ち合わせの時刻までは後十分、ショッピングモールでの買い物に付き合っつてと言われ今に至る。

こんなにも暑いのだし中で待てばいいのかもしれない。だがもし日菜がちよつと早めにきてしまえばお互いにお互いを待つ、なんて馬鹿馬鹿しいことが起きるかもしれない。

しかしながらいつも若干遅刻気味の日菜が早くくるなんて事はあるのか、なんてことも思ってしまう。

実際に日菜が時間より早く来たことは一度もないのだが……あんなことをされたのだ、少しばかりそういうことを意識してしまうのも仕方がないだろう。

「悠君、久しぶり」

後ろからそんな声が聞こえてくる。振り向くと心臓が飛び跳ねたような気がした。画面の奥で見た時には何一つ問題はなかったのにどうしてこうも違うのだろう。

暑い、先ほどまでそう感じていたのに今は感じる余裕がない。熱い、それは明確に、体の内側から湧き出ているもの。

その湧き出るもののせいか知らないが喉が渴いて仕方がない。久

しぶりとも返せない。ただただ目をそらせずにいた。

「別に中で待っててもよかったのに」

「……なんとなくだよ」

「そんなこと言っちゃって〜」

後ろで組んでいた手の片方の人差し指をゆっくりと唇に運んでいくその動作に、どうしても顔が赤くなってしまふ。

そんな僕を見て日菜は笑う。その笑った顔も、やはり真っ直ぐと見ることができない。

「……で、何買うの？」

「水着！ 今度撮影で使うらしいんだけど各自で用意してって言われちゃってさ」

「……それ、僕よりもリサさんののが適任だと思うけど」

僕はお洒落とかそういう類いの興味も知識もなければセンスもない。なればリサさんの方がいい筈だ。この前一緒に買い物を買っていたし、なにしろ同性だし。

そんなことを考えていると日菜は、わかってないなあと呆れたような声で言う。

「悠君だから選んで欲しいんだよ、君の気に入ったそれがいいから」

「……選ぶだけだよ、探すのは流石に」

「むく、まあそれでいつか」

少しだけ不満そうにそう呟くと、日菜は何処からか帽子を取り出し深く被りサングラスをかける。

やはりその見た目は不審者そのものでアイドルつてめんどくさいんだなと思わされる。

水着コーナー、それも女性ものところにやって来たが、やはりいるのは女性のみ。男連れなんて人はおらず、さらには店員すら全て女性。

そんなところに入り込む勇氣は流石になく、日菜には一人で探しに行って貰った。

「もう時間もあんまりないんだよなあ……」

壁に寄りかかっているとそんな言葉が漏れてしまった。二ヶ月、言

われたのはそれだが今ではもう一ヶ月と半分くらいしか残されていない。

一ヶ月半、それをそれだけ残っていると考えるのか、それしかないと考えるのか。それは人とその出来事にもよるだろうが……あまりに少ないと思ってしまう。

それは今までの半分にも満たないもの。今はいい、だが夏休みが終わったらもつと早く時間は過ぎ去っていくだろう。いつも通り、流れる雲のように、あっさり」と。

「ねえねえ、こっち来てよ〜」

呼ばれたので向かってみるがやはり周りの視線はとても痛く感じってしまう。どれがいいかなくと三つほど見せられる。

そのうちの一つは見てるこっちが恥ずかしくなるくらいには派手で恐らく一番似合うだろうが……それはなんか嫌だ。

となれば二択なのだが、僕としてはどっちがお洒落とかわからない、だが適当に選ぶのもなんか悪い。

どっちがいいのかなと考えたが、結局はこっちの方が似合うかもという直感になってしまった。

選んでみると、あたしもなんとなくそう思ってたんだよねと言い残して日菜はレジの方に向かっていった。

外で日菜を待っていると、近くを通る人の話している内容が耳に入ってきた。何やら今日の花火何時に集まる？ とのこと。

そういえば今日は花火大会だったか、毎年行われていることだからすっかり忘れていた。

「そういえばさ、今日は花火大会だね」

「……らしいね」

「どうせ暇だよ？ 行こうよ！」

日菜はいつの間にか会計を済ませていて同じ会話を聞いていたのかそんなことを聞いてくる。

行くにしてもおそらく行われるのは夜。紗夜さんを誘っても全然時間は余るだろうし、夜なら紗夜さんも予定はないかもしれないし。

『おねーちゃんのこと、嫌いにさせないでよ……』

だけど思い出されるのはその言葉。それはあの日、何よりも強く残されている。これに比べれば他のことなんてあつてないようなもの。あれは冗談なんてものではない。本音なんだと、そう感じられたから。

今はどうなのだろう、もう既になつてしまったのだろうか。家は一緒なのだし会わないなんて事はないだろうが。

「……どうかしたの？」

「いや、なんでもないよ」

「それじゃあまだまだ時間あるけど……なにしよつか？」

「……とりあえず、昼飯でも食べる？」

賛成、日菜はそう言つて手を繋いでくる。サングラスの間から見える笑顔は自然で、何よりも似合つていた。

聞くことができない、聞けるわけがない。もし聞いてしまったら、この笑顔が消えてしまいそうだから……

「うん、ここならよく見えるね」

「屋上の方がよく見えたんじゃない？」

「流石に今日は人がいそうだからね」

帽子とサングラスを外しながらそう言つてくる。テレビでそれを見ているのか、それとも他の見やすいところにいるのか知らないが周りには見事に誰もいない。

しばらく待っていると花火が上がり始める。外灯の明かりと川の流れる音、それだけだった世界に新しく光と音がやってきた。

「星もいいけどこういうのも、るんつてするね」

「……そういえば久しぶりだね、それ」

「そうだっけ？ まあ悠君といるとずっとるるるんつて感じだから言葉にしてないだけかも」

最近の花火というのは凄い。ただただ円形でオレンジ色のものだけでなく、色とりどりに花や星などの様々な形のものがある。

「あ、あれ犬みたいじゃない？」

「日菜は犬、好きなの？」

「まあまあかな、犬が好きなのはおねーちゃん」

出そうとは思わなかったのに、つい紗夜さんのことが話題にあがってしまった。

どうにかしてそらさないと、そう思考するが日菜はそれに割り込むように言葉を出す。

「……やっぱりさ、嫌いにならないんだよね」

「……その方が僕も、ありがたいかな」

「あたしも。出来れば嫌いになんかなりたくないもん」

嫌いにならない。それはなんともありがたい言葉で、それでいて冷たい言葉。日菜は、嫌いにならないとしか言っていない。

「なんでかわからないんだよね」

「紗夜さんだからじゃないの？」

「かもね。でも自分のことなのにわからないんだよ？ 不思議じゃない？」

「日菜にもわからないことあるんだね」

「あたしにもわからないことくらいあるよ、例えば……次にあがる花火の形とか」

「……それは誰もわからないでしょ」

他人の事がわからない。初めて会った時にはそう言っていた筈なのに今では自分のこともわからないと言っている。それは成長か、はたまた退化というべきなのか。

そんなことを考えていると、長らく続いていたドンドンと発砲しているかのような花火の音が急に止まった。

もう終わったのかと思ったが時間的にはまだ中盤程度だろうし、小休憩のようなものなのだろうか。

「……まあ一番わからないのは悠君なんだけどね」

「それはまた、何がそんなにわからないの？」

「君にあたしだけを見てもらうにはどうしたらいいか、色々考えて、全部試して……全部駄目だったから」

「……あれもそういう意図？」

かもね、とこちらを向きながらそう言ってくる。日菜はまた上がり始めた花火に視線を向けることなくこちらを見ている。

僕もそんなものは気にならないし、音すらも入ってこない。

もしかしたらまたされるんじゃないか。そう思うと顔はそらしたくなるがそれはできない。たいした理由はない、男子高校生だから。理由は多分、それだけだと思う。

「安心してって、三回目はないからさ」

「三回目？」

僕がそう聞くと日菜は声を溢した。三回目、それは言い間違いか聞き間違いか。だが声を溢したということは多分、本当のことなのだと思ふ。

僕が覚えてないだけか。まさか、そんなことをされたのなら忘れるはずがない。ならば、僕が知らない間に。

「ごめんね」

「……アイドルなのにそれでいいの？」

「なりたくてなったわけじゃないからいいの」

そんなもの屁理屈、日菜もそれはわかつてはいるだろう。いや、日菜のことだしもしかしたら本心からそう言っているのかもしれない。

まあ常日頃メンバーの話をしているし、活動内容の話もされるので少なくとも嫌い、ということはないのだろう。

「それで、三回目はないってどういうこと？」

「なに、もしかしてしてほしいの？」

「……さあ、理由でもあるのかなって」

うーん、と目を閉じて両手を組み日菜は考える。理由はあるのだろうか。

自制心が足りなかったから起こしてしまった行動だからなのか、それとも罪悪感というものを抱いたからなのか。

「三度目の正直って言うじゃん。だから三回目は……悠君からがいいな」

うるさいくらいの花火の中、不思議と透き通るようにそれは聞こえ

てきた。恥ずかしいからなのか日菜は花火の方を眺めていた。

僕はそれに何も答えることはできず、花火を眺める彼女を見ることしかできなかった。

僕はどうしようもない幸せ者だ。かわいらしい二人に好かれて
いるのだから。

僕はどうしようもなく不幸者だ。どちらかを、裏切らなければなら
ないのだから……

常夏

蝉の鳴く声がある。耳障りなその音は不快感を感じさせ、そんなこととはありえないというのに不思議と夏の暑さを倍増させているかのように感じられた。

昨日の夜、日菜から明日の昼って暇？ という簡潔なメッセージが送られてきたので暇だと返して今に至る。

悠君の家に行くねと言われたのだが、今日に限って家には親がいるので家の前で日菜を待っている。

エアコンのある空間がすぐ近くにあるというのにこうやって外で待つのはなんとも馬鹿らしい。それに今日は特に暑いから余計に。

アイスを持ったら食べ終わる前には溶けてしまふんじゃないか、そう思わされるくらいには暑い。暫く待っていると少し大きめの鞆を持った日菜がやってきた。

「あれ、なんで家の前にいるの?」

「今日は親がいるからさ」

「なるほどね」

「で、今日は何するの?」

そう聞くと日菜はポケットの中から二枚の紙を取り出してひらひらと振ってくる。

ライブのチケットのような形をしたそれを見て、今日はRoseliaのライブがあるのかと思っただが渡されたそれを見ると書いてあるものは予想とは全く別のものだった。

「なにそれ」

「トコナツツパークの招待券、この前撮影で行った時に貰ったんだ」

「トコナツツパーク……ああ、あれか」

小学生の頃だったか、姉に連れられて行った覚えがある。最近でも変わらずテレビで取り上げられていてその人気は衰えを知らないらしい。

泳げないという事はないし招待券ということは金も入場料は必要ないのだろう。しかし、一つだけ大きな問題が存在している。

「水着、持ってないんだけど」

「向こうでも買えるらしいから大丈夫だつて」

早くしないと混んじやうし取り敢えず行こと手を引かれる。確かに大人気施設というのもあるし、今日のような暑い日となれば込み合うことは間違いない。

しかしそのような場所に日菜は行つて大丈夫なのだろうか。日菜は大人気アイドル、それに水着ともなれば変装らしきものはろくに出来ないだろう。

さらに人も多いとなれば……まあめんどくさいことになるのは目に見えている。

日菜に、大丈夫なの？ と一応聞いてみると、何が？ とまるでわかっていないかのような答えを返された。

「バレたらめんどくさいことになる気がするけど……」

「大丈夫じゃないかな、彩ちゃんがこの前行ったけど誰にも気付かれなかつたつて聞かされたし」

「……案外大丈夫なもんなのかな」

やはりそういったところでは芸能人がいたとしても人が多すぎて気にかけないのか、それとも自分のことで手一杯なのか。

流石にアイドルとなれば気づかれそうなものだと思うが……前例があるなら大丈夫なのだろう。

「あ、アイス買ってこようよ」

日菜のそんな提案に乗り途中で見かけたコンビニに寄る。早くしないととは言ったもののこの程度なら誤差にも入らないだろう。

あまりの暑さに食べきる前に溶け出すアイスを見て、プールへの思いが少しだけ強くなった。

プールというのは不便なもので、プールサイドならともかくプールの中に入るのならば眼鏡は禁止。

プールサイドなら大丈夫とは言うものの、何処かに預けておけるといわけではないので実質的にはそちらでも付けることはできない。

コンタクトをつけているわけではないので視界が驚くほどにボヤ

けて見える。寝る時と風呂以外では基本付けっぱなしなので少しだけ気持ち悪いと感じてしまう。

「それで、最初はどこ行くの?」

「人気のアトラクションは優先パス取っておいた方がいいって教わったからまずはそれかな」

「人気となると……あれか」

眼鏡をつけていなくてもわかる巨大なそれ、恐らくはウォーターズライダーなのだろうが……もの凄い急角度に見えるが多分気のせいだろう。

しかし本当に不便だ、こうして地図を見るのにも一苦労。他のアトラクションの人気不人気はわからないが一番人気だけ取っておけば問題ないのだろうか。

「それにしてもほんとに目悪いんだね」

「ずっと眼鏡だしね」

「あ、あの……Pastel*Palettesの氷川日菜さんですよね!」

突然声をかけられたので何かと思いのした方を向くとそこには女子が二人。その視線は僕の方には向けられておらず日菜の方に向いていた。

知り合いなのだろうかと思ったが、Pastel*Palettesの名前が出てきたのだから恐らくファンなのだろう。大丈夫とはなかったのだろうか。

日菜はそうだよと返した後僕の方に視線を向けてきた。少しだけ困ったようなそれは助けを求めている、というものではない気がした。

「えっと、そちらの人は……」

「あく……僕も日菜のファンで、偶々見かけたのでお話してただけです」

やはりアイドルとして異性と一緒にいたなんて事は知られない方がいいだろうし、ファンで偶々見つけたから話していたということにおくのが一番いいだろう。

僕がいたらこの人達も満足に話ができないだろうし一度その場を離れる。

スマホの持ち込みは禁止はされていなかったが、ちょっと古めのスマホのため防水ではないので壊れる可能性を考えて持ち込んではいない。

また見つけるには骨が折れるが変な風にSNSで拡散されるかもしれないことを考えれば仕方がないことだろう。

「どこ行くか……」

日菜の事を待つのもいいかと思っただが少しだけ人ばかりができていたのでだいぶ先になってしまいうだろう。新人アイドルの人気というのは凄まじいものだ。

仕方がないとはいえ一人でぶらつくのは少しだけ寂しいものがあった。

「暇だ……」

激流下りにウェーブプール、暇を潰せるものはたくさんあったがやはりそこに一人でいる人なんてどこにもいない。

全員二人組かそれ以上。一人で行ってもなんら問題はないがやはり周りの視線というものは気になってしまう。

日菜はもう解放されたのか、何処にいるのか、辺りを見回してみるのが眼鏡がないせいもあってか見当たらない。そも狭い訳ではないので近くにいない可能性の高いのだが。

「もしかして……悠さんですか?」

前方から声をかけられる。うつすらとしか見えないがなんとなくそれでも誰だかわかる、その声でそれは確信に変わる。

「紗夜さんもこういった所に来るんですね」

「それはこちらも同じです」

どうやら紗夜さんはRoseliaの人達と来ているようで今からそこに戻るらしい。一人でいるのも何だしと思い、紗夜さんに連れられてそこに向かうことにした。

「遅かったね紗夜、隣の人は……」

「あ、悠君！ おねーちゃんと一緒にいたんだ！」

「え、嘘！ 悠なの？」

Roseliaの人達といれば日菜も見つけやすいだろう。そうも思っていたのだがそこには既に日菜がいた。

ふと隣を見ると紗夜さんは少し驚いたかのような顔をしていたのでおそらく紗夜さんが離れている間にきたのだろう。

「今からリサちーとあこちゃんとウオータースライダー行くんだけど、悠君も行こうよ！」

「……遠慮しとく」

「あく、悠君怖いのが苦手なんだっけ」

「男の子でしょ、行こうよ」

「そうだよ悠兄！ ぜったい後悔しないから！」

「……流石に男女比があれじゃないですか？」

「大丈夫だって、そんなの誰も気にしないよ」

僕が気にするんだけど、そんな思いは届くことなく日菜に手を引かれる。

確かあれは五人乗りの筈だからあと一人は乗れるがまあ四人でも問題はないだろう。他に乗る人はいないだろうし。

ウオータースライダーのところに着くと人は一人もいない、というわけではないが行列というほどではない。時間的な問題か、それとも運が良かったのか。

「あれ、どうしたの？ 紗夜」

「もしかしておねーちゃんも乗るの！」

「……別にいいでしょ」

「そうだけどさあ、さつきあんなに怖がってたじゃん？」

「そ、それは……今井さんも同じでしょう」

顔を少し赤くしながら紗夜さんは言う。怖がっていたというのにまた乗りにくるとは、怖さの中に楽しさがあるというものなのだろうか。

そんなに待つことなく順番がやって来て乗り込んで暫く進むとそこそこの急カーブに連続で襲われた。

ボートに掴まっていなければ振り落とされる人も出てくるかもしれないくらいには思えてこれは安全面は大丈夫なのだろうか、なんて思える程度には余裕があった。ここまでは。

「……紗夜さん、なんで僕の手に掴まってるんですか？」

「あ、ずるい！ あたしも！」

「あはは、大人気だね」

でもちやんとボートに掴まってた方がいよいよ、リサさんがそう言うとは手は離された。それに少しだけ寂しさを覚えてしまうのは仕方がないだろう。

しかしここまではそんなに怖くないと思うのだが……この先何があるのだろうか。

先ほどリサさんはさつきと言っていたし恐らく紗夜さん達は二度目、この怖がり方は先の何かのせいだろう。そんなことを考えているといきなり体を浮遊感が襲った。

そこから先はあまり思い出したいと恐らく紗夜さん達は二度イダーは人が乗るために作られていない、それだけはわかることごときた。

「紗夜、ポテトばっかじゃなくていろいろ食べなつて」

「ポテトばかり食べてません！」

「このムール貝とか美味しいわよ、食べてみて」

ウォータースライダーの後は激流下りやウェーブプール、温水プールとかに行つてたらすぐに夜になつちやつた。

ウォータースライダーはすつごくくるんつてきて、もう一回乗ろうと誘つただけで悠君は首を縦には振つてはくれなかった。

夕食はおねーちゃん達はシーフードレストランに予約していたんだけど、あたしと悠君はそういうのは一切決めてなくてどうしようかと思つてた。

でもリサちゃんからの提案で折角だから一緒に食べることになった、とは言つても席が隣なだけだけど。

「ファンの人とはどうだったの？」

「面白かったよ、あたしのどこが好きなのかとか聞いてみたりしてさ」
他人って面白い、他人はあたしじゃないからあたしとは全く違う考えをしていてよくわからない。それがすつごく面白いけど……面白
いだけ。好きとはまた違う。

大好きな君と一緒にいたのに邪魔をされて少しだけイラツときたのは本当だ。アイドル活動は楽しいけど、こうやって邪魔をされるのはるんってしない。

でも話すこと自体は面白いから一人の時か他の人と一緒にいるときなら全然構わないんだけど。

「悠君って好きなもの先に食べるタイプ？」

「あゝ、多分そうかも」

悠君は同じものばかり食べてるからそうなのかな、って思ったけどやっぱりそうらしい。そしてそれはおねーちゃんと一緒。

あたしは好きなものしか食べたくないけどできれば最後まで取っておきたいタイプ。そしてそれは食べ物だけじゃない。

「この後はもう帰るの？」

「水上ショーを見る予定！ 撮影の時は見れなかったから楽しみなんだ」

「へえ、盛りだくさんだね」

レストランに入る前に一旦更衣室に行ったからか、悠君にはいつも通りの眼鏡がかけられていた。

見え方がどれだけ変わるのかわからないけど、更衣室から出てきた悠君はあたし達から顔を背けていたしだいぶ違うんだと思う。

「そろそろ始まるみたいですし、移動しましょう」

「そろそろって、まだ15分もあるわよ？」

相変わらずおねーちゃんは時間に厳しい。悠君も行動は早いけど遅れても怒らない。

君はどうして行動が早いんだろうか。もしかしてそれは、おねーちゃんに影響されたからなのか。それだったらちよつと、嫌だなあ。

ちよつと早くに行動したとはいえやはりメインイベント、あんまり前の方は取れなかった。とはいえ見えないなんてことは全然ない。

水上ショーを眺めていたけどやはり斜め前に座っている悠君の顔にしか目がいかなかった。そんな時、ドンツという聞き覚えのある音がして空を見上げると、そこにはいくつもの花火が上がっていた。

「ねえねえ、悠君」

そう言いながら肩を軽く叩くと彼はこちらを向く。何と聞かれるがあたしはなんでもないと返すと彼は視線を前に戻してしまう。

それがちよつと嫌で、彼に後ろから抱きついて顔を彼の横に持つてくる。

「あと一ヶ月、だよ」

「……わかつてるよ」

顔を赤くしてそう返される。おねーちゃんがこつちを見ている。そういえばおねーちゃんは知っているんだろうか、あたしが改めて告白したことを。

おねーちゃんに見えるように、見せつけるようにすると彼だけでなくおねーちゃんも顔を赤くする。

そんな姿を見るのも面白い、だけど悠君がそつちを見るのは……面白くない。

おねーちゃんのこととは、やっぱり嫌いになれない。けどもし君がおねーちゃんを選んじやったら、それは本当になるかもしれない。怖い。

でもそれより怖いのは……君のことを好きじゃなくなってしまうかもしれないこと。冷めてしまうことが、覚めてしまうことが何より怖い。

君はあたしのすべてなのに、君の事を好きじゃ無くなっちゃったら……あたしはなんになるのだろう。

また花火が上がる。観客の人はみんなそちらの方を向くけれどあたしは悠君から目を離せない。

お願い、嫌いにさせないで、好きでいさせてよ。それは、あたしにはどうすることもできないから。

課題

人間やらなくてはならないものというものにはどうにもやる気が出ない。

近日中にやればいいというのならばやるが、いかんせん期限が遠い物に関しては量に限らずやろうと思えない。

しかしそれをいつまでも後回しにしていると当然ツケがやってくる。

しかもそれを後悔するのは決まって期限が目の前になってから、何度も経験したというのに成長しない。つまるところ……

「めんどくせえ……」

目の前に積まれている課題の山、手を付けている物を探す方が困難な風に思える程度にはやっていない。

提出期限、つまり夏休みの終わりまで後3日、長いようで短いそれでは終わりきるかわからない。勿論サボらなければちゃんと終わるのだろうが、そんな自信は欠片もない。

いざ課題をやろうとする前は何故か部屋や机の散らかりが気になるものだ。普段は全く気にも止めない癖にこういった時には何故か目に止まる。

無駄と言えるくらいには綺麗に片付けた終わった時、スマホが通話がかかってきたことを知らせてくる。

親から連絡でもきたのかと思ったがそこには紗夜さんの名前が記されていた。

『すいません、いきなり電話をかけてしまつて』

「いえ、全然大丈夫ですよ」

『今日つて悠さんのご両親は出掛けていますか？』

「今はいないですね、夜には帰ってくると思いますけど」

『そうですか』

こんなことを聞いてどうしたのだろうか、そんなことを考えているとインターホンが鳴った。

すいませんと紗夜さんに告げ通話を切り、スマホをポケットに入れ

てからドアを開ける。

スマホをポケットに入れておいてよかった、多分持ったままだったら落としてしまっただろうから。

宅配でもきたのかと思いきや開けたそのドアの先には予想もしていなかった人がそこにはいた。

「事前の連絡もなく申し訳ありません」

「……とりあえず中に入りますか？」

扉の先には先ほどまで話をしてた人物が立っていた。どうしてそこにいれるのか、ということも気になったがそれ以上に理由が気になった。

日菜が連絡なく来ることは何度もあったが紗夜さんはこうして事前の連絡をせずに来るような人ではない。

何かあったのか、そんな事を考えながら冷蔵庫から麦茶を取り出しそれを渡す。

「……何かありましたか？」

「いえ、特には」

首を横に振る彼女は何となくだが嘘をついているようには見えなかった。

ならば何故来たのか。勿論それを迷惑だとは思っていないし、理由が特にないのであれば拒む理由もない。

……いや、理由があっても拒みはしない。むしろ歓迎すらするかもしれない。やはり何かしら頼られている、というのは少し気持ちのいいものだから。

しかし先程の、特にはという発言から汲み取れるに、理由が全くないというわけではないだろう。ただそれが重くないだけ。

「昨日、言っていましたよね」

「昨日……何か言いましたっけ？」

「……夏休みの課題、終わってないんですよね？」

ため息混じりにそう言われる。昨日は紗夜さんとは直接会っていない筈だが、そんな風に考えていたものは一瞬で消え去った。

昨日の夜、相変わらず謎の余裕でNFOをやっていた時に、そんな

風な内容をチャットで打った記憶がある。

「……はい」

「長期休暇の課題は計画性を持ってやった方がいいですよ」

はいと頷くことしかできない。いくら期限がまだとはいえ、課題が終わっていないと誰かに言うのは変な恥ずかしいものがある。

昨日はチャットを打ち込んだ後は宇田川さんや白金さんにも驚かされてしまったし、やはりこういういった事は軽率には言わない方がいいのかもしれない。

「終わる目処は立っているんですか？」

「……わからないです」

そうですか、紗夜さんがそういうと暫く沈黙が続いた。ここで何か言えたらいいのだろうが、そんな度胸はないしこの沈黙をどうにかできるセンスもない。

「それなら、私が手伝い……ましようか？」

どんだん尻すぼみになるその声にその沈黙は破られた。恥ずかしいのか顔は下を向いていったのだけはわかった。

突然のその提案に少し呆けていると、彼女は顔をほんの少しだけ上げてこちらを覗いてきた。

するとほんのすこし顔が赤くなっていることに気付きそれがとても可愛らしく、それにつられて僕の顔も多分赤くなっていると思う。

「……お願い、できますか？」

多分紗夜さんが来ていなければ僕は答えを見てそれを丸写ししていたと思う。それができないと少し残念に思うこともあるが別にそれでもいいかなと思えている自分がいる。

こんなこと考えられなかった。楽な方ではないというのにそれを選ぶというものは前までは考えられなかったこと。

課題のワークを開くと、僕と紗夜さんは隣り合わせに座る。

普段から勉強なんて全くしていないのだから、当然わかるものなんて一握り。わからないところは紗夜さんに教えて貰いながら解く。

説明をされる際どうしても体が近寄ってしまう。そんなことを意識しているのは僕の方だけかもしれない。

折角教えて貰っているというのに説明を集中して聴けてないというのはとても悪いと思うし、できれば意識しないようにしたいとも思うがやはり気になってしまうものは仕方がない。

そのページすべての説明が終わる頃にはほんのすこし、それこそシャーペン一本分程度ではあるが確実に近寄っていた。

それは僕からか、紗夜さんからか、はたまた両方からなのか。それは、わからない。

「一旦休憩にしましょう」

「……まだ他のワークが大量に」

「ただ終わらせるだけでは課題の意味がありません。それに、集中力が切れているように見えたので」

ひとまず一冊目が終わったが終わらせなければならぬものはまだまだ残っている。しかし紗夜さんが教えるのが上手なのか終えるのにそこまで時間はかからなかった。

休憩しましょうと言われた手前一人で進める気にもなれない。教えて貰っているのだし何かお菓子でも持ってくるかと思いきそれを取ってきて紗夜さんに渡す。

「……聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「答えられる範囲内なら」

ありがとうございます、紗夜さんはそう言ったが俯いたまま次の言葉は投げ掛けられなかった。

もしかして聞きづらい事なのか、しかしそんな質問に思い当たることは……ないとは言えない。

「……悠さんは日菜と、どこまでいったんですか？」

「……変わりないですよ、前までと」

「付き合っていないんですか？」

「ないですよ」

やはりあの時、プールの時のあれを見てそう思ってしまったのだらうか。

あれは思い出すだけで恥ずかしい、なんて程度のものではない。そ

んな事を考えているだけで少しだけ顔が熱くなるのを感じた。

「ということ、まだ答えてないんですね」

「……来月の27日、答えます」

「その日は確か悠さんの誕生日、でしたよね？」

「言いましたっけ？」

「日菜から聞きました」

誕生日、そのくせ貰うのではなく答えを渡す側。それに不満はない。今まで、今でさえ決められていない自分が、全て悪いのだから。

「それなら私も……その日にお願ひできますか」

不意打ちのようにかけられたその言葉は、鈍器で殴ってきたかのようには僕の頭を揺さぶったかのような気がした。

何をとは言われていない。だけどそれは流れるに……これしかないだろう。

ああ、全部自分が悪いんだ。決められないのが悪い、逃げてきたのが悪い。だからこんなことになってしまう。

「……………わかりました」

「申し訳ありません、待ってますって言ったのに……」

「大丈夫ですよ」

そろそろ再開しませんか？ そう言って課題を再び始める。

教科が変わったとはいえ問題は難しくなったわけではない、むしろこちらの方がやりやすいとも思える程度。しかし明らかに解く速度が遅くなってしまった。

一ヶ月後、そんなものこななければいいのに。寸分の狂いもなく動く時計に、少しのイラつきを覚えた。

「今日はありがとうございました」

「いえ、私の方こそ勝手に押し掛けてしまつて申し訳ありません」

時刻は7時を回っていてそろそろ悠さんの両親が帰ってくる時間帯になったらしく私は帰ることになった。

まだ悠さんの課題は終わりがきつてないが、明日明後日とサボらずやれば恐らく終わる量。彼ならきつと大丈夫だろう。

そう思つて扉に手をかけ、それを開けようとしたところで振り返る。

忘れ物をしてしまったから。ただ少し物足りないと思つてしまつたから。

「あの、明日も今日みたいなことつて……」

「明日は一日中親が家にいるらしくて」

「……そうですか」

ちよつとの期待を孕ませた問い。それに対する答えはとても悲しくて、無念としか表しようがなかった。扉に手をかけ直した所で声をかけられる。

「明日も暇なので図書館とかでよければ」

何故その内容を言つてくれたのかはわからない。だけどそれは嬉しくて、つい振り返つてしまう。

こんなこと初めてかもしれない。夏休みが終わつてしまうことを寂しいと思つてしまうのは。

今までは十分といえる程満足は出来ていた。でも今回だけは終わつてほしくないと思う。

「それでは、また明日」

「ええ、また明日」

自分から決めたのに、悠さんが決めるまでと言つたのに結局こうやって求めてしまう。日菜の後を追つてしまう。取られたくなくて、失いたくなくて……我慢できなくて。

日に日に思いが膨れていつて、恐怖が破裂しそうになつてしまう。綺麗な事だらけの理想を抱えそれを心の端に捨てる。綺麗な事だから叶えられないのなら、そんなものいらぬ。

あなたはどちらを選ぶのだろう。私を選んでくれるのか、日菜を選んでしまうのか。選ばない、なんて選択肢は……取らないでくれると思う。

譲り合つて、奪い合う。だけどそれには何の意味もない。どちらかを選んだら、あなたはもう片方のことは忘れ去つてしまうのだろうか。

あなたがそうしたいのならそれでもいい。でも私は、多分日菜も忘れない、忘れられないと思う。

だって今の私達がいるのは、あなたがいたからだから。

泣いて笑って、日々を過ごした。

あなたの選択に私はどうするのだろう。私は、笑っていられるだろうか。

不明

肌が焼けている子、髪が短くなった子、ちょっとだけ明るくなった子。夏休みが明け数日経ったというにも関わらず、クラスの子の変化にいまだに慣れていない。

「白金さん、湊さんに遅れると伝えておいて貰えないかしら」

「大丈夫……ですけど、何か用事でも……あるんですか？」

「今日は生徒会の仕事がありますので」

新学期が始まったということもありここ三日間授業はなくテストだけだった。当然 Roselia の活動は大事だが、学生であるからにはこちらの方が優先されるのは当然だ。

テストで赤点なんてものを取ってしまったえばそれはバンド全体の遅れとなる。

そのため今日は久しぶりの Roselia での活動。全員個人練習は怠っているわけではないと思うが音を合わせるとなると話は別の事だ。

そんな大事な練習に遅れてしまうのは心苦しいが生徒会には自ら志願したのだから仕方がない。そんなに長い用事ではないのが唯一の救いと言ったところか。

「……大変そう……ですね」

「自分で決めたことなので」

そんなこと会話をして白金さんと別れ生徒会室に向かった。内容としては大したことはなかったが、30分程度もかかってしまった。

今すぐ練習に向かってもいいが折角なのでクラスの見回りをする。三年生ともなればクラスで自習をする人もいるが二年生でそのようなことをするものはいない。しかし騒いでいたりすれば、三年生の迷惑になってしまうので注意をする気でした。

だが騒いでいる人どころか残っている人もいない。今学校にいるのは部活をしている人くらい、テスト終わりというのもあって残ろうとは思わないのだろう。

最後のクラスの扉の前に来たとき、中から話し声が聞こえてきた。

あまり大きな声ではないので注意する必要はないかと思っただが、これから大きくなる可能性もあるので、なるべく早めに帰るようにと伝えるためにその扉を開けた。

「あら、紗夜ちゃんじゃない」

「白鷺さんに丸山さん、何をしているんですか？」

「撮影の練習をしたの。事務所で練習をしてもよかったけど今日はバイトがあるから……」

「……ところで彩ちゃん、大丈夫なの？」

「え、何が？」

白鷺さんが時計を指差すと丸山さんの顔は青くなり、走って廊下に出ていった。廊下は走らないと言うが彼女には聞こえていないだろう。明日改めて注意させて貰おう。

「はあ……白鷺さんも早めに下校してください」

「そうさせてもらうわ。それにしても本当に意外ね」

「何がですか？」

「あなたが誰かを好きになるなんて」

どこからそれを、羽沢さんのお店で会った時には確か彼はいなかった、それならば出所なんて一つしかない。

「白鷺さんには関係のないことです」

「関係ないなんてことはないわ」

日菜が絡んでいるからだろうか。彼女は日菜が悠さんの事を好きだとは知っているのだろう。だけど私には全く関係がない。

Rosealiaの練習もあるので早く帰らねば、と扉に手をかけたところで白鷺さんが発する。

「私も彼の事が好きって言うても？」

その言葉に思わず振り返る。彼の事を好き？ 白鷺さんが？ 悪い冗談、しかしその表情からは何も読み取れない。

何故、いつ、どこで、思考が止まらない。何かが、心の奥底で黒いナニカがあらわれた。

目の前の人が先程と同じ人には見えない、それこそ私からすればそれは、悪魔のようで……

「……冗談よ」

「……からかうのはやめてください」

「そもそも私が彼の事を好きになっただとしても、彼は私のことは選ばないわよ」

それはあなたもよくわかってるでしょ？ そう言つて小さく笑う彼女を見ると、そのナニカは霧散していった。

安心した、酷く。もし冗談と言われなかったら、私の中で彼女はどくなつていただろう。

「……わかりませんよ」

「わかるわよ。彼、あなたと日菜ちゃんに夢中よ？」

「それでもです」

「……本当に彼のことが好きなのね」

それこそ日菜ちゃんと同じくらい、その問いには否定することも頷くこともできない。

負けているつもりはない、だが勝っている自信もない。知らない、日菜がどれほど彼のこと好きなのか。わからない、私はどれだけ彼のことが好きなのか。

「……練習があるので私は失礼します」

「それは週末も？」

「……だつたらなんですか」

「あなたはそれでいいの？」

「それはどういう……」

「わからないならいいのよ」

そう言つて白鷺さんは教室から出ていった。あれは一体どういうことなのか、何か引つ掛かつて気持ち悪い。

何もかもがわからないというわけではない、でも何をわかっているかが、何がわからないのかわからない。何処かでうすらと理解しているような自分があることがなにより気持ち悪い。

うっすらと浮かんでいるそれはなんなのか、廊下を歩きながら考えてみるが、いぞそれが何かはわからなかった。

いつも通りライブハウスに向かっている筈だった、にも関わらず辿り着いたのは別の場所。

学校を出てからもずっと考えていたとはいえ道を間違えたという記憶はない。

ならば何故ここに来たのだろうか。用事はない、逆方向というほどではないが道の途中にあるわけでもないこの場所に。

「そういういえば今日は……」

水曜日。彼はいるだろうか、確信はない。そもそも学校が違う上に私は学校が終わってからだいたい時間が経っている。

夏休みの課題を手伝っている時、彼はテストがあると saying していたのでおそらくあったのだろう。

彼にも友人はいるはず、それも私の知らない友人が。勉強が得意でない彼のことで、きつと今頃その友人と食事でもしているに違いない。

そんなことを思いながら私はコンビニの中を覗き込んだ。

声はかけられない、中には入れない。このガラスが邪魔だ、このガラスが生命線だ。中に入れば私は出てこれなくなる。

週刊誌を手にしたあなたは何を読んでいるのか。制服ではないところを見るに彼は誰かを待っているのだろう、彼がただ本を読むだけであれば制服のままの筈だろうから。

ふとスマホを見ると週刊誌を元の場所に戻し、ドアに向かう彼から目を離せない。足が動かない、ただ見ることしかできない。

彼は私に気づいているのだろうか。そんな微かな望みを持ちながら彼を見ていると、コンビニから出てきた彼と目があつた。彼は少し驚いていた顔をしてこちらに歩いてくる。

「どうしたんですか?」

「……練習の前に寄っただけです」

気づけばここに向かっていた、なんて言えるわけがない。あなたが好きになってくれたのは努力する私、真面目な私、ならばこんな言えるはずがない。

「誰か待ってるんですか?」

「待ち合わせの時間まで暇だったので、それと……」

水曜日だったので、小さな声で視線を私から外してそう言われる。少しだけ顔を赤くして。

私もつい恥ずかしくなってしまう。週刊誌を見るため、そう言われるのならばこんなことにはならない。だが、水曜日だから、それにその様子を見てしまえば仕方がないことで。

「すみません、そろそろ待ち合わせの時間が……」

「あ……わかりました」

あなたは誰と待ち合わせをしているのだろうか。ああ、そういえば今朝日菜がやけに楽しそうだった。ならば……そうなのだろう。

白鷺さんが言いたかったのは恐らくこういうこと。期限が近い、だから彼と少しでもいるべきではないのかと。終わりが近い、だから彼といるべきではないのかと。

「……今日の夜って空いていますか？」

「まあ、そうですね」

「それなら今日……」

「わかりました」

そう言って彼は私に背を向けて歩きだす。もう終わりなのか、待つてくさいなんて言えたらどれだけ楽か。

私は彼の背中が見えなくなるまで、ライブハウスに向けて歩きだすことはできなかった。

今日は当然練習に集中できないということではなく、むしろいつもよりも集中することが出来た。それは、悠さんの好きなこの音をよりよくしなければと思ったから。

日菜は今はどうなのだろう。この前聴いた時技術は勝っていた、それだけは確かにわかった。でもそれ以外、技術以外は全て負けていた。

彼女は簡単に、一瞬にして私を飛び越えて追い抜かす。ならば今は更に差が開いているだろう、技術の差は縮まっているだろう。

「はあ……」

『どうしたんですか?』

「いえ……大したことではないです」

今日感じた黒いナニカ、霧散したはずのそれは完全には消え去らず、捕らえられない何かとして残っている。

もしかしたらそれは誰かに向いてしまうものなのか、だとしたらそれは誰なのか。私自身か、それとも日菜か、もしかすると……悠さんにもか。

「悠さん」

『なんですか?』

「……いえ、なんでもないです」

画面の中でキャラが動き、彼の後ろを付いていく。現実でもこうやっていられればいいのに、しかしそれはすることができないでいる。

期日は近い。その日が待ち遠しくて、嫌で、怖くて、楽しみで考えたくなくて。混じって溢れて、自分でもわからない。

もしその日、あなたが日菜を選んだとしたら。

そしてその口で、私を好きだと宣ったとしたら。

私も好きですと、友愛を持って返すことは出来るだろうか。

日菜のこと、貴方のことを、変わらず好きでいられるのだろうか。

それは私にはわからない。そして、わかりたくもない。

確信

目が冴えてしまって眠れない。部屋の電気を消しこうして外を眺めてどれくらい時間が経っただろう。

星がよく見える、月が綺麗にそこにある。時間を忘れるくらいにはそれを眺め続けている。

こんな綺麗な月の日はあの日の事を思い出してしまう。あの時から何も変わらないこの気持ち、だけどその深さは、強さは、変わっている。

悠君のことはやっぱり好きだ。もちろん長所も、欠点も何もかもすべて。

「会いたいなあ……」

君に会いたい。メッセージを送りあう、電話をする。それもいいけどやっぱり直接君に会いたい。一昨日会ったのにもう会いたくなくてしまっている。

それは今思ったわけではない。昨日……いや、一昨日別れた時点でそう思っていた。

明日も明後日もパスパレの練習が遅くまであつてそれが叶うのは早くて三日後、だけどその日は平日だから君が会えるのかわからない。

「今から電話しちゃおうかな……」

話したいことはない、でも話したい。彼は起きてるだろうか。こんな時間周りで明かりがついている家なんて殆ど存在しないこの時間。

悠君は夜更かしをよくするから起きているかもしれないけどもしそれで起こしてしまつたら申し訳ない。ああ、彼と会う前ならこんなことは考えもしなかつたらうに。

「そろそろ寝ないのかなあ」

時計は見えないスマホで確認する気も起きない。もししたら今以上に目が冴えてしまつて眠れなくなつてしまふそうだから。

おねーちゃんが一人、おねーちゃんが二人、一年前くらいまでは

ずっとこれだった。

たまに興奮しちやったこともあるけど、落ち着けるわけがなかったけどそれでも単純作業の繰り返しはやはり眠気がきていた。

でも最近では悠君ばかり。だけど君は一人、二人もいない。だから数えることはせずに考えるだけ、思うだけ。君との日々を夢見るだけ。

当然そんなことですぐには眠くなる筈がない。でもこれをするのは夢に期待するため、理想を掲げたいだけ。

吉夢を願い、あたしの意識は次第に溶けていった。

夢の内容は覚えてない。薄らとは思いつけるがそれでもはつきりとは思いつけない。でも悪くはなかったと思う。

もう一度眠れば見れるかな。そんな風に思ったけれどパスパレの練習はもう始まっちゃう。急いでもどうせ間に合わないし歩いて向かうことにした。

「おはよ〜」

「日菜ちゃん、遅刻だよ」

「気にしない気にしない」

練習といってもバンドの練習じゃなくて撮影の練習。勿論アイドルなんだからそういった仕事もあるし、一応やらなきゃいけないっていうのはわかる。

だけどあんまり面白くないからるんつとこない。

「日菜ちゃん何も持ってないけど、練習大丈夫？」

「大丈夫だよ、全部覚えてるし」

「その能力羨ましいわ……」

台本なんて一回読めば全部覚えられる。あたしが来たから練習は始まったけどイヴちゃんも麻弥ちゃんも台本を見ながら、彩ちゃんに至っては噛んじやったりしてた。

なんで出来ないの、予め言うことが決まっているのにどうしてそれが出来ないの？

……なんて昔なら言っちゃってたんだろうけど今ではそんなことは口には出さない。少しは思っちゃうけども。

何度か合わせてみたけど一回個人で練習しようって事で決まった。暇になっちゃったから彩ちゃんの練習を見てたけど噛んじやったり、どうにか台詞を思い出そうとうろうろしたり。やっぱり彩ちゃんは面白い。

「そういえば日菜ちゃんって苦手なものあるの?」

「ん〜……味の薄い物とか?」

「そうじゃなくて……わからないこととか」

苦手なもの、地図記号とかそういうものは何故だか覚えられない。本当にその理由はわからない、他のことはパツと覚えられるけどそれだけは。まあ覚えようとも思わないけど。

あととはなんだろう。わからないこと、そんなものは殆どない。でも存在しないなんてことはない。他人のこともそうだけど、特に彼のこと。

わからない、本当に何もかも。その日までどうすればいいその日何をすればいい。その日より先、何ができるのか。

「彩ちゃんの行動はよくわからないかな?」

「も〜!」

「ほらほら、彩ちゃんは練習しなくていいの?」

千聖ちゃんに言われると彩ちゃんはまた台本を読み始める。ああ、わからない、何をすればいいのかわからない。

台本なんてものがあればいい。言うべき言葉と言われる言葉、彼の思い、それと答え。全てわかればいいのに。

だけどそんなものはない。まるで迷路に迷っちゃったみたいでわからない。正解と君のこと、あたしのこと。そのすべてが何もかも。

「ヒナさん、何を見てるんですか?」

「あ、もしかして日菜ちゃんもエゴサーチしてるの?」

「へー、日菜さんもそんなことするんですね」

練習が終わってパスパレの皆でご飯を食べた帰り道、スマホを見ながら信号を待っていたらイヴちゃんにそんなことを聞かれた。

エゴサーチ、彩ちゃんがやっていると後ろから見させて貰った

ことはあるけど自分でやったことは一度もない。

このアカウントは殆ど使わない。もう一個の方もたまにパスポレの活動報告とかはするけどそれ以外で開くことは殆どない。

このアカウントは悠君の眩きをたまに眺めたりするだけ。彼のはゲームや音楽関連の物が多いけど、彼の考えが見えるそれを偶然見つけると少しだけ嬉しくなる。

「違うよ」

「じゃあ何してるの？」

「ジブンも気になります」

彩ちゃんと麻弥ちゃんは悠君のことを知らない、だから教えられない。

あたしとしては別に教えてあげてもいいんだけど千聖ちゃんから、二人は知っちゃったら隠せないでしょうねって言われちゃったから。イヴちゃんは悠君のこと知ってはいるけど、あたしが悠君をどう思ってるかまでは知らないと思う。

内緒、そう言つてアカウントを切り替える、もし見られたらめんどくさい。千聖ちゃんには見られちゃってるけど。

こちらを見て薄く笑う彼女を見て人差し指を口の前に立てて目配せする。

エゴサーチ、他人からどんな風に見られてるか、思われてるかを確かめるそれ。彩ちゃんにやり方を聞いて実行する。

「へー、面白いね、これ」

「酷い内容はまともに受けなくて大丈夫だからね？」

「うーん、見てるところそういうのはないけども……千聖ちゃんもこういうことってするの？」

「私もたまにするわね、フアンの人達の意見はやっぱり大切だから」

可愛い、面白い、好き、そんな言葉がたくさん目に入る。普通はそういうのを言われたらちよつとは嬉しいんだけどあんまりピンこない。

可愛い、何が？ 面白い、何処が？ 好き、どうして？ なんで理由を言ってくれないの。それじゃおもしろくないよ、参考にならない

よ。

勝手に覗き込んできたみんなと一緒に今度はパスパレで検索をかける。ライブがよかったとか、テレビで見ただけで面白かったとか。そんな中、ある一つの眩きが目に入った。

『生まれ変わったらパスパレの人達みたいになりたい』

「彩ちゃんは生まれ変わったら何したい？」

「私!? 私は……うーん……」

「イヴちゃんは？」

「私は武士になりたいです！」

素振りをしていながらイヴちゃんは答える。素振りと言っても竹刀も木刀も持っていないから手を振り下ろしてるだけだけど。

彩ちゃんは額に指を置きながらまだ考えている。彩ちゃんはどうするのか。そんなことを考えていたら麻弥ちゃんから日菜さんはどうしたいんですか？ と聞かれた

「あたしは……そうだな、今とは違う事をしたのかな」

「なんでですか？」

「そっちの方が面白そうじゃない？」

「日菜ちゃんらしいわね」

信号はとつくに青に変わっていたので歩き出す。生まれ変わったら今とは違う事をする、同じなんてつまらない。

ちよつとしたことが違ったらどうなっていたのか、それを考えるのは少しだけ楽しい。

彩ちゃんはずっと考えていたのか信号を渡れていなかったのが面白かった。

「生まれ変わったら、か……」

ベッドの上で横になりながらそんなことを呟く。あの後すぐ別れてこの事をずっと考えていた。

今とは違う事をしたい、何もかも。おねーちゃんと一緒に花咲に通ってみたい天文部じゃない部活に入ってみたりしたい。おねーちゃんと仲が悪くならないようにしてみたい。

ギターだつてもっと早くに始めていたかもしれないし、もしかしたらギター以外の楽器をやっていたかもしれない。それでよねーちゃんと同じバンドを組んでいたかも。

アイドルをやらないのもいいかもしれない。パスパレのみんなと関係を作れないのは残念だけど全く別の事もやってみよう。

悠君におねーちゃんより先に会ってみたり、答えを先伸ばしにしなかったり、そんなこともいいかもしれない。叶わない、だからこそ考えが膨らんでくる。

この事について話してみたくてスマホで電話をかける。面白くするために、楽しむために、その為に今とは全く違うことをする。

嫌なことはなかったことに、楽しいことはまた別のことに。面白いことはもつと面白くするために違うことをする。

知っていたら迷わない、怖くない。だけどそんなのこれっぽっちも面白くない。

違うことをする、ならばこれはなんなのだろう。

とびきりに楽しいから、特別に大切だから、飽きていないから、失いたくないから。理由はどれかわからない。

でも、多分、きつと、必ず……

「あ、もしもし悠君。ちょっと聞きたいんだけどさ」

——また君のことを、好きになる。

それだけは絶対に、変わらない。

選択

期限まで後、一週間。

時が経つのは本当に早い。まだ決められていないのに、わからないのに時間は流れていく。何でもないけど外を歩く。家にいても外にいても変わらない、どうせ考えるのはこれだけだ。

どうすればいいのだろう、どう決めればいいのだろう。そんなこと全くわからない。知識も経験も、度胸もなにもかもないから。

本でも読めばわかるのか、ネットで調べればわかるのか。そんなことを考えながら歩いていると角から出てきた見覚えのある二人組に声をかけられた。

「あら、悠じゃない」

「あ、お久しぶりです!」

「……久しぶりです」

二人は鞆は持っているがそれ以外には何も持っていない、今回は戸山さんを巻き込んで楽しいこと探しでもしているのだろうか。

そんなことを考えていると弦卷さんは僕の顔を覗き込みこんなことを聞いてきた。

「そうだ! 悠も一緒に楽しいこと探ししましょ!」

「……僕といっても面白くないですよ」

「そんなわけじゃないですよ、加々美さんの話面白いですし」

「そうよ、それに何か悩んでるなら楽しいことをするのが一番よ」

「悩みがあるなら私たち聞きますよ」

「……顔に出てました?」

なんとなくよ、弦卷さんはそう言った。ホントに日菜に似てる。なんとなくだとか勘だとか言うくせにピタリとこちらのことを当ててくる。

聞けばわかるのか、少しは決めれるのか。他人の恋愛観を聞くのは役立つかもしれない。それがセクハラとして思われなければだが。

「悩みなんて楽しいことをしてれば吹き飛んじゃうわよ!」

「……そうですね、そうさせてもらいます」

「決まりね！ それじゃあ何をするか決めましょ！」

悩んでいる、それは間違いない、だけどこの悩みは捨てられない。ずっと先送りにし続けた僕がこれすら捨てたらもう二度とこの機会はこない気がする。

それは自分のため、それもあるけど二人の為。決めるのは後でいいと言ってくれて、そしてそれが今なんだ。

甘えていた僕への鞭、これを捨てるのは二人への裏切りなんだと思ってしまう。

「悠は何かしたいことはある？」

「僕は特には……」

「私ちよつと疲れちゃったからつぐのお店行きたい！」

「悠もそれでいいかしら？」

頷くと二人は歩き出す。疲れちゃった、そんなことを言っていた癖にたまたま見つけたマスコットキャラに話しかけたりしている。周りの目があれだったので僕は少し離れていたが。

会話はないわけではなかったが、大切な二人のどちらかしか選べないのならどうするか、そんなことを急に聞けるわけがない。

暫くすると羽沢さんのお店についたがそこには先客が一人。その人は僕も知っている人で戸山さんと弦卷さんはその人のいる席に座る。

「……お久しぶりです」

「あ、どうも」

「えつと、いつものでいいですか？」

「それをお願いします」

すっかり僕も常連でいつもので覚えられてしまった。二人はジュースを頼んだらしく、それを待っていると戸山さんに尋ねられた。

「加々美さんって何を悩んでたんですか？」

聞いていいものなのか、めんどくさいと思われないだろうか。特に美竹さんなんてそう思いそう、酷い偏見だが。事実興味無さそうに珈琲を飲まれている。

しかしてどのようなにして聞けばいいのだろう。恋愛観を聞くのは少し違う、変な風に思われたくはないし。

大切な人が二人いて、どちらかしか選べないならどうするか。大切な人が二人いて、どちらかを裏切らなければならぬならどうするか。二つ目は流石に聞き方が重すぎるだろうし一つ目がいいだろう。

「二人とも選べばいいじゃない」

「……それができないから聞いてるんですよ」

「どうして？」

「どうして……」

「悠にとつてその二人は大切なんでしょ、なら二人とも選んだら幸せになれるじゃない」

「お、お待たせしました」

僕にとつては大事な二人、どれ程かはわからないが向こうもこちらのことは大切だと思ってくれているだろう。それならば二人とも取ってしまう、でもそれは駄目。選んでと、待っていると言われたから。

出された珈琲を口にする。一度会話が途切れ少しだけ安堵する。もしこのまま話していたら押しきられてしまいそうだったから。

「私だったら一緒にいたいと思う方を選びますね！」

「……ふと考えた時に一緒にいる方、かな」

一緒にいたいと思う方、ふと考えた時に一緒にいる方。前者は両方、後者は……今は意識をしまっているからわからない。

美竹さんが羽沢さんにも問いかけると彼女は少し焦ったような風で僕の事を見てくる。そういえばこの中で羽沢さんだけは知っているのか、この質問の理由を。

「え、えっと……自分の事をより好きだと思ってくれてる方、ですかね？」

僕はどちらが好きなのか、それはわからない。なら二人のどちらがより僕の事の方が好きなのか、それもわからない。

好きでいてくれる、それは今のところ間違いない。じゃあ強さは？

僕は二人じゃないしエスパーでもないからわからない。

日菜は言った、僕が全てなんだと。紗夜さんは示した、僕のためにと。

どれだけ好きだと言われても、示されても、その強さははっきりとはわからない。僕が過剰に感じているか、もしかしたら半分にも及んでいないかもしれない。

僕の好きだつて二人にどう届いているのかわからない。均一に届いているのか、どちらかにより強く伝わっているかもしれない。

「……ありがとうございます」

「少しは役に立てました？」

「ええ、凄く」

自分以外の意見はこんなにも役に立つ。もうこれだけで充分、後はそれをもとに決めるだけというくらいには。

だが他の人にも聞けたら聞くかもしれない。少しでも後悔のしない選択、それを知るために。

「そういえば加々美さんって日菜先輩に凄く懐かれていますよね」

「懐かれてる？」

美竹さんがふとそんなことを口にする。仲がいいではなく懐かれている。どういうことだろう、そう考えている僕に向かってメッセーヂの履歴を見せてきた。

「こんな風に、隙あらば加々美さんのこと話してきます」

「あ、それなら天文部の活動の時もそうよ！ あなたの事を話しているとき日菜はすっごく楽しそうなの！」

「……そうですか」

それだけ答えて珈琲を口にする。そう言われるのは嫌な気分はない、当然だ。口に残る珈琲がいつもよりも苦く感じたのは、何故だろう。

NFO内で目的地に向かいキャラを移動させる。今日は紗夜さんにはできないそうで宇田川さんと白金さんの三人でダンジョンに潜っている。

最近では四人でやるが多かったので紗夜さんがいないのは寂し

くもあるが今回だけは助かる。流石にこれは紗夜さんには聞かれたくない。

『あこだったら一緒にいて楽しい方かなあ〜』

『私は一緒にいて安心する方ですね』

この問いは誰に聞いても違う答えが返ってくる。友人にメッセー
ジで聞いても仲のいい方と答えられた。どれも参考になる、だけど全
て明確に答えることはできない。

一緒にいたい方、ふと考えて一緒にいる方、自分のことをより好き
だと思ってくれる方、それはどちらかわからない。

一緒にいて楽しい、それは多分日菜の方。振り回されることがとて
も楽しいと感じる。

一緒にいて安心する、それは多分紗夜さんの方。落ち着いた雰囲気
やちよつとした話をするとか何故か安らいで安心する。

だが他方はそうではないかと言えば全く違う。紗夜さんといえるの
は楽しくないのか？ そんなことはありえない。日菜といえると安心
しないのか？ 落ち着かないけどそれに安心を感じて。

『そういえば最近紗夜さんがあんまり集中出来てないかもって思うこ
とがあるんだけど、悠兄何か知ってる？』

そんなチャットが送られてきて、知らないと言いつつ打ち込んだところ指
を止める。

予想ができないわけではない、全くわからないわけではない。そう
であってほしいと願う、そうであれば嬉しいから。

『そうかな？ 私にはむしろ凄く集中してるように見えてたけど』

『うーん、集中してないっていうよりも別のことを考えているってい
うか』

違うのであればなんなのだろう。何か問題でも起きたのか、新しい
悩みでもできたのか。それならばどうにかしたいし、どうにかできる
のなら手伝いたい。

『ぶっちゃけ悠兄って紗夜さんとどうなんですか？』

『どうって？』

『実は付き合ってたとか、紗夜さん聞いても答えてくれないんです

よ』

『ないですよ』

そう答えながらダンジョンを攻略する。ボスを倒したところで明日練習があるからといって二人はログアウトした。

付き合っていない、それはまだなのか、その気がないからなのか。後ではなく今すぐ決めろと言われてたら、どうしていたのだろう。

パソコンを切り外に出る。空は雲一つなく星がよく見える、天体観測の時には程遠いがそれでも十分なくらいには。

外が暗いのも相まって、目を瞑っても星が見えてしまう気さえする。

目を閉じる。見えたのは星ではない、しかし黒に染まっていたわけではない。見えたのは、浮かんだのは水色の何か。

これはなんなのか、わからないはずがない。ふと浮かんだのは、思ったのは、どちらなのだろう。

月曜日、この日には決まらなかった。

火曜日、夜に日菜から電話がかかってきて話をした。

水曜日、コンビニに行ったが紗夜さんはこなかった。

木曜日、悩んでいたら夜が明けていた。

金曜日、いまだ決められていない。

「どうしたの？ そんな浮かない顔して」

「……練習はないんですか？」

「今日は休みなんだ」

期日を明日に控え眠れずに夜が明け気がついたら日は真上に昇っていた。昼飯を買いにいくついでにコンビニに向かっているところでもりサさんに出会った。

ここ数日は満足に寝ることが出来ていない。授業中でさえ考えていたらあつという間に時間が経っていて、友人には何故か心配をされた。

「そういえば明日なんだっけ？ 決めれたの？」

「……………まだです」

「……………そうなんだ」

「……………少し相談させてもらっていいですか?」

「いいよ、でもここじゃあれだし……………つぐみのお店にでも行くっか」

そう言われ羽沢さんのお店に向かう。店の中に入ると前とは違った見知った顔がおり、リサさんは許可をとるとその人と一緒の席に座る。

「リサちゃんは今日練習はないの?」

「悠と同じこと言ってる、Roseliaはそんな風に映ってるの?」

「紗夜ちゃんを見てればね」

「あはは。それで、悠は何が聞きたいの?」

突然こちらを向いてそう聞いてくる。大切な人が二人いて、どちらかしか選べないならどうしますか? 今までそう聞いてきたがこの二人にはそう聞く必要はないだろう。

「どうすればいいと思いますか?」

僕がそう聞くと二人は顔を合わせる。主語が抜け落ちた頭の悪そうな聞き方、でも伝わっていると思う。リサさんはやっぱりかく、と溢しながら頭を掻いている。

暫くの空白の後、白鷺さんが呆れたかのような声色で言葉を発した。

「そんなの私達に言われても困るわよ」

「うん、アタシ達が決めるわけじゃないんだし」

「……………どういう風に考えて選べばいいかとかを聞きたいんですけど」

「あら、じゃあ日菜ちゃんを選びなさいって言えばあなたはそうするのかしら?」

そんなはずがない。そんな簡単に、誰かに決められるものじゃない。

「二人とも悠に選んでほしいって言ったんだから、全部悠が決めるべきだと思うな」

「そうね、せいぜい後悔しないようにしなさい」

「二人はこう思ってるだろうからってのもなしだよ、悠がどうしたい

かで決めた方が二人もいいと思うから」

「……わかりました」

本当に嫌になる。決められないこと、そして他人に流されそうな僕に。変われそうと思っていたが結局なにも変わっていない。

目を瞑る、そこには何も映らない。僕はどうしたい、僕がどうしたい。一緒にいたいと思うのは、どっちなんだ……

今まで悩んでいたのが嘘みたいに、それは一瞬で浮かんできた。

「そうか……そうかあ」

「決まったの？」

頷くとリサさんはよかった、と言って笑顔を向けてくる。

僕は悩んでいたなんて言っていた癖に奥底では決まっていたのかもしれない。裏切りたくないと言って、誤魔化していたのかもしれない。

でも、それでも、好きだったって気持ちは本当だ。裏切りたくないって気持ちも嘘ではない。だけど好きなんだ、本当に好きなんだ。

「まだ時間はあるんでしよう？」

「はい、もう少しだけ」

「ならもう少し、悩んであげなさい」

決められた、でもそれはほんの少し力を加えれば揺らいでしまうかのようなもの。本当にこれでいいのか、それは本当なのか。

期限は明日、後悔はしたくない。もう一人の方を選んでおけばよかったなんて絶対に思いたくない。それは僕以上に相手に悪い。

出された珈琲を飲み干し二人に感謝の言葉を述べて店を出る。帰り道、公園に寄ってベンチに座り、思考の海に身を委ねた。

その日の夜、二通のメッセージが届いた。紗夜さんと、日菜から。

『明日いつものコンビニで、待ってます』

『明日の昼、待ってるね』

鞆につけていた天秤のキーホルダーは何故だか釣り合うことなく傾いている。まるで僕の心を読み取ったかのように。

何度考えても変わらない、僕が好きなのは……

日菜

空を雲が覆っている。日を隠し光が漏れる隙間もない。空気は少し湿っていて、天気予報でも昼頃は雨だと言っていた。

屋上から下を覗き見る。まだこないかな、いつくるのだろう。昼とはいったが明確な時間は指定してないのだし待つことに不満はない。早く来ないかな、まだきてほしくないな。二つの異なる感情を抱いていると、ゆつくりと扉の開く音がした。

「……早いね」

「悠君こそ、まだ午前だよ」

「昼としか言われてないからね」

そう言っただけはあたしの隣に来る。隣り合っただけ空を見る。雲しかない空、時間の関係もあって月も星も映らない。ほんの少し近づいてゆつくりと視線を下にずらしていき悠君の方を見る。

「それにしても場所違ってなかったのによくわかったね」

「わかるさ、確信はなかったけど」

少しだけ笑ってそういう彼は本当にずるい。彼ならわかってくれる、そう思っただけ書かなかったけどそれを実際にされるとやっぱり嬉しいものがある。

「決まったの？」

「……決まったよ」

「……そっか」

息をゆつくりと、大きく吸う。うるさいにも程がある。爆発しそうで、そう思えるくらいに心臓が高鳴っている。

手を後ろで組んで目を瞑る。こうしないと落ち着かない、動いていないのに視界が揺れているかのような気がした。

数秒か数分か、何も会話はしない。その短い間でほんの少しだけ心を落ち着けて、無理矢理口を開ける。

「鏡よ鏡。この世で一番美しい人は誰ですか？」

「……それは僕にはわかりません」

「鏡よ鏡。この世で一番かわいい人は誰ですか？」

「それも僕にはわかりません」

初めて会った時にした会話、今でも鮮明に思い出せる。あの時はまだ君のことを興味程度にしか思っていなかった、おねーちゃんより好きになるなんて欠片も思っていなかった。

聞きたくない、でも聞かなきゃいけない。君から聞いてくれれば楽だけど、これはあたしから聞かなきゃいけない。

「加々美鏡よ加々美鏡。この世で一番あなたが好きな人は……誰ですか？」

あたしがそう聞くと悠君は何も答えずに顔を下に向ける。いぎ言われると答えるのが恥ずかしいから、であればどれだけよかつただろう。

それは恥ずかしいとかいうのじゃない。確信はないけれど顔を赤くしていないし、多分そうなのだと思う。

ずっと彼は黙ったまま、顔を伏せたまま答えは返ってこない。何故何も答えないのか、それは恥ずかしいからじゃないのだから……つまりはそういうことなのだろう。

「そう……なんだ」

「……………」

泣くかもしれない、怒るかもしれない、嫌いになるかもしれない。そんな風な事を思っていたのにいぎそうになると何も思うことができない。

わからない、はつきりとはわからない。わかりたくない理解したくない。夢ならば覚めてしまえ、悪い夢なら消えてしまえ。そう願って頬をつねってもただ痛いだけ。

彼の顔を見ることができない、ただ誤魔化す為に手すりに手をかける。うつすらと、ゆっくりと、何かが込み上げてくる。

なんで、どうして、それを聞くことはできない。先に会ったから？先に好きになったから？それは聞いてもどうしようもないし、聞きたくもない。

手が濡れた。ああ、雨が降っている。随分と生暖かい雨だ、頬が濡れる。だけど少しすると冷たい何か体が濡らす、それはまるで隠し

てくれるかのように。

「雨……降ってきちゃったね」

目が開かない、雨が強くて開けられない。手で目元を拭って悠君の方を見ると彼は既に顔を上げていて、少しだけ辛そうな表情が見えた。

駄目だよ、そんな顔しないでよ、君はなんにも悪くないんだから。あそこに行き指差したのは屋根の下、あそこならもう雨はないはずだ。手を繋ぐ、そして手を引かれる。それは初めてのことで、こんな状況だということにとても、嬉しかった。

地面がどんどん濡れ始めた。最初は感じる程度だったそれは今でははつきりと見えるくらいには強くなり始めた。

強い、本当に強い、吐き出す息さえかき消してしまう。それはまるであたしと悠君をここに閉じ込めるみたいにすら思ってしまう。

「ねえ、悠君」

「……何」

「悠君はさ、後悔しないよね？」

この選択を後悔しないのか。自分でいうのも何だけど、君は酷く迷っていた。それは見ていればわかったし、リサちゃんや千聖ちゃんからも聞いた。

あたしはね、してるんだ、後悔を。口には出せないけど物凄く後悔してる。

もし君のことを好きだって事をもっと早く気づけていたら、もう少しだけでも早く告白できていたら。

あの時、答えを今すぐにと言えていたら……おねーちゃんと君との仲直りを手伝わなかったら、結果は変わっていたかもしれない。

そんなことばかり、あたしはずっと逃している。君のことが一番なんだと全てなんだと言っていた。それなのに毎回ちよつとだけおねーちゃんの事がよぎっちゃって、そのせいで押し付ける事ができなかった。

勿論それが悪いことだとは言わない。君にとって、おねーちゃんに

とって、あたしにとってもそっちの方がいいことばかりだから。

おねーちゃんは傷つけない、君には後悔をしてほしくない。全部そう思っただけ、願ったことなんだ。だからこの答えは一つしかない、そう言ってもらわなきゃ困るんだよ。

雨がうるさい、数分の間は無言の後かき消されてしまうような声で悠君は言った。

「……絶対しない、とは言えない」

何それ、後悔する可能性があるってことじゃん。あたしの願いはどうするの？ 君のために、君に後悔してほしくなくて色々したのに。

ああ、本当に……

「よかった……」

あたしの今までは全部、無駄じゃなかったんだ。君の中には少なからずあたしがいる、おねーちゃんと競り合えるくらいには。

もしここで絶対しないなんて言われたら、正直寂しかった。あたしの願いを叶えてくれなくて本当に感謝してる。

もし君が叶えてたらあたしはおねーちゃんのこと、君のこと、どう思っていたのだろう。考えたくもない。

やっぱりあたしは君のことが好きだ。友達として人として、それは当然だ。今もとってもドキドキしてる。まだ好きなんだ、男の子として、異性として。

フラれたのに、二番目だと言われたようなものなのにやっぱり君のことが好きなんだ。だからどうしたらいいのかわからない。

「これからさ……どうしたらいいと思う？」

「どうしたらって？」

「君のことがまだ好きだから、あたしは君に理由もなく会えないじゃん？」

「……別にいいんじゃない？」

「駄目だよ」

もしあたしが君のことをただの友人として程度の好きに落ち着けたのならこんなことで悩むことはなかった。こんな好きじゃなければ悩まなかった。

君はおねーちゃんの事が好きで、おねーちゃんも君のことが好き、そこにあたしは入れない。

きつと嫉妬しちゃう、奪いたくなってしまう。だから理由もなく君に会うことは出来ない。

偶々だつたりおねーちゃんのライブだつたり、自分の中でも基準はわからないけど許されるのはそんなことだけだと思う。ただ会いたいからで君に会うのはこれからは出来ない。

雨は少しも降りやまない。二人でただただ地面に叩きつけているそれを眺める。

ああ、こんなこと考えなければよかった。寂しくて、悲しくて、また泣いてしまいそうだ。

「……そういえば折り畳み傘、まだ返してもらってないよね？」

「え……あ、忘れてたよ」

どうして今そんなことを聞くのだろう。この雨のお陰でふと思いつ出したからだろうか、それともこの空気が耐えられなかったからだろうか。

でも怒りはない、彼からすればどうでもいいことなのだから。あたしが勝手に決めたことで勝手に苦しんでる。それだけなのだから。

「まだ持つてる？」

「……今は家かな」

「じゃあさ、いつか返してよ」

次に会ったときに返してじゃなくていつか返してよ、物凄く引っかけると言いかた。そしてそれはもしかしてと思わされてしまう。

あたしが勝手に都合よく解釈してるだけなんじゃないか、そう思つて悠君の方を見ると彼は少し恥ずかしそうに頬を掻いていた。それを見てあたしの解釈が間違っていないことを知ってしまった。

「……忘れちゃうかもしれないよ」

「それならまた次会った時に返してくれればいいよ」

「……壊れかけなのに返してほしいの？」

「そうだね」

ズルい、本当にズルい、そんなのズルすぎるよ。乾きかけていた頬

がまた少し濡れた。

いつか返してと、忘れたら次会った時に返せと、ならあたしはわざと忘れてしまおう。君に傘を返すという理由で会って、忘れちゃったと笑ってみよう。

次には返してねと言われてごめんねと謝ろう、そしてその次にまた傘を忘れよう。きっとそんなのがずっと続くと思う。

「紗夜さんにはバレないようにね」

「あー、確かに。おねーちゃんにバレたら駄目だね」

「でもバレなければ」

「真実になる、でしょ？」

二人で笑う。おかしいな、寂しいなんて気持ちはどこにいったんだろう。地図記号が読めなくて迷子になってしまったのだろうか、悠君に教えられてどこか知らないところに行ってしまったのだろうか。

でも迷子になっただけ、知らないところに行っただけ、きつといつか戻ってくる。悠君がここを去れば多分戻ってくる。

今だけは泣かせてよ、大きな声で叫ばせて、君がいたらそれができないよ。それができたらきつとスツキリする、なんだか一区切りできそうな気がするんだ。

「行かなくていいの？ おねーちゃん、多分待ってるよ」

「……そうだね、傘持っていないし、止んだら行くよ」

それも駄目なんだ、一人にしないでくれるんださせてくれないんだ。おねーちゃんのと好きな癖にあたしの側に来てくれるんだ。

本当に嫉妬しちゃう、おねーちゃんが羨ましい。こんな君を手に入られるんだから。君があたしの側にもいてくれる。ただそれだけであたしは嬉しい。

でももし君から求められたのなら……あたしは拒めないと思う。

ああ、君は酷い、一人で泣かせてもくれないんだ。雨はまだまだ強い、きつと暫くは止まないだろう。それは彼もわかっているだろうし、あたしの傘を見ながらそれを言うのだから本当に……

君は、ズルいよ。

「そういえば誕生日プレゼント、何がほしい？」

「あー、別に」

「いらぬは無しだよ、あたしは貰ったんだから」

告白の答えを貰う日、今日はそれだけじゃなくて悠君の誕生日でもある。あたしは貰ったんだからいらぬなんて言わせない、あの時キーホルダーを買って貰ったからとも言わせない。

好きな人の特別な日には何か贈りたい、そう思うことはいたって普通のはずだ。幸いアイドル業のお陰か最近お小遣いも増えたし、大体の物は買えると思う。

「うーん、なんでもいいよ」

「ほんとになんでもいいの？」

「……といってもあまりに変なものはやめてよ？」

「えー、まあいいや、目瞑っというて」

鞆を漁りながらそう言うのと彼は目を瞑る。きっと彼は変なものが来るだろうと思っ込んでるのだろう。

なんでもいい、言ったのは君だよ？ やっぱり嘘なんて言わせないよ。別にいいよね、物じゃなくても、形に残さないものでも……

「……何するのさ」

「えへへ、プレゼント」

三回目のキスは今までで一番浅くて、優しくて、短いものだった。その筈なのに何故か今までで一番、満足感に溢れているものだった。

これから君はおねーちゃんと恋人になる、だからこれができるのも多分最後。今は誰のものでもない君も誰かのものになってしまう。それはあたしじゃない。

「ねえ、悠君」

「……何？」

これは君に言われた言葉、君からあたしに送られた簡素な言葉。だけれど何より重くて大切な言葉。

「頑張っつね」

あたしは笑えているだろうか、君が好きなあたしみたいに精一杯元気な笑顔を見せつけられているだろうか。

彼は暫く放心した後急に顔を赤くする。これからおねーちゃんに会いに行くのにそんなのでいいのだろうか。

行ってくるよ、そう言っただけで彼は扉を開け屋上から去っていった。

雨はとつくと止んでいる、まるであたしの心の中みたいに空は晴れやかだ。なんだかどつてもこの結末に納得してる。先程までの不安は何処に行ったのか、純粹におねーちゃんと君の事を応援できる。

何にも変わらない、そう、何にも変わらない。おねーちゃんの事が好きな悠君と、それをどうにか振り向かせようとするあたし。

君のことが好きなんだ、世界で一番、宇宙で一番好きだ。あたしの空心に君は何よりも輝いている。

これからは好きになつてとまでは言わないよ、だからお願い、あたしの事を忘れないで。おねーちゃんだけじゃなくてあたしにもちゃんと構ってね。

君の日常に、ちゃんとあたしをいさせてね。

紗夜

スマホを眺め続けながら彼を待ち続ける。どうして来ないのかなんて思うことはない。ずっと、いつまでも待つ、最初からそう決めている。

彼がすぐに来ないのは私からすれば少し嬉しいことだった。なんて聞けばいいのだろう、どうすればいいのだろう、それを考えることができるから。

勿論ずっと前から少なからず考えていた、それでも何も決まらなかった。何て言えばいいのだろう、そんなこといつまで経ってもわからなかった。

雨はとつくに止んでしまった。とても強くて屋根の下にいたにも関わらず少し濡れてしまったが、今では大体乾いている。

ここまで遅いということは恐らく彼は日菜の方に先に行つたのだろう。彼はなんと答えたのか、今は何をしているのか。

そんなことを考えていたら、こちらに向かつてくる人影が見えた。

「っ……」

待っていたのに、心待ちにしていたのに息が詰まる。視線をそらせなくて目を閉じられない。彼が近づいてくるとその縮まる距離に反比例するかのように心臓の高鳴りが大きくなる。

彼が隣にやってくる。準備をしていたのに話しかけることが出来ない。

あなたが好きなのはどっちなんですか？ 日菜にはなんて答えたりですか？ そんな問い、他にもあったがその全てが吹き飛んでしまった。

頭が真っ白になって息が荒くなる。何も言えない、何も言われない。ただただ重い空白が襲いかかってくる。

「……いつからいたんですか？」

「……さっき来たところですよ」

ずっといきましたと言うことは出来なかった。悠さんはきつとわかっていて、私はずつといたことなんて。ならば何故聞いたのか、そ

れは恐らく私のため。

こんな程度でも会話をしたお陰かちよつとだけ緊張は和らいだかのような気がする。深く息を吸い、目を閉じて聞いてしまおうと覚悟を決めようとする。

「……雨も止んでますし、少し歩きませんか？」

だというのに結局聞くことは出来なかった。聞きたくない、気になりはするけれど、それ以上に怖くて怖くて仕方がない。

彼はいいですよと言ってこちらに手を伸ばしてくる。昼のコンビニということもあってか周りには多くはないが人はいる。そのせいかほんの少し恥ずかしい。

ほんの少し、その程度に抑えきれたのはやはり人目なんてものをそんなものと言いつれられるくらいには嬉しいから。あなたから手を伸ばしてくれたのがそれくらい嬉しいから。

手を繋ぐ、優しく。あなたはどちらを選んだのだろう。もし私を選んでくれたのなら私はこの手を強く握れるのだろうか、絡ませることはできるのだろうか。

彼の横顔を見ると、不思議と胸が痛くなる。

目的もなく歩き続ける。会話は少ないし、本当になにもしていない。何かを買うということはないし、何かを食べに店に寄るなんてこともしていない。

「……ここも懐かしいですね」

「そういえば最近きてないですね」

「またいつか行きませんか？」

「……練習ですよね？」

「本来の用途ですよ」

「僕は音痴なので……」

遊びたいのなら来ればいい、一人で練習するくらいでしかくることがはない。そんな風にさえ思っていた場所なのにあなたとなら悪い気はしないと思う。

そういえばあなたに興味というのを持ったのはここからかもしれ

ない。傘を貸され、ファストフードで偶々であった。そこまでなら印象があつたとしても記憶に残るまでには至らなかつただろう。

ここであなただが私にアドバイスのようなものをくれたから、見透かしてくれただがあなたに興味を持てたのかもしれない。

商店街も懐かしい、あそこでパンを買って話したのが昨日のことのようだ。もしかしたらあの時からあなたに気が向き始めたのかもしれない。

羽沢さんのお店も見える。あなたのために、あなたが好きなものを作るようにする。勿論それは容易ではなかつた。Roseliaの練習との並行、それが私には出来なかつた。

なのにあなたは私を責めなかつた、自分のためにやっているからと。頑張る私を否定しない、それが最も嬉しかった。

道行く人が何故だか減っていく、まるで世界から私と悠さん以外が消えていくかのように。なんだか二人だけの世界を作っているかのようにすら思わされた。

いつの間にかたどり着いていたのは公園で、この時間にしては何故か誰一人もいなかった。

公園の中心に向かい手を離し、向かい合う。

「もう、随分待ちました」

長く待った、それでも熱は永遠に冷めることはなかつた。

いや、むしろ強くなっていった。錆びることなく研ぎ澄まされていった。

「……そうですね、随分と待たせてしまいました」

彼はそう言つて目を閉じる。ほんの少しの間、一分にも満たないそれだが、それすらも永遠に感じられた。

うるさいくらいに心臓が鳴る。それこそ彼の言葉を聞き逃してしまふのではないかと思つてしまふくらいには。

鳥の鳴き声も葉が揺れる音も耳に入つてこない。あまりの空白、ちよつとした音でも入つてきそうなのに聞こえてこない。それは彼の言葉を聞き逃さないために。

悠さんの口が、ゆつくりと動いた。

「……僕は、紗夜さんのことが好きです」

聞き間違えようがない、確かにそう聞こえた。何故だか視界が歪んでくる、涙が勝手に飛び出てくる。何故なのか、それは私にもわからない。

「……私なんかでいいんですか?」

「紗夜さんだからいいんです」

「……嘘だったら許しません」

「こんな場面で嘘はつきませんよ」

——僕と、付き合ってくれませんか?

恥ずかしがりやな彼から出るとは思えないその言葉、でも間違いなく彼から出た言葉。

信じることが出来ない、まるで夢なんじゃないか、もし夢ならば覚めないで欲しい。

もう涙は止まらない、溢れて零れて滝のよう。言葉を出せない、お願いしますと言うことすら出来やしない。

私は言葉を忘れてしまったかのように何度も、何度も頷くことしか出来なかった。

こんなの初めてかもしれない、どうして涙が止まらないのだろう。寂しくなんかないのに、悲しくなんかないのに、ただただ嬉しいだけなのに。

ああそうか、人は嬉しいときにも泣くのか。大丈夫ですかと言って差し出された彼の手を取る。今度は強く握る、指を絡ませる。一本一本結ぶように、ほどけないように。

日菜ではなく私を選んでくれた、ただ唯一勝つことができた。だけどそんなことはどうでもいい。

別に日菜じゃなくても、相手がいなくてもこうなっていたと思う。ただ私のことが好きだと言ってくれたのが、何よりも嬉しかった。

「上手くいったみたいだね」

「……どうしてあなたがここにいるの?」

「悠君の跡つけてたんだよ、もしかして気づかなかったの?」

そんなこと全く気づかなかった。悠さんのことしか考えられなくて周りなんか気にしていなかった。

もしかして見られてしまったのだろうか、先ほどのことも。そう思うと今更ながらとてつもなく恥ずかしい。

「まさかおねーちゃんの泣き顔が見れるとは思わなかったよ」

「……早く忘れなさい」

「えへへ、無理」

寂しくないのだろうか、悔しくないのだろうか、辛くないのだろうか。私だつたらきつとそう思っていた、なのに日菜はそんなことないかのように笑顔を向けてくる。

まるで自分のことのように喜んでい、そんな風にさえ感じられた。

「ところでさ、二人ともしないの？」

「何をよ、あなたの言葉はいつもわかりにくいの」

「え、悠君はわかるよね？」

その言葉で悠さんの方を向いたら顔を赤くして目をそらされた。いったいなんなのだろう、私にはわからない。でも彼は知っている、日菜も知っている。

悠さんに聞いても何も返ってこない、それどころか今度は顔を下に向けられてしまう。ならばと日菜に聞くと驚きの答えが返ってきた。

「キスだよキス。恋人になったんだからやっちゃいなよ」

「そ、そんなの出来るわけないでしょー！」

熱い、多分顔は真っ赤に染まり上がっている。悠さんが赤くなった理由がわかった。まだ早いだろう、付き合ったその直後では。

したくないということはない、だがやはり恥ずかしい。もつと時間が経って、お互いのことを更に深く知れてからでも遅くない。

「え、でもあたしと悠君はしたよ？」

「……どういふことですか？」

「い、いや、それは……」

「……目を瞑ってください」

それも三回も、と指を立ててくる。怒りはない、どうせそれは日菜

から無理矢理なのだろう。彼がそんなことを出来るとは思わない。

彼は言われた通り目を瞑る。怒られると思ったのか、それとも叩かれるかもしれないとも思ったのか。ほんの少し距離を取られてしまった。

妬ましい、羨ましい。そんな事を言われて嫉妬しないでいられない。どうすればいいのかわからない、ただしたいがままに私は動いた。

私のものと彼のものを、ゆっくりと重ねた……

頭がくらくらする。顔が熱い、さっきのとは段違いだ。やってしまったと恥ずかしくなる、でもこれでいいんだと思えている自分もある。

彼は驚いたかのような顔を向けてくる。今の状況を理解できていないのか少し放心気味だ。

「……私だって、嫉妬くらいします」

そう言うとは彼は顔を赤くする。真っ赤だ、とても赤い、まるで蝟のよう。

それが少し可愛らしくて、少しだけ溶けるかのような視界の中で彼がいつもよりかっこよく見えた。

「ねーねー、どこかお昼食へに行かない？」

「……確かに、私はずっと食べていなかったしそろそろお腹も空いてきたわ」

「んー、おねーちゃんと悠君はどこか行きたいところある？」

「私は別に……悠さんはどうですか？」

「……いつものファストフードとかどうですか？」

そういえば最近行っていない。そんな暇もないし行く理由もなかった。そこにしましようと言って彼と手を繋ぐと、日菜は彼のもう片方の手を掴む。

日菜は辛くないのか、悲しくないのか。私だったらきつとそう思っている。

日菜が強いのか、それとも私が気づけていないだけなのか。その笑顔の下には何か隠されているのだろうか。もしかしたら私の事を嫌

いに思っているのではないか。

ほんの少し、ちよつとした不安は気づけば山のように積もつていた。

「ねえ、おねーちゃん」

「……何？」

「何でもないよ。ただちよつと気になっただけ」

気づかれているのだろうか。少し前に出て日菜はそう言ってくる。

あなたのことが嫌いだった。それは少しだけ前の話で、それも本心じゃなかった。

今はあなたのことが好き。恥ずかしきはあるけどはつきりと伝える事ができる。

もし逆だったら、私はあなたのことを……

「ねえ、おねーちゃん」

「今度は何よ」

「気を抜いてたら……取っちゃうよ？」

何を、わからないはずがない。冗談か本心か、それはわからない。

ああそうだ、日菜も彼のことが好きなんだ。彼は私を選んでくれた、だからといって気を抜くことはできない。

もし立場が逆だったら私だつてそう思っていただろう、諦めることなんてできない。

だけど無理矢理なんてことはできない。でももし彼から求めたのなら私は断ることなんてできないだろう。多分それは日菜も同じように思ってる筈だ。

ならば彼を振り向かせようとするだろう。相手のことを応援しながらでも、もしかしたらと願う行動し続ける。

ふと風が吹く。爽やかな風、髪がふわふわと揺れる。

その風のお陰かどうかはわからない。でも心の中の塵は、あつという間に吹き飛ばされていった。

「……させないわよ」

私は彼の手を気づかぬ間に強く、握っていた。

枕元のスマホが鳴ることによって起こされる。こんな朝早くから一体誰だろうか。

昨日のことはまるで夢のようで一日経ったのに実感はない。もしかしたら今日が日曜日なのではないか、そう思ってしまうほどに。

だが手に感じたあれは、唇に触れたあれは間違えようがない。

「ねみ……」

起こされた時間はいつもより三十分くらい早い。今日も今日とて学校があるので制服に着替えながらスマホを確認する。

するとそこには紗夜さんの名前、外にいますというメッセージが送られてきていた。

一瞬なんの事かわからなかったがすぐに寝起きで回らなかつた頭は回りだし、朝食も取らずに鍵を持って外に出る。朝食なんて抜こうがそんな大差はないだろう。

「……どうしたんですか？」

「……服が乱れてますよ」

失礼しますねと言われ服装をただされる。いやはや寝癖がついてなくてよかつた。しかしてどうしたのだろう、何か用事でもあるのだろうか。

「途中まで……一緒に行きませんか？」

お互いに学校は違う、近いわけでもない。それこそ十分も歩けば道は別れてしまう。

断る理由もない。自転車を取ってくるがそれは押すだけで乗りはしない、せめて別れるまでは。

「日菜には……内緒にしておいてくれませんか？」

ふとそんなことを言われる。理由は聞かない、多分聞かれたくもないだろう。だがそこまで悪い理由ではない、それはなんとなくだがわかる。

わかりました、それだけ言って並んで歩く。雲はない、太陽は眩しいくらいに照りつける。だけどそれ以上に、隣の人のが眩しかった。直視できないのではなく引き寄せられる。ふと笑うその姿に少し

早く心臓が動く。
いつまで経っても、この人の笑顔には慣れられる気はしない。

日常

恋愛とは、付き合うまでがピークである。

誰が言い始めたか知らないがそんな話は各所で聞く。付き合うまでにどうしようと悩んで、その間には相手のいいところしか見えてこない。

だが付き合ったとたんに相手の悪いところばかり目についてしまう。なぜだかわからないが付き合った癖に長続きしないなんてのはよく耳にする。

まあそんなことは僕からすれば全く縁のない話だ。そもまだ一週間も経っていないのだから流石にそんなことはない。

「はあ……」

とても楽しみ、だけど少しだけ憂鬱だ。今日は紗夜さんと映画を見に行くことになっているのだが、紗夜さんは来週のライブのための練習があるので昼過ぎくらいにくるらしい。

まだまだ午前中なこの時間から待つのは少し早すぎではないかと思うが、日菜にこの時間に会おうよと言われてしまったのだから仕方ない。

別に紗夜さんと二人きりでないことが憂鬱なんじゃない、待っていることが憂鬱なんじゃない。日菜に会うのがとても憂鬱に感じられる。

当然会いたくないということはない。だが日菜に会うのはあの日から初めて、振ってしまったあの日から。

あの後食事に行った、そこでいつもと殆ど変わりのない話をした。笑顔を見せられ、楽しそうな声で話題を振られた。

だけどそれはあの日だけではないのかと、今になっては僕のことを嫌っているんじゃないか、ついそんなことを考えてしまう。

後悔はしたくない、だけどこうなるとほんの少しだけ後悔してしまう。でもそれは仕方がないだろう。

考えすぎだと言われるかもしれない、でも考えないわけがない。最後まで悩んだ相手のことなんだ、嫌われたくないと思うのは自然の筈

だ。

言われた時間まで後10分。いつもと変わらず少し遅れてくるのか、それともそれより早くやってくるのか。はたしてどちらなのだろう。

そんなことを考えながら柱に背中を預けながらスマホでゲームをしていると突然隣に誰かやって来て、その人は画面を覗き込んできた。

誰なのか。視界に入り混んでくるのは見慣れた髪色と少しだけ見えるその顔、わからないはずもない。

僕は覗き込むその人にしか意識がいつておらず、最終的にはスマホの画面は殆ど見ていなかった。

「あれ、負けちゃった」

「……久しぶり」

「まだ一週間も経っていないよ?」

そんな声が聞こえたのでスマホをしまう。僕の中で久しぶりは一ヶ月から、そうだったのについてそんな風に思わされてしまった。

毎日は会えるわけがない、毎週会えるという確信もない。そんなことから一週間程度ではお久しぶりというのはなんともおかしい。

ではなぜ、それは多分一週間というのが限りなく長いものに変わったから。あの時とは違い、この人との一週間はそれほど強くなったから。

そんなことは見抜かれているのかちよつとだけ笑みを浮かべてくる。ああ本当に、久しぶりだ。

「あ、傘忘れちゃった」

「……いつか返してよ?」

「ごめんね、次会った時返すからさ」

とんだ茶番だ、こんな会話に意味はない。ならばなぜこんなことを聞くのか、それはなんとなくとしか答えられない。

別に言わなくてもお互いに理解してるはずだ。別に返さなくていい、これは理由でしかない、会うための理由にしかならない。

だというのにそんなことを聞いてくるのは彼女が気に入ったから

なのか、もしかしたら別の理由なのかはわからない。でもそんなことを言ったのは僕だからほんの少しだけ恥ずかしかったりする。

「今日は変装してないんだ」

「別によくない?」

「……流石にバレそうじゃない?」

バレなければどうとでもなる。だが映画館ともなれば人はいる。特に有名な監督の新しく映画が公開されたというのも相まって、入り口前だということにここにいる人の数はとんでもないことになっている。

こんな状態でバレないなんて出来るのだろうか。今も気づかれていないのか不安だ。

「バレても大丈夫だよ」

「……という?」

「だって悠君はおねーちゃんの恋人じゃん。もしバレてもそう言えればいいし……」

「そうじゃなくて男といることがバレるのがさ」

「んー、じゃあ悠君が女装すれば?」

「……絶対やだ」

面白そうなのに、と言っている日菜を見て少し安心した。その声には強がりなんてものはなく自然なもので、あの時と殆ど変わらな

い。

「……で、どうするの?」

「おねーちゃんの迎えに行こー!」

「時間はまだまだだけど……まあいいか」

今までと何も変わらない。話がないなんてこともない、日菜は元気そうにこちらに笑顔を向けてくる。

でも今までと違うことがたった一つだけある。僕の手はポケットから出ているがそこには何も無い。スマホも、財布も、日菜の手も。

最初はあれだけ恥ずかしくて出来なかったというのに今となっては少しだけ、寂しかったりもした。

ライブハウスの前で待つこと数十分、とても長く聞こえるそれだが一瞬にして過ぎ去っていた。

ライブハウスのドアが開きそこからRoseliaの皆さんが出てくる。まだ正午前なのでもう少し待つのかなと思っていたのだが予想よりも早かった。

「予定の時間より早いと思うのですが……」

「待つてようって話になったので」

「おねーちゃんだってそっちの方がいいでしょ？」

「それはそうだけど……」

待つていようとは言ったもののギターを持ったままというのはどうなのだろう。もしかして一度帰るつもりでもあったのだろうか。そんなことを考えているとリサさんと宇田川さんが近寄ってきた。

宇田川さんの目が凄く輝いている。何かあったのだろうかと考えていると凄く興奮したような様子で話しかけてきた。

「悠兄！ 紗夜さんと付き合い始めたって本当!？」

「う、宇田川さん！ どこからそれを……」

「まさかバレてないとも思ったの〜？」

「……そうですよ」

「……すっごーい！ 何かしてみてくださいよ！」

何かとはなんだろう、手を繋げばいいのか。だが紗夜さんが嫌と言ったためそれはなしになった。

「で、今日は何の予定なの？」

「悠君とおねーちゃんは映画見るんだって！」

「あれ、日菜は違うの？」

「そうだよ。悠君も二人きりの方がいいでしょ？」

どうだろう。確かに二人きりで映画を見たいという思いはある。だからといって日菜がいたら邪魔かと言われたらそれも違う。

「何言ってるの、あなたも行くのよ」

「え……でも……」

「……いつか三人でって言ってたでしょ」

日菜から目をそらしながら彼女はそう言った。誰も喋らない、僕も

日菜も、紗夜さんもRoseliaの人も。そんなだから紗夜さんは少しだけ赤くなつていくのが見えた。

「おねーちゃん、だーいすき！」

「ちよ、日菜！ 抱きつかないで！」

「よかつたね。アタシも行きたかつたなあ、なんて」

「駄目だよりサちー、あたし達三人で行くんだから」

日菜は紗夜さんから離れると小走りで来た道に戻る。何かと思いきちちらを見ていると日菜は振り返って手を振ってくる。

「早く行こうよー！」

「ギターを家に置いてこなくちゃだからまだ行けないわよ」

「じゃあ早くお家戻ろうよー！」

本当に元気だ、笑いながらそう言ってくる彼女を見てるとこっちまで不思議と嬉しくなる。

ふと手に何かが当たる。それが何かはすぐにわかりそれを優しく掴む。この前みたく絡ませられればいいのだろうがまだ恥ずかしい。でもいつかはそうできるようになれるのなら。

「……行きましょうか」

「……はい」

いつも疑問に思っていた。

退屈な日常から逃げ出したいとずっと思っていた。非日常を求めていた訳ではないが、ただただつまらない日常をどうにかしたかった。

なら日常から逃げ出したのなら何が待っているのだろう、それが常に疑問だった。非日常でも待っているものなのかと思っていた。

だが違う。つまらない日常から脱獄したその先もまた日常なんだ、新しい日常が待っているだけなんだ。

「二人とも早く〜」

「まだ時間はあるのよ、あなたは急ぎすぎよ」

こんな日常がいつまでも続けばいい、僕はそう思っている。

後日談 指切り

「明日は絶対に来てくださいね」

「行きますよ、絶対に」

一番最初は、紗夜さんの音に惹かれた。見た目に魅力がなかったというわけでは勿論ないが、やはり意識し始めたのはそのせいだ。

であれば紗夜さんのライブを自分の事のように楽しみに思ってしまったとしても何もおかしいところはないだろう。

ライブのチケットの当選率はこの前でもあれだというのに更に厳しくなり、手に入れられるのか不安ではあったがリサさんから、友希那と紗夜にはバレないようにねと渡された。

そんなの悪いと断れるほど僕は人間できていない。とりあえずお金は渡しておいたから大丈夫な筈だ。

外はすっかり寒くなっていて、左手は少しだけ痛いなど感じてしまう。だがそれに反して右手は少しだけ暖かい。それはこうして手を繋いでいるからなのだと思う。

「……日菜は、どうなんですか?」

「何も言ってますせん。来ないのならそれでいいですし、来たのなら……」

紗夜さんの足が止まる。この時期になると日が沈むのが早くなつてはいるが、周りの家から漏れだす光や、近くの自販機のお陰でそこまででもない。

「……来たのなら、それでもいいです」

見惚れてしまうかのような小さな笑顔は、周りの明かりなんか比にならなかつた。

まだ来てほしくない。そう言っていた彼女が、来たのならそれでいいと言った。

来てほしいではない、誘ってもいないのだからまだまだなのだこの人は思っているかもしれないが、それでも十分だろう。

「……何かおかしいですか？」

「いや、なんでもないですよ」

つい小さく笑ってしまう。これは時間が埋めてくれたのか、それとも二人が進んだ結果なのか。

ふとポケットが揺れる。何かと思うが今は一人きりなのだしやめておこう、そう思っていたが視線でバレてしまったのか、大丈夫ですよと言われたのでスマホを確認する。

『悠君明日一緒に行く！』

どこに、日菜と何処かに行く約束などしていないからそんなものは一つしかない。

タイミングがいい、もしかしたら隠れて聞いているのか、そんなことすら思わされる。わかったと送ってスマホをしまう。

「……何だったんですか？」

「秘密です」

顔に出てしまっていただろうか、だがきつと教えない方がいいだろう。

あの時はバレた時に面倒くさいというのだったが、今回は違う、バレたって問題はないだろう。

秘密と答えると紗夜さんは少しだけムツとしたような顔をして、繋ぐ手に力が加わってきた。

隠し事をされるのがそんなに嫌だったのか、それとも相手が日菜だとわかったからなのか。

ほんの少しだけこちらも手に力を加えると、お互いにちよつとだけ顔が赤くなってしまう。

気づけば、寒さは消えてなくなっていた。

はじめて聴いた時は、どこか焦りを感じさせた。次に聴いた時は、更なる焦りが感じられた。

音楽のプロでも、エスパーでもないのだから完璧にそうだとは言いきれない、でもそんな風を感じさせられたのは事実だった。

だけどだんだんとその焦るようなものは溶けて、どこか楽しそうな

音が変わっていった。

「次で終わりかあ、早いなあ」

隣にいる日菜がそんな声を漏らす。早い、確かにそうだ。だけどそれは事実としてではなく、感覚の話。

聴き入って、夢中になつて、心から楽しめた。そういつたことを感じていた間はなんとも時間の進みが早くなる。ゲームをしている時にも感じるが、それより遥かに早く感じていた。

あの音から焦りを取り除けたのならどうなるのだろう、欠片も残さず溶かしたのならどんな音になるのだろう。そしてその為に行動したのならば、僕も変わるかもしれない。

なんてあの時は思っていた、その為だけの関係だった。だけどそれは変わっていった、いつしか好きだから、それだけの理由になつていった。

演奏が始まれば、やはりというべきか心を掴まれる。他の人とバンドを組んでいた時には邪魔だと感じられた他の音も、Roseliaの人達ならばそうは思わない。

誰も負けていない、しかし誰が飛び抜けているというわけでもない。合わせている、全ての音は邪魔しあわずに、重なって、膨れ上がる。

息を忘れる、不思議と手に汗が浮き出てくる。まるで吸い寄せられるかのように視線が固定される。

その視線の先にいるのはやはりというべきか紗夜さんで、聴こえてくる演奏も少しだけギターが強調されて聴こえてくる。

焦りを取り除いたその音は、変わらず正確な音だった。だがつまらないかと言われたらそれは違う、機械的かと言われたのならそれも違う。

自分を見ると、まるでそう主張しているかのような音。

この瞬間でさえも永遠であればいいのに。そう、思わされた。

「ありがとうございます」

その言葉と共に少し暗かった部屋に光が戻ってくる。もう終わり

なのか、残念に思いながらもステージの上を眺めていると、紗夜さんと目があつた。

演奏前、演奏中に目があわなかつたわけではない。だけどその時の紗夜さんは演奏に集中するためというのもあると思うが、特に反応をしなかつた。

だけど今回は紗夜さんはこちらに向けて、少し恥ずかしそうに片目を瞬かせてきた。ぎこちない仕草のそれはもしかしてウインクのもりなのだろうか。

普段の彼女からは想像ができなくて、見惚れてしまった。紗夜さんはやはり恥ずかしかったのか、メンバーの中では一番最初にステージから降りていった。

「あれ、絶対悠君に向けてだよね」

「……白菜かもしれないよ?」

「だったら嬉しいんだけどなあ」

そんな会話をしながら外に出る。胸の高揚は未だに収まる気配はなくて、夏も終わり涼しくなり始めた季節に肌寒さを感じさせられるが、体の中は未だに熱いまま。

それはこの高揚のせいなのは間違いないだろう。ではそれは演奏のせいなのか、それとも先ほどのあれのせいなのか。

それは僕にはわからないし、もしかしたらそのどちらもなのかもしれない。

「悠君はおねーちゃん達の演奏ほんとに好きだよね」

「まあね、今回は自分でチケットを手に入れたらいいんだけど……」

「そういえば気になったんだけど、悠君ってパステルのライブには来てくれないよね」

「……そういうとこの運はなくてさ」

そう、僕はPastel? Palettesのライブに行ったことは一度もない。

応募してもどうせ受からないから、なんて理由で応募をしないことは多少あるが、バイトもしていないし金が足りないということもある

る。

当然応募をしたことがないわけではないが、物の見事に全て落選。僕の運はこういうところで発揮してくれない。

「う〜ん……そうだ！　あたしがチケットあげようか？」

「いや、流石にそれは……っていうよりも頼んで貰えるものなの、それ」

「あー、そっかあ……」

もし貰えたとしても受け取る勇氣は僕にはないかもしれない。バレた時にファンの人に何をされるかわからないし、パスパレにも酷い迷惑がかかるだろうし。

Rose liaならばいいという話ではないが、そちらはプロではないし、値段も全然違う。それに僕とリサさんの個人的な取引なのだから漏れることもない。

「悠君にあたしのギター聴かせたいのになかなかその機会がないよお〜」

日菜のギターを聴いたのは駅前のある一回しかない。休みの日に家に突入しだして引き出そうとしたことはあったが、近所迷惑になりかねないので止めていた。

テレビやCDでなら聴いたことはあるが、どうやら日菜は僕に直接聴いて欲しいらしい。

「まあ応募はしてるんだし、いつかは受かるでしょ」

「まあ仕方ないか、絶対に毎回應募してよね！」

「ま、毎回かあ……」

これまた財布が薄くなりそうなことを言ってくれる。そろそろバイト始めないといけなかなあ、そんなことを思っていると日菜がこちらに向けて人差し指を差し出してくる。

「約束、だよ」

「これって小指じゃなかったっけ」

「あれ、そうだっけ。まあどれでも変わらないでしょ」

そんな会話をしながら僕も人差し指を引っ掻ける。そうすると日菜はその手を上下に振り始めた。

「指切りげんまん嘘ついたら……」

少し考えるようにする日菜、もしかしたらこの後は知らないのだろうか。僕がその先を言おうとしたところで日菜は言う。

「キスしちゃう！ 指切った」

「あのなあ……」

「別に毎回応募してくれればいいんだよ」

あ、でもと日菜は付け足してくる。

「されたいんだったら、しなくてもいいんだよ？」

「……はあ」

さつきまで引つ搔けていた指を唇に当てながらそんなことを言うてくる。冗談だろう、そう思ったがどうかはわからない。

「絶対応募してよね！」

「日菜、あまり悠さんを困らせないで」

「あれ、おねーちゃん。どうしたの？」

「飲み物を買いにきたのよ、あなたが変な事を言っていないか見にしたのとかねてね」

そう言つて紗夜さんは自販機で何かを買つてこちらに近づいてくる。

「でもおねーちゃんも悠君がいた方が嬉しいでしょ、さつきだってウインクしてたし」

「あ、あれは目にゴミが入っただけよ……」

「えー、ほんとかなあー」

ニヤニヤとしながら日菜は紗夜さんにそう言う。紗夜さんは咳払いを一つし、僕の方に小指を差し出してくる。

どういう意図なのかわからなかったが、先ほどのやつを見られていたとすればすぐにわかる。こちらを向かずに頬が赤くなっているのが見えるので、恐らくそれなのだろう。

僕も小指を出して、引つ搔けた。

「もし日菜とするならば……私ともしてもらいます……」

何を、わからないはずがない。思わず僕も顔が赤くなってきたかのような気がしてしまった。

「も、見せつけてくれるな」

「い、今井さん！ どうして……」

「紗夜があんまりに遅いから見にきたんだよ」

「……今のは忘れてください」

「どうしよっかな」

リサさんとそんなことを話ながら紗夜さんはライブハウスの中に戻っていく。涼しいはずなのにどこか暑い、それは先程よりも遙かに。

「おねーちゃんの事待つ？」

「そうするか」

ライブの応募忘れないようにしとかなないと、そう思っていたというのに今では、忘れるのもいいかもしれないなと思ってしまった。

共有

「紗夜、最近どうなの？」

「どうって……何がですか？」

「も、そんなの一つしかないでしょ」

「練習も終わり、片付けが終わったところで今井さんがそう聞いてくる。」

「なんだろう、それは少しにやっっている今井さんの顔を見れば嫌にでもわからされた。」

「……特別変わった事はないですよ」

「ふくん……明日は練習休みだけど予定はあるの？」

「家で練習をしようかと思っっていますが……どうかしましたか？」

「最近ギターの腕が上がったような気がする。自分のことをこういうのはどうかと思うが、それでもここまで思っているのは始めてだった。」

「彼が好きな音に、私のつまらない音に、ようやくだんだんと色がついてきたかのような気がするのだ。」

「彼と付き合い始めて、なんだか安心したかのような気がするようになった。だから今は少しでも練習がしたい、彼にもっといい音を届けたいから。」

「うーん、紗夜はさ、それでいいの？」

「何がですか？」

「悠が今日何してるか知ってる？」

「今日？ 何かあるのだろうか。昨日一緒に登校していた時には特に何も感じなかったが……一体なんのことだろう。」

「暫く考えていると、今井さんは一つため息をつきながら教えてきた。」

「昨日日菜がね、明日は悠君とお出かけするんだって言うってたよ」

「そんな事聞いていない、日菜からも、悠さんからも。」

「私は悠さんと付き合い始めてから毎日一緒に登校するようになった。それはいい、会える時間が増えるのだ、嬉しくない筈がない。」

でもそれだけなのだ。毎日一緒に登校して、それ以外では会うことはむしろ前より減ってしまった。

それはなぜか、私がこうして、練習ばかりに目を向けていたから……

「だからさ、明日デートにでも誘ってみたら？」

「そんな急に……迷惑に、ならないでしょうか？」

「悠ならちよつと忙しくても紗夜の事優先すると思うよ」

今井さんはそう言った後、ライブハウスから出ていく湊さんの後に付いていった。

デートに誘う、言うだけなら簡単だ、しかし実行しようとなるとそう簡単にはいかない。

恥ずかしくて、どこに行けばいいのかわからなくて、向こうがそれで満足するのかわからなくて、何をすれば正しいのかわからない。

ふと取り合った連絡の履歴を確認する。私はどのように彼を誘っていたのか、何処に誘っていたのか。

誘うのならば彼の好きな所に行った方がいいだろう。ならば……ゲームセンターだろうか？ 私はよくわからないが、彼が楽しんでくれるのならばそれでいい。

どう誘おうかと悩んでいたところで、急に電話がかかってきた。相手は、悠さん。

『あー……もしもし』

「……どうかしましたか？」

思いもよらぬことに心臓が跳び跳ねた。何か用なのだろうか、もしかしたらと期待しながら続きを待つ。一秒でさえ、嫌に長く感じられた。

『あの……明日って、空いてますか？』

「え、ええ、明日は練習もないので」

『それなら……明日どこか行きませんか？』

ほぼ反射的に了承の言葉が漏れてしまう。それこそまだ残っていた白金さんが驚いてしまうくらいには。

少し待ってくださいと言ってライブハウスを急いで出る。

どうして彼から、こんなにも都合よくこんなことを言われるのだろう。今井さんが連絡を入れただけなのかもしれない、それでもやはり、ズルく感じられてしまう。

「えっと……何処に行くんですか？」

『だいぶ前に行ったあの犬と触れ合える公園とかどうですか？』

そこでお願ひします、そう言ってしまった。悠さんは犬の事が好きなのだろうか、彼は犬にあまり懐かれないというのに。

次は、次こそは私から、彼の好きな所に行かせて貰おう。そう思うとなんだか明日が待ちどおくて、季節的に冷たい筈の風も、全く気にならなかった。

服装なんて学生らしくて動きやすければなんでもいい、そう思っていたのはいつまでか。少なくとも彼と出会う前まではそう思っていた。

勿論そう言った服が好みなのは今でも変わらないし、出来る限りそういう服を選んでいる。

ただ最近では自分に似合う服、それは自分ではよくわからないが、今井さんに薦められた服を着るようになった。勿論、彼と会う時だけが。

この前と同じくバスに揺られて一時間強、ワンちゃんと触れ合える公園に着いた。

あの時のように晴れ渡ってはおらず、空は雲が多い尽くしている。だけど、今日は雨が降る気は全くしない。むしろ、晴れてしまいう。最初はやはりワンちゃんとの触れ合い。ワンちゃんは可愛くて、そう騷られているのか人懐っこい。

餌をあげて近寄ってきたところで頭を撫でたり、それだけで不思議と癒される。

しかしそんな犬でも悠さんは何故か懐かれずに吠えられている。やっぱり駄目かと呟く彼は、本当に楽しんでいるのだろうか。

「悠さんは……楽しいですか？」

「楽しいですよ、とても」

「……ならいいのですが」

その後は食事をしようということになり、名残惜しさを感じながらもその場を離れた。

その後は特に何も無い。この前と一緒にでお土産屋さん立ち寄り、日菜のこと、Roseliaの事を話したりした。

ただこの前と唯一違うとするならば……手を繋いでいたことだろうか。

「もしかして、あんまり寝てないんですか？」

「いえ、そんなことはないですけど……どうしてですか？」

「酷く疲れているように見えたので」

「僕は体力がないですから、後は……楽しいことがあると不思議と疲れませんから」

時間はあつという間に過ぎてしまい、帰りのバスに乗り込んでそんな会話をする。

嘘は言っていない、それは疲れた顔を見せながらも小さく笑っている彼を見ればわかる。

ではワンちゃんには好かれずに、ただ話していただけだというのに、何が楽しかったというのか。それが気になって聞いてしまった。

「紗夜さんが楽しそうだと、僕も楽しいですから」

恥ずかしいことをまるで何でもないかのように言ってくれる。多分私は顔が赤くなってしまっていると思う。

ああ、本当にズルい。それは私ものなのに、だけどそれは口に出すことが出来ない。握る手に、つい力が入ってしまった。

次は、次こそは、逆でありたい。彼の横顔を見て、そう思った。

「あれ、悠さん？」

そんな事を考え込んでいると会話が途切れてしまった。何か話さなければと適当な話題を振ってみたが返答はない。

もしかしてと思って見てみれば、やはり悠さんは眠ってしまった。そんな疲れていたのか、楽しんでくれたのか。起こすのは悪いと思いきのままにすることにした。

ふと笑みが漏れてしまう。最初はまともに顔を見ることが出来な

かった。

二度目は隣で並んで、一緒に眠ってしまう事さえ出来た。
それなら三度目は……

「……いえ、こういうのはあなたが起きている時に」

窓側に倒れこみながら眠っている悠さんを見てそう呟く。

キスは、したくないわけではない。だけど、私だけ知っているそれは、なんだかズルいかなのような気がした。

あなたとの思い出になるようなことは、共有したいから。

「……おやすみなさい」

いい夢を、それを願うことにした。けど少し寂しくて、彼の顔をこちら側に優しく倒れさせた。

「……、覚えてますか?」

「……ええ、覚えてますよ」

帰り道、忘れもしない、悠さんに一度別れを告げた場所。酷いことを言った、それこそ今こんな関係になれていることが奇跡だと思えるような事を。

あの時はあれだけ嫌だと思っていたのに、もうすっかりと彼の優^毒しさに犯されつくしてしまった。でもそれはとても心地よくて、その優^葉しさは、私を救ってくれた。

「……あなたが初めて名前で呼んでくれたのも、ここでしたね」

「……最後に、なんて言われましたけどね」

最初で最後、そう思っていたのに。いや、今とは違う呼び方だから間違っではないかもしれない。

でもそれは、最後にしたくない。

「あの時と同じ呼び方を、してくれませんか?」

「やっぱり恥ずかしいですね……」

彼は頭を軽く掻く。ちよつと恥ずかしそうにしながら、あの時と同じように空白が肌を突き刺してくる。

「……紗夜」

ああ、やっぱりこれは不思議だ。いつもより二文字少ないだけなの

に全く違うような感じがする。

でもそれは私だけ……あなたとの思い出は、共有したいから。

「……悠」

そう言うとき彼は目を見開いた後、顔を赤くされ目をそらされる。

ああ、恥ずかしい。溶けてしまいそうなくらいには体が熱い。恥ずかしくて嬉しくて、お互いに何度も名前を呼びあつてしまう。

「……やっぱり呼び方は、まだいつも通りにしましょう」

「……ええ、そうですね」

まだ、そう、まだだ。いつかそうなればいい。時間がかかろうと、それが自然であるかのようになればいい。

空が曇りというのもあるが、時期的なものもありもう真っ暗だ。見失わないように、もう離さないように手を繋ぐ。

あの時切り裂いた闇が今、私達の手を繋いでくれたかのような気がした。

距離

「おねーちゃん、今日ファストフードのところで新商品出るんだって、一緒に行くよー!」

「今日はRoseliaの練習があるから駄目ね、終わった後も予定もあるし」

えー、と声を漏らすとおねーちゃんから、Pastel? Palettesは練習はないの? と聞かれた。

今日は練習がないこともないが自主練だから行かなければならないというわけでもない。そも出来るのだから行く必要だつてないのだけれど。

ただ今日はイヴちゃんと千聖ちゃん、麻弥ちゃんも仕事だつて言っていた。彩ちゃんもバイトがあるつて言っていたし暇なのはあたしだけ。

そう説明すればおねーちゃんは仕方ないわねと言ってくれる……わけもなく、また今度ねと言つてそのまま出かけていった。

また今度、おねーちゃんはそう言った。ちよつと前ならありえなかつたろうに。

やつぱりおねーちゃんの事は好きで、こうやつて仲良くなれていると思わされるのは何度目だとしても嬉しいものがある。

でもそれとこれとは別、新商品が食べたいのは事実だし暇を潰せる何かをしたいのもまた事実。

そういえばおねーちゃんは練習が終わった後も予定があると言っていた。そしてそれは多分……

「もっしもーし、起きてる〜?」

『……こんな昼に何?』

「悠君まだ寝てたの?」

「休みだし、昨日は遅くまでゲームしてたから」

昨日もでしょ? そう言うのと彼は小さく笑つて誤魔化する。新商品食べに行こ、と誘つてみれば長くならなければと返された。

やつぱり、そういうことか。おねーちゃんの予定はきつと悠君と、

何をするかは知らないけど、何かしらのことはするのだろう。

それもそうか、二人は付き合ってるのだから。それじゃいつものファストフードでね、そう約束して電話を切ると、不思議とため息が一つ漏れた。

「それでね、おねーちゃん誘って見たんだけど忙しいって断られちゃってさあ」

「ひ、日菜ちゃん、お願いだから何か頼んで……」

「お、お待ちのお客様はこちらにどうぞ」

ファストフード店に着いたけど悠君はまだいなかった、珍しい。なので店員をしていた彩ちゃんと話して来るのを待つ。

それにしても彩ちゃんと花音ちゃんはどうしてそんな困ったような顔をしているのだろうか。

やっぱり休日のこういったところ、更に新商品が出た初日となれば人の数も普段とは大違いなのかもしれない。

めんどくさそうだなあ、そんなことを思いながら視線を入り口に向ける。入ってくる人が気になって仕方ない。また違うのか、ため息を漏らしながら彩ちゃんと話すことにする。

しかしそろそろ来るだろうし、彩ちゃんもお願いだから注文して、と何度も言ってきているので先に頼んじやおうかな。

そんなことを思いながらこれで最後と思いついてきた人を見て、手を振って呼び寄せた。

「悠君は何頼むの？」

「いつもと一緒の予定だけど」

「じゃあ彩ちゃん、それでお願い」

「いや、流石に僕は並ぶよ」

「えー、わざわざ並ぶ必要なんかないよ」

「僕と日菜はよくても後ろの人はよくないでしょ」

相変わらず悠君は変なところで真面目だ。これが君の普通なのだろうか、あたしには全く理解が出来ない。おねーちゃんは……これも、理解出来るのだろうか。

列を見直してみればそこまで長くはない、一番後ろに悠君と一緒に並ぶ。他愛のない話をして待っているこの時間も、君となら価値ある物に、大切な時間になる。

なんか彩ちゃんがかんなくて面白けど、どうしたのだろうか。やっぱり彩ちゃんはよくわかんなくて面白い。

「……ところあの店員の人、日菜の知り合い？」

「パスパレのボーカルやってる彩ちゃんだよ」

「……こんなところでバイトしてるんだ」

「イヴちゃんだってつぐちゃんのところでバイトしてるし似たようなもんじゃない？」

「まあそうだけど」

ようやく順番が回ってきたので商品を頼む。悠君と話していたからそこまでではなかったが、それでもだいたい待った気はする。

頼んだものを受け取って席に座るが、彼はトイレに行ってしまったので先に食べて待つことにした。

「そういえば悠君は新商品頼んでないんだ」

「金もないし、寝起きだからそこまで腹減ってないしね」

「うーん……それならこれあげる、これくらいなら大丈夫でしょ？」

いや、と断られてしまいそうなので有無を言わずに渡す。ちよつと困った風な様だったが、それでも残り一欠片、一口で食べきれてしまいそうなくらいならと思つてか、彼はそれを口にする。

これだけ期待させられていた新商品なのだが、期待通りというかなんというか、期待を裏切るものを想像していた身からすると少しばかりがっかりさせられてしまう。

だが不味いというわけではないし、当然美味しいという部類に入るのは間違いない。悠君は食べてどう思ったのかな、それを聞こうと彼の方を見る。

「どうしたの？」

「……いや、なんでもないよ」

「え、気になつちやうなだけど」

彼はあたまから顔ごと目を背けていた。よく見ればほんのり赤い、

一応新商品はスパイシーソースだなんだと言っていたし、彼は辛いのは苦手だったのかもしれない。

でもそこまで辛くなかったと思うんだけど、そう味を思い出すと同時に気づく、あれはあたしの食べかけだったなど。

ほんの少し、本当に少しだけだけど、あたしまでも恥ずかしくなってきた。

このような事、悠君がおねーちゃんと付き合い始めてからすることはなかった。手を繋ぐことでさえ、あの日で最後。

それってしちやいけないことなのかな、思い出したかのように寂しくなってきた手にスマホを持たせて誤魔化す。

「……ねえ、悠君この後暇でしょ」

「……まあ、まだ時間はあるね」

「じゃあどこか遊び行こうよ！」

寂しさを少しでも忘れるために。おねーちゃんが家を出たのもさつきだし、多分まだまだ時間はあるだろう。

何処に行こうとかは一切決めていないけれど、おねーちゃんに買っておこうと言って二人で新商品を一つ買った。

楽しい時間というのはとても早いもの、一人でいたら何して暇を潰そうとか考えながらも暇だ暇だと嘆いているというのに、こういう時間は一瞬のように感じさせられる。

事実既におねーちゃんの練習が終わる時間のようで、彼もそろそろ時間がと言っていた。

もう終わりなのか、とても残念に思っつてつい空を見上げてしまったからだろうか、段差に躓いてしまった。

手に持った新商品を入れた袋を落とさないようにしないと、そんなことすら考える余裕はあつたけど多分倒れてしまうだろう。

少しだけゆっくりと進む視界の中、急に袋を持っていない方の手を掴まれた。

「危ないからちゃんと前見て」

「あ、ありがとね、悠君」

別に、そう言っただけは歩き出す。その手はあたしと繋いだままで。引つ張られるようではなく、引つ張るのでもない。至って自然に、これが当然であるかのように二人で歩く。

なんだ、あたしの考えすぎだったのか。彼も似たような事を考えていたかもしれないけども。

もしおねーちゃんが見たら怒っちゃうかもしれない。それでも手は離せなくて、寧ろ握る力は強くなっていった。

「日菜ちゃん！」

次の日、パスパレの練習のために事務所に入り、練習場に入るやいなや、彩ちゃんに詰め寄られた。

なんだろう、今日はそんなに遅れていないし悪戯だって仕掛けていない。もしかしたらこの前の悪戯を根に持つてるのかな？ そんな事を考えていたら手を引かれ部屋から連れ出された。

「どうしたの？」

「日菜ちゃんはアイドルなんだよ？」

「そんなのわかってるよ、それで？」

「昨日一緒にいた人と、どんな関係なの？」

「悠君のこと？ 別になんでもないよ、ただの……」

知り合い、そうは言えなかった。友達、それも言うことは出来なかった。あたしはその程度だとは思っていない、だけど恋人ではないし答える言葉がない。

多分表すのなら友達が一番なんだろうけど……悠君はあたしのことを今、どう思っているのかな。その程度なのかな。

「……ただの友達だよ、ちよっと仲のいいね」

「……ほんと？」

「ほんととも何も、彩ちゃんにはどう見えたの？」

「えくっく、その……」

人差し指を擦り合わせながら言い淀む。視線もあたしからそらして練習場の方に向いている。

言いにくいことなのか、いったいなんなのだろうと考えていたけど

全くわからなくて、教えてと迫るとやつと重い口を開いてくれた。

「つ、付き合ってるのかわかって……」

「……彩ちゃんにはそう見えたの？」

「うう……ごめんなさい」

あたしと、悠君が、付き合ってるように見えた。嫌な気などするはずもない。詳しく聞こうと更に迫ると彩ちゃんは練習場に向かってしまった。

「付き合ってるように……か」

彩ちゃんだけじゃなくて周りからはそう見えるのだろうか。昨日繋いだ手をまじまじと見る。

指だけで約束をして、昨日は手を繋いだ。次はおねーちゃんみたいに、前みたいに絡ませてみよう。

付き合ってるように、それもいいけれどやっぱりようにはなく、事実として付き合いたい。

おねーちゃんが知ったら怒るだろう、悠君も首を縦に振ってくれないだろう。だからそれは事実としてすることはできない。

でも、それを実現出来ないとしても、少なくともあの時みたいに……近くにいられるようにしたい。

それは現実の距離の話じゃない、心の距離の話。恐れず、普通に、自然に……仲良く、過ごしていきたい。

「ねえ悠君、来週って空いてる？」

スマホを取り出して電話をかける。次はどうしよう、映画を見ようか、星を見ようか。一緒に、隣で、手を繋いで。

悪戯

ハロウィンという行事はなんともおかしなものだ。

お菓子をくれないきや悪戯するぞなどという、いくら選択権がこちらにあるとはいえ、こちら側には損しかない選択肢を押し付けてくる。

カードゲームではそういう類いのカードは評価は低いことが多いが、いざ現実となると大変強力、もはやパワハラの域だ。即刻禁止になつてほしい。

などと文句を言つてみたが、僕の周りにはそのようなことをしてくるようか奴はいないので気にする必要はない。

というか高校生にもなつてそんなことをする奴などいるわけがなく、中学になつた頃にはもうやりもしないしやられもしてないはずだ。

そんなことを考えているとインターホンが鳴る。またなんか宅配で届いたのかと思いつながら、まだ開けてないお菓子をジャンパーのポケットに入れそれを着る。

こんな時期になつてしまったので外は当然寒い。日差しがあるお陰でだいぶましになっているとはいえ、風が強いので実質ノーカンのだ。

こんな中お疲れ様ですねと思いつながらドアを開けると、そこには宅配の姿はなかった。

「やつほ〜」

「……とりあえず上がる？」

「あー、じゃあそうさせてもらおうかな」

突然の日菜の来訪に戸惑いながらも家に上げる。親がいないからというのもあるが、それ以上に日菜の格好が格好だったから。

「それ、どうしたの」

「この前撮影で使つたの借りてきたの！ 似合つてるでしょ」

「似合つてるけどさ……」

いかんせん露出が多い。水着姿を見たことはあるし、それに比べれば明らかに少ないのだが……何故だかこちらの方がそう感じさせら

れる。

恐らく悪魔がモチーフ、どちらかといえば小悪魔か。そんな感じの衣装を日菜は着ていた。

外はあんなにも寒いというのに半袖。上に着るような物は持っていなかったし、恐らくあの格好でここまでできたのだろう。

悪目立ちしないのだろうかと思いつつも、そんなこと気にするような性格じゃないよなどと納得しながら珈琲を出し、今着てるジャンパーを渡す。

「外寒くなかったの？」

「すつつごく寒かった、触ってみる？」

差し出された手はほんのり赤く、相当寒かったのだということは何れだけでわからされる。

そして触れると、こちらの熱が奪い取られるかのように冷たさが触れたところから襲ってきた。

「何か上着くらい着てきなよ」

「折角のハロウィンだし仮装だよ？ 勿体ないじゃん」

そう言って日菜は珈琲の入ったカップに手を当て暖める。

呼んでくれたらこっちから行ったのに、そんなことを思いながら僕も珈琲を飲み、その熱さに舌が少し痛くなった。

「で、今日は何しにきたの？」

「おねーちゃんにお菓子貰いに行くって思ってた誘いにきたの！」

「……紗夜さんそういうの準備してるのかな」

「なかったら悪戯できるからそれはそれでよくない？」

悪戯、いざ言われるとよくわからないものだ。脅かすだとかその程度のものであれば、教室のドアに黒板消しを挟むなんてのも悪戯の範疇だ。

ただ線引きは曖昧で、何処かの誰かからすればそれは悪戯というレベルを超えてしまうかもしれない。特に紗夜さんなんかそう思うと思うよなどと勝手ながら考えてしまう。

まあ日菜が危ない事をしそうだったら止めればいいのか、そう考えながらちよつとだけ熱さの落ち着いた珈琲を飲む。

「……紗夜さん何処にいるかわかっているの？」

「うーんと、確かつぐちゃんのとこに行くって言ってた！」

場所はわからない、ということもないようなので一安心。珈琲をちびちびと飲み干して簡単に洗い外に出る。

ジャンパーは貸してみたものの、先程の発言から考えるにどうせ脱ぐのだろう。そう思っていたのだが、日菜はそれを脱ぐことはなく歩き始めた。

「あれ、脱がないの？」

「悠君は脱いでほしいの？」

「いや、寒いし風邪引かれるとあれだから着てほしいけど、さつき折角のハロウィンだしって言ってたじゃん」

あー、と日菜は声を漏らす。これは指摘しない方がよかったか？自分の分は追加で持っておいたので別に構わないのだが。

日菜は袖の中に隠していた手を外に出し、体の後ろで手を組んで笑顔で、僕に向けて言ってきた。

「一番見せたい人には見せれたからもういいかなって」

「……そう」

そう言って手を伸ばされる。それは冷たいけど、それ以上に、暖かった。

「いらっしやいませ〜」

ハロウィンだからといって仮装をする、なんていうのは身近では起き得ないことだと思っていた。

日菜がやっていたのは予想外、というわけではなかったが、商店街に仮装をした人がそこそこいたことには驚かされた。

事実店の中にも仮装をした人は見受けられる。日菜と同じように薄着の人が多いので、恐らく寒かったから避難してきたというような感じだろう。

「おねーちゃん、お菓子ちょうだい！」

席に座っている紗夜さんを見つけると、日菜は飛び出すように近づき同じ席に座り、そう言った。

紗夜さんは仮装をしていない。何をしていたのだろうかと思いつつ、僕も珈琲だけ頼んで紗夜さんと同じ席に座る。

「はあ、仕方ないわね」

「わーい、パウンドケーキだー!」

キラキラと目を輝かせながらそれを受けとるとそれを食べ、頬に手を当て美味しさを表現しつつも不思議そうな表情を浮かべていた。

「あれ、昨日と味が違うような……」

「……やっぱりあなたが食べたのね」

「あ、バレちゃった」

誤魔化すように笑ったあと僕に1つ渡してきた。紗夜さんの方を見ればどうぞと言われたのでそれを口に運ぶ。

文句なしで美味しい、ただ残念ながら何が美味しいのかと答えられるような舌と語彙は持ち合わせていない。

どう伝えようかと迷っていると、日菜は僕から何かを渡されるのを待っているかのように手を差し出してきていた。

「お菓子ちよーだい」

「……そういうのは家出る前に言って欲しいんだけど」

「そしたら悠くんお菓子持ってきちゃうでしょ？ それじゃ面白くないじゃん」

「面白いって……」

そんなに悪戯がしたいのか。まるで僕がお菓子を持っていないのをわかっているかのようにニヤニヤとこちらを見てきている。

何かなかったかなとポケットの中を漁っていると、そういえば日菜が来たときにポケットにしまったことを思い出す。

僕がポケットを指差すと、不思議そうな顔をしながらポケットに手を入れて、少し不服そうな顔をしながらお菓子を取り出した。

「ちえ〜、つまんないの」

「日菜、貰ったのにそんな言い方はないでしょ」

「でもさ〜、悪戯もしたかったんだもん」

折角るんつてくる悪戯考えといたのにな〜と日菜は溢す。

そんなにしたがる悪戯とはなんなのだろう。録でもないこととい

うのは簡単にわかるので、数十分前の自分に感謝をしながら運ばれてきた珈琲を飲む。

そんな中入り口のドアが開き新しい客が入ってくると、日菜がその人達の所に向かかっていった。知り合いなのだろうか、美竹さんはわかるが残りの三人は誰かわからなかった。

そちらを眺めていると、紗夜さんから話しかけられた。

「そういえばこれなんですけど……」

「えつと……これは？」

「羽沢さんに教わりながら作ってみたものです」

つまりここに来た理由はこれを作るためで、これを作った理由は僕に渡すため。

嬉しくないはずがない、断るわけがない。だが食べるのがなんだか勿体ない気がして、今のところは食べようとは思えなかった。

「日菜が迷惑をおかけします」

「いや、大丈夫ですよ」

「あの上着……悠さんのですよね？」

「ええ、そうですね。仮装で家に来たんですけど流石に寒そうだったので」

何を話しているのだろうか、日菜はなんだか楽しそうだ。

先程のグループには仮装をしている人もいたようだが日菜は上着は脱いでいない。外に比べると暑いくらいだというのに着続けるのは……何か理由でもあるのだろうか。

「悠さん」

「なんですか？」

「期末試験が近いと思いますが……きちんと勉強していますか？」

突然振られたその問いに、僕は頬を掻くことでしか答えることは出来なかった。

忘れていたわけではない、やらなくていいと思っていたわけではない。ただやりたくなかっただけ、本当にそれだけでしかない。

自分でもため息をついてしまいそうになる。変わりたいとは願うもののやはり人間の根幹は簡単には変わらない。近くにこんな頑

張っている人がいるのに感化されないのだからそういうことなのだろう。

「……悠さん、お菓子って持ってますか？」

「え……あ、持ってないですね」

「それなら……今度一緒にテスト勉強でもしましょう」

微笑みながら、紗夜さんはそう言った。ああ、なんだそれは、悪戯のつもりなのだろうか。

わかりましたと僕は返す。僕は何一つとして変わっていない。それは先程の通り根強く残ってしまっていて、修正しようにも自分の力ではどうすることも出来ないししようとも思えない。

でも、だからこそ、この人は手を貸してくれる、手伝ってくれる。

それならいつ、どこにしましようかと早速決めることにした。

いつかは変わりきってしまうのか、それともいつまでもこの性格は変えられないのだろうか。

前者であればそれでいい。そうなりたいと願ったし、今もそう思っているのだから。

では後者は？ それはそれで……いいかもしれない。

本当に僕には勿体なくらいだ、目の前に座る人を見て、いつまでもこうであればいいのにと、強く思った。

特別

私にとってクリスマスとは、それこそそうあるものでしかなかった。

クリスマスだからとかクリスマスのせいとか、そういったものは一切なく日常の延長線。特別なことは殆どない、それこそ夕食がほんの少し豪華になる程度。

何にも変わらない、勉強をしてギターを弾いて、それで一日が終わる。今年もそうなるだろう、そう思っていた。

「……どうしたらいいのでしょうか」

クリスマス、正確にはクリスマススイブのだが、そういう関係の男女にとっては盛り上がるものというのは知識にある。

勿論行事であるのだから同姓であれ盛り上がるらしいが、どうにもクリスマスというものは他と比べ異性間では一際特別なものらしい。

このように私にはクリスマスに関する知識、より正確にはクリスマスですることというものがわからない。

今井さんから悠さんと出かけるんでしょなどと言われてしまい、悠さんから出かけましょうと言われ肯定したはいいものの、何もかもがわからない。

何処に行くべきか服装はどのようにするべきか、何を話すべきなのか。調べてみたはいいものの何処も書いてあることは異なり参考になどなりはしない。

その日、つまるところの明日は終業式。ある程度の時間はあるし、それこそRoseliaの練習ですらない。

であるからこそその不安、その翌日にはRoseliaの練習はあるのだがそれも昼から。暇、といってしまうばそうなってしまう。ならばこそ、どうしたらいいのだろう。

普通に一緒に過ごす、それもいいかもしれない。

本当に？ まさか、普通の休日であるならまだしも、後に予定があるならまだしも、予定もなく、それが祝日であるというのにただ過ごすというのは……恋人としてどうなのだろうか。

いや、それは少し違う。恋人だからどうだとか、そういうことは一切ない。ただ、私がそうしたいだけで……

うつ伏せにベッドに横になりスマホを眺める。悠さんのご両親は余り家にはいないというのはわかってはいるが、それが明日もそうなどという確信などあるはずもない。

聞けばいい、しかしそんなことを出来るわけがない。階段を上る音が聞こえ体を起こす。多分日菜がそろそろ寝なさいとでもお母さんに言われたのだろう。

「このままで……いいのかしら」

デートをしないわけではない。最低月に二回、何処からがデートかはわからないが、一緒に何処かに出掛けるというのを最低限とするならばそれくらい。

自分では少ないとは思わない、もちろんその逆で多いとも思わない。ただ悪戯に回数を重ねるよりもよっぽどいい。

そのはずだけれど、そう思っているのだけれどキスをしたのはあれ一度きりという事実。それに不満はない……と思えるはずがない。たった一度、それは彼と日菜よりも少なくなくて。

回数で競うものではないという事はわかってはいるが、だからといって認められるものではない。

悠さんもしたくなかないなんて思っていない……といいのだが、彼も私もそれは求められない、迫れない。恥ずかしい、なんて小さな感情で。小さくて小さくて、だけど膨れ上がるそれに邪魔をされて。でもそれをほんの少し弱らせる為に彼が眠っている時というのは、やはりずるい気がして出来なかった。

なんて思ってはみたものの、キスしませんか？　なんて真正面から恥ずかしげもなく言えるなんて関係にはなりたくはない。

そんなもの、そういうためだけの関係の人がやっていそうだから。私達もそうなってしまえば多分それは、恋人とは言えなくなる、言いたくない。

「……自分勝手ね」

やりたいのに出来なくて、望んではいるけれどそれが呼吸のように

自然になつてしまうのは嫌だ。矛盾している、ああ、本当に自分勝手だ。

部屋の電気を消すとスマホの明かりが妙に目立つ。明日の予定、合っているかもわからず組んだそれに今一度目を通し、不安と期待を抱きながらスマホの電源を落とし目を瞑る。

特別な日だからこそ、そうしてほしいと期待して、特別という言葉に背を押される。

明日の私はどうだろう？ 求めるか、求められるか。今の私にはわかるはずもなく、布団を頭まで深く被り明日を迎えることにした。

集合時間なんてものは当てにならない。その日の朝はいつもと同じく一緒に登校、というわけにもいかずに久しぶりに一人での登校だった。

別に寂しいなんてことはない、それこそ彼と付き合う前はこれが普通だったのだからどうこう思うはずもない。

なんて強がってみたものの、やはり少しだけだが道がいつもより広く、学校までの道のりが近い気がした。

そんな思いをしたからか、予定の時刻よりも30分も早くに着いてしまった。だというのに、私が着く頃には既に彼がそこにいた。

彼との待ち合わせはいつもこうだ。相手を待たせないようにと来る時間が毎回変わってまるでいたちごっこ。さつき来ましたなんて言葉を信じられる筈もないが、向こうもいつもそう思っているのかもしれない。

そんなならば時間通りに来ればいいと思いそう取り決めたとしても、もし相手が早く来てしまっていたら、等と考えてしまい着くのは最低でも十分前だ。

春や秋ならともかく今は冬、それも年末ともなれば寒さはとてつもない。そこで待たせてしまうなんてどうにも悪いことをしてしまつたかのような気分になる。

「寒くなかったですか？」

「それでもなかったですよ」

蓋の開いてない缶珈琲を両手で握りながら言っても説得力なんてあるはずがないのに。こんな日だからか寒さと服装が一致していない人達の姿を見ながらそう思う。

男女のペアの数は普段と比べ物にならなくて、その全てが手を繋ぐ、腕を組むなどしている。それこそ、していない私達が不自然に思えてしまうくらいには。

手袋を片方外すとそこだけ一気に冷え込んでくる。それを見てか悠さんも手袋を片方外す。言葉なんてなくても、恥ずかしさは完全に消せはいいないが、これは自然とできるようになった。

しかしバチリと、指がちぎれるかのような痛みが一瞬走る。

思わず手を引つ込めた、彼も同じで繋ごうとした手を振っている。冬といえば、そう思われるかのような静電気だった。

ただそれだけだというのに大きな壁を感じる。何でもなかった筈なのに急に戸惑いが生じてしまった。会話もなく、しかし手袋をはめなおすこともなく、ただ悪戯に沈黙が続いた。

下を向いて、彼の方を見て、それを数度繰り返すと彼から話しかけられた。

「……………これ、飲みますか？」

「……………いえ、大丈夫です」

「そうですか」

そう言っただけ彼は珈琲を鞆にしまい、またこちらに手を伸ばしてくる。私は彼の顔を一度見た後、その手を取った。

「……………暖かいですね」

「さっきまで珈琲触ってましたから」

どこ行きましようか、なんて聞いてくる彼にはお見通し。

不安なんてものは何処にいつてしまったのか。楽しみとはまた違う、言い表せないような感情が押し寄せてくる。

私達は、まず最初の目的地に向けて歩きだした。

「雨……………止まないですね」

「そうですね……………」

今日は雪が降るかもしれませんが、なんて予報を全て無視したかのようなそれはただただ強くなるばかり。

なんでこんな日に限って雨が降ってしまうのか。ほんのり暗くなった外、休憩しましょうと寄った羽沢さんのお店から外を見る。

「どう……しましょうか」

そんな言葉を漏らしながらも胸が苦しくなる。待っていれば止むかもしれませんと言ったのは私で、これからの予定、全て崩れ落ちてしまった。

綺麗なイルミネーションがあるという場所、大きなクリスマスツリーがあるという場所、そんなとこ、こんな天気に行こうと思えるはずもない。

どうしよう、頭を働かせてはいるがどうにもよさげな物は思い付かない自分が情けなくて、飲む珈琲も味がしない。

そんななか、悠さんからあの、とぼつが悪そうに話しかけてきた。

「……この後予定、あったりしますか？」

「……いえ、こんな天気ですから……悠さんは何かあるんですか？」

「あー……今日も両親帰ってくるのだいぶ遅いので……」

そこまで聞いて、心臓がドキリと鳴った。恥ずかしさから言えない、多分そうなのだろうがそこから先は聞こえてこない。

珈琲の味が今更口に広がってくる。苦味もあれど、甘くて、顔もいつの間にか前を向っていて、期待を胸に彼の顔を見る。

「よかったら僕の家……来ませんか？」

もう、本当にズルい人だ。貴方は少し怖かったのかもしれないが、私にそれを断れる筈がない、断る筈がない。

領けば珈琲のせいとか、それともお店の暖房のせいとか、体がゆっくりと暖かくなっていく。彼はほっと一息、やはり恥ずかしかったのか外に視線を向ける。

「悠さんのご両親は今日も忙しいのですか？」

「今日は学校帰りから遠くに行く予定だったんですけれど……」

そこから先は何も言われないが、小さく、誤魔化すように笑う彼から全て理解できた。

それは今日のため、ああ、ズルい、ズルすぎる。家族よりも私を優先してくれる。それが正しいかどうかはわからないが、嬉しいという事だけは間違いない。

外を眺めれば雨が相変わらず降っている。強くはならず、しかしながら弱くもならない。

こんな日なのに雨なのか、こんな日だから雨なのか。窓に映る私の顔は、自然と口角が上がっていた。

悠さんの家は久しぶりだ。半年前だったか、その時もこんな雨だった。互いに手を洗い、口をゆすいでお茶を入れる。

話す内容なんてなんでもよくて、しかしそんな空気ではなくて。気まずいとかそういう訳ではなく、単純に何もすることがなく、それだから何も話すことがない。

予め家にお邪魔しますだとか言っていれば映画とか借りておけたものの、こんなにも急だから本当に何も無い。

夕食を作らせていたかどうかとも思ったが、今回は悠さんのご両親が帰ってこないというわけではなく、お母さんに夕食はいららないとも伝えていない。

今から伝えるのは……流石に遅い。口にはしなくても嫌な思いをしてしまうだろう。何らかの軽食があれば話もしやすいのだが、そう思っているとインターホンが鳴った。

「え、嘘」

「もしかして……ご両親が？」

「時間的にはまだの筈ですけど……他に来る人はいなさそうですね……」

もう一度インターホンが鳴る。互いに顔を見合わせて、言葉を発さずに悠さんは玄関に向かっていった。

背筋を伸ばし、それこそ面接を受けるときのるように姿勢を整える。整えはしたが、心の準備は少しも出来ていない。

悠さんのご両親にお会いしたことは一度もない。彼が伝えているかどうかはわからないが……いや、私も伝えられていないのだ、彼も

伝えられていないと思う。

リビングのドアが開くと更に気が引き締まるが出てきたのは悠さ
りだけ。お風呂場からタオルと上着を取ってまた玄関に戻っていく。
どうしてと迷いつつも、その場を動くべきではないと思いついてい
ると、明るい声と共に誰かがやってきた。

「あれ、おねーちゃんどうしているの?」

全身ずぶ濡れ、頭をタオルで拭きながら先程悠さんが持っていた
上着を羽織った日菜がそこにはいた。

「あなたこそどうして? それにそんなずぶ濡れで……」

「仕事も終わったし帰ろくって思ったら雨がドシャーってなって傘
も持ってなかったし、悠くんの家近くにあったなぐって思ったから」
「……はあ」

体の力が一気に抜ける。二人きりというものを壊されたという事
実に少しの不快感を抱きつつも、あのままではどうしようもなかった
ということから感謝もする。

「そうだ! クリスマスプレゼントって彩ちゃんから貰ったケーキが
あるんだけど、おねーちゃんも食べない?」

「ちよつと、夕食はどうするつもりなの?」

「それはそれでこれはこれ! じゃあおねーちゃんは食べないの?」

「……そうは言っていないでしょ」

わーいと言って日菜がケーキの入った箱を開けようとするが、悠さ
りにお風呂に入っちゃええばと言われていた。

渋々といった感じでお風呂に向かう日菜からウィンク一つ、何事か
と思うも意図を読み取るのは簡単で、悠さんの方を見る。

「なんか……ごめんなさい」

「いえ、謝られるようなことは何も……」

それは何に對しての謝罪なのだろう。日菜を上げてしまったこと
か、それとも会話が出来ていなかったことか。日菜がクリスマスプレ
ゼントと言っていたが、そういうものを用意できていなかったこと
か。

日菜が戻ってくる前に悠さんの隣に席を移す。いきなり距離が近

くなつて、これまた無言のまま時間が過ぎていく。

「……あの、悠さん」

「……なんでしょうか」

「目を……瞑つていただけじゃないでしょうか」

不思議そうに彼は目を瞑る。日菜は今いないし二人きり、でもそれは今だけで、止まりっぱなしじゃいられなくて。

目を瞑つて貰ったのは恥ずかしさから、伝えてないのも恥ずかしさから。貴方はどう思っているのか、初めては衝動的に、でも今はどう思う訳ではなくただ平然としていて。

それでいながら今なら、今だからという感情は何より強くて。日菜の置いた箱を見ながらそう思考する。

「もう、開けても大丈夫ですよ」

ゆっくりと目が開けられる。初めても貴方は目を瞑つていた。それは私からするときには恥ずかしかったから、その程度のもので。

今回もそのうちにしてしまえばいいものを、でもそれはやっぱりズルい。私だけが知っているのではなく、私だけがこんなに恥ずかしくて、心臓が張り裂けそうになっているなんて。

だから、それは私と貴方のものであるべきで……

「私から……クリスマスプレゼントです」

ほんと、溶けてしまいそう。悠さんは顔が真っ赤だけど、多分それは私も一緒。恥ずかしさでもう顔は見れなくて、満足感は凄まじくて。

「次があるなら……悠さんから、お願いできますか？」

頷き、音もないそれが何よりも嬉しくて。顔から熱も引き前を向ける。次の時、その時があれば。優しく微笑めば彼はまた顔を赤くする。

外は雨、ザーザーと勢いのままに降り続ける。日菜が来るまでの間、話しは一つもなかったけれど、何処かとても、満足感を覚えられた。

特別な日とはきつと、こういう日の事を言うのだろうか。

一年

月曜日、特定の予定がある曜日ではないし学校が終わるのも遅くはない。休み明けという憂鬱さえ加味しなければ翌日から休みである金曜日に次いで楽なその日。まあ平日に限った話なのだが。

学校を終えどっか遊びに行こうと友人に誘われるがそれを断る。何でだよと聞いてくるが今日は予定があるからとしか返しようがない。そう言うのと納得はしていなさそうに友人は別のやつのところに行った。

冬も終盤に差し掛かり、だからといって寒さが和らぐわけではない。こんななら家で暖まるために寝転がるのが吉であると思うが今日はそういうわけにはいかない。

しかしながらそれを残念ながらと思うことはない。何故ならその予定というのが日菜に呼び出されたというものだから。

それはいい、しかし何故今日なのか、それがわからない。昨日は日曜日、それなのに何故わざわざ今日を、いや、日菜はアイドルだし色々忙しかったのかもしれない。

だとしても学校終わったらすぐにショツピングモールに来てねなんて、買い物をするならば休日の方がいいだろうに。

もしかしたら理由なんてなくてただの日菜の気紛れかな、なんてことを考えていたらショツピングモールに辿り着いた。

「悠君、遅い」

「これでもだいたい急いだ方なんだけど……」

自転車を止めるとそこには既に日菜の姿が。当然制服、両手には手袋をして更にはマフラー付きにニット帽と防寒は……コートを着ていない以外は完璧、少しだけ安心した。

しかしながら待ち合わせで僕の方が日菜より遅くきたなんて……これで二度目だったか。果たして本当にその一回だけか、それに関しては詳しくは覚えてない。

それでもその一回は確実、どうしようもないくらい印象に残させられている。あの時の事を思い出すと今でも胸が締め付けられるかの

ような感じがする。

「それで、何するの？」

「うくん、とりあえず……」

片方の手袋を外して手を伸ばされる。僕より小さくて、少しだけ先が硬いそれを優しく取ると中に案内される。どうやら一番最初は昼飯に行くようで。

繋いだ手をまじまじと見ているがどうかしたのだろうか？ 僕も防寒として手袋をしていたが手汗はかいていない筈なのだが。

「どうしたの？」

「ううん、なんでもないよ。それよりほら、急ご？ 人で埋まっちゃうよ」

向かう先は相も変わらずファストフード店、確かに学校終わりのこの時間、少しの合間にその列は伸びていくだろう。

早歩きにでもするか、そう思った矢先に手を引かれる。それは何度も体験したもの。

急ごと言うわりにはその歩みはゆっくりだった。初めての時なんか引かれるというよりは引つ張られる感じだったというのに。

どうにせよあの時から比べ、僕を引く手は優しくなっていた。

ファーストフードについたがやはり時間帯の問題か、人の数は尋常でない。一応注文し席に座ることが出来たが人口密度が高すぎる。それこそ今並んでる人は頼めても座れない程に。

「めんどくさいよね、わざわざこんな格好しなきゃいけないなんて」

「仕方ないんじゃない？ バレたらめんどくさいでしょ」

「あたしは別にいいんだけどね、今日はあれだけだよ」

目の前に座る女性、まあ日菜なのだがその姿は先程とは違う、とはいつても眼鏡をかけたただけなのだが。

しかしながらニット帽を被って普段かけてない眼鏡をかけ、パツと見で日菜とわかる人はいるだろうか。

アイドルだし人も多いから変装しようということとその格好をしているらしいのだが、ニット帽をしているせいか逆に目立っている気

もする。

とはいえ、アイドルだとバレてしまった方が目立って大変だろうか
らこれでいいのだろう。

「悠君も食べる?」

「いいよ、お腹もそんな空いてないし」

そっかーと言いながら日菜はポテトを食べ進める。相変わらずあの山は何処に消えているのだろう、それともアイドルというのはそんなに大変なものなのか。

珈琲を飲みながらそんなことを思っているとそういえば、と前置きをしてから僕が気になっていた事を聞いてきた。

「悠君、今日がなんの日かわかってる?」

「なんかあつたつけ?」

「え、わからないの?」

どうして今日なのか、それは先程考えてわからなかったものなのだがどうやら何かしらあるらしい。

しかしながらそう言われてもわからない。今日は祝日でもないしなにかしらの行事があるような日でもない。それこそ誕生日だとかの記念日でもないし……一体なんなのだろうか。

「ほんとにわかんないの?」

「……ごめん」

「じゃあヒントね、この後行くのはゲームセンターだよ」

この後ゲーセンに行く、それが何のヒントになるのだろう。それこそ日菜と行ったことなんて一度だけで、その日と今日が関連つくわけでもない。

いや、そういえばもう一つだけ日菜とゲーセンが結び付くものがあった。遊んだわけでもない、それこそ立ち寄ってもいない、だけど記憶に有る限りではそれしかなくて。

じゃあその日何があった、それは日菜と知り合った日で……確か一年前。正確な日付は覚えていないがこう言ってくるということは恐らくそういうことで。

「思い出した?」

「……知り合って一年？」

「正解！ もー、忘れるなんて酷いな」

「……そんな昔の事一々覚えてないよ」

最近は五分前の事ですら思い出せない事があるのだ、一年前なんて覚えてる訳がない。ただ僕の答えに満足したのか、日菜は手元のポテトを一気に食べると立ち上がった。

「時間もないし、行こ、悠君」

今日は学校が長かったというわけではなければここに長居をしたわけでもない、事実時間を見てみればそこまで遅いということでもない。

何か予定でもあるの？ と聞いてみるが別に、としか返ってこない。帰る時間を確認してみても特に指定はないとのこと。

だというのに時間がないと答えるというのは……日菜にとってはその通りということなのだろう。

この後ゲーセンに寄って、その後は何も決めていないらしいが帰るという選択肢はないらしく。

ああ、なるほど、これは時間が足りないな。引かれながらゲーセンに向かう途中、出口に向かってすれ違う学生達を見て僕もそう思った。

屋上への扉を開ける。外は真っ暗、季節のせいもあるけれど、それ以上に時間が時間だから当然だ。

星がよく見える、君の顔はよく見えない。あたしがその場に座り込むと悠君も隣に座り込む。

流石に暗すぎかな、なんて思っただけでスマホのライトをつけてあたし達の間で置く。つけた瞬間は眩しいと思ってしまうけれど、それでも来たばかりだし星を隠すほどのものでもない。

楽しかったなあ。ゲームセンターに行っただけで、楽器屋にも寄ったり洋服を見たり、おねーちゃんとお揃いになるようにと同じ手袋を3つも買っちゃって。

濃密で、だからこそ一瞬に感じられてしまった。

「……………なら誰も見てないよ」

彼は何を思っただろう言ったのか、まあ含みも何もなく本当にその通りでしか言っていないのだろう。その言葉通りに眼鏡を外す、ニット帽は寒いからつけたままだけど。

ほんと、君はそれをあたしが捉えた通りにしていたらどうしていたのだろう。そこまで考えてないのかも知れないけど、なんて思っただけの手を取るとちよつとだけ冷たかった。

「今日は寒いね」

「まあ……………冬だからね」

会話もなく星を眺め、ふとそんなことを聞くとコートを渡される。別にいいのに、なんて言葉は飲み込んでそれを羽織る。

吐き出す息には色が付く。そんな日なのに強がっちゃって、そんな日でも変わらず君は優しくして。

「風邪、引いちやうよ?」

「馬鹿は風邪引かないから大丈夫だよ」

それならあたしは、なんてものも懐かしい。君との一年、冬に知り合って春に好きになって、夏を君と過ごして秋には……………振られちゃったけど、全部全部大切な思い出で。

「星……………綺麗だね」

「当然、あたしのお気に入りの場所なんだから」

空から視線を落として君を見つめる。悠君も見られてると気づいたのかあたしの方を見てくる。今年は去年の通りにはいかなけれど、去年のように君と過ごせたら……………

「ねえ、悠君」

「何?」

「天体観測ツアー、今年も行かない?」

「……………今年こそ紗夜さんで行けるんじゃないの?」

「だから、三人でだよ」

「……………ペア限定じゃなかったっけ、確か」

「そんなのは覚えてるんだ……………」

知り合った日は覚えてなかった癖に。でもそれだけあれが君に

とっては大事なもののかなと思えば嬉しいのも事実。

つぐちゃんとか誘ってさ、そう言ううちよつとだけ迷つて了承される。二人には聞いておいてねと付け足してだったけど。明日学校でつぐちゃんに聞いてみよう、おねーちゃんには……その後で。

「そろそろ帰ろっか」

「だね、もうこんな時間だし」

スマホの明かりを消せば真っ暗で、互いの顔も見えやしない。コートを羽織ったはいいけど中との気温差が酷くて凍えてしまいそう、それでも繋いでいる手だけはそうではなくて。

君とはいつまで一緒にいられるのだろう。死ぬまでか、君とおねーちゃんが結婚するまでなのか、大人になるまでか、それとも……高校を卒業するまでか。

そんなの嫌だ、でもそれはあたしにも悠君にもわからないことで。どこまで離れようとあたしは君の事を思えるなんてのは当たり前で。空をあたし達が見上げる、空があたし達を見下ろしている。今ここにいるというのは他でもない、君とあたしと、あの星達が覚えててくれる。

「月が綺麗だね」

「……そうだね」

答えはなんともない、わかってる癖に、わかってるからそう返される。

指を絡ませる、離れないように、おねーちゃんのように。彼が少し抵抗するようにしてきたからちよつとだけ強く握ると冷たい手には小さく痛みが走る。

君と出会ってもう一年、君と知り合ってまだ一年。一年というのは長いけど短くて。

一年かけたこの気持ち、一年持ちっぱなしのこの気持ち。時間をかければ無限に強くなるのか、それともここら辺が上限で後は下がっていくのみか。

まさか、君のことを好きでなくなっていくなんて考えられない、それこそおねーちゃんの事を嫌いになるなんてのと同じくらい。

じゃあ君より誰かを好きになれるかな、なんてことはあたしにはわからない。あり得ないなんてことは存在しないから否定はしない。

「ねえ、悠君」

でもまあ……そうなることなんて想像できないけど。

「忘れないでよね、天体観測ツアー」

「そっちこそ、色々と忘れないでよね」

あーあ、釘刺されちゃった。でもまあ、それでもいつか。

これからもずっと一緒だよ、なんて言えないから、こんな日常を、大切にしていきたい。

誕生日

贈り物とは何を買えばいいのだろうか。

極論を言ってしまうえば相手にとって邪魔にならず、ある程度使い道があるものがあるのならそれでいい。

そんなことはわかってはいる、でもそんな都合のいいものがパツと思いつく筈もない。いや、あるにはあるのだが、渡すものとしてはそれに対しての知識がなさすぎる。

「どうしたもんか……」

紗夜さんと日菜の誕生日、二人共ギターをやっているのだしそれに関するものを送ればと思ったのだが、いかんせんそう簡単にはいなくて。

ピックなら予備にもなるし丁度よさげ、なんて思って調べたらそれはもう未知の世界。二人のギターの種類も分からなければ今使っているピックの形や厚さもわからない。

もしこれで今と全く違うものを送ったのならそれはもうゴミのようなもの。折角の誕生日にそんなもの貰いたくもないだろうし、なによりそんな風なことにしたくない。

ということまでギター関連は駄目、勿論二人に聞けばそれも解決なのだけれど……まあ、知られたくないというか、何を渡されるか察されてしまいたくない。

「やっぱこれになるんかなあ……」

売り物のアクセサリーを見ながらそう呟く。やはり無難なものに、しかしそれでは去年と同じになってしまう。とはいっても期日は既に明日なわけだし他の選択肢は思い浮かばない。

オシャレとかそういうのは本当にわからないのは相変わらず。自分ではこれでいいんじゃないかと思っただけでも周りからはダサイと思われる可能性だってある。

渡してそう思われるのは嫌、であるけれど他人がこれだと選んだものを渡すのも何か違う。

贈り物を選ぶのに金の心配はしたくはないのだが、いかんせん手持

ちが寂しいので買える物は限られてくる。

昨日紗夜さんの誘いを断っていれば、なんて思ったところで金は返ってこないし、冗談でもそう思えるわけがない。

二人が好きそうなものがいい。ならばポテトとか、だがそんなものは見当たらない、勿論あつたとしても買わないが。

何も同じものを渡す必要はない、傘と星をモチーフとしたアクセサリーをそれぞれ手に取り値段を確認。

これじゃあ渡すものとしては安すぎるか？　と思いつつも店を一周して見たが他によさげなものは見つからず、それらを購入して店を出た。

「あれ、加々美さんですか？　こんにちは」

「こんにちは」

「このお店から出てきたつてことはもしかして……」

「……そうですね、紗夜さんと日菜に」

店を出たところで声をかけられ、そちらを向けばそこには羽沢さんが。二人には内緒にしておいてくださいと伝えれば勿論ですと返された。

そんな会話をしながら明日のことを考える、特にこれをどうやって渡そうかというのを。会いましょうと伝えるのは少しあれだがそうしないとうしろしようもないわけで。

「そうだ！　加々美さん、明日うちに来ませんか？」

「羽沢さんのところに？」

「はい。紗夜さんと日菜先輩が来るのでそれも渡せると思っています」

僕はサプライズとかそういうのが好きというわけではないが、やはりそういう風に行けるならそちらの方がいいだろう。

当然その提案を受け、何時頃かとも教えてもらった。朝早くというわけでもなかったので寝過ぎず心配もなさそうで一安心だ。

「三人用の席、用意しておきますね」

「いや、わざわざそんな……」

「大丈夫ですよ、それにあの二人もその方が絶対喜びますから」

「……ありがとうございます」

「それじゃあ明日、待ってますね」

明日が楽しみだと、そうも思いながらやはり緊張もする。

去年紗夜さんに渡す時もこんな風だったか。そう昔の事を思い出しながらその場を後にした。

「いらつしやいませ。早いですね、加々美さん」

「遅れるよりはいいですから」

当日を迎え、朝からどうにも落ち着かなかつた。じつとしていることができずにこうして店に来たはいいものの、予定の時間はまだまだ先だ。

背中を押し出されてしまったかのように落ち着かずそわそわする。少しでも落ち着こうと珈琲を頼むが残念ながら効果はない。

まだかなと入口の方を見て、その後時間を確認してため息をつく。何度かそれをやっていると言われていると羽沢さんに小さく笑われ、ごめんなさいと言われてしまった。

「……自分のことじゃないのにこんな気にしてるの、おかしいですよね」

「いえ、そんなに思えるのは凄くいいことだと思いますよ」

ああまだかと、何度思ったところで思い足りることはない。なんて言ってプレゼントを渡すか決められてもいないし、顔を合わせた瞬間何とと言うかも決められていない。

どれだけ考えてもわからないそれについてまた考えようとした瞬間、今まで少しも動かなかつた入口の扉が開いた。

「つぐちゃん来たよ……って悠君もいる！」

「日菜、少し落ち着きなさい」

「おねーちゃんも落ち着きなさいよ！」

タイミングが悪いとはこういうことだろうか、それとも願いに願ったのがやつと叶ったとも思うべきか。どうにせよその扉から入ってきた人達は僕が待ち望んでいた人ということに変わりはない。

日菜はすぐさま僕の隣り席に、紗夜さんは羽沢さんと少し会話をし、僕の前向きに。

二人が飲み物を注文してそれが届くまで話していたが、その中に誕生日と関連しそうなものは一つもなくて……

「そういえば来週のあたし達のライブ応募してくれた？」

「勿論、といっても受かるかはまた別だけどね」

「それでしたら私達も近いうちにライブがあるので、よかつたら来てくれませんか？」

「ええ、行かせていただきます」

今日が自分の誕生日だと気づいてないんじゃないか、そう思っってしまう程に関係のない話。

勿論それらの会話はどうでもいいというものではないが、そう思ったときあることに気づく、それは紗夜さんの視線。

彼女の視線が下の方に、正確にはプレゼントを入れた袋に向いていた。勿論偶然かもしれないが、チラチラと何度も見る様子は間違いなく気になっているようだ。

ならば日菜はと見てみればそれはもうガツツリと見ている。まるで中身を推測するかのよう、だけどそれ何と聞いてくることはない。

僕から言うのを待っているのか、気づいてしまえば露骨に思えるほど。あの、と声をかければ視線は僕の方に、そしてそれには期待を孕ませているかのよう、に思えた。

「……これ、誕生日プレゼントです」

アクセサリーを袋から取り出して二人に渡す。大したものではないのにまじまじとそれを見つめられ恥ずかしさを覚えてしまう。

早くありがとうございませうとか言ってしまうてくれればいいのに、二人はそうすることなくじつとそれを見つめていた。

「はい、私からもプレゼントです」

なんとも言えない雰囲気は漂っていたが、割って入ってきたその声と一緒に二人の前にケーキが置かれその雰囲気は霧散する。

日菜は目を輝かせながら早く食べようよ、とアクセサリーを鞆につけながら言う一方で、紗夜さんは反応はしたがアクセサリーを見つめたまま。

「……ごめんなさい、大したものじゃなくて」

「……いえ、そんなことはないですよ。とても嬉しいです」

「おねーちゃん先週くらいから楽しみにしすぎててずーっとそわそわしてたもんね」

「そ、それは……あなたもでしょう?」

「まあね。来週はあたしたちの誕生日だよって送ろうか迷っちゃったもん」

紗夜さんは恥ずかしそうに顔を赤くして、日菜はそれを面白そうにしながらそれを見ながらケーキを食べ進める。

満足したのか紗夜さんもアクセサリーをポケットにしまいケーキを食べ始める。

そんな二人を見ながら珈琲を飲もうとカップを持つが空だと気づいて手を離す。

ケーキ美味しそうだなと早くも食べきりそうな日菜を見ていたらあの、と前方から声がして。

「悠さんも……食べますか?」

「え?」

「私の食べかけに……なっってしまったすけれど」

先程とは比べ物にならない程に顔を赤くし背け、ケーキを少し乗せたフォークをこちらに向けている。されてる側で恥ずかしさを覚えるのだから本人はどうかなど想像もつかない。

新しいフォークを貰ってそれで渡すという選択肢もあったらうに、でも嫌ではない、ある筈がない。

差し出されたフォークを手に取ろうとした瞬間、日菜が声をかけてきた。

「折角だしさ、そのままいっちゃいなよ」

そんなことできるわけ、そう思ったが日菜からの視線が痛い。運よく羽沢さんは奥に行ってるみたいで、紗夜さんがこんな風な事をしてきたのもそれがあっての事の筈。

そうされると思っていたのか、それともそうされてもいいと思えたのか。聞こえていたはずの紗夜さんはその手を下げようとしな、寧

ろこちらに近づけてきさえしている。

退路は断たれ顔が熱を持ち、心臓もうるさくなってきた。落ち着かせようとする時間もない、羽沢さんが戻ってくるかもしれないし、なにより紗夜さんも手が疲れてしまっただろうから。

こぼれないようにフォークを支え、僕は差し出されたケーキをそのまま口にした。

日菜はひゅーひゅーと騒ぎ、紗夜さんは発火しそうと思えるほどに顔を赤くする。僕も負けないくらいに顔は赤くなってるだろうし心臓は今にも破裂しそうだ。

甘い。こんな甘いものを食べたのは初めてだ。それが実際にそうなのか、それともそう思わされてるだけなのか。どうにせよ、嫌な気はしない。

不快な気は欠片もなし、寧ろ心地好い程だ。強く、その味は舌の上に、頭の中に残っている。

ああ、本当に甘すぎて、一生忘れられなそうだ。

彼から貰ったアクセサリを眺める。どれだけ見つめたところで形は勿論色も変わらない、それでも見飽きる事は全くなく、それこそずっと見ていてしまっそう。

去年貰った物はずっと部屋に飾ってある。身につけない理由は特にない、もしあるとするならば……やはり、恥ずかしいというもの。

「……はあ」

今年のプレゼントもまた、私の部屋で私と日菜にしか見られない物になってしまっのか。見せびらかすものではないのだけれど、隠すものでもない。

でもこんなものきつと私に似合わない。誰かに笑われてしまったらどうしよう、多分私はその人を許せなくなってしまう。

悠さんからの物を笑うなんて許せるはずもない。そして誰かをそう思いたくもない。

そんな風に思うけど彼がくれたものだから、どこかにつけておきたいとも思ってしまう。

彼は手元の珈琲が空になっていたけどおかわりを頼まなかった。お会計の時に彼は財布の中の小銭を探していて、お札は目に入らなかった。

私が誘えば日菜が誘えば、彼は絶対に断らない。彼にだって趣味はある、なのにこうしてプレゼントを渡すのだ、その思いは無駄に思わなくて、してはいけなくて。

「ここなら……いえ、これでは隠れすぎね」

鞆にアクセサリーをつける。目立たないように、しかし隠れ切つてしまわないように。

今度会った時悠さんは気づいてくれるだろうか、いや、私が恥ずかしいと隠すようにしなければきつと気づいてくれる筈。

だから無理に目立たせる必要はない。私とあなただけがわかればそれでいい。

今度日菜と一緒に彼に合いそうな物を探してみようか、なんて事を新しくなった鞆を見ながら思っていると不思議と笑みが浮かんできっていた。

あなたと付き合い始めてほぼ半年、時間というのは早いものだ。でもどれだけ早くても、どれだけ長くても、この想いは変わることがない。

未だ好きということに慣れなくて、未だ好きになるのが止まらない。何も特別ではない、それが普通で、あなたが私をそうさせてる。

あなたとの日常は本当になんでもないことばかり。おかしなことも厄介なことも、不思議なこともそうそう起こりはしない。

でもそんな日々が大切で、嬉しくて。

明日も、来週も、来月も来年もその先も、きつと変わらない、変えさせない。

あなたと私、二人で過ごす日常だからこそ、私は続いてほしいと思えている。

将来

将来どうするのか。今までなんとなく考えないようにはしていたけれど、高校にも通いはじめ三年目、流石に目を背け続けるわけにはいかなくなってきた。

教室の雰囲気はピリピリし始めてきたし、友人も気がつけば勉強してる。真面目なことだと思いつつ、それが普通なんだろうなと思うとため息が零れてしまう。

将来の夢と聞かれたら何とも答えられない、やりたいことは何かと聞かれてもわからない。

勉強しなきゃとわかっていてもそうしないのは、めんどくさい、ただそれだけ。

夜中までゲームして、休みの日は遊んで、痛い目を見るのは自分なのだからまだいいにしても、やはり心の奥底で不安が渦巻いている。

このままでいいのかなんて問いの答えは出きっている、でもどうせ大丈夫、そんな考えもある。

ほんと、僕はどうするのか、なんて他人事のように考えていたらスマホが鳴った。確認してみればその相手は日菜で、つぐちゃんの店で集合ねなんて書かれていて。

彼女は自分と同じ年の筈なのにこうして誘ってくる。こう思うのはいいことじゃないはずであるのだけれど、毎度安心する。

「これなんだけどき、悠君はどう思う?」

「いいと思うよ、通ればだけど」

今年度になって日菜は生徒会長になったらしい。始めて聞いた時はうまくやっていけるか心配であったが、生徒会活動は楽しいようだなによりだ。

こうして新しい案の相談を僕によく持ち掛けてくるのだが、こういうのは本当に実行されるのだろうか、なんて考えていると店のドアが開く音がした。

「いらっしやいませ」

「あ、おねーちゃん！」

「……こんにちは」

「こんにちは。羽沢さん、日菜は迷惑をかけてないかしら？」

「め、迷惑だなんてそんな……」

開いた扉の方を見てみればそこには紗夜さんの姿が。羽沢さんと少しの会話をした後彼女は僕の隣に座る。

実は最近、彼女と少し気まずい。別に喧嘩をしたとか顔を合わせなくなったりとかそういうのじゃない、ただ一方的に思ってるだけ。

彼女は僕とは正反対の人だ、それは出会った時から変わらない。だからこのような時期になってくるといつい自分と比較してしまう。最近夜は遊んでいない、一緒に出かけましようという連絡もきていない。こちらを気遣ってのそれであるのだろうが、それがまた辛かったりする。

「悠君、どうしたの？」

「……何が？」

「なんか、るんつてしてなさそうだったから」

何でもない、と答えることなら簡単だ。でもそう言っても彼女は嘘だと見抜いてくる。

だけど紗夜さんのことと言うのはあれだ。本人の前であるというのもあるが、彼女が勉強をしたいからというのもあるだろうし、偶々時間が取れていないだけな可能性だってある。

というよりもそれが普通なのかもしれない。彼女欲しいと狂ったように言っていた友人でさえ最近は言わなくなってきたのだ、偶に連絡し合う方が彼女にとつていいのかもしれない。

「将来どうしようかなって」

「将来というのは……進学か就職か、ということですか？」

「そういえば三人はもうそんな時期なんですね」

「そんなって言ってもまだ5月だけだね」

「もう5月よ、あなたは気が緩みすぎだわ」

進学か就職か、SNSで流れてくる仕事の悪口ばかりを見ているせいか、就職はあんまりしたくないなと思っている。

進学だつて行きたいところがあるわけではないし、こつちに関してタダではないのだから親に迷惑がかかる。

「私は……まだあまり考えてません。今はまだF W Fにだけ集中したいので」

「あたしもまだ決めていないく、あたしはパスパレもあるしね」

この時期に決めていないだなんて僕以外にいたのか、ちよつとだけ安心する。なら勉強していかないかなんて……聞くだけ無駄か。

紗夜さんに限つてそんなことはないだろうし、日菜は天才だからとしてないだろう。まあ日菜は僕と違つて勉強ができるから、であるからまだマシな方なのだろう。

「決まつてないなら悠君つて勉強してないの？」

「あー……しなきゃなとは思つてるんだけど」

進学するか就職するかも決めてないから勉強はしなくていい、なんてはさすがない。寧ろ決めれてないのだからこそ、やりたいことが出来た時に無理だとならない為にするべきで。

そこまで思つておいて何故出来ないのか、何度問いたかわからないし結局答えは出ないまま。テストが近くなるといつもこうであるから紗夜さんも呆れているだろうと思ひ見てみると何か言いたげで。

「……悠さんは進学の道を捨てているわけではない、ということですよねっ。」

「まあ、一応は」

「じゃあさじやあさ、勉強しようよ、三人で」

日菜が言うそれもいつものこと、何ともありがたい話ではあるんだけど……今回に関しては少し迷う。

勿論嫌ではない、今までからするに二人となら勉強もそれ程苦でないし、なにより結果に結びつく。だけど迷う理由は一つ、僕の為だけに時間をとつてもらうのがどうなのかと。

「ありがたいけど……二人の時間を取るのもあれだし」

日菜はパスパレがあるから進学するかも決めていない、紗夜さんだつてバンドに集中したいと言つた。そんな二人に僕が、しかも教えるのではなく教わるだけのために時間を取つてもらうのは……

「そんなことないですよ。人に教えるのは普通に学ぶより効果的だと言いますし」

「そうそう、それにあたしは忙しくもないからね」

「……それなら、お願いします」

二人からは貰うばかりで何も返せてない、だから今日は奢らせてもらおうと提案してみるも受け入れてもらえない。自分が好きでやっていることだから、そう言われて。

「僕の為なんかに、ありがとうございます」

「違うよ、悠君」

僕の言葉をすぐさま否定しじつとこちらを見てくる日菜の目を見れば、それが冗談でもなんでもないというのはわかる。

一体何が違うのか、考えてみたけどわからない。

「悠君の為じゃなくて、あたし達の為だからさ」

「……というと？」

「あたしは悠君が進学するなら一緒に行きたいなって思ってるし、それに……」

目線が僕から紗夜さんの方に向いていく。僕もつられてそちらを向けば彼女は何のことかわかっていないのか、不思議そうな表情を浮かべていて。

「おねーちゃんも、頻？に悠君に会えた方が嬉しいでしょ？」

「あ、あなたは何を言ってるの！」

「え、でもおねーちゃん最近ずーっとスマホのこと気にしてるし、ため息も多いじゃん」

「そ、それは……」

こちらを見て、すぐさま顔を逸らす。少しだけ顔を赤くされたからかこちらも同じようになってしまう。

「この時期ですし悠さんは忙しいのかと思いましたが、それで……」

「い、いえ、僕も……似たようなものでしたから」

相手は忙しいのだろうと気にかけて、迷惑をかけてはいけないうと思ってしまう。聞く機会はある癖に聞けないという、本当に僕と全く同じような。

「けつて〜い！　じゃあ今から図書館に行こ〜！」

「あなた、勉強道具は持つてるの？」

「必要なの？」

「……あなたはいらなくても私と悠さんは必要なのよ」

なら明日、というので僕と紗夜さんはそれならと答える。

こうやって互いの事を考えて、そんなだから一歩引いてしまつて、悪い事ではないと思う、押し付けでないし自分勝手でもない。でも、いいかと言われたらよくわからない。

人の気持ちなんて全部わかるはずもない、だから自分だったら、そんな風に考えて。

「……紗夜さん」

「……なんでしようか」

「もしよかつたら来週、何処か行きませんか？」

勉強しようなんて言っていた癖にこの提案、矛盾しているけれど嘘はない。羽沢さんと話している日菜に聞こえないように小声で、紗夜さんは答えてきた。

「それは……二人ですか？」

「……はい」

どっちでも、とは答えてほしくないだろう。日菜がいてほしくないわけではない、久し振りに彼女と二人でいたいだけ。

彼女はそうですかと、小さな笑みを浮かべながら呟いて。

「はい、喜んで」

「おねーちゃん、なんの話してるの？」

「なんでもないわよ」

ふーん、と疑惑の目をで見ってくるが追及はされない。さて来週どうしようかと珈琲を飲みながら考え数分程経った頃、スマホが連絡を知らせてくる。

後でいいかと思つたけれど、紗夜さんにどうぞと言われてしまったのでそれを確認する。

『今日の夜、来週の事について話しませんか？』

横の人を見れば何のことやらと日菜と羽沢さんとの会話に混ざつ

ている。

喜んで、僕も彼女と同じその返事を送ることにした。

認知

「紗夜ちゃんありがとう、助かったよ」

「いえ、大したことではないですから」

CIRCLEで何やら困り顔の丸山さんを見て、話を聞いてみれば課題でわからないところがあるというので教えていた。

必要ないと言ったのだが今度何か奢るねと約束させられてしまい、断り切れずに了承してしまった。

「それにしても紗夜ちゃん教えるの上手だね、すつごくわかりやすかったよ」

「そうですか?」

「うん、この前日菜ちゃんに教えてもらった時はその……よくわからなくて」

あははと苦笑する彼女。教えるのが上手、それは悠さんに勉強を教えるようになったからだろうか。

「よかったらなんだけど……今度また教えてくれないかな?」

「ええ、私でよければ」

「ホント!? ありがとう」

大したことじゃないから知り合いだから、それもなくてはならないけれど感謝されることではない。

私が彼女に勉強を教えて、私は彼女に教え方を学ばせてもらう。それは彼に教える時に必ず役立つ、だからこれは一方的なものではなく対等だ。

「あ、そろそろ行かなくちゃ」

「それではまた」

「うん、また今度ね」

そう言って彼女とCIRCLEを出て別れ、荷物を置いたため家に向かって歩き出す。

実は最近、楽しみが一つ増えた。毎日できるものではない、だから今日はやろうと決めていたのだ。

ふと自分の口角が上がっていることに気づき、歩く速さも少しだけ

上がっていた。

やってきたのはショッピングモール。誰と約束しているわけではなく一人、何処に行くかも決めてない。

だけど来た理由がないわけじゃない。それは下見だ、まだ決まっていないいくつかのデートのための。

「この映画は……」

付き合い始めた時は今更ながらこのような予定建てを楽しいとは思えていなかったと思う。どうすれば彼が楽しめるのか、そればかりだったような気がする。

でも時間が経って慣れてきて、ようやく自分も楽しめるようになってきた。勿論彼といれば全てそうなるのだが。

遠くに出かけるとなれば調べながらになるが、ここのように遠くない場所であれば直接来た方が分かりやすい。

夏という季節を感じさせるようなタイトルの映画のポスターを見て回る。そういえば彼はこういうのが苦手だったか、であればこれはなしと決め近くの丸椅子に腰を下ろした。

「あれは……」

ふと見えた二人組、勘違いでなければ悠さんと今井さん。偶々会ったのだろうかと思っただが、気づけば私は二人の元に歩き出していた。

「あ、紗夜。やっほー」

「こんにちは」

悠さんからは軽く頭を下げられ私もそう返す。何故二人は一緒にいるのか、そう聞くと今井さんは両手に持った袋を上げながら答えた。

「買い物しすぎちゃってさ、持つの大変で困ってたところを助けてもらったんだ」

「……そうですか」

安心した。そんな事をする人じゃないとわかっていてももしかしたらと疑ってしまう、怯えてしまう。これはいつまで経っても治らない。

彼の両手にも袋、それを見て今井さんの方を見て、なんと思ったのか目をそらされる。

「私も手伝います」

そう言つて悠さんから袋を一つ受け取ろうとするが断られる。

彼は今井さんの方を見る、つまりそうしてくださいということなのだろうがそれは私が許せない。

「今井さんのものなのですから彼女が二つ持つべきです」

「いや、でも……」

「大丈夫だつて、アタシはバンドで体力ついてるし」

渋々といった様子で袋を一つ渡してくる。何が入っているかは知らないが大きなものじゃないしそこまで重くもない。

彼の手が一つ開いた、私の手も一つ空いている。荷物を持ち替えその手を軽く閉じ、歩き始めるのを待つ。

「そうだ、二人共何処か寄らない？」

実はお昼まででき、なんて言う彼女に対し私と悠さんは顔を見合わせる。言われてみれば私もそう、ならば残るは彼だけで。

「僕もまだですし、二人がいいなら」

「私もです」

「なら決まり！ それじゃあ行く」

何処に行くかは決めてあるのか彼女は歩き出す。

手が触れた、握った、握られた。歩幅は彼が合わせてくれて、ふと笑みがこぼれた。

「相変わらずですね」

「何がですか？」

「優しい人だと思ひまして」

「……そんなわけじゃないですよ」

聞き慣れた答えが返ってくる。彼はいつも認めてくれない、謙虚なのか、それとも本当にそう思っているのか。

「僕なんかより紗夜さんの方が優しいですよ」

「私が、ですか？」

例えば、そうして挙げられると恥ずかしくなり、熱さえ感じてきて

しまう。

今日のように手伝ったり勉強を教えてくれたり、その言葉達に違うんですと言うことはできない。違うけど、そう言えなくて。

それらに打算的な目的はない、でも優しさもない。あなただから、それだけだ。

丸山さんに教えたが悠さんとのそれに役立つかもしれないなんて思ってしまったし、今井さんに声をかけたのだってあなたがいたからで、いかなかったらどうしてたかわからない。

これを知られたらどうなってしまうのだろう。あなたは優しいから知られたところでどうもないだろう。でも、もし、それがチラリと見え隠れする。

あなたはどうかなのだろう。こんな風に隠しているものがあるのだろうか、不安を感じているのだろうか。

暑さのせいかな、そんな事を考えてしまっていた。

今井さんの後を付いてやってきたのはファストフード店、そういえば久しく来ていなかったと思いつながらポテトを口にする。

「そういうえば二人は今日何しにきたの？」

「あー……参考書を買いに」

結局買わなかったですけど、彼がそう答えると視線が私の方に。なんて答えればいいのか、正直に答えるなんてできる筈もなく頭を働かせていると、悠さんが欠伸を噛み殺しているのが見えた。

「……もしかして寝不足なんですか？」

「……少しだけ」

「ちゃんと寝ないと駄目だよ、この季節は熱中症とかもあるんだし」

会話の流れをそらせてホッと、なんてことはない。大丈夫ですよという彼はわかっているのか、自分は本当に大丈夫、そんな風に思っているような気がして。

「……あまり、心配させないでくださいね」

もしあなたが倒れたら、考えたくもない。心配させないで怒らせないで、そう願うことしかできなくて。

「怒った紗夜は怖いよ」

「今井さん、変なことを言わないでください」

「あはは、まあもしそうだったら日菜も怒っちゃうと思うから気を付けるんだよ?」

両手の人差し指で頭に角を作るようにして彼女が言うのと、彼はわかりましたと答えを変えた。

「折角だしさ、二人はお互いに言いたいことってないの?」

「お互いに?」

「さつきみたいな、こうしてほしいとかそういうの」

「僕はないですね」

彼は即答、ならば私もそうするべき、でもそうはできなかった。不満ではない、けど思うことは少しだけ。

「……悠さんには、知ってほしい事が一つだけあります」

彼がこちらを見てくる。そんな心配そうな顔をしなくて大丈夫です、ただ知ってほしただけですから。

「私はあなたのことが、あなたが思っているよりずっと好きです」

私はあなたのことが好き、それだけだ。

だから心配させないで、私が好きなあなたを自分なんかと言わないで。それとできれば、私に一番優しくしてほしい。

笑ってみせると彼に顔を背けられてしまう。知ってくれば、わかってくれればいい。本当に、それだけだ。

「……僕だって紗夜さんのこと、好きですから」

不意打ちに近いそれは笑みが崩れるには充分すぎた。ズルい、相変わらず全てわかっているかのようで。

あなたはどれくらい私の事が好きなのか、時折不安になってしまふ。それを晴らしてくれるようなその言葉は、夏にも負けなくらいの暖かさで。

「熱々だね」

「い、今井さん! これは……」

「日菜に言ったら面白くなりそうだな」

ニヤニヤとした表情を向けてくる今井さん、頼み込んでもどうしよ

うかなとしか返ってこない。
恥ずかしい。その気持ちもきつと、隣の彼も抱いているのだろう。

写真

「あついく、溶けちゃう〜」

手で顔を扇いでみるがそんなに変わるはずもなく汗が垂れる。

家の中で引き籠ればこうはならないのだけれども、残念ながら外での用事のためそうもいかない。

「……まだ着かないの?」

「もうすぐだよ」

多めの荷物に加え風も全く吹いていない。日菜に案内されながら早く着かないかなと思いつける。

星を見に行こうと誘われて、楽しみだと期待して、それでもこの暑さには憂鬱にならずにはいられない。

「日菜、遅かったわね」

「あれ、もうみんな来てるの?」

「ええ、悠と日菜が最後よ」

着いたよと言われ一番最初に目についたのは漫画やアニメのような豪邸、今まで何度か目にしてきたのだがやはり非現実感が拭えない。

弦卷さんに連れられ車に乗る。みんな、ということとは最低二人はいるのだろう。紗夜さんは Roselia の練習があると言っていた……知っている人だとありがたいのだが。

「あ、加々美さん。お久しぶりです!」

「こんにちは、加々美さん」

車の中にいたのは戸山さんと羽沢さん、そしてもう一人、金髪でツインテールな女の子。

「えっと、初めまして、市ヶ谷有咲です」

「……初めまして」

車の中は涼しくてソファのようなものにも座れて、なんとも快適な筈だけど居心地はいいとはいいきれない。

嫌ではないが息苦しい。外よりマシではあるがそれでもほんの少ししか違わなくて。

「具合でも悪いの?」

「いや、全然」

気持ち悪くはない、ただ思うところがあるだけ。

こういうこと、紗夜さんはあまり快くは思わないだろう。僕だったらそんな風に、不安を抱いてしまうだろうから。

……考えすぎか、それともただそんな風に思っただけなのか。

「えつと……日菜さんと加々美さんってどんな関係なんですか?」

市ヶ谷さんにそう聞かれ互いに顔を合わせる。なんでもない、でもなんでもなくはない。

互いにそう思っているとは思うけど、いざ聞かれるとなんと言えればいいかわからなくて。

「……どうなんでしょうね」

「難しいな」

その返答に市ヶ谷さんは首を傾げる。不足はなく嘘もない、そんな丁度よい関係が見当たらない。

突然弦巻さんが僕と日菜の手を持って繋がせてくる。一体何を、そう口にする前に彼女は言った。

「悠と日菜はとっても仲がいいのよ!」

「いや、それはわかってるけど……」

「確かに、あたしと悠君はすつごく仲がいいんだ」

「……うん、僕と日菜は仲がいいですよ」

仲がいい、ただそれだけ。友達では言葉は足らず、でもそれ以上ではない。

市ヶ谷さんは僕らの回答に不満そうな表情を浮かべ、戸山さんと二人だけでしか聞こえない声量で話し始める。

「何話してるんだろうね」

「回答に不満があったんじゃない?」

「仲がいい、としか表わせないんだけどなあ」

「こちらもひそひそと小声で話していると、弦巻さんが何を話しているの? と聞いてきたので、なんでもないと言え彼女も加え会話す

る。

羽沢さんは向こうに加わったようで、着いた後どうするかと話していると、市ヶ谷さんの驚いたかのような声が聞こえてきた。

「どうかしましたか？」

「えっと……いや、その……」

僕の事を見て、すぐ何処かへと向いてしまう。何か聞きたいことでもあるのかと思っていると、彼女に聞かれた。

「加々美さんって紗夜先輩と付き合ってるん……ですか？」

二人から聞いたのか、しかしそれは疑っているかのようで。

まあ、それも仕方がない。誰だってそう思う、むしろ思わない方が不自然なくらいで。

「市ヶ谷さんは紗夜さんのこと、知ってるんですか？」

「花咲と一緒に生徒会をやらせてもらって……」

「……そうなんですな」

生徒会での紗夜さんはどうなんですか、なんて聞いていいことなのか。この前紗夜さんに聞いてみたけれど、別に何もありませんよと彼女は言っていた。

特別聞きたい理由があるわけではない。自分の知らない彼女があるかもしれないというのが気になってしまうだけ。

「ねえねえ、着くまで何かして遊ば」

「いいけど……何するの？」

「持ってきてるやつでできそうなのはトランプしかないや」

「あ、私たちも混ぜていいですか！」

「もちろん！ それじゃあまず……ババ抜きでもしよつか」

トランプで遊んでいても頭の中から消え去ってくれはしない。結局そのまま、気づけば目的地に着いていた。

「悠君は食べないの？」

着いたらみんなでバーベキューをしようという弦巻さんの提案によりしているが、どうにも遠慮がちになってしまう。

食べるよと言って日菜が取ってくれたのを受け取り口にするが

……いつも食べてるようなのと全く違うから驚いた。

細かい違いが判別できるような肥えた舌を持つていない僕でこれなのだから、つまりはそういう事なのだろう。

「ほーら、有咲も食べようよ」

「ちよまつ、お前食べすぎだろー！」

「だって、すっごく美味しいんだもん」

そう言いながら戸山さんは両手が塞がるように持って食べている。なんとも美味しそうに食べているものだから自分が食べているのもよけいにそう感じさせられて。

「悠君はバーベキューって今までしたことあった？」

「ないかな、やる相手もないし」

「それならこれが初めてなんだ」

「そうなるね」

そっか、とどこか嬉しそうに日菜は頷いて食べ進める。それがどうかしたのかとは聞き出さない、どうせ深い意味もないだろうから。

ようやく食べきると、あれだけもつたいないとかで遠慮していたくせにもう少し食べておけばよかったか、なんて思ってしまう。まあまた食べたいかと言われると怪しいが。

「ねえ、この後お散歩でも行かないかしら！」

「あたしも行く！ 悠君はどうする？」

「あー……じゃあ行こうかな」

市ヶ谷さんも戸山さんに誘われていて、食べたばかりだからと言っていたが何度もの説得に折れたのか行けばいいだろう。それならばと羽沢さんも来ることになった。

そうと決まるなり弦巻さんと戸山さんが走り出して、それを追うように日菜も走り出す。流石に食べた直後に走る元気はないし、僕たちはゆっくりと歩くことにした。

空はまだ明るい。夜はまだまだ遠そうだ。

「悠君はまだ眠くないの？」

「この時間は普段でも起きてるから」

みんなはもう寝静まっていて、外で星を眺めているのはあたしと悠君だけ。と言ってもまだ日付が回ってないくらいだから、寝てしまうにはまだ早いだろう。

真っ暗、とまではいかないけれど、悠君のことがはつきりとは見えないくらいで、それが嫌でスマホのライトを付けに上着を被せ、辺りをちよつとだけ明るくする。

星が綺麗だ、月が綺麗だ。吸い込まれそうで、夢中にさせられて、こんな風に手を伸ばせば届いてしまいそう。でもその手を握ってもそこには何も入っていない。

だからその手を彼の手の上に。確かに触れて、彼がこっちを見て、笑ってあげれば空を見上げてしまう。

「……上着使う？」

「そんなに寒くないから大丈夫」

君は優しい、いつまでもそうだ。ちよつと冷えちゃったかな、なんて考えていたけどじんわりと浮かんできた熱で消えてしまった。

「……綺麗だね」

「そうだね」

「ほんと、おねーちゃんにも見せてあげたかったな」

涼しい風があたしたちの間を通り抜けていく。何とも答えず、何を思っているのか読み取れない表情で彼は空を見続けている。

本当に勿体ない、おねーちゃんも来ればよかったのに。仕方ないことだけどそう思わされてしまうくらいには綺麗な星空で。

「悠君今ってスマホ持ってる？」

「あるけど、何に使うの？」

「るんっ、てすること思いついちゃった」

いいことを思いついちゃった、見せてあげたいなら見せてあげればいいんだ。流星に直接見るよりは劣るだろうけど、それでもいいことだ。

悠君のスマホを借りる。ロックがかかっていたからなんとなく彼の誕生日を打つてみたら開いてしまう。

変えといた方がいいよと言ったらどうせ誰も見ないからなんて

言って、自分の事になると本当に甘いんだから。

ライトに被せていた上着を着て、あたしのスマホを彼の事を照らすように置く。今までとの差で流石に眩しいからちよつと離れる。

「それじゃあ撮るね」

写真を撮られるのはアイドルになってから何度も経験しているが、撮る側というのはそう多くない。

彩ちゃんが写真を撮る時はこうした方がいいと言っていたことを思い出したけど、あれは自撮りだっけと忘れることにした。

カシヤカシヤと連続してシャツター音が鳴り、いい写真が撮れたかなと確認する。

「後でおねーちゃんに送っておいてね」

「……これ、僕を撮る必要あった？」

「必要だよ」

わかってない。星空だけじゃなくて、君も写っているというのが大事なんだ。なんて、言ってもわからないんだらうけど。

あたし向けにメッセージとしてよかったやつを送ってから悠君にスマホを返す。

「日菜は撮らないの？」

「あ……折角だし撮ってもらおうかな」

彼に撮られる、というのはなんか緊張する。速く撮ってくれないかなとそわそわしながら待っていると、一つだけシャツター音が聞こえて彼が戻ってきた。

「……悠君ってさ、もしかして写真撮るの下手？」

「……そんな酷い？」

「悠君はこれ見てどう思うの？」

「普通にかわいいと思うけど……」

……ほんと、キザりたい。言ったのが彼だからいいけれど、よく恥ずかしげもなく言えるものだ。

いつもは変なところで恥ずかしがり屋な癖に、なんて思いながら自分のスマホを手取る。

「ほら、もっと近づいて」

代わりに彼のスマホでライトを付けて、殆ど密着するようにして内側カメラで撮る。

彩ちゃんがいつもやっているように撮って、なかなかじやないかなと頷きながら確認していると、彼も気になったのか覗き込んできた。

「星写ってないけどいいの？」

「あたしはこれでいいかな」

星と一緒に撮ろう、なんて考えていたけれどこっちの方がずっといい。

ああ、月が綺麗だ、星が綺麗だ、おねーちゃんも来ればよかったのに。

本当にもつたいないな、こんなものまであったのに。

さつき撮った写真を眺めながらそう思い、また彼の手の上に自分の手を重ねた。

「悠君はそろそろ戻る？」

「まだ残ろうかな」

夜はいつになったら明けるだろう、星はどれくらいで見えなくなるだろう。

今度はおねーちゃんも一緒に来て欲しいな、そんな事を考えながら空に溶けていった。

熱

「……なんで朝ってこんなに気持ち悪いんだろ」

朝というのはなんでか気持ち悪い、それはこの世に生まれてかなりの時間経っているというのに毎日のように感じているもの。

だからその気持ち悪さには慣れている筈なのだけど、今日の気持ちの悪さは特別強い。

顔を洗って少しでも取り払うかと立ち上がろうとするが、そうすることすら億劫なくらい気怠さを覚える。

「……もしかして」

右手の甲を額に当てる。そうならどうかと願ってしたことはあるけれど、もしかしてとやったのはいつぶりか。

当ててみて、ああたしかに熱いかも、なんてわかるはずがない。体温計ってどこにあったつけと探して、案外勘が当たるものですね。見つかったのですぐさま計ってみる。

「あー……」

表示された数値は平均よりも高い。学校休むのめんどくさいな、なんでよりもよって今日なのか、なんて考えながら冷蔵庫から飲み物を取り出す。

行けるか行けない、どちらかと言われたら行ける。だけど行くべき行かないべきかと言われたら後者なのだろう。

あまり休みたくはないが、他人に移すなんて起こしてしまったらそっちの方が問題か。

気が進まないままに学校に連絡をし、何をしようかと思いつながら布団に戻る。

いつもなら紗夜さんと学校に向けて歩いている時間、今日は会えそうにないなと寂しさを覚えていると、スマホがメッセージが送られてきたことを知らせてきた。

『もしかして、まだ起きてないんですか？』

あれほどだるかったのがまるで嘘かのように飛び起きる。まさかと思いい制服に着替え玄関まで行き、扉を開けようとしたところで、今

の自分は病人なんだということに気づく。

『熱を出しただけですだから気にしないでください』

『熱って、大丈夫なんですか?』

『大丈夫ですよ、大したことないですから』

扉を開けたら彼女が、なんてことを考えて、流石にそんなことはなにかと自分の部屋に戻って数分後、お大事にしてくださいと彼女からメッセージが送られてくる。

わかりましたと返信して何をしようかと考える。気怠さもほんの少少で、先程のせいで眠気は欠片も残らず消えてしまった。

暇なのだししなければいけないこともない、であるからゲームをしていればいいのは事実だがなんだか気が乗らない。

なら勉強でもしようかな、そう考えた自分自身に驚かされた。自発的に勉強しようかななんて、軽く思っていたけれどこれは相当な風邪かもしれない。

ああでも悪いことじゃない、思いついたのだからすぐやろう、なくなってしまう前にやろう。そう思って勉強道具を取ろうとして、急に今まで全く気になっていなかった部屋の様子が気になり始めて。

部屋の掃除を済ませてからやろうと考え、結局変わってないなとため息がこぼれた。

暗闇から吊り上げられるようにして目が開く。どうやらいつの間にか眠ってしまったっていたようで、机の上には手をつけようという痕跡が見られる勉強道具が。

結局やんなかったな、なんて考えながら僕の意識を釣り上げた鳴りっぱなしのスマホを手取る。

『ねえねえ悠君、この後つぐちゃんのお店行こ!』

元気そうな声が寝起きの頭によく響く。少しだけクラリとしたのは気のせいだろう。

「ごめん、今日は行けそうにないや」

『……珍しいね、友達と?』

「いや、熱出しちゃってさ」

『ふーん、悠くんが熱だなんて珍しいね』

日菜はうーんと、電話越しで悩んでいるかのような声を漏らす。

何か用事でもあったのか、だとしたら申し訳ない。暫くするとそう
だ、と彼女が声を出す。

『悠くんの看病、行っていい?』

「……いや、駄目でしょ」

「なんで?」

『なんでって、移ったら悪いし』

当然だ、熱がある人のところに行くものじゃない。

『でも悠くんさ、前あたしが風邪引いた時来てくれたよね』

「あれは……」

それを言われると苦しい、なんて言おうか迷っているとそれじやと
言って電話を切られる。

マスクはどこにあったか、最後にマスクをつけたのなんていつかわ
からない。だけどここの前親がマスクを取り出していたのを思い出し
てマスクを見つける。

日菜が来るまで後どれくらいか、少なくとも暇になることは間違
ないだろう。

「今日なんかあったかな……」

僕が熱を出したのがそんなに珍しく思えたのか、何かしらの用が
あったのか。思いつくことはないけれど、彼女はそうなのかもしれな
い。

取り敢えず着っぱなしだった制服から着替えて、何もする気が起き
なくてソファーに寝転がること数十分。全く音がなく、そろそろ眠っ
てしまいそうになっていた頃にインターホンが鳴った。

「やつほー悠君」

「……ほんとに来たんだ」

「嫌だった?」

まさか、そう言いたいし事実嫌なはずがない。でももし移してし
まったら、そう考えてしまうと素直に喜べない。

扉を開けた先にいた彼女は私服姿で、手には袋を一つ持っていた。

「まさか悠君が風邪ひくなんてね」

「僕もひくとは思わなかったよ」

「馬鹿は風邪ひかないから、なんて言ってたのにね」

もしかして馬鹿じゃなくなっちゃったのかもね、なんて言ってる。もしそうだとするなら日菜と紗夜さんが勉強を教えてくださいませんか。らだらうか。

日菜は僕の事をじっと見ている。彼女にしては珍しく会話が続き、どうしたものかと思案していると、ねえと声をかけられて。

「膝枕、してあげよつか？」

「……急に何言ってるの？」

「今日何の日か、わからないわけじゃないでしょ？」

今日がなんの日か、ないはずだと思っていたのに何かあるのだろうか。何も約束はしていないはず、であればそういう日なのかと思っただけれど、膝枕の日なんて聞いたこともない。

全くないわけじゃない、でも日菜ととなるとわからない。思い浮かばないから黙っていると、大きなため息が目の前から聞こえてきた。

「覚えてないんだ」

「……ごめん」

「謝ることじゃないよ」

日菜は正座して手招きしてる。彼女から目をそらしてカレンダーの方を見るとしようがないなあと聞こえてきて、彼女は足を崩していた。

「去年みたいなこと、してほしいの？」

「去年って……」

「あたしはどうかなくって思ってたけど……悠君がしたいのなら、いいよっ。」

彼女は唇に指を当てる。その動作の意味するところ、僕の思い違いでなければ恐らく。

熱のせいだろうか、なんだか熱くなってきた。動けない、喋れない、ただ受け入れることしかできない。心臓が鳴りだして暫く、彼女は急に笑ってこう言った。

「冗談だよ、悠君だってしたくないでしょ？」

「……」

口でならなんとなく言える、頭の中でなら何とでも思える。ただ体がそれに従ってくれるかはまた別、自信はない。去年のこの日のこと、思い出すと顔が赤くなり始めるし、胸がしめつけられそうになる。顔を見せた思考、それが膨らみ始めそうになった時インターホンが鳴ってそれをしばませた。

親が帰ってくるのはだいぶ遅いと言っていたし宅配だろうか、玄関に向かおうとして日菜に止められる。

「あたしが出るよ」

「いや、どうせ宅配だろうし僕が出ないと……」

「おねーちゃんを呼んだんだよ、それで入れ替わりになろうかなって思ってたよ」

「……何か予定でもあるの？」

「別に。でも悠君はそっちの方がいいでしょ？」

折角の誕生日なんだし、そう言われて声を漏らした。やっと気づいた？　なんて言われたけれどそっちの方はすっかり忘れていた。

日菜なりの気遣い、受け入れた方がいいのだろう。でも、立ち上がった玄関に向かおうとする彼女を呼び止めた。

「……いいよ、帰らなくて」

「なんでって、聞かない方がいい？」

「……プレゼント、まだもらってないからさ」

数秒の間ができて、その後彼女の笑い声が聞こえてきた。彼女は袋を置いて玄関に向かい、紗夜さんと一緒に戻ってきた。

「……こんにちは」

「こんにちはは、元気そうで安心しました」

何か飲み物を取ってこようと思って冷蔵庫に向かおうとして、私がいりますと紗夜さんが取りに行ってくれた。

誕生日、一年の内一度しかないがそこまでの特別さは感じない。今まではそうだったけれど……今日という日、それがたまたま、ではないけれど誕生日と同じだからそういうわけにもいかなかった。

これを知っているのは僕だけか、紗夜さんを見るとこそそこそと二人で話していて、話し終わったのか僕に向けて二人共袋を渡してきた。

「誕生日おめでと、悠君」

「おめでとうございます、悠さん」

「……ありがとうございます」

なんだろう、表し方が思いつかない。簡単に言えば嬉しいで済むのだろうけど、それじゃ足りない。爆発しそうとか、溶けてしまいそうとか溺れそうだとか、そんな複雑なものじゃないし、それでもまだ足りない。

「本当はケーキとかも買ったのですが……」

「おねーちゃん、つぐちゃんのお店で手作りしたかったんだもんね」

「日菜！」

「あはは、でも明日そうすればいいんじゃない、悠君って明日は暇？」

「暇だけ……明日かあ」

明日じゃ熱が引いてるかわからない。それもあるが今気持ち悪さはないし恐らく大丈夫だろう。でも問題なのは明日ということ今日じゃないこと。

それでも今日はもうしょうがないようなもの、風邪をひいた自分が悪い。そう思っているとほらね、と日菜の声が聞こえてきた。

「悠君が忘れてるわけないって言ったじゃん」

何も言わない。何の事かはわかっている。紗夜さんは少し顔を赤くして、僕もつられるように赤くなって、消えてしまいそうな声で話しかけられた。

「今日がなんの日か……わかっているんですか？」

「……ええ、まあ」

「誕生日なことはすっかり忘れてたくせにね」

付き合い始めて一年目、それを忘れるわけがない。でもなにもすることはできない。ほんとは考えて、くれていたのかもしれないけれど、僕が熱を出してしまったから。

情けない、本当に自分が嫌になる。

「そういえばプレゼント、見なくていいの？」

ああ、折角のこんな日に悪い事なんて考えたくない。ちよつと沈んだ気持ちでも二人からもらったプレゼントを見れば吹き飛んでしまうことだろう。

二人から渡された袋の中を見る。日菜からはアクセサリー、今年僕が贈ったのがそれだから合わせてきたのか。ただ僕が贈ったものよりずっと高そうでなんだか申し訳ない気持ちになってしまう。

そして紗夜さんからのプレゼントは……ギターのピックらしきものだった。

「これは……」

「その……何を渡したらいいか全くわからなくて……」

「おねーちゃん、ほんとは自分で作ったケーキをプレゼントにしようと思ってたんだもんね」

「……最近買い替えまして、それは前に使っていたものなのですけれど……貰ってほしい、と思ひまして……」

もうしわけありませんと言って彼女は顔を伏せる。日菜の話を聞く限り謝るべきは紗夜さんじゃなくて僕だ、それにこれも嬉しくないはずもなくて。

「プレゼント、ありがとうございます」

「明日、おねーちゃんからの本当のプレゼントが待ってるからね」

「そんな期待されるほどのものじゃないわよ」

「紗夜さん」

付き合って一年。長いようであつという間。終わりは今のところ見えていない、これからも終わりは訪れそうにない。

なんでしようと言われて大きく息を吸う、マスクがあるから少し苦しい。

思った回数はまだ数えられない、けどと言った回数は数えてないけど数度しか。それでいい、お互いにそうだとわかっている、なんかじゃよくないだろう。

それはそう、思いというのは、言わなければ伝わらないのだから。「大好きです」

ああ、また熱が強くなった。日菜はニヤニヤとしていて、紗夜さん

はよくわかっていないのか細切れに声をもらしている。

「わ、私も……悠さんの事は……大好きです……」

顔が赤い、もしかしたら熱を移してしまったかもしれない。もしそうなってしまったら謝っても謝り切れないだろう。

いったいいつまで僕はこんな風でいるのか、こんな日常はいつまで続けられるのか。少し怖さはあるけれど全く不安はない。

この日常が終わったらどうなる？ ただ新しい日常があるだけだ。そこにいるのはきつと僕だけじゃなくて……

また明日、そう言い続けられる事が、きつと一番の幸せなんだろう。

手袋

「あつたか〜い」

「日菜、やめなさい」

「だって〜、手が冷たいんだもん」

後ろから抱きつくようにして日菜がポケットの中に手を入れてくる。手袋はつけていないし、なんなら彼女もコートを着ているし自分の方に入ればいい、と言つても通じないのはいつものこと。

歩きづらい。漏れたため息は真っ白で、手袋の中に隠れた手が少し冷たくて、早く用事を済ませて帰ろうと思うが日菜が邪魔で早くは歩けない。

……まあ、そこまで悪くは思わないのだけれど。

そんな風な事を考えていると曲がり角から人影が。改めて離れるよう日菜に言うが聞き入れるつもりはないようだ。

見られて問題があるわけじゃないし、恥ずかしくもあるがそう大したものじゃない。しょうがないと割り切ったところで日菜が声を上げた。

「悠君!」

「何してるの?」

「おねーちゃんのポッケ、すつごくあつたかいんだよ」

悠君もどう? なんて私の許可を取らずに聞いていた。悠さんの両手は袖の中に隠れていて、彼が大丈夫と答えると日菜が抱きついていた手を離した。

「それならあたしが暖めてあげようか?」

隠れていた手を引っ張り出して日菜が彼の手を掴む。瞬間、冷たど声が出て彼女が弾かれるように彼の手を離した。

驚いたような表情をしつつも彼女はゆっくりと彼の手を掴み直す。

「悠君の手、冷たいね」

日菜は繋いだ手をじっと見ていたけれど、再度手を離して自分のコートに手を隠す。

「……悠さんは手袋つけないんですか?」

「あー……実は手袋、なくしちゃいました」

となると新しい手袋を買おうとしているのかと思ったが、聞いてみるとどうやらコンビニで珈琲を買おうとしていたらしい。

探せば見つかるという自信があるのか、それとも買わなくていいと思っているのか。どちらにせよ彼は手が冷たいまままで過ごすようで。

「それならさ、一緒にポテト食べに行かない？」

「ちよつと、日菜」

「おねーちゃんも嫌じゃないでしょ？」

嫌なはずがあるものか、視線を向けると彼は頷いたから彼の隣に行き、片方の手袋を外してその手を取るとピリツと静電気かのようなものが。

実際に起きたわけじゃない、ただ彼の手が冷たくて驚いただけ。だがそれを感じたのか、彼は手を離そうとするものだからつい反射で強く彼の手を握ってしまった。

「い、痛くなかったですか？」

「いえ、それより……冷たくないんですか？」

冷たい、こんな冷たい日に手袋をしていない、更に言えば私が手袋をつけていたのだから当たり前といえれば当たり前だが、それにしてもだ。

でも、それだけ。ほんの少し手が冷たい、それだけだから。

「少しだけですよ」

「……ならいいんですけれど」

「手が冷たい人は心が暖かいつて言うし、悪いことばかりじゃないんじゃない？」

割って入ってきた日菜の言葉、聞きはするけれど確かめようのないものだけれど、彼ならば確かにそうだろう。

じんわりと握っている手から冷たさが抜け、全く別のものではあつたはずのものが溶けて、合わさって、混じっていく。

手が触れあっていない場所は寒さを感じてしまうけれど仕方がない、それ以上に暖かさを感じているのだから。

だけれども……ああ、そういえばと今井さんがこの前漏らしていた

言葉を思い出す。

「手を広げて貰ってもいいですか？」

尋ねれば彼は疑う余地なく私の言う通りにしてくれる。広げたその手に私も手を広げて重ねると、思っていたよりも彼の手が大きいことに気づく。

私より一回りくらい大きいその手、重ねあつた指をずらして、隙間に落としこんで、握る。

数秒、彼は理解が出来ていなさそうだったけれどぎこちなく、ゆつくりと手を握ってくれた。

手だけの筈の熱が身体を昇り、顔まで至り発されるまでに。

これは……いや、言い訳はない。求めて、受け入れられて、それが嬉しくて恥ずかしいだけだ。

その後ファストフード店に着くまではよかつたけれど、いつ離そうかと迷い続けていたら日菜に笑われてしまい、無性に恥ずかしかった。

「ねえ、紗夜」

「なんですか？」

「紗夜ってさ、ほんとに悠の事好きだよね」

否定はしない、それは自分自身が誰よりもわかっているから。

誰よりも、誰よりも好き。そうありたいから。

「そう見えますか？」

「じやなきや手袋の作り方を教えて、なんて頼んでこないでしょ」

「……悠さんに渡すだなんて言った覚えはありませんが」

バレバレだよ、なんて言われてしまうと少し恥ずかしい。

決してこのような事が苦手なわけではないけれど慣れない事であるし、何より変な緊張があつて上手く手が動かない。

手作りである必要なんてない、寧ろ市販の物を渡した方がずっといい。そんなのわかっている、わかっているけれどこうしたいと思つたから。

「今井さんは毎年こういう物？」

「うん。まあアタシの場合は自己満足みたいなものなんだけどさ」

「……私だって、自己満足のようなものですから」

頼まれたんじゃないかと、私がしたいと思っただけであるから自己満足。彼のためだとか喜んで貰えたらだとか、全部私から向けているものだから。

「ねえ、紗夜」

「なんですか?」

「マフラーの編み方も教えてあげようか?」

「……お願いしても、大丈夫でしょうか?」

当然、と彼女は笑顔で言ってくれた。

とは言ったものの今日中に作り終えられるかと言われたら難しいし、とりあえずは手袋を作ることに集中する。

一番大事な事、それは渡す相手の事を思う事。なんて、それっぽいことを言われ、多分何よりもそれは守れただろうという自信があった。

プレゼントを渡すとき、いつもどんな風にしようか迷ってしまう。決めるのはいい、考えるのはいい、作るのはいい、全部それなりに思うことはあるけれど少しだけだ。

だけどプレゼントを渡す時となると、ああ、どんな風に渡そうかとどこで渡そうかとか、そんなことばかり考えてしまう。

「どうかしましたか?」

「いえ、なんでもありません」

こうやって言うチャンスを貰っても誤魔化してしまう。

恥ずかしいから? このタイミングじゃないと思っっているから? 喜ばれなかった時が怖いから?

なんて、考えるのは言い訳みたいな事ばかり。

はあ、と彼が自らの息を手にかけて袖の中に隠す。

ほら、渡せ。渡せば彼はつけてくれる、渡してないから彼はこんなにも寒そうなのだ。

鞆の中から取り出して渡す、たったそれだけなのに、それだけの事

にこんなにも考えている。

「あの」

「なんですか?」

「……羽沢さんのお店、寄っていきませんか?」

ほんと、どうしてこんな風になってしまうのか。もう既に慣れる程度はこなした筈なのに、それが正解じゃないとわかっている筈なのに。

風が吹いた。冷たい風だ、コートを着ているのに、手袋をしているのについぶると身体が震えてしまうほどには。

「今日も寒いですね」

「……そうですね」

私があなたに何か用事があること、全部お見通しなのだろう。

用事がなくても会いたいからというだけで会うことは多々あるけれど、今日も何をしたいと言ったわけではないけれど。

悠さんがこちらの事を見ていた、視線が合うと彼は私からそらすかのように前を向いた。

いつそのこと、ああでもなんでもないと答えてしまった。本当に後先考えていない。

そわそわとして落ち着かない、時間でもなく場所でもなく、私の意思一つで解けるというのに襲われ続ける。

多分彼はそれを感じ取ったのだろう。切り出すなら今、そう思い続けて、結局羽沢さんのお店に着いてしまった。

「いらっしやいませ」

扉を開けるとそこは外とは別世界かのように暖かかった。彼も袖から手を出し、自分の手首を掴んで手を暖めようとしている。

とは言ってもだ、季節は季節、どれだけ冷たかろうと手は洗った方がいいだろう。そう彼に告げ、私も手を洗うと冷たさからつい顔をしかめてしまう。

「紗夜さん」

席に戻り彼の事を待っていると、先に頼んでおいた珈琲を届けにきた羽沢さんに話しかけられた。

珈琲に手を当てながらなんですかと返すと、膝の上に置いた鞆に視線を向けられながら

「頑張ってくださいね」

「な、なんのことですか？」

「何かプレゼントを渡すんですよね？」

何故、そんな風に思っていると悠さんが戻ってきて、彼女は手を振って戻っていった。

そんなにわかりやすいのか、となれば目の前の彼はどんな風に思いながら待っているのか、珈琲の苦味が舌の上に残る。

「……………」

沈黙が、消えた筈の冷たさとして身体に纏わりついてくる。

珈琲の立ち上る湯気の向こうに彼を見て、ドクリと心臓が大きく鳴った。

「あの、悠さん」

「なんででしょうか？」

ああ、もう、いつまで私はこんな風なのか。腹を決めて、覚悟をして、これが初めてなわけでも最後なわけでもないのだから。

「これ、なんですけど」

やった、やれた、やってしまった。市販品の物を渡すとは全然違う、それこそ目眩がしてしまうくらいには。

「あの、これって……………」

「その……………手袋を無くしたって言うていたので」

じろじろと舐め回すかのように、とまではいかないにしてもじつと、渡した手袋を見つめられる。

不満があるか、それともおかしいなところでもあったのか。そんな風な事を考えているとふと、彼はその手袋を手にはめた。

「ありがとうございます」

そんな嬉しそうな顔をしないでください。そんな顔を見たら変な顔をしてしまいそうになってしまうじゃないか。

珈琲を両手に持って顔を隠すようにして飲む。熱い筈のカップを両手で掴んでいるにも関わらず、そんなことが気にならないくらいに

は身体が熱を持って。

「……紗夜さんは何か欲しいものってないんですか？」

「欲しいもの、ですか？」

「僕、紗夜さんから貰ってばかりなのでたまには、って」

そんなこと、そんなもの、いらないしあなたがいてくれるだけで。

言えるわけがないし言ったところで彼は認めない。

であるなら何が欲しい？ 別に、何でも、何もかも。それもまた言

える筈がないことだから。

彼は手作りだと気づいてくれるだろうか、気づいてしまうのだろうか。

か。だとしたら恥ずかしい、だとしたら嬉しくて。

欲しいもの、とすればあれか。そうだ、ほんの少しくらいならいい

だろう、欲しくさせたのも彼なのだし。

「甘いものをお願いしてもいいですか？」

「甘いもの、ですか？」

「はい」

口の中が苦いと思ったらありやしない。だから甘く、甘くさせて貰おう。

注文をして届いたケーキ、二人で分けあって食べたそれはとてつもなく、でも不快感なく甘かった。

新年

新年、何をして向かえるか。

好きなテレビを見るか、飛んであれこれ言ったり物を食べながらや、誰かと一緒に過ごすか。

そんなことを考えたところで僕は一人、何をするわけでもなくスマホを眺めているだけなのだが。

「今年もいい年だったなあ……」

カーテンを開け夜空を見上げ、今年あった事を思い返しているとそんな言葉が口から漏れた。

こんな風に思える事が何より幸せ、なんてキザったい事を考えてしまつて手に持ったスマホに視線を落とす。

そういう風に思えるのも全部、とは言わないがこの人のお陰。後はあの人もか。

今年はいいい年だ、なんて思えたのは去年が初で、今年もそう思うことが出来たのだ。であれば感謝はせずにはいられない。

「うわっ……」

突然の電話、驚いて変な声が出てしまった。僕に対していきなり電話をかけてくるような人なんて一人しかいない。誰だと特に確認することなく通話を繋ぐ。

『もしもし、悠君?』

『どうしたの、こんな時間に』

『別に、用なんてないよ』

この返答にも慣れたもので、そつかと返す程度で終わってしまう。

『ねえ、今空見える?』

『うん、星が綺麗だね』

『ならよかった。綺麗だよね、星も、月も』

『そうだね』

後数分。別に何をするわけではないけれど気になってしまうのは仕方がないだろう。

『一つ、お願いがあるんだけどさ、いい?』

「ものによるかな」

『大丈夫だよ。ただ、空を眺め続けて欲しいってだけ』

「それだけ？」

『うん、それだけ』

どれくらいとは言われてないが、流星に数時間ずっと見続けろというわけではないだろう。

いいよと言うと絶対だよ、と念を押すかのように言われ、一体なんだろうと思いつきながらも空を眺め続ける。

『それじゃあ悠君……また来年ね』

「え……あ、うん。また来年もよろしく」

最後にもう一度念を押されて通話は切れた。今日は流星群でもやってくる日なのだろうかと思いつきながら空を見ていると再び通話がかかってくる。

伝え忘れた事でもあるのだろうか、そう思って画面を特に見ずに通話に出た。

『もしもし、聞こえますか？』

その相手は予想とは異なっていて、気軽に話そうとしていた言葉を飲み込んでむせてしまう。

大丈夫ですか？　なんて心配をさせてしまいなんだか申し訳なくなる。

だけれどもそれきり、何一つとして会話は無い。鋭いくらい静かなそれが突き刺さり、星空は相変わらず押し潰してくるかのようになって広がっている。

「今年もありがとうございます」

『いえ、こちらこそ』

何を話したらいいのだろう。取り敢えず浮かんだ言葉を伝えては見たもののその後が続かない。

『悠さんは今年……楽しかったですか？』

「ええ……紗夜さんは？」

楽しいと言いきるには形は違うかもしれないが、向かう方向は同じだ。言い表すには難しい、でも確かにそのような物を含む年だった。

『はい、私もです』

そう聞こえ、小さく笑うと向こうからも同じものが。抱くものは似たようなものか、来年はどうなることかと、不安はあれど恐れはない。……いや、嘘か。高校生活も終わってしまったえば生活は変わる。大学生は楽だとは聞くが、まだなれると決まったわけではないしその自信があるのかと言われたら別。

一応紗夜さんと日菜に勉強を教えてもらっているからある程度は自信はあるが、どこまでいってもある程度ではない。

行きたいところに行けるのか、正直な話僕個人であればあまり思うことはないのだろうが、ここに彼女達が絡んでいるのだから話は違ってくる。

彼女達には喜んで欲しいから、彼女達には僕の事で残念そうにならないでほしいから。それが、考えてしまうとても怖く思えてしまう。

「来年も、よろしくおねがいします」

『はい、来年も……』

『おねーちゃん、明けましておめでと〜!』

突然ドアが思い切り開く音がしたので驚いて振り向いてしまったがドアは閉まっている。であれば、というより内容からして向こうからだろう。

ちゃんとドアをノックしなさいと注意する声が聞こえてくるのが微笑ましいが、先程聞こえてきた事が本当だとするならば……

「年、明けてるじゃん……」

『悠君もおめでと〜! ちゃんと約束守ってくれた?』

「うん。でもこれ、何か意味あったの?」

『あたしも空を見てたからさ』

答えになつてないような気もするが……まあ、言いたいことはなんとなくわかってしまうのだが。

星が綺麗だねという問答を再度彼女とすると、申し訳なさそうな声色が聞こえてきた。

『悠さんは……よかったんですか?』

「何がですか？」

『年越しを私と電話をして迎えてしまったことです』

家族と一緒にでなくてはよかったのか、ということだろうか。

親は二人して歌番組を見ているか寝ているかだし、いてもいなくても変わらない。そういうことじゃないとはわかるが、僕からしたらそれが全てだ。

「僕はこうして迎えられたこと、よかったと思ってますよ」

『……実は私も、です』

尻すぼみになりながら答えられ、日菜からひゅーひゅーと煽るような音が聞こえてくる。

それを咎めるような紗夜さんの声が聞こえ、でもでもと日菜が話して。

新年早々、なんとも楽しいものだろうか。

『あ、そうだ。悠君も神社に行こうよ』

「いいけど……今から？」

『あたしはそれでも全然いいけど……おねーちゃん、そろそろ眠たいでしょ？』

『別にそんなことは……』

『それじゃ悠君、迎えに行く時電話で起こすね』

今年もよろしくね、なんて言われて一方的に通話が切れた。

向こうは紗夜さんのスマホで電話をしているはずなのに勝手に切ったのだし、今頃怒られてしまっているのだろうか。

それにしても迎えに行く時か……こっちから行くべきなんだろうなどは思いながら、時間もわからないし仕方がないかと言いつつ部屋の電気を消す。

朝は苦手だ。昼かもしれないが、可能性があるのだし今のうちにさっさと寝てしまおう。そう思って部屋の電気を消して横になる。

今年もいい年になりますように、なんてどうせ後で願う事を考えながら目を閉じた。

ただ普段の不健康な生活のせいだろうか、結局寝た時間はいつもと対して変わらなかった。

「あけおめ！ 今年もよろしくね」

「あけましておめでとうございます」

新年始め、溶けてしまいそうな朝日を浴びながら挨拶を返す。

早く行こ、と日菜に手を繋がれ、すると紗夜さんがなんだか不満そうな表情を浮かべていたので手を伸ばすと優しく取られる。

もう慣れた。彼女はこうして欲しいのだと、それが嬉しくて。

まだ慣れない。彼女とこうすること、それが未だに、ずっと慣れられる気はしなくて。

別に日菜とのそれには慣れてしまったとかそういうわけじゃない。

日菜は距離感が近く、手を繋ぐという行為の回数も多い。それでも……だとしても、だ。

「悠君は今年 목표とかあるの？」

「大学受かることが一番かな」

「それならいっぱい勉強しないとですね」

「……頑張ります」

どれだけマシになろうと嫌いなものは嫌い、だけれどもまあ、頑張らなければいけないのだろう。

そう思うだけで一人では全然頑張れないのが寂しいところ。もし二人がいなかったら……もつとろくでもない人間だったのは間違いないだろう。

その後暫く歩くと神社に付いた。人がたくさん、それこそ手を繋いでいなければ見失ってしまうんじゃないかと錯覚してしまうほど。

しかしここまで人がいるとアイドルである日菜がいることが問題となってしまうのではないか。そんな不安を抱いた瞬間、彼女があっ、と大きな声を出した。

「ちよつとだけ行つてくるね」

それだけ言つて彼女は何処かに。その方向を見てみると……何やらそこだけ人が多い。

新年っておみくじと賽銭以外にすることは何かあったか、どうにも知識がないのでよくわからないが、何かしらの撮影でもしてるのだから

うか。

そんな事を思いながら列に並びおみくじを引く、凶でなければなんでもいいのだけれど、そんな思いで開いたそこにはただ一文字、小吉とだけ書かれていて。

「どうでしたか？」

「大吉でした。悠さんは？」

「小吉です」

彼女は大吉、であればよかった。神様とか運試しとか、そういった物は信じてないけど、見えるものとして示されれば嬉しいものだ。

ただどうにも彼女は気に入らない様子、最上の物を出したのだし不満はなかりうに。あるとするならその内容、または僕の結果か。

「賽銭、入れに行きましようか」

「……そうですね」

願い事など用意していないし、考えてはいるけど思い付かない。

そもそも五円玉なんて入っていたつけど財布の中を漁ってみるが、残念なことに真ん中に穴が空いた効果は全て白色で。

「五円玉、ないんですか？」

「まあ……縁ならもうありますから」

「……そういうものではありません」

そう言われ彼女から五円玉を手渡される。これ以上の縁を望んだところで何もなさそうだが、やって悪いことはないか。

順番が回ってきて、作法なんて知らないので紗夜さんの動きを真似るようにして手を合わせる。

別に信心深いわけでもないし、特に祈るような目標はない。願ったところで、結局は自分次第なのだし。

であれば……自分の手では叶わない事をお願いしておこうか。

——二人にとっていい年になりますように

ああ、流石に強欲か。であったとしても、これが一番の願いであるのだから仕方がない。

「ねえねえ、悠君はどんなお願いしたの？」

「もう用事は終わったの？」

「うん。彩ちゃんが撮影してたから遊びに行ってきたの」
なるほど、通りであそこまで人だかりができるわけだ。

二人でいるのを見てか紗夜さんもやってくる。彼女はなんて願い事をしたのか、なんて思ってはみれど聞くことはしない。

「それで、どんなお願いしたの？」

「二人にとっていい年になりますようにってしたよ」

反応がない、もしかして何かしてしまったのだろうか。もしかしてこういう願い事では他人を使ってはいけなかったのか、であれば二人には申し訳ない。

「……普通、自分の事についてお願いすると思うのですが」

「僕の一番の願いがこれだったので」

「やっぱり悠君って面白いね」

日菜は真剣な表情で僕の右手を包み込んで、その瞳に吸い込まれてしまいそうな程綺麗な目で僕の顔を見上げ。

「折角のお願いなんだし絶対に叶えるよ、悠君のお願い」

「ええ、私もそうするように努めます」

今度は紗夜さんが僕の左手を包み込んで、どこまでも優しい笑顔を向けてくれる。

ほら、お願いなんてするものじゃない。僕の幸せなんて望むものはなく、願うものでもない。

それを与えてくれるのは神様じゃなくて……この二人なのだから。

「今年もよろしくお願いします」

「ごちそうさ」

「うん、よろしくね！」

今年もまたいい年だったと思えるような、そんな一年、そんな日常があるのだと、強く祈ることにしよう。

誰に、神様に。それと……この二人にも。

納得

最近、また一段と寒くなってきた気がする。毎日これ以上寒くなることはないだろうと思われ、そして毎日その予想は裏切られる。

暖房をつけていないとはいえ、家の中でさえこれ程寒いのだ、外なんて出るものじゃない。まあ、今日は用事があるので出なければならぬのだが。

指が冷たくてゲームなんてできたものじゃない、そんなことは起るはずもないのに指が取れてしまうんじゃないかと心配になる。

暖房のリモコンは近くにあるのだが、それを取るためだけに立ち上がるのがなんだか面倒くさい。本当に僕は、そう考えていたらスマホが鳴った。

どうやらメッセージが届いたらしく、相手は紗夜さんだ。その内容は……パスパレの人達が僕に会いたいらしいが時間はありますか？ というもので。

「いやいやいや……」

思わず声に出してしまった、でもしょうがない。人気アイドルグループの人達が一般人でしかない僕に会いたいなどあり得ないことなのだから。

でも事実そんな事を言われてしまっている。紗夜さんはこういったことで嘘や冗談を言う人ではないというのはわかってはいるし、何事なのだろうと考えながら断っておいてくださいとお願いした。

今日は日菜と会う予定がある、何の用事が知らないが日を改めて貰うとしよう。なんて考えたところで原因は日菜なんじゃないかと思いついた。

いくらアイドルといっても異性と仲がいいという程度なら……大丈夫と思いたい。

そんな風に考えていると、すぐ終わるそうなのでメッセージが追記されていた。

そんなにも急ぎのものなのか、だけれど時間的にどれだけすぐと言われても日菜との予定には間に合わないだろう。

もうすぐ予定があるので送ろうとして、すんでのところで指が止まった。

紗夜さんがこうして連絡してくるのは何故か、それはパスパレの人が僕の連絡先を知らないから。そしてメッセージ的に今彼女達は紗夜さんと一緒にいるのだろう。

となると僕が断ると紗夜さんがそれを伝えるわけで、そうなれば彼女は少なからず申し訳なさを覚えてしまうかもしれない。

彼女は何も悪くない、それこそ僕だって悪くないしパスパレの人達だってそうだ。だけどどう思うかはその人次第だから。

送ろうとしたメッセージを全て消す。すぐと言ったのだ、ならばその言葉を信じよう。日菜には悪いが、極力彼女に迷惑がかからない方法、となれば彼女を待たせないことだ。

彼女達には日菜との待ち合わせの場所に来て貰おう。もしかしたら日菜とパスパレの人達が鉢合わせるかもしれないが、彼女もメンバーなのだし悪くは思わないだろう。

この後すぐ羽沢さんのお店でなら、とメッセージを送り支度をして外に出る。

寒さへの身震い、零れたため息は空に溶けて消えてしまった。

「久しぶりね」

「お久しぶりです」

喫茶店の中に入ってみればいらっしやいませ、という羽沢さんの挨拶と共にそんな声が。そちらを向いてみればやはりパスパレの皆さんがいた。

「あっ……………」

「知りあいですか、彩さん？」

「な、なんでもないよ」

日菜から話は聞くと、SNSでも流れてくるから彼女達のこととはわかる。ただそんな人達が目の前にいるのはどうにも現実味がなくて。

「僕に会いたい理由ってなんだったんですか？」

「チヨコレートの事について聞こうと思ったのよ」

「……チョコですか？」

「ええ。この前のたのバラTV、見てないの？」

「……すいません」

「い、いやいや、謝ることじゃないよ」

丸山さんが焦ったようにそういうが内心どう思ってるやら。自分達がアイドルで、担当を勤めている番組を見られていないと言われれば快くは思わないだろう。

それにしてもチョコか、それで僕に聞きたいと言われても僕はお菓子作りなどやったことがあるかないかも不安な程だし、そんな風には知られてない筈。

であればなんだ、そもそも番組でチョコで、男の好みのチョコとはどんななのかとても聞きたいのだろうか？ でもそれこそ僕じゃなくっていい筈で。

「来週、番組で日菜ちゃんにチョコを作ることになったんだけど……」

「日菜さんがるるるんっ、とするチョコを作らないといけなくて」

「貴方ならわかるんじゃないかって思ったのよ」

ああそうか、来週はバレンタインか。しかしるるるんっ、とするチョコとはまた抽象的なお題なことだ。

「るんっ、じゃなくてるるるんっ、なんですか？」

「はい！ ヒナさんはそう言っていました！」

るんっ、ではなくるるるんっ、とするチョコ。どういのがそのようなのかなんて、そもるるるんっ、が何なのかすら曖昧なのだし日菜本人にしかわかる筈もない。

日菜はどんなものにそのような感情を抱くのか、口頭で聞いたのも数える程しかないがないわけではない。

どんな時だったかは思い出せないが、こうすればそうなってくれるかもというものは思い付く。まあ、どこまでいっても予想の域は出ないのだけでも。

「多分……」

いきなり肩に何かがのしかかってきて、それに驚き答えは出せない

かった。

誰なのか確証はないが、僕にこういうことをするのは彼女だけだ。両肩に前腕を乗せられているおかげで顔は見えず、また頭を動かすこともできない状態で彼女の言葉を聞く。

「悠君に聞くのはダメ、だよ?」

「ひ、日菜ちゃん、それってどういう……」

「そのまんまだよ。悠君に聞くのはダメだから」

答えになってない、だけど有無を言わさずそれを認めさせるような圧が彼女から出ているのか、誰も口を開こうとしない。

「サヨさんにも聞いてしまったのですが、それも駄目だったでしょうか?」

「おねーちゃんは……セーフ、かな?」

紗夜さんは大丈夫で僕は駄目、その違いはなんだろう。

なんて事を考えていると肩が軽くなり、その代わりに手を掴まれ立たされ、別の席に連れていかれた。

「ごめんなさい、とは言えなさそうだから手振りだけで彼女達に謝っておくが微妙そうな表情をされてしまう。

いろんな人に聞いていた事への回答、あっているかどうかは別としてそれを聞けるかもしれないなかったのだからそれもそうか。まあ、それだけではなさそうだけれども。

「僕は駄目で紗夜さんは大丈夫ってどういうこと?」

「そのまんま、悠君は駄目なの」

先程の場所とは離れた席に連れられて、座るなり聞いてみるが回答は先程と同じ。

だけれども先程とは違い、だってと彼女は続けた。

「悠君はわかるんでしょ? あたしがるるるんっ、とするチョコ」

「絶対ってわけじゃないよ、日菜じゃないんだし」

「だから駄目なの。どんなチョコならるるるんっ、とするかなんてあたしだってわからないんだから」

それなら問題ないのでは、と思ったところで頼んでいた珈琲が持つてこられる。席を移ってしまったけれど大丈夫かと思ったが問題な

いらしい。

早速それを飲もうとしたところでそれに、と彼女は付け足した。

「悠君が言っちゃったらなんか、こう……るるるんっ、としなくなっちゃいそうな気がするから」

ああ、なるほど、確かにそうだ。日菜が聞いていなければ違うかもしれないが、いや、彼女なら気づいてしまうかもしれない。

これはただのるるるんっ、とするチョコではなく、パスパレから日菜へのるるるんっ、とするチョコなのだから。

であれば僕が彼女達に言うというのはそのチョコへの不純物になっってしまう、それはあまりにも勿体無いことで。

ちらりと彼女達がいる席を見る。

なんと言っているかは聞こえないが話あっていることはわかる、おそらくチョコについて話し合っているのだろう。

「もしかしたらるるるんっ、じゃなくなってるるるるんっ、くらいいかもしれないよ?」

そんな事を言ってみればきよとんとしたような表情の後笑われた。変な事は……いや、知らない人からしてみれば確かに変か。

「それは絶対?」

「予想だよ。でも多分、そうなると思う」

「なら楽しみにしておこっかな」

そう言っただけで彼女は羽沢さんを呼んで注文をする。これも予想にすぎない、だがパスパレの人達がああやって考えてくれているのならきっとそうなるだろう。

そこでふと思いついた、そういえばと彼女に聞いてみる。

「僕はともかくとして、紗夜さんは大丈夫なのってなんでなの?」

「おねーちゃんならわかんないって答えるかと思っただけだからさ」

そんなわけと言おうとしたところでそれを遮るかのように付け足された。

「悠君が聞かれてるってことはそういうことですよ?」

「……確かにね」

それもそうか、紗夜さんから聞けていれば僕なんかには頼る必要はな

い。

紗夜さんは真面目だから、真面目すぎるからわからないなんて答えたのだろう。わかっていたのかもしれないし、本当にわからなかったのかもしれない。

それにしてもバレンタイン、か。今年も彼女達はくれるのか、思えば不安になってしまうのは傲慢なのだろう。

「どうしたの?」

「……別に」

気が付けばぐでつと机にめいっばい体を広げる日菜の事を見てしまっていた。

ああほんと欲張りだ、来週のバレンタインの事を考えると不安になると同時に楽しみになってきた。

「だーれだ?」

「……日菜?」

「正解! 流石だね、悠君」

バレンタイン当日、家の外で待つててくださいという連絡通り待っていたら早速日菜がやってきた。

彼女の右手には大きめの紙袋、中身は見えないが恐らくはそうなのだろう。

「日菜、急ぎすぎよ」

「おねーちゃんはゆっくりしすぎだよ! チョコ溶けちゃったらどうするの?」

「溶けるわけじゃないでしょ、夏じゃないのよ」

日菜に遅れてやってきたのは紗夜さんで彼女の手には箱、それを大事そうに抱えていて。

「はい、ハッピーバレンタイン」

二人からそれらを受けとる。まだ口にしてないどころか開けてすらいないのに甘さを感じられた。

なんでか日菜は嬉しそう、紗夜さんはやはりというべきか顔を背けている。そんな二人にありがとうございますと深く、心の奥底から最

後の一滴まで絞り出すように口にする。

「お返し、楽しみにしてるね」

「日菜、そういうのは頼むものではないわ」

「そんな事言いつつおねーちゃんも楽しみにしてるでしょ？」

「そ、そんなこと……」

背筋が伸びたかのような気がした。詳しいことは知らないけれどもお返しは貰った倍は返すべき、なんて事をどっかで見えた気がする。

それが量で解決できるのならば全く問題ない、だけれども問題は質と、納得だ。これ以上ないという程の嬉しさを覚えている今、これ以上の物で返さないといけない、となると自信は持てない。

二人は優しいから、ずっとずっと劣っている物で返すことになってしまっても喜んでくれるかもしれない。でも、そんなのは僕自信が誰よりも許せないだろうから。

「……うん、期待しててね」

「るるるるるるんっ、とするの、お願いね」

「……………」

任せて、と言えないのが僕の弱さだろう。だとしてもやれることはやる、やらなければならない。だってこれは、二人の為のものだから。

「日菜、帰るわよ」

「もう少しくらい大丈夫だって」

「今何時だと思ってるの？」

えく、と日菜は残念そうな声を漏らす。日菜のたのparaTVの撮影が終わってから来たらしいので時間としてはだいぶ遅いので、今から帰って夕飯くらいだろうか。

「送っていきますよ」

「さっすが悠君、わかってる〜」

紗夜さんはわざわざそんな事しなくても、とでも言いたげだが彼女の口は開かない。

この行為にわざわざ、というのはない、これは僕がしたいと思ったからの自己満足なのだから。

チョコを家の中に置いてきますと言って家の中に入りドアが閉ま

ると、無意識のうちに大きなため息をついていた。

お返しはしたい、質もよいものにならないと僕が納得しない。なら、僕が納得するようなお返しとはなんなのだ。

……自分の事だ、わからない筈がない。それにこの前思ったことだ、どうするのがいいのか、なんて答えはとつくに出ていて。

「手作り、か……」

気が乗らない、というわけじゃない。ただ自分には向いてなさそうだなとは凄く思う。だけれども幸いとも言うべきか、お菓子作りのできる人は周りにいるし頼み込んでみるとしよう。

先程貰った物を丁寧に部屋に置き、日菜の袋の方から小さめのチョコを一つ手にとって口に運ぶ。

甘い、甘い、でも不快感は微塵もなく、それを不思議だと思いつながら二人の元へ。

空を見上げると空は雲一つなく澄んでいて星々がよく見える。

また星を見に行きたいな、ふとそんな事を思いながら紗夜さんと手を繋いだけれど、彼女の手は不思議と温かく感じられた。

明日

「悠ってさ、ほんとに紗夜のこと好きだよね」

「……突然どうしたんですか？」

なんの脈絡もない、普通に話を聞いていたら一息つくなりそんなことを目の前に座る女性、リサさんはそんなことを聞いてきた。

なんらかの段階を踏んでいればまだしも突然だ、何の事だかよくわからない。なので聞き返してみたらだってさ、と目の前にあるケーキを一口食べてから彼女は続ける。

「二人の誕生日にケーキを作りたいから教えて、なんて妬けること頼んでくるんだもん」

「バレンタインに貰いましたしそのお返しみたいなものですよ」

「ホワイトデーにはちゃんとお返ししたんでしょ？」

正直理由なんてどうでもよくて、結局は僕がそうしたいだけ。

羽沢さんが珈琲を運んできてくれて、会話が止まると少し恥ずかしくて一気に珈琲を飲むと熱さから舌の上がヒリヒリと。

「紗夜と喧嘩したこと、ないよね？」

「ないですけど……それが？」

「いやー、ほんとに仲いいんだなって」

熱さばかりを感じる舌を誤魔化すためにケーキを口にするが、やはり味は珈琲を飲む前より薄く感じる。

いや、もしかしたらそう思いたいだけで最初からこうだったかもしれない。やっぱりそこらで高くて美味しいやつを買った方がいいのか、なんて考えながら口にして。

「紗夜さんが優しいからそうなるだけですよ」

「またまた、喧嘩どころか言い争いすらしないですよ」

「しないでどう思ってるかなんてわからないですから」

実際、僕の中だけですら何も無いというわけではないのだ、互いに皆無なんてことはありえない。

「じゃあ、悠は紗夜の事どう思ってるの？」

「……聞く必要ありますか？」

「うーん、ケーキ作りのお礼ってことで、どう？」

そんなことを言われてしまえば弱い。どう思ってるかと改めて考えてみると、浮かんでくるのは紗夜さんをどう思っているではなく、彼女にどう思われているかというものばかり。

彼女の事は好き、それ以上はあるかもしれないが、それ未満であることはありえない。

「好きとしか言えないですね」

「その割には考えてる風だったけど」

「どう思われてるかの方が不安ですから」

だってほら、彼女はあんなにも綺麗で、可愛らしくて、完璧とも言えるような人なのだ。これ以上何かを求めるというのは罰当たりだ。

まあ、別に彼女じゃなくとも他人に何かを求めるということ自体が傲慢な気はするが。

「ほんとに自分のことが好きかってこと？」

「それなら紗夜さんは加々美さんの事は好きだって言っていましたよ」

「それはわかってるんですが……」

いや、わからされたという方が適切だろうか。今までに何度か彼女にそれが届いてしまい、その度に怒ったような様子で懇切丁寧に教えこまれる。

それこそ怒られている癖に申し訳なさよりも恥ずかしさが勝ってしまう程で、思い出すだけでついつい目を塞いでしまう。

「こうやってるのを、紗夜さんはどう思ってるのかなって」

「んー、それなら紗夜にだって悠の事聞いたりしてるよ？」

「そうじゃなくて」

くだらない、そうわかっただけいながら気にしないでいられなくなったのは何時からだろうか。

原因は相も変わらず回りに流されたからではあるのだが、元凶となったのはなんなのだろう。本能的なものか、それとも何処かから仕入れられたのか。

「……異性と話してるって、どう思うんですかね？」

「心配しすぎだって、それくらい大丈夫だよ」

口説いてるわけじゃないんだからさ、なんて言ってくれれば違う、そうじゃない。

面倒くさいとはわかってる。だけれど気にしているのは僕がどう思うかではなく、彼女がどう思うか。より確かに言うのであればどう思ってくれているかだ。

心配してるんじゃない、ああほんと、気持ちが悪いけど仕方がないんだ、わかってはいるけどどうしようもないんだ。

ほんの少しでも、そう思っただけだなんて、そんなにおかしな事なのだろうか。

「……逆に、悠ならどう思うの？」

「嫌ではないですけど……何も思わないわけでは」

本当に面倒くさい、面倒なことは嫌いな癖して自身は辺りを探し回っても見つからない程に面倒な性格をしている。

カラカラと音を出しながら残り少ない珈琲をかき混ぜる。ぐるぐると、渦を作り出してその中に飲み込まれていくように……

「いやー……悠ってほんとに紗夜の事好きだね」

「なんですか、改まって」

「そういうのは普通、気にしないで欲しいってとこだと思うからさ」
自分が気にしていることなのだ、他人がどう思っただろうと嫌だとうだと思うのはおかしいだろう。

ふふっ、と笑い声が聞こえてきた。そんなおかしな事なのだろうか、と思っただけの聞こえてきた方に視線を向けてみると軽く謝られ。

「日菜先輩が加々美さんとあったことを話すとたまに不機嫌になるって言っていましたよ」

「それって……」

嬉しいことなのか、いや、まずは申し訳ないと思うべきなのだろう。

そも、これは気になる程度でしかなくて、嬉しいとかそういうのではないし、抱いてはいけなくて。

「そろそろキーキ作りの練習再開しよっか」

「……お願いします」

持つものはなくていい。不安も心配も、そういったものはなに一つ。

喜んでくれるだろうか、ただそれだけを思えばいい。

ならばそれを実現するためにできることをしようと、既に渦の収まっていた珈琲を飲み干した。

「悠君、来たよー！」

勢いよく扉が開かれた、キラキラとした何かを期待するような眼、伝えてはいないけれど呼んだ理由は気づいてるのだろう。

まあ、自分の誕生日を忘れるなんてことはそうそうないか、僕みたいに祝ってくれる人が少ないわけではないのだし。

「日菜先輩、壊さないでくださいよ」

「大丈夫だよ。心配性だなあ、つぐちゃんも」

「いや、よくないでしょ」

えへへ、と笑ってはいるが心の中ではどう思ってることやら。

本当に壊れないように、そう見えるだけで実は優しく開けていたりするのだろうか。日菜ならありえそうというのが恐ろしい話だが。

外は雨が降ってはいるがそれほど強いものではない。だけれど日菜は防ぎきれずに濡れているようで、羽沢さんが日菜にタオルを渡す。

わしゃわしゃと雑そうに拭いた後頭を軽く振って僕の席に。表情は楽しそうのまま崩さず、珈琲の注文と共にタオルを返していた。

「楽しそうだね」

「そりやもちろん、楽しみで仕方がなかったんだもん」

「それで風邪引かれたら困るんだけど」

「そうなたら看病してくれるよね？」

ならないならそれに越した事はないが、なったらまあ、するけれども。

とはいえ僕がそうしなくとも彼女がやるだろうけども。

「いらっしやいませー」

心臓が大きく跳ねた。日菜が来たということはつまり、そういうこ

とである可能性が高いということ。

期待し、振り返る。そこにいたのは予想通りで……

「こんにちは」

「こんにちは、紗夜さん」

こんな日なのに雨、ではない。この日だからこそ雨なのだ。

日菜とは対照的に全くといっていい程に濡れた様子のない彼女が扉を開けて立っていた。

正直、緊張している。死ぬほど、なんて普段なら大概は誇張表現だが今回ばかりはそうと言っても違う。

じつとしていいることだけで辛いし、視界は狭まるし珈琲の味もよく感じ取れていない。挙動不審にはなっていないか、なんて鏡を探し出した時点でもう遅いのだろう。

「慌ててるね」

「……緊張しちゃ駄目？」

「別に、見てて面白いし」

まあ、あたしが言えることでもないんだけどさ、とは一体なんのことか。少なくとも今の僕には気にかける余裕はなかった。

「お二人とも、誕生日おめでとうございます」

「おめでとうございます」

その言葉と共にケーキが運ばれてくる。

言うべきか言うまいか、笑いながら誤魔化すように言ってしまうればどれだけ楽なのだろう。

羽沢さんに言ってもらうか、勇気を出して自ら言ってしまうか。言わないままでもいたら何も起こらないし、言わなければ伝わらない。

こんな風までとは思わなかったけれど、予めどう伝えるかは決めておくべきだったか。そう思って二人の方を横目で見てみたらこちらのことを見つめてきていて。

「……どうしたんですか？」

「これさ、作ったの悠君だよね？」

「……そうだよ」

何時気づかれたのか、何故気づかれたのか。始めからかもしれない

けれどまあ……あまりに不恰好すぎたか。

やはり変なことせず頼むか、少し高めの市販の物がよかったか。後悔しても今更ではあるが来年の糧にはなるだろう。

「すっごく嬉しいよー!」

ただ偽りなく、花のように笑う彼女は嬉しそうで、写真なんて撮っているのを見るに無駄ではなかったか。

そんな様子を見てしまったからか、少しばかり期待を込めて紗夜さんの方を見てみると未だに僕のことをじっと見ていて。

「……食べるのが勿体ないですね」

「そ、そんな期待されるような物じゃないですよ」

彼女も一枚だけ写真を取り、大切そうに一口。こう、なんとも恥ずかしいものだ。

「美味しいですよ、とても」

「うん、すっごく美味しい!」

どうか、どんな風なのか、そんなものはいらない。嬉しくて、嬉しくて、なんともいえないものが心の中に。

「えっと……渡したいものがあるんです」

「これ以外にも、ですか?」

「ケーキは羽沢さんに手伝ってもらってますし」

去年も一昨年も誕生日には形に残るものをプレゼントを渡してきたのだ、だから今年もと思っただけ。

……羽沢さんには悪いが、手伝ってもらったものを誕生日プレゼントとするのが嫌だと思ったというのがないわけではないのだが。

「毎年同じものなのは申し訳ないですが……」

「毎年同じものだとしても、毎年嬉しいよ」

「……大切にしますね」

日菓はケーキを食べながらそう言っつて、紗夜さんは渡したアクセサリーを大事そうに両手で包んでそう言った。

「ねえ、悠くん」

「何?」

「来年も今日みたいな祝い方、してくれる?」

昨日には大切な記憶を求め、今日には大切な出来事を求め、そして明日には……

「雨、止みませんね」

「そうですね」

「今日はこの後、どうしましょうか」

明日にはきつとまた、今日のような日常を求めている。

真夏

「暑い……」

照りつける太陽、肌では感じることもできないほど弱々しい風、更にはここ数日雨がふっていない。それこそ暑くない理由を探す方が難しい。

本当ならば家からは一步も出ず、冷えた空気の前で過ごしていたところ。

だが夏休みということもあり、一時家に帰ってきている姉に、アイス買ってきてと少しの金を渡され放り出されてしまった。

背筋を流れる汗だけが唯一冷たいと感じる中、まるで自分が溶けているかのように錯覚する。

折角のことだしこのままの勢いで遊びに行ってもいいのだが、どうにも自ら誘う気分になれないのはこの蒸し暑さのせいなのか。まあ、関係ないことだけは明白だ。

コンビニの中に入ってみれば外とは打って変わって涼しい風が吹いてきて、落差とすれば寒い程だがすぐ慣れる。

なんでもいいよと実に面倒な要望をされていたアイスコーナーを見ていたが、普段買わないせいでどれがいいのかわからない。

自分用にも買おうとは思っていたが、ここでおすすめなんだと調べるのは面倒だ。

金は渡されたのだし安いのを適当に買うのもまた違う。はてさてどれを買うべきかと悩んでいると、隣から伸びた手がアイスを一つ指差していた。

「これ美味しいよ」

誰かと思えば見知った顔。挨拶をすれば元気ないねと言われてしまったが、外がと言えば納得してくれたようだ。

「物知りだね」

「ひまりちゃんが言ってたんだ」

ちよつとだけ高いけどね、そう付け足されたので値段を見てみればその通り。この値段で買う人はいるのだろうかと思ったけれど、他と

比べて少なくなっているのを見るにそういうことだ。

ただ高いものであればここまで買う人もいない、つまりは値段相応な質を持ったものなのだろう。とはいっても買うつもりは微塵もないが。

「悠君はどれが好きってある?」

「どれでも、ただ昔よく食べてたのはこれかな」

「あ、それあたしも昔よく食べてたな」

ねだるところか望んだこともないが、親がよく買ってくれた。選ぶのなら食べたことのないやつ、と思ったけれど冒険して外れを引くくらいならと手に取った。

「日菜はどれにするの?」

「うーん、悠君と同じやつにしよっかな」

数分しかいなかったにも関わらず既に外に出たくない。だが何をやるわけでもなく時間を潰すわけにはいかないののため息と共に外に出る。

この暑さでは帰るまでにアイスが溶けてしまわないか心配だ。といっても心配したところで解決策はありもしないのだが。

「悠君2つもアイス食べるの?」

「まさか、おつかいみたいなものだよ」

「え、じゃあ帰っちゃうの?」

「溶けたら面倒だしその予定だけど」

こうして話している間にも溶けてしまうまでのカウントダウンは始まっているわけだが、どのくらいでそうなるかなんて知るわけないので気にするだけ無駄だ。

もしそうなったとしても冷蔵庫に入れておけばどうにかなるか。

まあ、そう簡単に溶けるものでもないだろうけど。

「おつかいついでにcircleにおねーちゃんの迎えに行こうよ」

「ついだって、circleと僕の家って反対側じゃなかったっけ?」

「悠君知ってる? 地球はね、丸いんだよ」

日菜は僕に地球一周でもさせるつもりなのか。確かにそれなら反対も何もないが一体何日かかることやら、なんて冗談はさておいて、

少しくらい遅れても姉は許してくれるだろうか。

どうせ家でネットサーフィンやらなんやらしているのだろうし気づきはしないということにしておこう。

「じゃあアイスが溶けないうちに行こうか」

「ありがと！ おねーちゃんの迎えとはいええ、この暑さの中一人で行くのは気だるかったんだ」

「紗夜さんと何か予定でもあるの？」

「特にないよ、ただそうしたかっただけ」

なんでもないかのように言うからにはよっぽど紗夜さんのことが好きなのだろう。歩きながらアイスを食べ始めた日菜を見ながらそう思い、つられて僕も食べ始める。

去年の夏はこんなにも暑かっただろうか。今年は去年より暑いな、なんて事を毎年思っている気がする。地球温暖化とはこういつたところに出ているのだろうか。

「食べる？」

「嫌いな味だったの？」

「ううん、なんとなく」

それなら味同じだし意味はない。これで僕が好物で既に食べきっているというのなら優しさだが、見れば日菜の方が多く食べている。

なんて話に集中していたら食べるのが疎かになってしまい、あつという間に溶け始めて焦ってしまい、いつのまにか食べきっていた日菜に笑われてしまった。

そんなこんなで話していたらあつという間にcircleに。互いに食べきり日陰で紗夜さんの事を待つこと数分、入り口から数人が出てくるのが見えた。

「悠くん明日って暇だったりする？」

「暇だよ」

「やった。じゃあ遊ぼうよ」

いいよと返すとまた後で連絡するね、と言って日菜は紗夜さんの事

を呼んだ。

紗夜さんはこちらに気づくと一緒にいたRoseliaの人達に何かを言っただけの方へ向かってくる。数秒程度だろうに、それすら待ちきれないのか日菜は彼女に向かい駆けていった。

「今日は暑いですね」

「そうですね、嫌になってしまいくらいには」

「熱中症等には十分気をつけてください」

心配性だな、と思いつつもいつもの事ではあるのでわかってますよと返事をする。

そんな心配をかけてしまうほど僕は信用がないのだろうか。とはいっても帽子もないし飲み物も持ってない、見えるところで信用させられる要素が何一つとしてないから仕方がないのだけれど。

……まあ、心配されるのが嫌だとか面倒だとか、そんなものは抱くはずもない、寧ろ正反対のものではあるのだが。

「そういうばさ、最近すごく怖いホラー映画が上映されたんだって」

「あれ、本当に怖いって噂だよ」

「リサチーはもう見たの？」

「ううん、友達が見たらしくて聞いただけ」

いつの間にかリサさんも近くにきて話を広げている。僕もSNSで感想を呟いている人を見つけはしたが、全員が共通して怖かったと言っていたからには相当なものなのだろう。

とはいってもどうせ僕は見ないから関係ない、そんな風に思っていたのだが……

「悠くん、一緒に見ようよ！」

なんて言われたものだから他人事ではなくなった。見れば日菜は悪戯をしているかのような笑みを浮かべていて、断固拒否しようと思っただけ、彼女は僕の耳元で囁いた。

——明日、暇なんだよね？

「……はあ」

「リサチーも一緒に見ようよ！」

「あはは……遠慮しておくね」

そう言い残すとリサさんはカフェで寛いでいる Roselia の人達のところへ去っていった。あれは逃げたな、とはいっても責めるつもりは毛頭ないが。

明日暇だと言いはしたがホラー映画となれば話は別、頭痛腹痛あれやこれやと予定が急に溢れだしてきた。

申し訳ないが断ろう、そう思っていたのだが思わぬところから逃げ道を塞ぐ言葉が飛んできた。

「……それ、私も一緒に行つていいかしら？」

紗夜さんがそんな風に言つてしまうから日菜は勿論と喜んで、僕は断る雰囲気ではなくなつてしまった。

もしかして紗夜さんはホラー映画好きだったりするのだろうか。そんな片鱗は今まで見たことがないのだけれど、もしそうなら……どうすることもできないか。

「駄目、ですか？」

「紗夜さんはホラー映画大丈夫なんですか？」

「進んで見ることはないですが、どちらでもないですね」

もしかして駄目なんですか、という問いには答えないでおく。

答えない理由なんてホラーが苦手だなんてかっこ悪くて恥ずかしいからであるが、おそらく察されてしまっているだろう。

「これ、食べますか？」

「……いいんですか？」

そういえばアイスはまだ溶けていないだろうか、と気にかけてみたが僕も日菜も食べた、となれば紗夜さんだけ食べてないのは不公平。

それに、もしここから家に帰るまでで溶けたら面倒だ。流石に暑さからの誘惑は強かったのか、申し訳なさそうな表情を浮かべてはいたが受け取ってくれた。

ふとスマホが連絡が来たことを知らせてきた。誰かと思つて見たが、姉から遅いとだけ告げられていた。

既読をつけてしまったし気づかなかつたと嘘をつくこともできないし、仕方がない、謝るくらいはしておこう。

「ねえねえ、明日以外に暇な日つてある？」

「いつでも暇だよ、急な予定が入ることはあるかもしれないけど」
「じゃあ来週、星見に行こうよ」

ここそそと、紗夜さんに聞こえないように小声で聞いてきた。相も変わらず日々に予定はなく、作るようなこともないので毎度毎度この返事である。

弦巻さんや戸山さん、紗夜さんなんかもいるのであろうか、そう思っていたら日菜は自らの唇の前で人差し指を立てる。

つまりはそういうことだろう。何を話しているのかと気になったのか紗夜さんが、どうかしましたかと聞いてきたので、なんでもないですよと返しておいた。

「それにしても意外です」

「何がですか？」

「怖いのが、苦手なんです」

「……そういうわけではないですよ」

苦手というわけではない、好きではないだけだ。何故好き好んで怖いものを見るのだろうか、好奇心は猫をも殺すと昔の人も言っているだろうに。

とまあ、言い訳のようだが本当に嫌いな訳じゃない。できれば見たくない、というだけで。

「明日が楽しみだね」

「……そうだね」

二人も怖がってくればいいのだけれど、というのはよくないか。二人が楽しめさえすればそれでいい。

……二人とも、特に日菜はホラー映画で怖がる場所というのは想像できないが。

その後コンビニに寄って家に帰ったが遅いと姉から大目玉。だけれど日菜におすすめだと言われたアイスを渡せば途端に機嫌がよくなったから単純だ。

「あつっ……」

明日も今日みたいに暑いのだろうか、そうではないことを祈っているが、結局それは自分の力で変えられることではないだけ考えるこ

とは無駄だろう。

ホラーを見れば涼しくなると聞きはするが実際どうなのか。冷や汗でそうなるというのであれば気分のいいものではないと思うのだが。

一人では絶対に体験しようとも思わないこと、いやまあ、複数人なら大歓迎かといわれればそうではないのだが。

したことないものをする前というのは不安で、怖くて、だけれどほんの少しだけ楽しみであるというのは本当だ。

だから明日のことも本当に少しだけではあるのだが楽しみ、そう感じられていた。

……まあ、紗夜さんと日菜がいなかったとしたら断固拒否であったことに違いはないのだが。

先ほどつけた扇風機の風に、僕のため息は流されていったのだった。

期待

なんでもいいよ、というものには酷く困らされる。とはいえ僕自身も多用してしまうのだから人に言えた質ではないのだが。

悪意があるわけではなく実際にそう思っているからであり、また善意からのものでもある。相手にそれが伝わるのか、という話は置いておいて。

「ほんと、何にしよう」

いつ頃から悩み始めたか。内容は二人の誕生日、それに贈るプレゼントについてである。

あれだこれだと、すぐに決められないのは僕自身のセンスの無さからか、それとも決断力とやらが無いだけか。どうにせよもうすぐに迫ったそれに間に合わせなくてはならなくて。

自分自身のものであればどこまでも適当になれるのに他人、特に彼女達へのものとなれば何処までも神経質。他人の事など知れる筈がないのに、何なら喜んでくれるのかと思考して。

聞けばいい、思うことは簡単だ。サプライズなど似合わないことくらい自分が一番わかっている。でもそれでは面白くないと、特に日菜ならば言うだろう。

まあ、紗夜さんだつてなんでもいいですよと濁すだろうが。

「似合わないよなあ……」

適当に目についたアクセサリを手に取りながらそんな事を呟いた。無論、彼女達に対してではない。彼女達なら例えどんなアクセサリだろうと所詮飾り、似合ってくれと確信している。

……流石に想像する限りでは似合わないものもあるのだが、実際につけてみたらなんて、あり得てしまうのが恐ろしい。

この話は僕の事、近くの鏡を見て、相も変わらず平々凡々なものと自傷する。

例えばこんなアクセサリ、似合わなくて当然だ。一目見て、どれに目線が行くかなど考えるまでもなく、何が主役かわからずじまい。

最も、僕は主役なんて柄でもないが。

「嘘を嘘だとしてよく言うけれど……」

本当の事を本当だと信じられないのは損なことだ。ネットに浸かりすぎてあれもこれも疑い半分で見るようになって、顔も知らぬ誰かの言葉を信じることなどいつのまにか出来なくなるようになっていた。

悪くはないのだろうが、自分としては面倒だ。それでも最終的には自分の感性を要求されるのだから意味の無い話であるかもしれないけれど。

鞆につけるアクセサリー程度ならばここまで悩まずとも目立たないし問題ないのだが、去年一昨年とそんな物を送っているのだしそろそろ別の物を、と思うことは自然な事だろう。

とは言ったところでアクセサリー以外の物を思い付かないのはセンスのなさ故。嘆いたところで降ってくるわけでもないのでまた別の物を探しに店内を練り歩く。

しかしまあ、思い付かぬと言いはすれど、消費し失くなってしまふものを渡したくないというのもまた本音。

傲慢な話で気持ち悪い話。彼女達は今まで渡したプレゼントを今でもずっと使ってくれていて、そのことに思わぬところが無いはずもない。

強欲な事は罪だと偉い人は言うが、それは本当にそうだと思う。だが、焦りも不安も心配もあれ、選ぶ楽しさが少しもないかと言われたらそんなことはない。

「これにするか」

ピアスやチョーカーに指輪と、ネットにすすめられたものは全て無し。駄目というわけではないけれど、どうにも似合う気がしなかった。日菜は兎も角として紗夜さんは特に。

見た目的に似合わないという話ではなく、それが彼女の性格と合わないというだけの話。真面目な彼女であれば自発的にそれらをつけるという選択肢はないだろうから。

……それらを付けた二人を想像し、片手で覆うようにして口元を隠した。通報なんてされたらどうすればいいかわからない。

会計を済ませ店を出て、少し暗くなった空を見上げる。不安は消えず、ため息をついてみたが色もなく、音もなく空に消える。

最近になってようやく寒さも収まってきて、ゲームをする前に手を温めるなんて面倒なこともしなくてよくなってきた。

冬は嫌いだけれど、ああ、少し残念だ。

手に付ける手袋を見て、またため息をついた。

人を誘うというのは随分と気が引けるもの。これは僕だけに限った話ではないと思いたいのだが、幾分他人に聞いたことがないのでわからぬまま。

受け身であることの利点など画面の向こうでしかあり得ぬのだが、放っておけば死ぬというわけでもないのだから治そうとも思えない。まあ、そんなことを言ってしまうばなんでもそうなのだけれども。

断られると嫌な気持ちになるだとか、相手に予定があつたら気まずくなるだとか、色々あれ、要は面倒くさいという感情が勝ってしまう。

「緊張する……」

であるのに、本日誘ったのは僕からだ。最も、今回が初めてというわけではないのだが、頻度でいえば少ないのもまた事実。

理由など簡単だ。面倒くさいなどというものを感じられなくなるほど大切なものだと思つたから。

「勉強とかしないくせして」

数年前の自分に聞かせてやればお前は誰だと言われそうなものだが、いずれわかるよと返すことしかできないだろう。

目の前を一人二人と通り抜けて行く。ピークは過ぎ、外も少し暗くなったかという頃、それでもショツピングモールには人だらけ。

彼女達を待つ間は最近やっているソシヤゲ等をする事ができない。いつもと比べ遥かに集中出来ないことがわかりきっているからで、こうして何をする気にもならなくて。

こんな自分に未だに慣れない。学んでいないだけか、学んだ上でこれなのか。そうしてまた一人目の前を通りすぎていく。

「二体いつから待っているんですか？」

「さつき来たばかりですよ」

「……そういうことになっておきます」

約束の時間、それよりも三十分前になって彼女はやってきた。

何時からと問われれば一時間。まあ体感の話であって実際はもっと短い、筈だ。

「日菜は少し遅れてくるそうです」

「そうなるのだいぶ待つことになりますね」

「嫌ですか？」

「まさか」

こういう時、なんと話をすればいいのかわからない。話がそこにあれば食い付くことも出来るが、虚無から話を振れとなると難しい。

共通の趣味、最近あったことに今日のこと。わかりはする、でも出せはしない。頭の中ではあれだこれだと考えている癖して口には出せないものだから、ぐらぐらと視界が揺れるような感じがして。

「あなたと会うのは久しぶりな気がします」

「……僕もそんな気がします」

「三日前にも会ったのに、不思議ですね」

紗夜さんの方に顔を向けると彼女と目が合った。吸い込まれそうな程に澄んだその瞳に、短く息を吸って、止めて、目を閉じた。

「すいません。色々ありまして」

「いえ、私も忙しかったので」

色々あったけれど、忙しくはなかった。実際勉強もなければ働くわけでもなく、誰かと遊んだわけでもない。

プレゼント探しに関しても、別にネットで漁るという方法がある以上時刻を問わずにすることが出来る。まあ、朝昼夜と潰れてはいたが、そこは僕の不器用さが出たところ。

「大丈夫です。わかっていきますから」

謝ろうとした瞬間、察されたのかそう言われる。

彼女から隠すようにした袋を持つ手がピクリと動く。全く、サプライズとは何だったか。

「バレてましたか」

「期待していただけです。」

悠さんだつて、しないわけではないですよね」

「まあ……はい」

期待されるというのは、恐らく最も緊張を生むものだと思う。

人前の発表だとか、ちよつと危険なことだとか、そんな緊張はどこまでいっても自分勝手なもの。そこに他人が絡むと、心臓が痛いくらいになってしまう。

これならばいつそ、全く期待されない方がハードルも低く例え駄目だったとしても気が楽だ。最も、そうするつもりは毛頭無いけれど。

「勝手に期待をしまして悪くは思っていますが……きつと大丈夫だと思つていますから」

「……責任重大ですね」

「日菜は私よりずっと今日の事を待ち望んでいましたよ」

あまり期待はされたくないのだけれど……心地よく感じるのは何故だろうか。

普段であれば誰かに期待されることなどないような僕であるから、慣れないものであれ、こうして誰かに、彼女達に思われる事を悪く思うことなどある筈もなく。

「……今日は寒いと思いませんか？」

「……そうですね。少し、寒いと思います」

彼女は手袋を外して手を置いて、僕もその近くに手をやるとまるで磁石のように引き寄せられ、やがてそれらはぶつかり合つて重なりあう。

彼女の手は、少しだけ暖かかった。

扉を開け外に出ると、いつの間にか辺りは黒く染まっていた。ご飯を食べ少し話して、それだけなのにこの時間。どうにも楽しい時間というものは早いもので。

いまだ渡せていないプレゼントを手に空を仰ぎ見ると、一面の星が埋め尽くしていた。

「珍しいね、星を見たいって悠君から言うの」

「……日菜は二人でよく見たりするのかしら？」

「たまに、かな」

月に一度や二度、それと通話しながら星を見る。その程度、頻発はしないが今日のような日にする程珍しいかと言われればそうではない。いい。

それでもまあ、雰囲気のようなもの。座り込み、話すこともなく見上げる。星は確かに綺麗ではあるけれど、見上げる相手はそれではなくて。

「星、見ないんですか？」

「見てますよ」

ただ、他に気を取られるものがあるだけ。自分から誘っておいた癖に何を言っているのか。もちろんわかっている、わかっているが、どうにも眩しすぎていけない。

立ち上がると、それにつられて紗夜さんの視線も上がっていく。

やっぱり、今更になつて恥ずかしくなってきた。隣を見下ろしてみれば、日菜は笑顔を見せてきて。

「……誕生日プレゼントです」

「これって……髪飾り？」

きつと、今が一番恥ずかしい。隠している分にはまだいいが、晒されてしまえば耐えることしか出来なくて。

髪飾りと、聞こえはいいが実物はただのヘアピン。これだと思いはしたが、結局は主観に過ぎない。

気に入られるか、気に入らないと言われるのか恐ろしく、だけれども待つことしかできないのだ。

「……付けてもらっても、大丈夫ですか？」

「いいんですか？」

——あなた、ですから。

消え入りそうな声で眩かれた言葉は熱を持って襲いかかってきて、つい目を背けたがそれは彼女も同じよう。

視界の端に入った日菜がニヤついていた気もするがきつと気のせいだ。

髪は女の命だと耳にする。服装を除けば一番最初に目につくものだから、と思っているが実際のところどうなのか。どうにせよ、大切なものだと言うのは読んでの通り。

緊張する。危険物を取り扱うのとは違い、宝石を手取るようなこと。僕にとつてはそれより遥かに価値のあるもの、思わず手が震える。と紗夜さんはその手を取った。

「嫌、でしようか？」

断れる筈もない。恐る恐るそれを彼女につけると、思った通り似合ってくれていた。

「おねーちゃん、凄く似合ってるよ！」

「自分では見れないけど、きつとそうだと思うわ」

駄目だ、眩しすぎてよく見れない。わいわいと盛り上がっているところから逃げるようにして空を見上げるが、どうにもよく見えてはくれない。

いや、見えてはいる。見えてはいるが、今僕が見たいものとは違うという単純な理由。

日菜も付けてくれたのか、えへへという声が聞こえてきた。

「あたしも髪伸ばそうかな」

「あなたが髪を伸ばすと録な事しないじゃない。この前だって、あたしに扮して悪戯して」

「あれはみんなが勝手に勘違いしただけだよ。それに悠君だったら見分けてくれるでしょ？」

突然話を振られ、肯定する。日菜と紗夜さんは確かに似てはいれど、見分けなど簡単、見たり聞いたりをしなければ難しいかもしれないが。

「ねえ、悠君」

「どうしたの」

「誕生日プレゼント、ありがとね」

唐突で簡素で、だけれども多分今現在に限れば何よりも嬉しい単語だと思う。

そんな事を思っていれば、少し不満そうな顔をして今度は紗夜さん

が口を開いた。

「悠さん」

「……なんですか」

「誕生日プレゼント、ありがとうございます」

先を越されたのが気に触ったのかなんなのか、ああ、やっぱり二人を間違えるなど、今になってはもう不可能なことだろう。

どういたしましてと言え、何故だか口元が緩くなったような気もした。

「明日って空いていますか」

「ええ、空いてますけど……」

「なら遊びに行こ。あたしもおねーちゃんも、明日は暇なんだ」

「……はい、喜んで」

三人並んで星を見る。去年の空と昨日の空、今日の空は似てはいるが別物、見えているものは違うのだ。

今日まで、ずっとほんの少しだけ変わっている。だけれどもそこには確かに存在している。

それはきつと、日常のようなものなのだろう。

星座

人は慣れる生き物だと誰もが言う。

事実、出来ないなりに繰り返しているといつの間にか出来るようになっていた、というのはゲームをしているなかでよくあることだ。

だけれども……

「慣れる気がしないよなあ……」

日菜と紗夜さんの誕生日を目前として、相も変わらずそれに向けて悩んでいる。

慣れないとは言えど年に一度、しかも何十年の付き合いがあるというわけではないのだから慣れにくくても仕方がない。と言い訳することは簡単なのだが、いやはや、毎年同じ悩みをしているのだから学習して欲しいものである。

もつとも来年、再来年……何十年先があつたとしても慣れる気はないけれど。

プレゼントは未だ決まっていけない。サプライズ的な何かとしてケーキ作りとかを考えたが実行できるはずもなく、捻り出すのも一苦労。

「ちよつとくらいは……」

実のところを言うと、彼女達の反応はなんとなくではあるがわかっている。何をあげるかは決めていないのに、である。

日菜はもう、なんでも喜んでくれる気がする。それこそそこに転がってる草や石でさえ大切にされてしまいそうで少し怖い。ああいや、流石にそれは自惚れすぎか。

しかし何をあげても喜ばれるなど、自信がある訳じゃない。ただそういうものだとわかっているだけ。当然、ほんの少しも妥協などするつもりはないが。

紗夜さんは自分に厳しく、他人にも厳しい。そんな理想的な人物ではあるけれど、僕には少しばかり甘い。

別に嫌なわけではない。厳しくされるのが好きなどという特殊な癖を持っているわけではないので、寧ろ人生甘やかされてドロドロに

なっってしまったばいいとさえ思っている。

でも彼女には……紗夜さんには、鼻目抜きに喜んで貰いたいと思っっているから。

僕は映画とかゲームのネタバレは楽しめるタイプの人間だ。結果を知って、それに向かう道筋を楽しめるから。

だからこそ喜んで貰うという結果を求めるのは至極当然。何で喜んで貰うのか、それは大切にしたい。

「あれ、もしかして日菜さんと紗夜さんへのプレゼント選びですか？」
突然話しかけられて、釣り上げられるようにしてそちらを向けば羽沢さんの姿。

悩む姿を見られるのは何故か恥ずかしくて、ネックレスにキーホルダーと持っていたものを元の場所に戻す。

「二人とも、楽しみにしていると思いますよ」

「それは……期待には答えないとですね」

彼女は先ほど僕が戻した物を手にとって、しばし眺めてまた戻す。はてさて彼女はなんと思ったか。アドバイスの一つや二つ貰ってしまいたいものである。

「何にするか決めてるんですか？」

「まだですね。それこそどういうのにしようか、なんてのも決めてなくて」

「何処で渡すのか、とかで考えてみるのはどうですか？」

うちを使うなら腕によりをかけてご馳走を準備します、と意気込まれる。何処で、確かにそれは少しも考えていなかった。

場所にあったものというのは想像しやすいから考えてみれば合理的。そうなれば何処とするべきか。

レストランなり、山に海にシヨツピングモール、後は羽沢さんのお店など選択肢は色々あるけれど……ああ、そういえばあそこか。

しかもあそこは確か、と思い付くなりスマホでその日の天気を調べてみれば晴れと出ている。ああ、ならばここに決定だ。

そして肝心のプレゼントだが、ここよりも向こうで買った方がいいだろう。サプライズとはならないが、本人の反応を見ながらの方が失

敗をしないわけであるし。

「いい場所が思い付いたんですね」

「はい、お陰様で」

パツと決めてしまったのはいいものの、落胆されたらどうしようという気持ちがないのかと言われたらそんなことはない。

そう表すような人達ではないとわかってはいるけれど、思われたら、というだけでもずきりと胸のあたりが痛くなる。

「楽しんできてください」

羽沢さんのその言葉にありがとうございますと返し彼女と別れる。しかしまあ、楽しんできてくださいか。それは間違いなく僕に向けられた言葉であって。自分の店ではないと察されてしまったのは少し申し訳ない。

まあ確かに、不安に思っても仕方がないのは当然だ。人が不安そうにしているところを見ながら楽しめる人間など、そう多くはないだろうから。

大丈夫。声に出さないそれは体の中をまっすぐ落ちていき、一つ息を吐かせた。

「楽しみだね、おねーちゃん」

「はしやぎすぎないようになさい」

「そんなこと言ってるけど、実はあたしより楽しみにしてたんじゃないの?」

「……別に、楽しむなどは言っていないでしょう?」

両隣からそんな声が聞こえてきて、キリキリと胃が痛むような気がしてしまい、昨日少し食べ過ぎたか等と誤魔化すように思考する。

今現在バスに座って揺られてはいるものの、何処に行くかは二人には伝えていない。ではあるが、ちらりと紗夜さんの方を見れば薄らと笑みを浮かべられる。

流石に隠し通すのは難しかったか。元より隠し通せるとは思っただけでなかったが。

「久しぶりだね、こうして三人で出かけるのって」

「仕方ないでしょ。私も、貴女も忙しいんだから」

「悠くんもあたし達に会える頻度減っちゃって寂しいよね？」

ふと、日菜がそんなことを聞いてきた。パスパレは勿論のこと、R
oseliaもプロとなって最近は二人に会う機会が減ってしまった。
た。

全く会わないというわけではないが半分、とまでいかななくてもそれ
くらいには。

仕方がないことだとはわかっている。わかっている、受け入れては
いるけれど、なにも思わないほどできた人間ではない。

「寂しいよ、勿論」

「ふーん。だったら、さ」

ずいっ、と日菜が近づいてくる。手招きをされ、寄ってみれば紗夜
さんに聞こえないようにか、耳元でこっそりと呟かれた。

——やめてあげよっか？

まるで、悪戯でもするみたいに。

「変なことを言うのはやめておきなさい」

「あれ、聞こえてた？」

「どうせ悠さんのことを揶揄うようなこと言ったんでしょ？」

「えへへ、正解」

冗談であるとわかってはいても反応してしまう、本当に心臓に悪
い。

「嘘をつくには随分と早いよ」

「どうだろうね。嘘かほんとかわからないでしょ？」

「わかるよ、これくらい」

彼女は自らの顔を触ってみるが、別に変なところなどありはしな
い。それこそ嘘だと顔に書いてあることも。

何をと言っていないので嘘もほんともないけれど、なんのことがわか
らぬほど間抜けでない。だから彼女の言うことは嘘だと安心するこ
とができて。

ふと手に何かが触れた。それは遠慮げで、しかしゆっくりと触れる
範囲が広がる。

何事か、見ずともわかる。数秒、数十秒、擦られているかのようなこそばゆさ。触れた小指同士が熱を持つ。

そうして一分でも過ぎた頃か、ようやくそれは僕の手の甲を覆っていた。

意気地なし。誰の事？ 自分の事だ。

手が触れた瞬間こうしたいとは思っていたはずだ。それは僕と、きつと、彼女も。

「紗夜さん」

「どうかしましたか？」

彼女の名を呼んだ。わからない、かける言葉もすべきことも。

ただ、バスの揺れと手の甲から感じるもの以外全てが、そしてだんだんとバスの揺れすらもが消え去って……

「目的地着いたみたいだよ」

そんな声で引き戻された。

未だ夢心地、しかしそれも次第に覚めてゆく。

先に立ち上がり、彼女に手を伸ばす。なんてことはない、立ち上げるのを手伝っているだけ。

ありがとうございますと彼女は僕の手を取る。先に降りた日菜を追い僕たちもバスを降りる。

バスを降りた時、僕と紗夜さんの手はそのままだった。

「楽しかったね」

「ええ、そうね」

今日来たところはいつかに来た犬とのふれあい公園。楽しんでもらえるかと最後まで怯えっぱなしであったけれど杞憂に終わってくれたらしい。

園内で買えるプレゼントを彼女達に渡し、出来ることは全て終えた。達成感、といえるものは感じない。ただぼっかりと、穴でも空いたかのような安堵だけがそこにある。

いや、違う。安堵と更にもう一つ、そこには別の感情が存在して。

「随分と不満そうね、日菜」

「そういうおねーちゃんだったって、結構不満そうだよ」

その言葉に歩みを止めてしまう。僕自身も不満はある久しく握られた手は随分と久し振りであった。

辺りは暗くなり始め、空は暗くなり始めて星が見える。握られているそれよりも遥かに優しい笑みを紗夜さんは浮かべると一瞬、ほんの一瞬だけ、星が煌めきをやめた気がした。

「今日がもう終わってしまうことが、とても不満です」

「あたしも。まだ全然満足はしてないもん」

「……そうですね、僕も同じです」

三人一緒に抱いた不満という感情は、三人一緒の理由だった。

なんだかそれがおかしくて、小さく笑ってしまえばつられるようにして日菜が笑い出す。そして、紗夜さんもだ。

「じゃあさ、みんなで流れ星に一日100時間にしてくださいってお願いしようよ」

「流れ星って……」

「大丈夫だよ。三人でやるから一人一回、いけるって」

「そんな簡単に見つかるものかしら」

バスで来ているのだから時間制限だってある。一生懸命探し当てたところで、全員がそこを向いていなければ意味がない。

しかしまあ、断る理由だってない。はてさて、早めに見つかってくればよいのだが。だけれど世の中、こういうのは上手くいかない道理がついてるものである。

「二日が100時間くらいになりますように」

そろそろ帰らなければならぬ時間、未だ流れる星の一つも見つからない。

突然日菜が空を仰ぐのをやめ、僕と紗夜さんの方を向いてそんな願い事を言ってきた。どういふことか、紗夜さんも全くわからない様子。

「……急にどうしたの?」

「二人とも、あたしにとっては星みたいなものだから」

「星みたいって、どういうこと?」

「うーん……わかんない」

紗夜さんから上がった当然の疑問、しかし当人もわかっていない様子。呆れたような表情、しかし、まあ、わからないこともない。

彼女は、一体何を思っているか。

「何光年も離れてないよ」

「……うん、そうだね」

冗談交じりのその言葉。輝いて、特別で、だけれども遠くは離れてない。

一步、日菜が近寄った。もう一步、既にぶつかる直前で。

「一秒、もいらないよ」

そう言うとき彼女は僕と紗夜さんの手をとった。離れてなどいない、少し強く握られた手からはそれを感じとれる。

「あたし達が星だとしたら、今あたし達は星座になってるね」

「また変なことを……」

「えー。もしかして、おねーちゃんは嫌？」

言葉はない、が反応はある。

星ならば、星座ならば、この手は離すことはきつとなくて。

「こういうのがずっと続いたら……」

一人言、僕のものではない。声の主は見られていることに気がついて顔を逸らす。

そんな彼女の言葉は、きつと二つ目の願いにはなっただろう。

夜空は広く、どれがどの星かなど浅い知識ではわからない。

だけれどもきつと僕達が星座なのだとしたら、一つだけ見失うようなものにはなりたくなくて。

「明日が今日よりいい日になりますように」

きつとその願いは、細やかに見えて強欲極まりないもの。

今日よりいい日など、今までの人生で見てもそう多くない。なのにそれを望む。遙か前の自分に言えば、高望みしすぎだと笑われてしまおうだろう。

「このままじゃ歩きにくいね」

「仕方がないよ」

「……少しだけ、ゆつくり歩きましょう」

手を離す、という選択。どれだけ熱くても、眩しくても、それを選ぶことはないだろう。

星であり、星座であつても流れ星ではない。だから消えることはなく、見つけられないこともない。

願い事は、星にするものである。詳しいあれこれは知らないけれど、きつと叶えてくれると望んで、流れ消える前にそれをする。

であるなら、僕が、僕達で星であるのなら……

明日を今日よりいい日にしたいと願つたとして、叶えるのは自分自身である。

彼女達の願い事も。当然、叶えるのは僕達自身であるのだろう。

……もつとも、日菜の願いはどう叶えようか。なんて考えても答えは考えたところで出ないのだけれども。